上峰村文化財調査報告書第７集

船石遺跡 II

本文編

昭和61年度佐賀県農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1989年３月

上峰村教育委員会

上峰村文化財調査報告書第７集

船石遺跡 II

本文編

昭和61年度佐賀県農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1989年３月

上峰村教育委員会

船石遺跡２・３・４区全景

序

この報告書は、大字堤地区一帯を対象とした農業基盤整備事業に先がけて実施しました昭和61年度船石遺跡の埋蔵文化財発掘調査事業の報告（本文編）であります。

この調査により、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡で竪穴住居跡・掘立柱建物等が検出され、それに伴う貴重な遺物も多数出土するなど多大な成果をあげることができました。

この報告をもって学術資料として、また文化財保護の推進に役立てていただければ幸いです。

なお、調査にあたって、ご指導、ご協力いただいた文化庁、県教育委員会文化課、県農林部はじめ、地元関係各位に対しここに心から感謝申し上げます。

平成元年３月

上峰村教育委員会

教育長　　松　田　末　治

例　　言

1．本書は、昭和61年度佐賀県営農業基盤整備事業に伴い、上峰村教育委員会が発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰村大字堤字一本谷に所在する船石遺跡の発掘調査報告書であり、そのうちの本文編である。

2．発掘調査は、調査区域を便宜的に２～５の４区に分割し、２区（1,500㎡）の調査を国庫補助事業とし、３～５区（5,000㎡）の調査を佐賀県農林部の委託事業として、上峰村教育委員会が主体となり実施したものである。

3．現地での発掘調査は、昭和61年４月７日から昭和61年１月31日まで行った。

4．船石遺跡の名称については、昭和57年に上峰村教育委員会が行った発掘調査報告書が「船石遺跡」としてすでに刊行されている。しかし、船石遺跡は、船石天神宮が位置する段丘を中心に広がる弥生時代を主体とした大遺跡であることが予想されるため、あらたに他の名称を冠した場合の誤認、煩雑さなどを避けるため「船石遺跡」を踏襲することとした。これに伴い、以後、昭和57年度調査部分を「船石遺跡Ⅰ」（調査区域名は１区）と仮称し、今回の調査部分を「船石遺跡Ⅱ」と称することとした。

5．現場での遺構実測作業は、馬原喜美子、島美保子、八谷直子、岡美代子、槻木ユリ子および調査員があたったが、一部を新九州測量設計株式会社に委託した。

6．遺構の写真撮影は鶴田浩二が行い、遺物の写真撮影は原田大介が行った。また、巻頭の航空写真は陸上自衛隊九州地区補給処の協力で撮影されたものである。

7．調査終了後の記録類の整理作業は、引続き上峰村船石発掘調査事務所にて行った。

8．本書の執筆は、鶴田、原田が行った。その分担は各文末に（　）で記した。編集・レイアウトは、原田が行った。

凡　　例

1．遺構番号は、発掘調査当時のままとした。また、遺構番号に冠した２文字のアルファベットは、遺構の種別を表わす。

　ＳＨ……竪穴式住居址　　ＳＫ……土壙・貯蔵穴　　ＳＪ……甕棺墓

　ＳＢ……掘立柱建物址　　ＳＣ……石棺墓　　ＳＤ……溝　　ＳＸ……不明

2．Fig. 1、Fig. 2 は、既製の地形図を用いたもので、図上方が座標北である。その他 Fig. および Tag. 中の方位は磁北を基準としている。

3．Tab. 中の数値に付した記号で、（　）は推定値を、※は部分値をそれぞれ表わす。

4．遺構実測図中の標高は、特記のないかぎり16.5mに統一した。また、点線は推定線を、一点鎖線は調査区境界をそれぞれ表わす。

5．『遺構図録編』、および『本文編』において、記述・数値が異なる場合は、『本文編』に拠っていただきたい。

目　　次

序
例言・凡例
調査組織・調査参加者・整理作業参加者

Ⅰ．遺跡の位置と環境……1

Ⅱ．調査の経過……5
　1．調査に至る経緯……5
　2．調査経過……6

Ⅲ．遺跡の概要……7

Ⅳ．遺構……11
　1．竪穴式住居址……11
　2．土壙・貯蔵穴……64
　3．甕棺墓……82
　4．石棺墓……85
　5．掘立柱建物址……86
　6．その他……87

Ⅴ．遺物……89

Ⅵ．まとめ……130

表 目 次

Tab. 1　船石遺跡出土竪穴式住居址一覧表……12
　　2　船石遺跡出土土壙・貯蔵穴一覧表……64
　　3　船石遺跡出土甕棺墓一覧表……82
　　4　船石遺跡出土甕棺一覧表……82
　　5　船石遺跡出掘立柱建物址一覧表……87

挿図目次

Fig. 1　船石遺跡の位置および村内周辺遺跡……3
2　船石遺跡周辺地形図……8
3　船石遺跡遺構配置図（折り込み）……9
4　竪穴式住居址実測図(1)　ＳＨ００２・ＳＨ００３……16
5　竪穴式住居址実測図(2)　ＳＨ００４・ＳＨ００５……17
6　竪穴式住居址実測図(3)　ＳＨ００７・ＳＨ０１２……18
7　竪穴式住居址実測図(4)　ＳＨ０１５……19
8　竪穴式住居址実測図(5)　ＳＨ０１６・ＳＨ０１７……20
9　竪穴式住居址実測図(6)　ＳＨ０２３・ＳＨ０２７……21
10　竪穴式住居址実測図(7)　ＳＨ０３３・ＳＨ０３４……22
11　竪穴式住居址実測図(8)　ＳＨ０３８・ＳＨ２０１……23
12　竪穴式住居址実測図(9)　ＳＨ２０２・ＳＨ２０３・ＳＨ２０４……24
13　竪穴式住居址実測図(10)　ＳＨ２０６・ＳＨ２０７……25
14　竪穴式住居址実測図(11)　ＳＨ２０８・ＳＨ２０９……26
15　竪穴式住居址実測図(12)　ＳＨ２１０・ＳＨ２１１……27
16　竪穴式住居址実測図(13)　ＳＨ２１２・ＳＨ２１３……28
17　竪穴式住居址実測図(14)　ＳＨ２１４・ＳＨ２１６……29
18　竪穴式住居址実測図(15)　ＳＨ２１７・ＳＨ２１８……30
19　竪穴式住居址実測図(16)　ＳＨ２１９……31
20　竪穴式住居址実測図(17)　ＳＨ２２１・ＳＨ２２３……32
21　竪穴式住居址実測図(18)　ＳＨ２２９……33
22　竪穴式住居址実測図(19)　ＳＨ２３０・ＳＨ２３３……34
23　竪穴式住居址実測図(20)　ＳＨ２３４・ＳＨ２３６……35
24　竪穴式住居址実測図(21)　ＳＨ２４０・ＳＨ２４２・ＳＨ２４４・ＳＨ２４６……36
25　竪穴式住居址実測図(22)　ＳＨ２５２・ＳＨ２５３……37
26　竪穴式住居址実測図(23)　ＳＨ２６３・ＳＨ２６４……38
27　竪穴式住居址実測図(24)　ＳＨ２６６・ＳＨ２７８……39
28　竪穴式住居址実測図(25)　ＳＨ２６７・ＳＨ２７９……40
29　竪穴式住居址実測図(26)　ＳＨ２８０・ＳＨ２８２……41
30　竪穴式住居址実測図(27)　ＳＨ２８６・ＳＨ２９４……42
31　竪穴式住居址実測図(28)　ＳＨ２９３・ＳＨ３００……43

Fig. 32 竪穴式住居址実測図(29) ＳＨ３０１・ＳＨ３０２・ＳＨ３０３……44
33 竪穴式住居址実測図(30) ＳＨ３０４・ＳＨ３０５……45
34 竪穴式住居址実測図(31) ＳＨ３０６・ＳＨ３０７・ＳＨ３０８……46
35 竪穴式住居址実測図(32) ＳＨ３１１・ＳＨ３１２・ＳＨ３１４……47
36 竪穴式住居址実測図(33) ＳＨ３１６・ＳＨ３１８……48
37 竪穴式住居址実測図(34) ＳＨ３１９・ＳＨ３２０……49
38 竪穴式住居址実測図(35) ＳＨ３２２・ＳＨ３２４……50
39 竪穴式住居址実測図(36) ＳＨ３２５・ＳＨ３２６……51
40 竪穴式住居址実測図(37) ＳＨ３２７・ＳＨ３２８……52
41 竪穴式住居址実測図(38) ＳＨ３４５・ＳＨ３４７・ＳＨ３４８……53
42 竪穴式住居址実測図(39) ＳＨ３４９・ＳＨ３５１・ＳＨ３５３……54
43 竪穴式住居址実測図(40) ＳＨ３５４・ＳＨ３６０・ＳＨ３６２……55
44 竪穴式住居址実測図(41) ＳＨ３６５・ＳＨ３６７・ＳＨ３７０……56
45 竪穴式住居址実測図(42) ＳＨ３７２・ＳＨ３７４……57
46 竪穴式住居址実測図(43) ＳＨ３７５・ＳＨ３７９・ＳＨ３８１……58
47 竪穴式住居址実測図(44) ＳＨ３８９・ＳＨ４０１・ＳＨ４０２・ＳＨ４１２……59
48 竪穴式住居址実測図(45) ＳＨ４０３……60
49 竪穴式住居址実測図(46) ＳＨ４０４・ＳＨ４０５……61
50 竪穴式住居址実測図(47) ＳＨ４０６・ＳＨ４１１……62
51 竪穴式住居址実測図(48) ＳＨ４１６……63
52 土壙・貯蔵穴実測図(1)……67
53 土壙・貯蔵穴実測図(2)……68
54 土壙・貯蔵穴実測図(3)……69
55 土壙・貯蔵穴実測図(4)……70
56 土壙・貯蔵穴実測図(5)……71
57 土壙・貯蔵穴実測図(6)……72
58 土壙・貯蔵穴実測図(7)……73
59 土壙・貯蔵穴実測図(8)……74
60 土壙・貯蔵穴実測図(9)……75
61 土壙・貯蔵穴実測図(10)……76
62 土壙・貯蔵穴実測図(11)……77
63 土壙・貯蔵穴実測図(12)……78
64 土壙・貯蔵穴実測図(13)……79

Fig. 65 土壙・貯蔵穴実測図⒁……80
66 土壙・貯蔵穴実測図⒂……81
67 甕棺墓実測図(1)……83
68 甕棺墓実測図(2)……84
69 甕棺口縁部実測図……85
70 石棺墓実測図……85
71 掘立柱建物址実測図(1)……86
72 掘立柱建物址実測図(2)……87
73 溝跡実測図……88
74 出土遺物実測図(1) ……100
75 出土遺物実測図(2) ……101
76 出土遺物実測図(3) ……102
77 出土遺物実測図(4) ……103
78 出土遺物実測図(5) ……104
79 出土遺物実測図(6) ……105
80 出土遺物実測図(7) ……106
81 出土遺物実測図(8) ……107
82 出土遺物実測図(9) ……108
83 出土遺物実測図⑽ ……109
84 出土遺物実測図⑾ ……110
85 出土遺物実測図⑿ ……111
86 出土遺物実測図⒀ ……112
87 出土遺物実測図⒁ ……113
88 出土遺物実測図⒂ ……114
89 出土遺物実測図⒃ ……115
90 出土遺物実測図⒄ ……116
91 出土遺物実測図⒅ ……117
92 出土遺物実測図⒆ ……118
93 出土遺物実測図⒇ ……119
94 出土遺物実測図㉑ ……120
95 出土遺物実測図㉒ ……121
96 出土遺物実測図㉓ ……122
97 出土遺物実測図㉔ ……123

Fig.98　出土遺物実測図(25) ……124
99　出土遺物実測図(26) ……125
100　出土遺物実測図(27) ……126
101　出土遺物実測図(28) ……127
102　出土遺物実測図(29) ……128
103　出土遺物実測図(30) ……129

図版目次

PL. 1　出土遺物写真(1)
2　出土遺物写真(2)
3　出土遺物写真(3)
4　出土遺物写真(4)
5　出土遺物写真(5)
6　出土遺物写真(6)
7　出土遺物写真(7)
8　出土遺物写真(8)
9　出土遺物写真(9)
10　出土遺物写真(10)
11　出土遺物写真(11)
12　出土遺物写真(12)
13　出土遺物写真(13)
14　出土遺物写真(14)
15　出土遺物写真(15)
16　出土遺物写真(16)
17　出土遺物写真(17)
18　出土遺物写真(18)
19　出土遺物写真(19)
20　出土遺物写真(20)
21　出土遺物写真(21)

調　査　組　織（昭和61年当時）

調査主体　　上峰村教育委員会

（事務局）

教　育　長　　重　松　守　男

教育課長　　浜　田　小夜子

社会教育係長　　吉　田　　忠

庶　　務　　岡　　義　行

〃　　鶴　田　浩　二

調　査　員　　鶴　田　浩　二（上峰村教育委員会文化財担当）

〃　　田　平　徳　栄（佐賀県教育委員会文化課調査２係主査）

〃　　徳　富　則　久（　　〃　　指導主事）

〃　　徳　永　貞　昭（　　〃　　文化財保護主事）

調査協力　佐賀県教育委員会文化課、佐賀県農林部・鳥栖農林事務所、上峰北部土地改良区
松尾建設株式会社、地元各位

調査参加者

発掘作業員

秋山　巌、秋山ユキエ、荒木　央郎、荒木　文夫、荒木　実、荒木　三好、鮎川ハルエ、石橋　悦次、石橋　テル、石丸ミチエ、大坪ケサグイ、大坪　一、大坪　光代、川原　正美、川原　ミヨ、楠川カメ子、黒石　光利、鴫山　静江、島　四郎、城野ハルコ、陣内　シツ、高島　英子、田中ミスエ、田中　豊、堤　イシ、堤　一、堤　ユキ、鶴田キヨ子、鶴田サヨ子、鶴田美千代、鶴田八重子、鶴田　義雄、野中マツヨ、桧枝佐知子、桧枝　茂、宮原　則美、三好　スエ、山口ミヨ子、山下　孝子、米倉　保、和佐　治夫

整理作業員

荒木　和代、江頭由香里、岡　美代子、古賀智恵子、島　美保子、槻木ゆり子、八谷　直子、深町佐千子、馬原喜美子、宮原　則美、田原　朋子、野田　真弓

Ⅰ．遺跡の位置と環境

船石遺跡は佐賀県三養基郡上峰村大字堤字三本杉・一本谷・二本谷の段丘先端付近（標高14m～25m）に位置する。

佐賀平野の東部は、鳥栖市から佐賀郡にかけての脊振山南麓に位置する。脊振山系から派生した数条の河川が南流し、筑後川及び有明海へと注ぎ込み、河川にそって多くの舌状または独立した洪積世段丘が発達している。それらの段丘に挟まれた谷底平野や扇状地性低地、南部有明海沿岸の三角州平野は、全国的にも有数な穀倉地帯となっている。また、各時代の遺跡が密集し、県内においても遺跡の宝庫として知られ、弥生土器片をはじめとし、種々の遺物の散布がいたるところにみられる。

上峰村は、三養基郡西部に位置し、北は脊振山地から南は筑後川の旧河道付近まで南北に12.8km東西に2.8kmの細長い村である。東は、北部で切通川の支流船石川などによって中原町と接し、南部は切通川で北茂安町と接する。南は、江越の南を東西に走る前牟田江湖の線で三根町と接している。西では、北部に東脊振村、南部に三田川町に接するが、この町村境が神埼郡との郡境となっている。

船石遺跡が位置する段丘は、西側を南流する切通川に沿って、脊振山地の鎮西山南麓の塚原付近から南へ延び、船石集落の南国道34号線付近で平野部に没する。遺跡は、この段丘の先端付近に鎮座する船石天神社周辺一帯に広がっており、温暖な気候と相俟って豊かな水稲農業に適した位置に存在していたと言うことができる。

佐賀平野東部は、県内においても遺跡の分布が密なところであり、特に弥生時代の著名な遺跡が目立っている。鳥栖市安永田遺跡[1]、中原町姫方遺跡[2]、上峰村船石遺跡Ⅰ区[3]、同村一本谷遺跡[4]、上峰村と東脊振村にまたがる二塚山遺跡[6]、東脊振村横田遺跡[7]、同村三津永田遺跡[7]、三田川町と神埼町にまたがる吉野ケ里遺跡[8]、など多くの集落が形成されている。これらの概要についてはそれぞれの報告に譲り、ここでは上峰村を中心として、船石遺跡Ⅱ区をとりまく歴史的環境について概観したい。

旧石器時代の遺跡は、これまで本格的な調査がされたものはなく、段丘上や斜面から断片的に石器が採集されているに過ぎない。ナイフ形石器を出土した中原町町南[9]や三田川町萩原[10]（東部工業団地内の旧小池付近）などが知られているにすぎない。

縄文時代になると山麓部に遺跡が出現する。早期の遺跡として中原町香田遺跡[11]、東脊振村戦場ケ谷遺跡[12]などが知られている。前期以降になると上峰村堤東方遺跡、東脊振村戦場ケ谷遺跡などがある。

弥生時代になると遺跡の数、規模ともに増大する。前期では山麓部、段丘上にいくつかの遺跡が知られている。中期になるとこの地域一帯の地区に遺跡が広がり、いくつかの遺跡群を形

成する。

この地域の弥生時代の遺跡としては特に墳墓群が注目されており、上峰村切通遺跡[13]、同村船石南遺跡[14]、同村と東脊振村にまたがる二塚山遺跡、三田川町と神埼町にまたがる吉野ケ里遺跡などで甕棺墓、土壙墓、箱式石棺墓が出土し、銅剣、銅鏡、鉄製武器など重要遺物が発見されている。しかし、船石南遺跡や中原町姫方遺跡のように500基以上の甕棺墓を出土しながら副装品が極めて貧弱な遺跡も多数存在する。これらの墳墓群は、ほとんどが段丘上に存在しており、今のところ墓地を営んだ集落との関連が結びつけられるものは極めて少ない。また集落跡の調査も近年の大型開発によって増加している。東脊村下石動遺跡[15]上峰村一本谷遺跡などが調査され、前記の墳墓群との関連やこの地域の社会状況が解明されつつある。

古墳時代になると、神埼町下朝日古墳など本格的な古墳が築造されるようになり、さらに五世紀後半になると三田川町、上峰村、東脊振村にかけて都紀女加王墓を代表とする前方後円墳７基、円墳５・６基以上からなる目達原古墳群[16]が出現し、この地域に政治的なまとまりをなすようになる。後期では、上峰村北部山麓地域の谷渡、奥の院、鎮西山南麓、東脊振村山麓部、神埼郡北部山麓部に大規模な古墳群が形成されている。

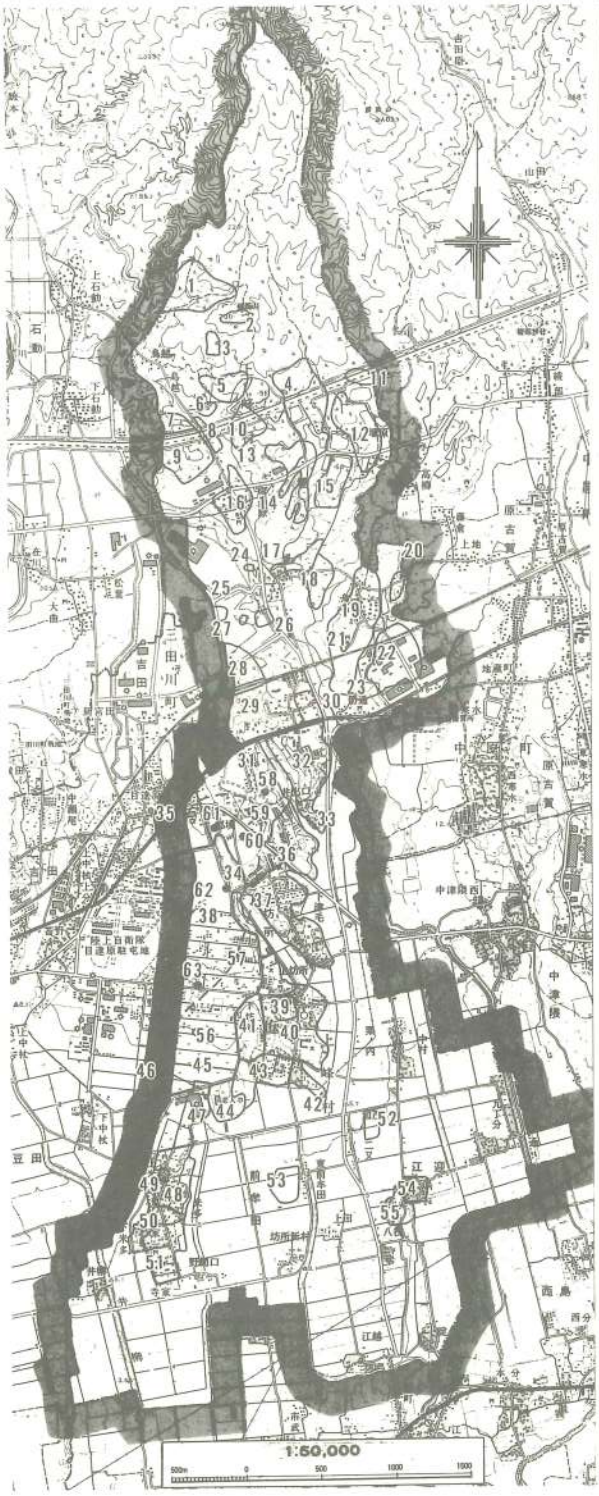
奈良時代には、上峰村塔の塚廃寺跡[17]、東脊振村辛上廃寺跡[18]があり、律令時代にこの地域に寺院を建立することのできる勢力がいたことを示しており注目されている。また、上峰村堤土塁跡[19]は水城様の土塁として注目される。

平安時代には、この地域の西半分は神埼荘と呼ばれており、また東脊振村の霊仙寺跡[20]が知られている。

中世になると多くの中世山城跡があり、平野部にも環濠をもつ平城が多数存在している。また平野部の集落跡からは多量の輸入陶磁器を出土しており、これらが、この地域では広く一般にも普及していたことを想起させる。　　（鶴田）

参考文献

「上峰村史」上峰村史編纂委員会　1979
「東脊振村史」東脊振村史編纂委員会　1982
「神埼町史」の神埼町史編纂委員会　1972
「続・佐賀の自然」佐賀県理科教育センター　1964
「佐賀県の遺跡」佐賀県教育委員会　1964
「佐賀県遺跡地図」佐賀県教育委員会　1986



番号	遺跡名	時代	遺跡の性格
1	奥の院古墳群	古墳	古墳群
2	鎮西山城跡	中世	山城
3	古城山城跡	中世	山城
4	二本柳古墳群	古墳	古墳群
5	鎮西山山麓古墳群	古墳	古墳群
6	堤一本黒木A遺跡	弥生	集落、墳墓
7	堤一本黒木B遺跡	弥生	集落、墳墓
8	堤三本松遺跡	古墳	集落
9	屋形原古墳群	古墳	古墳群
10	堤五本松遺跡	古墳	集落
11	谷渡遺跡	古墳	
12	谷渡古墳群	古墳	古墳群
13	堤三本柳遺跡	縄文	集落
14	青柳古墳群	古墳	古墳群
15	新立古墳群	古墳	古墳群
16	屋形原遺跡	弥生、古墳	集落
17	堤土塁跡	古代	土塁
18	八藤遺跡	縄文、古墳	集落
19	船石遺跡	縄文、弥生、古墳	集落、墳墓
20	上地遺跡	弥生	墳墓
21	船石四本杉遺跡	縄文、弥生	墳墓
22	船石工業団地遺跡	弥生	墳墓
23	船石南遺跡	弥生	墳墓
24	堤遺跡	縄文	集落
25	二塚山遺跡	弥生	墳墓
26	五本谷遺跡	弥生、古墳	墳墓
27	堤埴輪窯跡	古墳	埴輪窯跡
28	栗山遺跡	古墳	墳墓
29	四本谷遺跡	縄文、弥生、古墳	墳墓
30	切通遺跡	弥生	墳墓
31	坊所一本谷遺跡	弥生	集落、墳墓
32	一本谷遺跡	弥生	集落、墳墓
33	井出口遺跡	弥生、古墳	集落
34	外記遺跡	弥生、古墳	集落
35	大塚遺跡	弥生、古墳	墳墓
36	坊所二本谷遺跡	弥生	集落
37	坊所五本谷遺跡	弥生、古墳	集落、墳墓
38	坊所八本谷遺跡	弥生、古墳	集落、墳墓
39	坊所城跡	中世	城館
40	樫寺遺跡	弥生、古墳、中世	集落
41	杉寺遺跡	弥生、古墳、中世	集落
42	坊所二本松遺跡	弥生、古墳	集落、墳墓
43	坊所三本松遺跡	弥生	集落
44	小坊所遺跡	弥生	集落
45	西峰遺跡	弥生、古墳	集落、墳墓
46	塔の塚廃寺跡	古代	寺院
47	北畠遺跡	弥生、古墳	集落、墳墓
48	西前牟田遺跡	弥生	集落
49	上米多貝塚	弥生	貝塚
50	寺家遺跡	弥生	集落
51	米多城跡	中世	城館
52	加茂環濠集落跡	中世	集落
53	前牟田城跡	中世	城館
54	江迎城跡	中世	城館
55	一ノ橋環濠集落	中世	集落
56	米多井伝承地	古代	井戸跡
57	目達原古墳群	古墳	古墳群
58	くずれ塚古墳	古墳	古墳
59	無名塚古墳	古墳	古墳
60	上のびゅう塚	古墳	古墳
61	大塚古墳	古墳	古墳
62	古稲荷塚古墳	古墳	古墳
63	稲荷塚古墳	古墳	古墳

Fig. 1　船石遺跡の位置および村内遺跡

註

(1) 藤瀬禎博・石橋新次「柚比遺跡範囲確認調査第3年次概要報告書」鳥栖市文化財報告書 1980

(2) 木下巧・天本洋一「姫方遺跡」佐賀県文化財調査報告書第30集　1974

(3) 七田忠昭「船石遺跡」上峰村教育委員会　1983

(4) 七田忠昭「一本谷遺跡」上峰村教育委員会　1983

(5) 高島忠平・七田忠昭他「二塚山遺跡」『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集　1979

(6) 木下元治「考古学〈弥生時代〉―神埼郡東脊振村横田遺跡」『新郷土』20―1　1967

(7) 金関丈夫・坪井清足・金関恕「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』 1961
七田忠志「東脊振三津の石蓋甕棺と内行花文明光鏡」佐賀県文化財調査報告書第2輯　1953

(8) 七田忠志「其の後の佐賀県戦場ケ谷遺跡と吉野ケ里遺跡に就いて」人類学雑誌6―4　1934

(9) 天本洋一・七田忠昭「町南遺跡」佐賀県文化財調査報告書第68集　1983

(10) 七田忠志「原始社会の開始」『上峰村史』 1979

(11) 高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋「香田遺跡」佐賀県文化財調査報告書第57集　1981

(12) 七田忠志「佐賀県戦場ケ谷遺跡」史前学雑誌6―2・4　1934

(13) 金関丈夫・金関恕・原口正三「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』 1961

(14) 1985年　上峰村教育委員会調査

(15) 高瀬哲郎「下石動遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第4集　1981

(16) 松尾禎作「目達原古墳群調査報告」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第5輯　1950

(17) 松尾禎作「塔の塚廃寺址」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯　1970

(18) 七田忠志「肥前風土記神埼郡の條に於ける寺院に関する一察」上代文化13　1935

(19) 高島忠平・杠一義「堤土塁跡」上峰村教育委員会　1978

(20) 田平徳栄他「霊仙寺跡」東脊振村文化財調査報告書第4集　1980

II. 調 査 の 経 過

1．調査に至る経緯

上峰村大字堤字三本杉・一本谷・二本谷に所在する船石遺跡の確認調査は、佐賀県農業基盤整備事業の計画に基づき昭和59年度に佐賀県教育委員会文化課により、現地踏査の結果をもとに検討され、遺跡の存在が予測され確認調査が必要と認められた地区について、佐賀県土地改良課・鳥栖農林事務所・県文化課・上峰村土地改良課・上峰村教育委員会との協議が行われ、その合意に従って実施された。その結果、弥生時代中～後期から古墳時代にわたる時期の竪穴住居跡・土壙・柱穴等の遺構、弥生時代中～後期の土器・須恵器・石包丁等の遺物が検出され、また、弥生時代中期初頭～中頃の甕棺墓群、これと同時期の集落跡が検出された船石遺跡に東隣する船石南遺跡とを合わせて38,600㎡の遺跡の存在が確認された。

上峰村の大字堤地区一帯は、用水確保が不十分で用水不足をきたしている。また、ほ場は不整形で散在し、道路は狭く未整備で機械の導入も困難となっている。このため、農業基盤整備事業により水不足を解消し近代的な大型ほ場と、農地の集団化を併せ行い、農業生産技術と大型機械の導入により労働生産性の向上、農業経営の合理化による農家所得の増大をはかるもので、昭和60年度より佐賀県農業基盤整備事業として10ケ年計画で実施されている。昭和61年度は、第Ⅰ工区の中の4.1haの工事が計画され、これに伴い面的工事及び小排水路工事によって削平されるため、埋蔵文化財の取り扱いについて検討する必要が生じた。

このことにより、両者の相互理解の上に立ち、農業基盤整備事業の推進と文化財の保存・活用を目的とした文化財保護との調整をはかるため、数回にわたり関係各位と協議を重ねた。この地域は、脊振山系南麓から派生する標高約14～18mの舌状丘陵上、切通川左岸に位置しており、丘陵の先端部分のため地形的に起伏がはげしい関係上、削平を受ける部分が多く、発掘調査予定面積が年間調査可能面積を越える状況にあった。さらには、各時代の遺跡が密集し、県内においても遺跡の宝庫として知られており、昭和57年度に当教育委員会による船石遺跡の発掘調査で甕棺墓・支石墓・古墳等が検出され、蛇行状鉄剣・蛇行状鉄矛等貴重な遺物が出土しており、特に重要な遺跡として注目されている。このため、盛土部分の拡大等の設計変更について十分検討がなされ、地形と小排水路工事の関係上、どうしても削平が必要である部分1,500㎡（2区）を国庫補助事業、5,000㎡（3～5区）を県農林部の受託事業として、合わせて6,500㎡を当教育委員会が主体になり、記録保存のため埋蔵文化財発掘調査を昭和61年4月より実施した。

（鶴田）

2．調査経過

調査区の設定については、昭和57年度に上峰村教育委員会が主体となり実施された船石遺跡発掘調査事業の報告書が『船石遺跡』としてすでに刊行されているので、便宜上、昭和57年度分を「船石遺跡Ⅰ」調査区を1区と仮称し、昭和61年度分を2区（国庫補助事業1,500㎡）から、3～5区（佐賀県農林部委託事業5,000㎡）まで分割した。

現地における発掘調査は、文化課の協力を得、2区（面的工事部分）から実施した。昭和61年4月14日に当教育委員会・作業員一同で簡素な安全祈願を行い、テントの設営、発掘用具等の整備・運搬を行った。4月16日から、0.4㎥のバケットを有するバックホーを使用し、遺構検出面まで表土を除去する。作業員による遺構確認作業を5月18日から2区の北側より開始する。遺構は、弥生時代の竪穴住居跡・土壙等が確認され、特に、竪穴住居跡群については、かなりの重複がみられ、前後関係が確認できた遺構から検出作業を行った。検出が終わった遺構から順に遺構及び遺物の写真撮影、遺構実測作業、遺物取り上げ作業を行った。また、2区と3区に跨る遺構については、検出作業をせず、遺構が確認された状態で残し、3区の表土除去作業終了後、遺構の検出を行うことにした。

3区（面的工事部分）は、南東部にかけて2区と同様かなりの重複が予想されたため、調査作業計画の見直しをする必要があり、関係各位に遺跡の概要説明及び現在の進捗状況等を説明し、調査期間の延長を申し入れた。7月22日から、3区より表土除去作業を開始し、4区（面的工事及び小排水路工事部分）、5区（小排水路工事部分）の順で行った。3区は、予想を上回る遺構の密度や重複が見られ、比較的遺構の少ない4区から遺構検出作業に移った。5区については、800基にのぼる甕棺墓が検出された船石南遺跡や船石工業団地遺跡に隣接しており甕棺墓群の検出が予測されたが、遺構の確認はできなかった。調査の結果、2区と合わせて125軒の弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡、甕棺墓、石棺墓・土壙・貯蔵穴等の遺構が検出され、多量の弥生式土器片、土師器、須恵器、石器が出土した。

全体の遺構検出作業がほぼ終了し、遺跡の性格が明らかになった11月23日㈯に周辺の住民を対象とした現地説明会を開催し、郷土史の一旦に触れることにより、参加者が文化財に対して共感を得、文化財愛護思想の普及、さらには、郷土愛の高揚をはかることができた。また、上峰公民館報第275号（昭和61年6月10日発行）で、発掘調査の方法・進捗状況について掲載し、文化財の啓蒙・啓発にあたった。

現地における発掘調査は、12月11日に完了した。調査記録及び出土遺物は、当教育委員会で保管し、遺物の整理・実測並びに遺物写真撮影等の報告書作成については、船石現場事務所で行った。

（鶴田）

Ⅲ. 遺 跡 の 概 要

船石遺跡は、佐賀県三養基郡上峰村大字堤字三本杉・一本谷・二本谷の段丘先端付近（標高14m～25m）に位置している。遺跡は、縄文時代から営まれ中世までの遺構が確認されているが、弥生時代がその主体である。その範囲は、現在船石集落が位置する中位段丘面（坊所面）とこれから南に延び切通集落北側で沖積平野に没する低位段丘面（舟石面）にまたがり、全体では10ha以上の広がりをもつものと予想される。この段丘は東を舟石川に、西を切通川に開析され南北に長い舌状を呈している。

本遺跡は、以前から石器や土器片が耕作に伴い断片的に採集されており、また中位段丘先端部に位置する船石天神宮境内には、古墳の存在とともに「舟石」・「亀石」・「鼻血石」などの巨石の存在が知られ、昭和20年代後半以降支石墓ではないかと疑問視されていた。昭和56年地元船石区で天神宮境内を児童公園や運動広場として利用していたという計画がもたれ、翌57年に村教育委員会が主体となり、県文化課の協力を得て発掘調査（調査区は「船石遺跡１区」と仮称）を実施した。その結果、弥生時代中期の竪穴式住居址９軒・支石墓２基（「舟石」・「亀石」）・甕棺墓ほか墳墓100基以上、５世紀中葉から５世紀末葉の古墳３基、中世の祭祀遺構、時期・性格不明の基壇状遺構が検出された。主な出土遺物は、住居址出土の弥生式土器・石器・鉄器、甕棺墓に使用された弥生式土器、古墳出土の土師器・須恵器・鉄器、中世祭祀遺構出土の中世土器などで、なかでも古墳出土の蛇行状鉄剣、蛇行状鉄矛が特殊な性格をもつものとして、当地では古式に属する須恵器とともに注目された。

一方、本遺跡の周辺には、かなりの密度で弥生時代遺跡が分布している。本遺跡東南に隣接する船石南遺跡では、昭和60年の発掘調査で竪穴式住居址40軒余・甕棺墓ほか土壙墓など墳墓約500基が検出されている。さらに東方の船石工業団地内においても甕棺墓などの墳墓が確認されており、一帯に一大墓域を形成している。これらは、船石遺跡とともに船石遺跡群としての有機的関連が考えられる。また、切通川対岸の二塚山丘陵には、昭和30年に調査された切通遺跡、佐賀東部中核工業団地造成に伴い調査が行われた二塚山、五本谷などの二塚山遺跡群の墓域が広がっており、副装品として漢式鏡・小型仿製鏡・鉄剣・鉄刀・玉類などが出土している。これらは副装品がほとんど見えない船石側の墓域と好対照をなしている。

今回の調査は、昭和61年度県営農業基盤整備事業施工区域の内、面的工事、あるいは小排水路設置工事で遺跡が削平、掘削される部分6,500m²について実施したもので、調査地域は、ＪＲ長崎本線と国道34号線に挟まれた低位段丘の中央部西斜面に位置し、ＪＲ長崎本線を南流した切通川が調査区域北西で小さく東に蛇行し調査区域北西部の段丘を侵食しており、遺構面と切通川東岸との間は比高差約５m程の崖となっている。調査区は、面的工事で削平される部分を２・３区、主に排水路設置工事で掘削される部分を４・５区として調査を行った。　（原田）

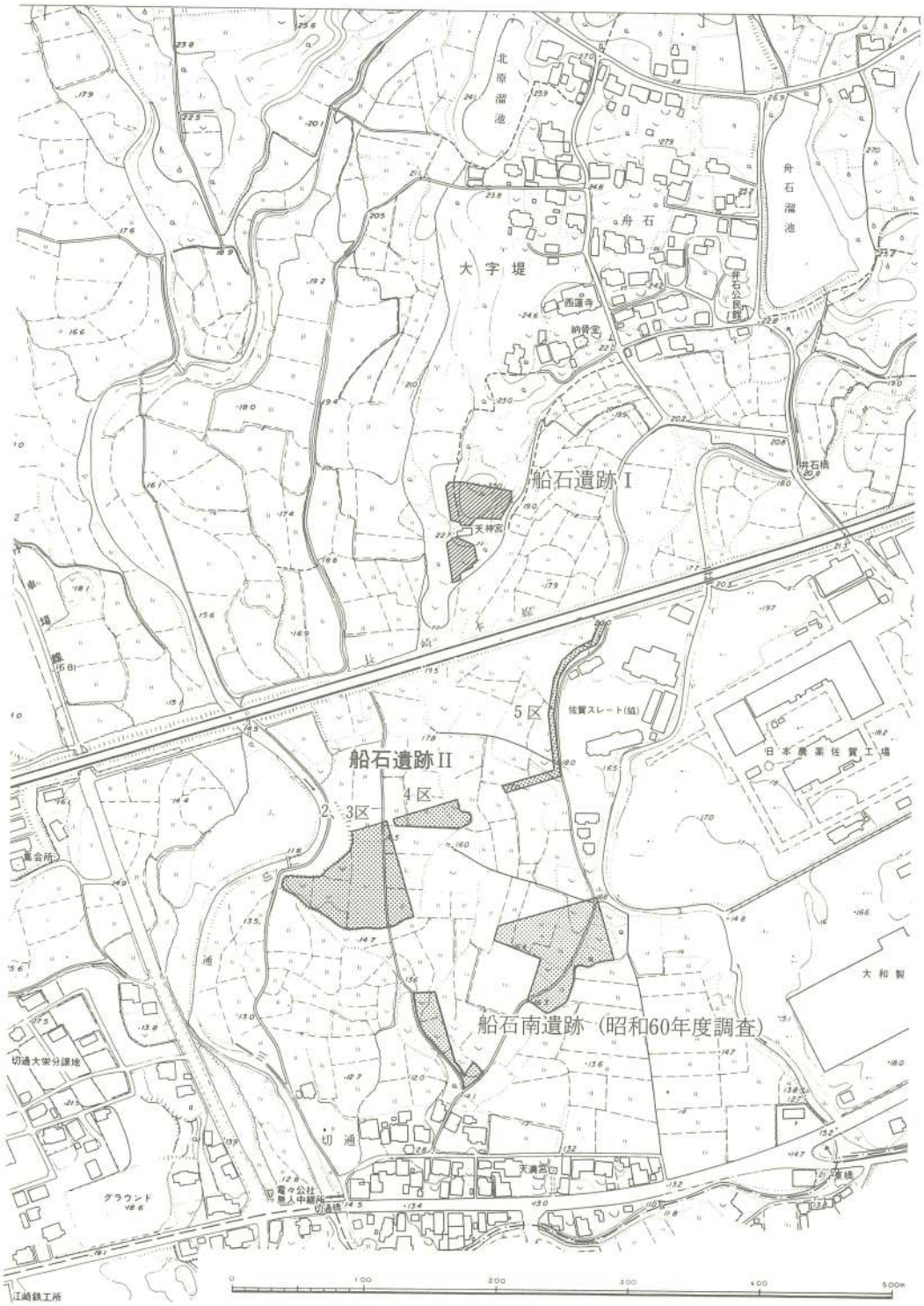


Fig. 2　船石遺跡周辺地形図（1/5,000）

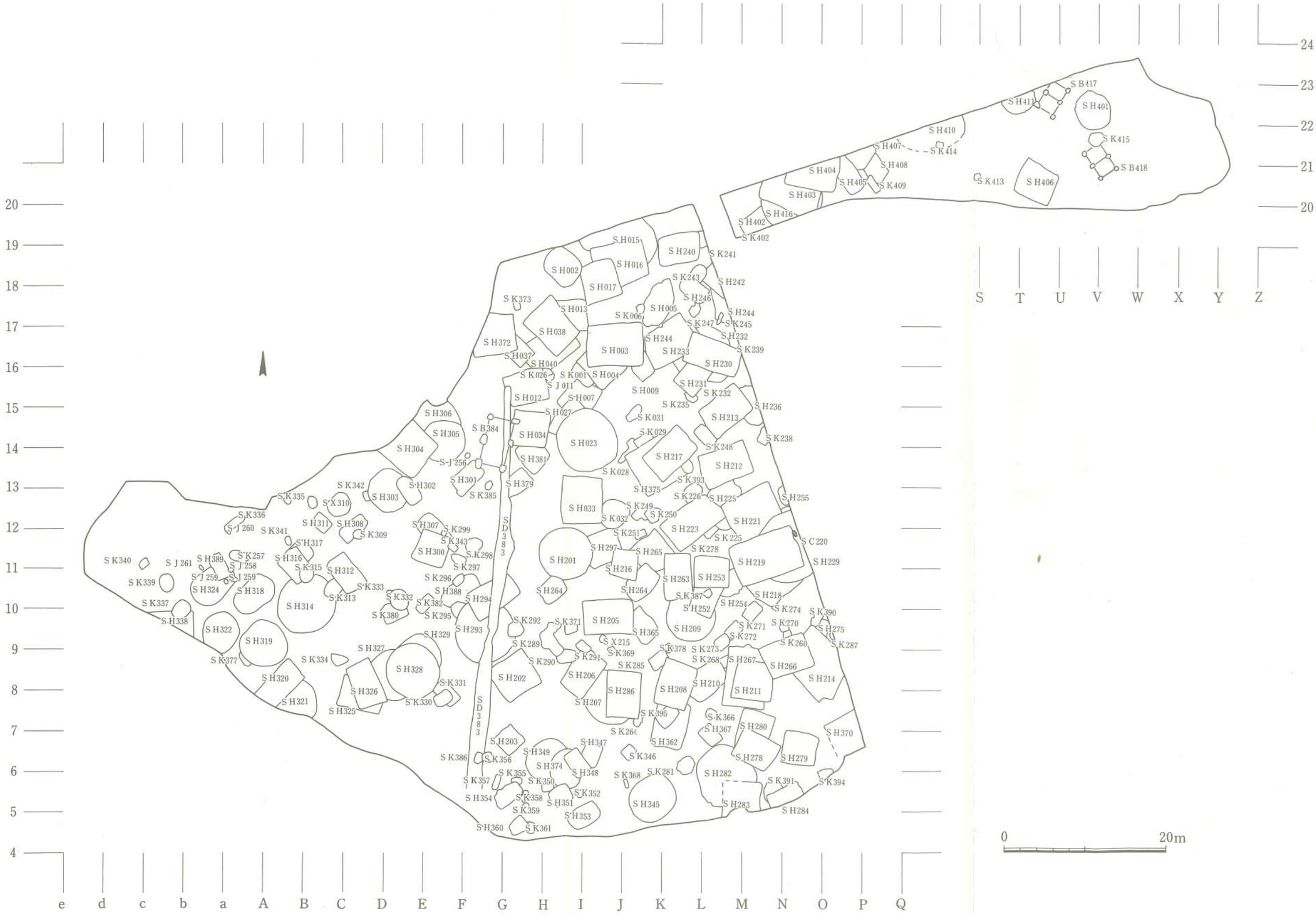


Fig. 3　船石遺跡遺構配置図（1/500）

Ⅳ. 遺　構

今回の調査区域は、佐賀県三養基郡上峰村大字堤字一本谷に所在する。脊振山系南麓から派生した標高約14～18mの舌状丘陵上に位置し、現在主として水田として利用されている。

調査の結果、2～4区では、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴式住居址108軒、掘立柱建物址3棟、甕棺墓8基、石棺墓1基、土壙113基、溝1条などが検出された。一方、5区からは遺構は検出されなかった。2～4区では、後世の耕作による削平で遺物包含層は遺存せず表土下部は直ちに地山である。このため、遺構の層位的な前後関係は失われ、平面的な切合いで前後関係を判断した。　（原田）

1．竪穴式住居址

今回竪穴式住居址として調査した遺構は、127基である。ここでは、そのうちの102基について図示した。これらの中には、形状、規模の点から土壙と考えられるものが含まれているが、調査時のままとした。土壙と考えられるもの19基を除く、住居址の内訳は、円形のもの26軒、小判形のもの6軒、隅丸長方形のもの9軒、長方形のもの48軒、正方形のもの7軒、方形（一部遺存するもので正方形か長方形か不明）のもの7軒、不整形のもの5軒である。

円形竪穴式住居址の規模については、ＳＨ229の推定長径9.40m×短径8.48m（推定面積62.8㎡）からＳＨ401の4.95m×4.35m（面積16.6㎡）まで、その差は大きい。床までの深さは、後世の削平を受けたものが多く資料としては不十分であるが0.22m～0.26mまでが多くを占めている。また、出入口等の痕跡については確認できなかった。主柱穴は、住居が重複しており確実に把握できるものが少ないが、30㎡以下のものは4～6本を、30㎡以上のものについては4～9本を数えることができる。屋内施設としては、中央部に炉状の土壙をもっている。床面の表面には小さな凹凸があり、完全な平坦面をなさず、内部は強く踏みしまっている。円形住居址からは、各種の弥生式土器や、磨製石斧、石包丁などの石製品が多数出土した。

長方形及び正方形の竪穴式住居址は、71軒が検出されたが、ほぼ調査地区3区、4区の中央部から東部に集中している。長方形竪穴式住居址では、主柱穴が2本で、ベッド状遺構をもち、壁際に土壙、中央部に浅い炉状土壙をもつものが多数を占めている。規模については、長辺5m～7m、短辺4m～5.5m、面積は22㎡～38㎡に集中している。出土遺物は、各種の弥生式土器が出土しており、ＳＨ402は、廃棄された後、土器を投棄された形跡がある。正方形竪穴式住居址は、規模一辺5.5m～6mに集中し、2本あるいは4本の柱穴をもつものが多い。ＳＨ202では、4本の主柱穴をもち、西側壁際にカマド跡が検出され、土師器・須恵器が出土している。

（鶴田・原田）

Tab. 1　船石遺跡出土竪穴式住居址一覧表

（時期：Ⅰ…弥生時代前期末～中期前半　Ⅱ…弥生時代中期後半　Ⅲ…弥生時代後期　Ⅳ…古墳時代）

住居址番号	平面形態	規模 (m・m²) 長さ・長径	幅・短径	深さ	床面積	棟方向	屋内施設 主柱穴	溝	炉・焼土・電	その他	出土遺物 上…土器・土製品 下…石製品・その他	時期	備考
SH002	隅丸長方形	4.75	3.89	0.12	16.0	N－48°－E	不明		炉状土壙		器台 太形蛤刃石斧	Ⅲ	
SH003	長方形	7.20	5.15	0.16	37.1	N－90°－E	2		炉状土壙	ベッド状遺構、2カ所	壺・甕・坏・高坏・器台・支脚	Ⅲ	SH004を切る
SH004	方形	4.94	※4.3	0.20	※21.2	N－47°－E	1以上			ベット状遺構、1カ所	壺・甕	Ⅲ	SH003に切られる。
SH005	隅丸長方形	5.05	3.27	0.11	14.6	N－39°－E	2		炉状土壙	土壙	甕 柱状片刃石斧	Ⅱ	SK006に切られる。
SH007	長方形	4.89	4.22	0.08	(17.8)	N－34°－E	2？		炉状土壙	土壙	壺・甕・鉢・碗・須恵器坏	Ⅲ	SK001に切られる。
SH009	方形	※3.1	2.10	0.19	※6.5	N－38°－W					壺・甕	Ⅱ	
SH012	長方形	5.10	4.10	0.08	20.3	N－66°－E	2			土壙	甕・蓋・甑・坏・高坏・碗・器台・扁平片刃石斧	Ⅲ	
SH013	方形	5.18	※3.8	0.11	※19.7	N－5°－W					壺・甕・碗・坏・高坏・支脚・ミニチュア・扁平片刃石斧	Ⅱ	
SH015	円形	(6.5)	——	0.08	(33.2)	——	8		炉状土壙			Ⅰ	SH016に切られる。
SH016	長方形	6.67	5.37	0.19	34.7	N－73°－E	2					Ⅱ	SH015を切る。SH017に切られる。
SH017	長方形	※5.0	4.93	0.09	※24.7	N－75°－E	2？		炉状土壙	土壙	甕・支脚	Ⅲ	SH002・SH019に切られる。
SH023	円形	7.82	7.65	0.28	46.8	——	8？		炉状土壙		壺・甕・碗・器台・土弾・ミニチュア	Ⅰ	SH027を切る。
SH027	不整方形	5.45	※2.0	0.25	※6.7	N－44°－E	不明				甕・蓋	?	土壙の可能性強い。
SH033	正方形	5.80	5.23	0.07	30.0	N－0°－E	2？				壺・甕・鉢・石剣小破片	Ⅱ	
SH034	長方形	4.87	4.33	0.04	21.1	N－14°－E	不明			土壙	壺・甕・高坏・ミニチュア・石包丁・太形蛤刃石斧	Ⅱ	
SH037	長方形	※2.6	2.65	0.07	※6.9	N－45°－W					鉢・高坏	Ⅱ	
SH038	長方形	6.68	5.04	0.11	30.0	N－42°－W	不明		炉状土壙	ベッド状遺構、1カ所 土壙	甕	Ⅲ	
SH040	長方形	6.50	4.40	0.04	28.5	N－45°－E					壺・甕	Ⅱ	
SH201	円形	6.90	6.25	0.14	33.9	——	8		炉状土壙		器台・石包丁	Ⅱ	
SH202	正方形	5.00	4.72	0.21	18.8	N－56°－E	4		電	土壙	土師器・須恵器	Ⅳ	SD383に切られる。
SH203	正方形	2.87	2.73	0.16	7.1	N－41°－W	不明				壺	Ⅱ	土壙の可能性強い。
SH204	不整方形	3.30	2.63	0.17	7.7	N－49°－E	不明				甕	Ⅱ	土壙の可能性強い。
SH205	長方形	6.37	4.20	0.20	25.7	N－90°－E					壺・甕・蓋・碗・高坏	Ⅲ	
SH206	長方形	5.50	3.58	0.18	18.2	N－33°－E	不明			ベッド状遺構、1カ所 土壙	ミニチュア	Ⅲ	SK290・SK291に切られる。
SH207	円形	6.90	——	0.18	37.4	——	不明			土壙		Ⅱ	SH206・SH286に切られる。
SH208	長方形	5.73	4.50	0.05	22.8	N－15°－E	2		炉状土壙	ベッド状遺構、2カ所　土壙	壺・甕・鉢・碗・坏・高坏・器台・支脚・石包丁	Ⅲ	
SH209	円形	6.12	(5.7)	0.21	(26.4)	——	4以上		炉状土壙		壺・甕・土弾 石包丁	Ⅰ	SH252・SH263に切られる。
SH210	隅丸長方形	(5.6)	3.60	0.32	(17.2)	N－54°－E	2		炉状土壙	土壙	支脚	Ⅱ	SH208・SH263に切られる。
SH211	正方形	5.62	4.90	0.12	26.9	N－35°－E	不明			土壙	壺・甕・鉢・碗・高坏・ミニチュア・砥石・鉄製品小片	Ⅲ	
SH212	長方形	6.23	4.15	0.19	24.5	N－68°－E	2？			ベッド状遺構、1カ所 土壙	壺・鉢・坏・高坏・器台・土弾	Ⅲ	
SH213	長方形	5.91	4.24	0.20	23.1	N－51°－E	2		炉状土壙	ベッド状遺構、1カ所 土壙	壺・甕・碗・坏・高坏・器台	Ⅲ	

住居址番号	平面形態	規模 (m・m²) 長さ・長径	幅・短径	深さ	床面積	棟方向	屋内施設 主柱穴	溝	炉・焼土・竈	その他	出土遺物 上：土器・土製品 下：石製品・その他	時期	備考
SH214	長方形	(7.2)	(6.7)	0.25	(48.2)	N−52°−W	2？			ベッド状遺構、1カ所 土壙	壺・甕・碗・高坏・器台・土弾	III	SH266に切られる。
SH216	不整方形	3.36	3.33	0.03	13.0	N− 6°−E	不明		中央にくぼみ		扁平片刃石斧・鉄斧	II	土壙の可能性強い。
SH217	長方形	6.07	4.05	0.17	24.0	N−46°−E	1？			ベッド状遺構、1カ所 土壙	壺・甕・碗・坏・高坏・石包丁	III	
SH218	長方形	※6.1	※4.3	0.27	※26.4	N−50°−E	2			ベッド状遺構、1カ所	壺・土弾	III	SH219に切られる。
SH219	長方形	8.40	5.40	0.18	44.2	N−71°−E	不明		炉状土壙		壺・甕・坏 石包丁・砥石	III	
SH221	長方形	6.75	※5.6	0.11	※37.8	N−66°−E	2		炉状土壙	土壙	壺・甕・鉢・碗・高坏	III	SH219に切られる。
SH223	長方形	※6.9	4.41	0.06	※30.6	N−54°−E	不明				壺・器台	III	SH221に切られる。
SH225	小判形	4.50	※2.3	0.04	※10.1	N−25°−W					壺	?	
SH229	円形	(9.4)	8.48	0.30	(62.8)	——	4以上		炉状土壙			I	
SH230	長方形	6.80	3.90	0.12	36.5	N−68°−W	不明			ベッド状遺構、1カ所 土壙	壺・支脚・ミニチュア	III	
SH231	長方形	5.63	3.27	0.21	(18.4)	N−38°−E					甕・碗・高坏 石包丁	II	
SH232	円形	(7.2)	(6.1)	0.17	(34.6)	——					壺・甕・鉢・高坏	I	
SH233	正方形	5.00	4.78	0.07	22.2	N−51°−E	2？			土壙		II?	
SH234	長方形	(5.4)	4.87	0.07	(26.3)	N−58°−E					壺・甕	II	SH003・SH230に切られる。
SH236	円形	5.15	——	0.08	20.7	——	不明		炉状土壙			I	SH213に切られる。
SH240	長方形	5.20	3.75	0.15	19.5	N−79°−E	2		炉状土壙	土壙	器台 太形蛤刃石斧	III	
SH242	方形	※4.3	※2.4	0.15	※ 6.4	N−51°−W						II	
SH244	方形	※3.8	※1.7	0.10	※6.1	N−16°−W					壺	IV	
SH246	隅丸長方形	3.74	2.22	0.10	7.5	N−53°−W	不明					?	土壙の可能性強い。
SH252	長方形	※4.2	3.12	0.25	※13.1	N−20°−E	不明			土壙		?	SH253・SK387に切られる。
SH253	長方形	4.45	3.74	0.10	15.0	N−90°−E	不明			ベッド状遺構、1カ所	壺・高坏 石包丁	II	
SH254	小判形	※3.0	2.36	0.13	※ 7.4	N−54°−E						?	
SH255	長方形	2,72	※ 1.6	0.04	※ 4.3	N−63°−E						II	
SH263	長方形	5.60	3.45	0.13	19.3	N− 0°−E	不明		炉状土壙	ベッド状遺構、1カ所 土壙	甕	III	SH252に切られる
SH264	不整方形	4.45	3.01	0.15	12.9	N−44°−E	不明		炉状土壙		壺	II	
SH256	長方形	(6.8)	(4.8)	0.04	(32.6)	N−47°−W					甕・鉢・碗・ミニチュア	II	
SH266	長方形	5.82	4.35	0.38	24.1	N−71°−E	2		炉状土壙	ベッド状遺構、2カ所 土壙	壺・鉢・高坏	III	
SH267	長方形	7.30	5.22	0.13	(38.0)	N− 8°−E	2			ベット状遺構が3辺を巡る。北壁部は2段。土壙		III	SH211・SH266に切られる。
SH275	長方形	※1.9	※1.8	0.12	※ 2.1	N−16°−E						II	
SH278	長方形	5.09	3.95	0.02	19.6	N−62°−W	不明		炉状土壙	ベッド状遺構、1カ所 土壙		III	
SH279	正方形	4.22	4.06	0.08	16.4	N−82°−W	2？		炉状土壙	土壙		II	
SH280	長方形	(4.9)	3.49	0.02	(19.5)	N−17°−E	不明			ベッド状遺構、1カ所		III	SH278に切られる

住居址番号	平面形態	規模 (m・m²) 長さ・長径	幅・短径	深さ	床面積	棟方向	屋内施設 主柱穴	溝	炉・焼土・竈	その他	出土遺物 上‥土器・土製品 下‥石製品・その他	時期	備考
SH282	円形	8.10	7.20	0.15	(44.9)	——	4？				壺・支脚	I	SH283に切られる。
SH283	長方形	※3.6	※3.5	0.07	※10.5	N—10°—E						II	
SH284	長方形	4.50	※2.2	0.26	※ 4.3	N—74°—E						II	
SH286	長方形	5.70	4.28	0.30	23.5	N— 0°—E	不明			ベッド状遺構、2カ所 土壙	甕・鉢・扁平片刃石斧・鉄斧	III	
SH293	円形	7.54	7.39	0.28	43.2	——	4or6		炉状土壙		壺・扁平片刃石斧・石包丁	I	SD383に切られる。
SH294	長方形	6.36	3.79	0.17	24.1	N—59°—E	不明		炉状土壙			II	SD383に切られる。
SH297	長方形	※5.55	※3.55	0.08	※20.3	N—71°—E						II	
SH300	正方形	3.91	3.82	0.11	15.1	N—22°—E	不明			土壙		II	
SH301	隅丸長方形	4.04	2.53	0.14	10,0	N—51°—E	不明			土壙		II	土壙の可能性強い。
SH302	隅丸長方形	3.79	2.08	0.08	7.4	N—25°—W	不明					II	土壙の可能性強い。
SH303	円形	※5.3	——	0.06	※22.0	——	6		炉状土壙	土壙	石鏃	I	SH302に切られる。
SH304	長方形	※5.8	5.41	0.07	※31.4	N—53°—W	2？				甕	II	
SH305	円形	5.27	4.95	0.09	20.4	——	5or6		炉状土壙			I	SH304に切られる。
SH306	円形	(8.2)	——	0.16	(53.0)	——	4？		炉状土壙			I	SH304・SH305に切られる。
SH307	隅丸長方形	4.83	2.82	0.45	13.4	N—44°—W	2？			ベッド状遺構、1カ所		III	
SH308	隅丸長方形	3.64	2.00	0.11	7.2	N—51°—E	不明		中央にくぼみ			II	土壙の可能性強い。SK309に切られる。
SH311	隅丸長方形	2.32	2.05	0.28	4.6	N—57°—W	不明					II	土壙の可能性強い。
SH312	隅丸長方形	4.97	2.98	0.25	13.8	N—36°—W	不明					II	
SH314	円形	7.33	7.12	0.19	40.9	——	9		炉状土壙			I	SK315・SH316に切られる。
SH316	長方形	4.24	3.02	0.34	12.8	N—35°—W	2					II	SK315に切られる。
SH317	隅丸長方形	2.68	※1.3	0.22	※ 6.5	N—46°—E						II	
SH318	小判形	5.45	3.55	0.43	16.8	N—52°—E	2		炉状土壙			II	
SH319	円形	5.89	5.72	0.12	26.4	——	4？		炉状土壙	床面が2段に掘り込まれている。	石包丁・砥石	I	SK377に切られる。
SH320	長方形	※6.0	3.15	0.11	※13.2	N—45°—E	不明			土壙		II	
SH321	円形	※5.1	※4.7	0.18	※18.8	——	不明		炉状土壙			I	
SH322	円形	5.18	4.72	0.23	16.3	——	4？					I	
SH324	小判形	5.97	4.08	0.12	20.0	N—54°—E	不明				床面が2段に掘り込まれている。	II	
SH325	長方形	5.62	3.60	0.23	18.6	N—76°—W	2		炉状土壙	ベッド状遺構、1カ所 土壙		III	SH327に切られる。
SH326	長方形	5.52	3.54	0.11	19.5	N—27°—W	不明				扁平片刃石斧	II	
SH327	円形	6.32	6.29	0.51	31.1	——	4？		炉状土壙		壺 太形片刃石斧・扁平片刃石斧	I	
SH328	円形	7.00	6.84	0.35	37.6	——	6？		炉状土壙			I	
SH329	円形	5.70	——	0.12	26.0	——						I	

住居址番号	平面形態	規模 (m・m²) 長さ・長径	巾・短径	深さ	床面積	棟方向	屋内施設 主柱穴	溝	炉・焼土・竈	その他	出土遺物 上‥土器・土製品 下‥石製品・その他	時期	備考
SH338	長方形	※5.7	※3.0	0.22	※ 9.0	N−86°−E						?	
SH345	円形	5.90	5.30	0.25	25.0	——	4or6					I	中央の土壙は別遺構の可能性強い。
SH347	長方形	(2.8)	2.25	0.14	(5.6)	N−20°−E	不明					?	土壙の可能性強い。SH348に切られる。
SH348	長方形	3.28	2.10	0.15	6.7	N−38°−W	不明					?	土壙の可能性強い。
SH349	円形	5.80	5.41	0.26	24.6	——	4		炉状土壙			I	SK350・SH374に切られる。
SH351	隅丸長方形	2.75	2.35	0.09	6.2	N−61°−E	不明		中央にくぼみ			?	土壙の可能性強い。
SH353	隅丸長方形	4.18	2.66	0.11	9.1	N−58°−E	2		炉状土壙			II	
SH354	隅丸長方形	3.42	2.02	0.14	5.9	N−52°−E	不明		中央にくぼみ			?	土壙の可能性強い。
SH360	隅丸長方形	2.20	1.83	0.17	3.4	N−53°−E	不明					?	土壙の可能性強い。
SH362	隅丸長方形	(5.8)	4.25	0.02	(23.7)	N−13°−E	2					II	SH208に切られる
SH365	長方形	4.05	2.80	0.49	10.0	N−36°−W	不明					?	土壙の可能性強い。
SH367	長方形	2.58	1.90	0.06	4.6	N−44°−W	不明					?	土壙の可能性強い。
SH370	方形	※4.9	※4.4	0.05	※20.4	N−29°−W	不明					?	北壁のみ遺存。
SH372	不整方形	5.45	5.20	0.07	(21.0)	N−81°−E	2 ?			土壙		?	
SH374	小判形	(4.9)	(3.5)	0.37	(13.3)	N− 3°−E	5 ?		炉状土壙			II	
SH375	正方形	6.30	5.95	0.06	(36.9)	N−59°−E	2 ?			ベッド状遺構、1カ所 土壙		III	SH217に切られる。
SH379	長方形	3.67	2.51	0.08	(9.0)	N−55°−E	1					II	土壙の可能性強い。SD383に切られる。
SH381	不整方形	3.82	3.30	0.19	(12.6)	N−34°−W	不明					II	土壙の可能性強い。SH034に切られる。
SH388	小判形	5.33	※2.0	0.12	※11.8	N−52°−E						II	
SH389	長方形	3.46	1.86	0.06	6.1	N−27°−W	不明					II	土壙の可能性強い。SJ258に切られる。
SH401	円形	4.95	4.35	0.19	16.6	——	1 ?			土壙		I	
SH402	方形	※3.5	※2.6	0.38	※ 7.1	N−34°−W	不明				壺・甕・鉢・器台 扁平片刃石斧・砥石・鉄斧	III	
SH403	長方形	※8.2	7.15	0.14	※58.6	N−73°−W	2 ?					II	SH404に切られる。
SH404	長方形	6.74	※4.3	0.26	※19.4	N−79°−W	2 ?			ベッド状遺構、1カ所	土弾	III	
SH405	長方形	4.67	2.50	0.20	10.3	N−36°−W	不明					II	
SH406	不整方形	4.90	4.23	0.19	19.4	N−62°−E	2			土壙	鉄斧	II	
SH407	不整形	※3.4	※2.3	0.17	※ 6.3	——						II	
SH408	不整形	※2.8	2.50	0.03	※ 6.1	N−37°−W						II	
SH410	円形	※2.4	2.37	0.07	※ 4.3	——						I	
SH411	円形	※2.2	——	0.11	※ 3.8	——	不明					I	
SH412	隅丸長方形	2.38	※0.4	0.32	※ 0.7	N−29°−W	不明					II	SH402に切られる。
SH416	円形	8.08	(7.3)	0.25	(46.4)	——	4or6	有	炉状土壙	土壙		I	

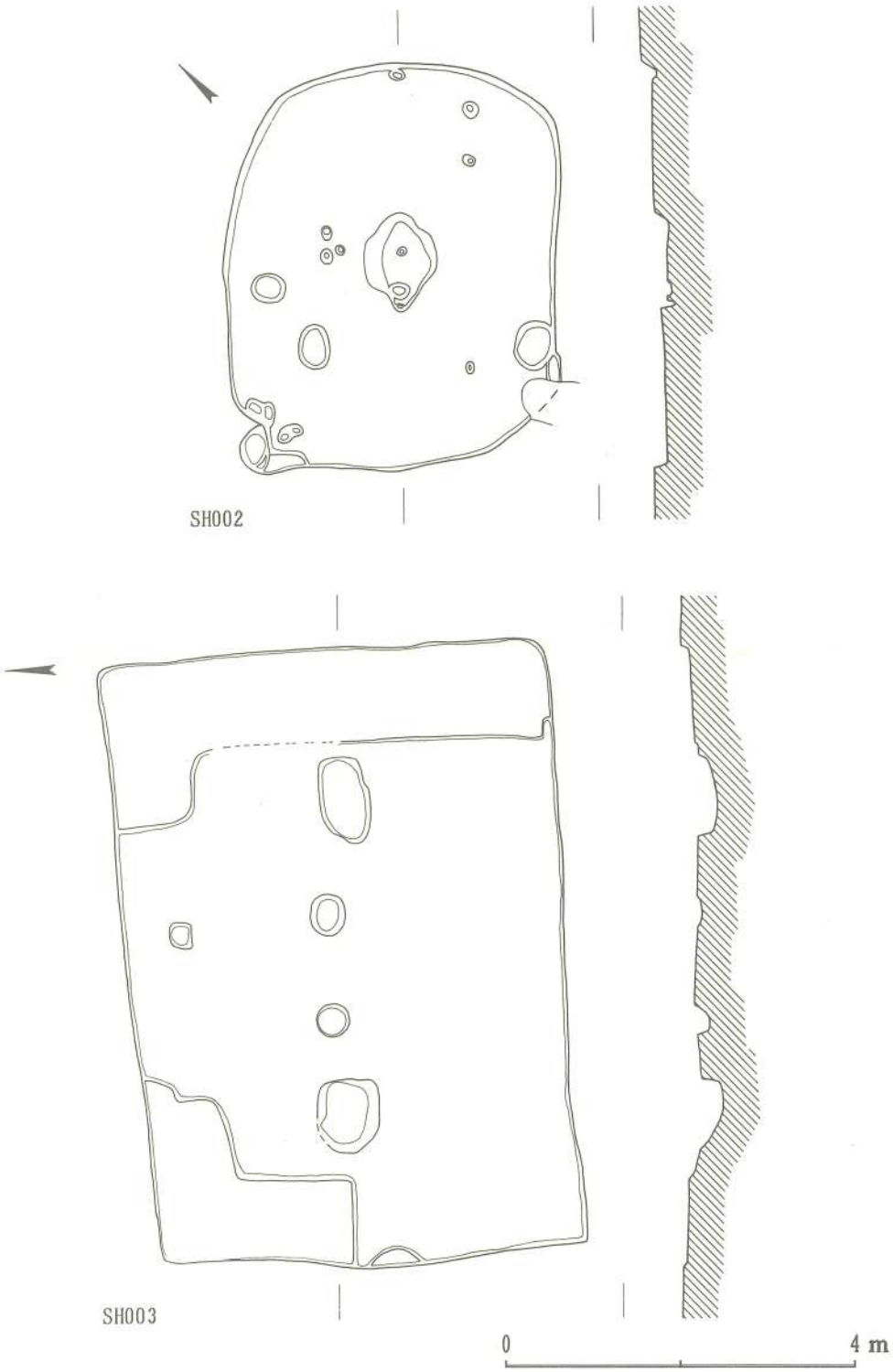


Fig. 4　竪穴式住居址実測図(1)　SH002・SH003

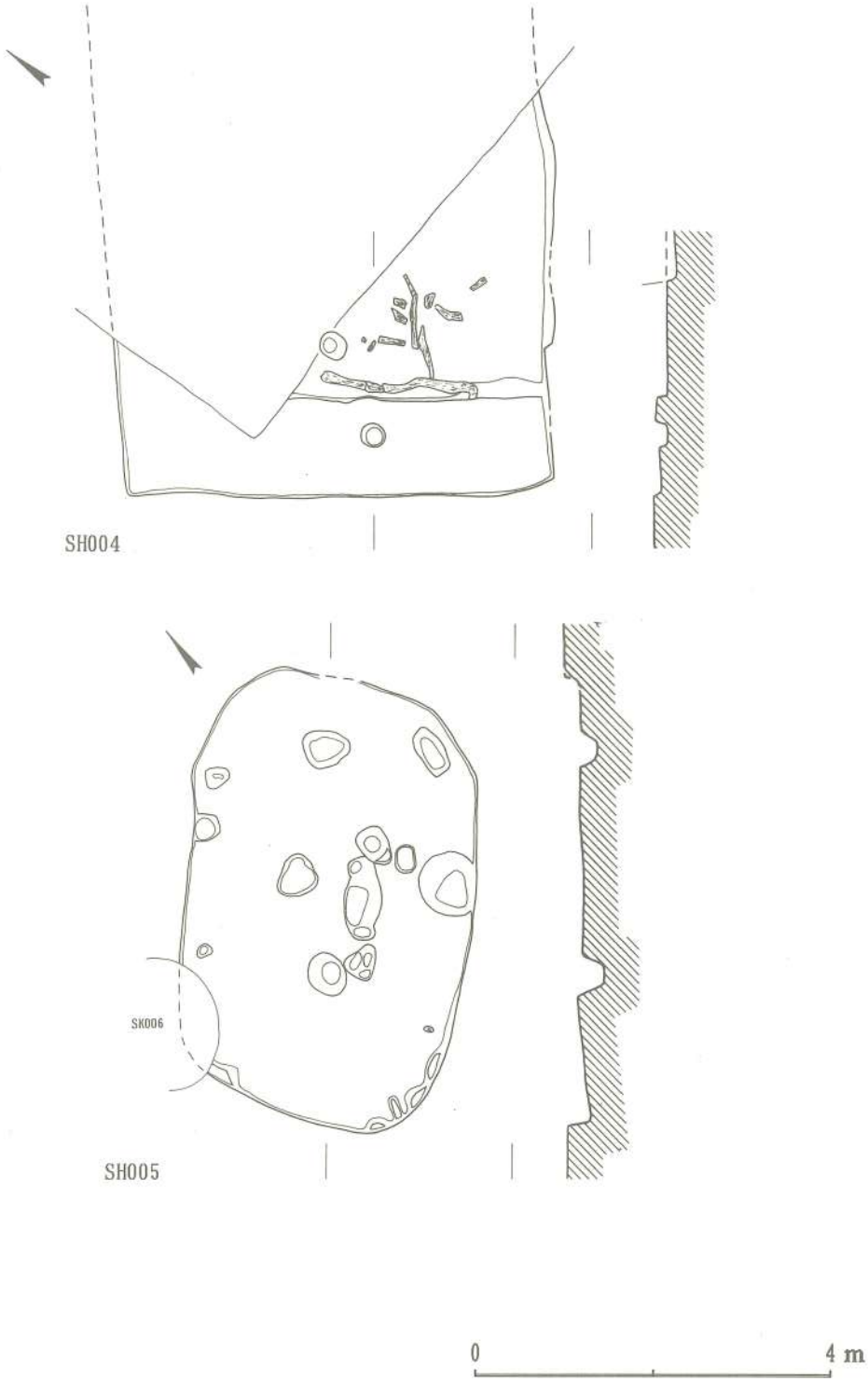


Fig. 5　竪穴式住居址実測図(2)　SH004・SH005

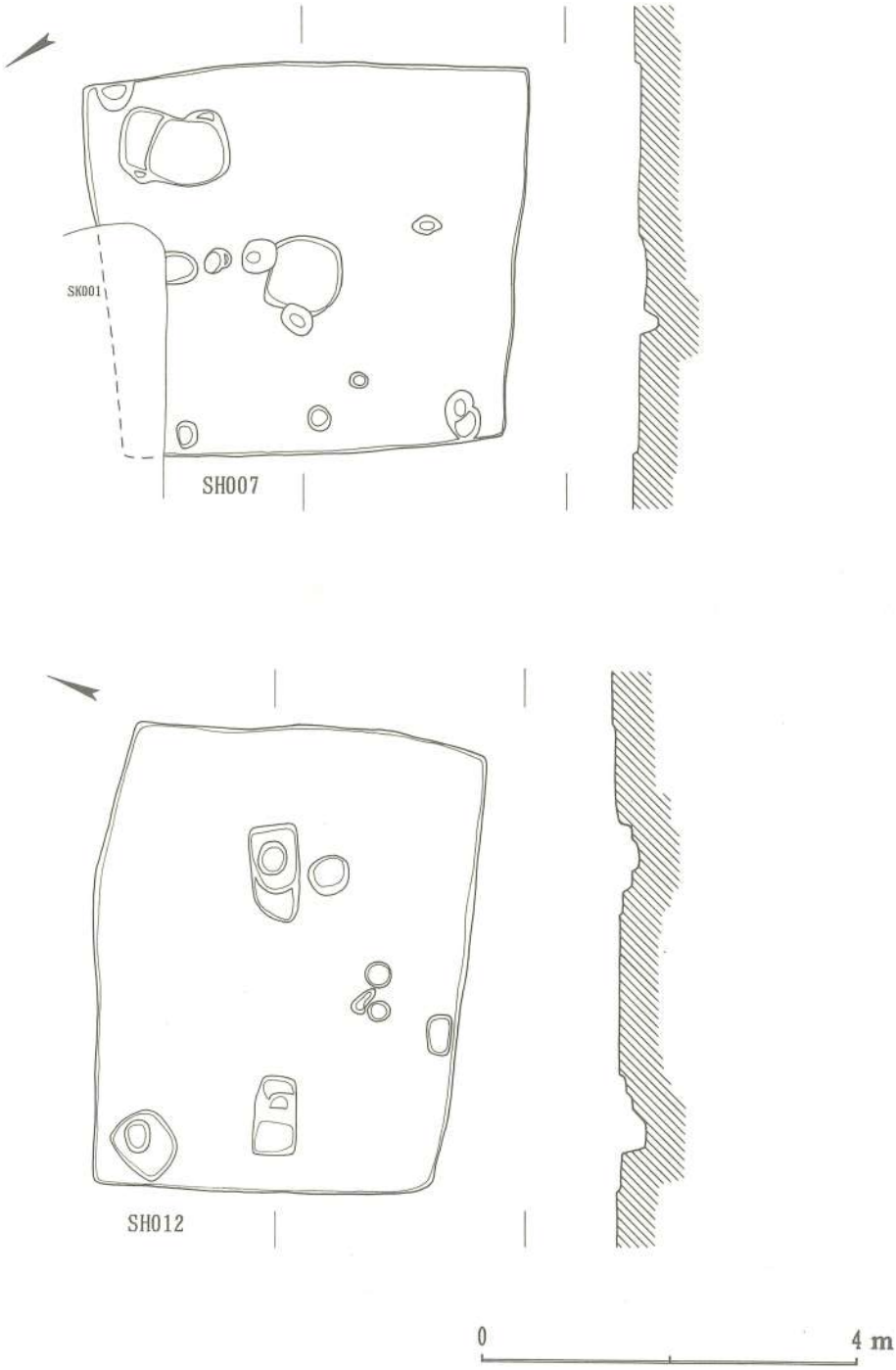


Fig. 6　竪穴式住居址実測図(3)　SH007・SH012

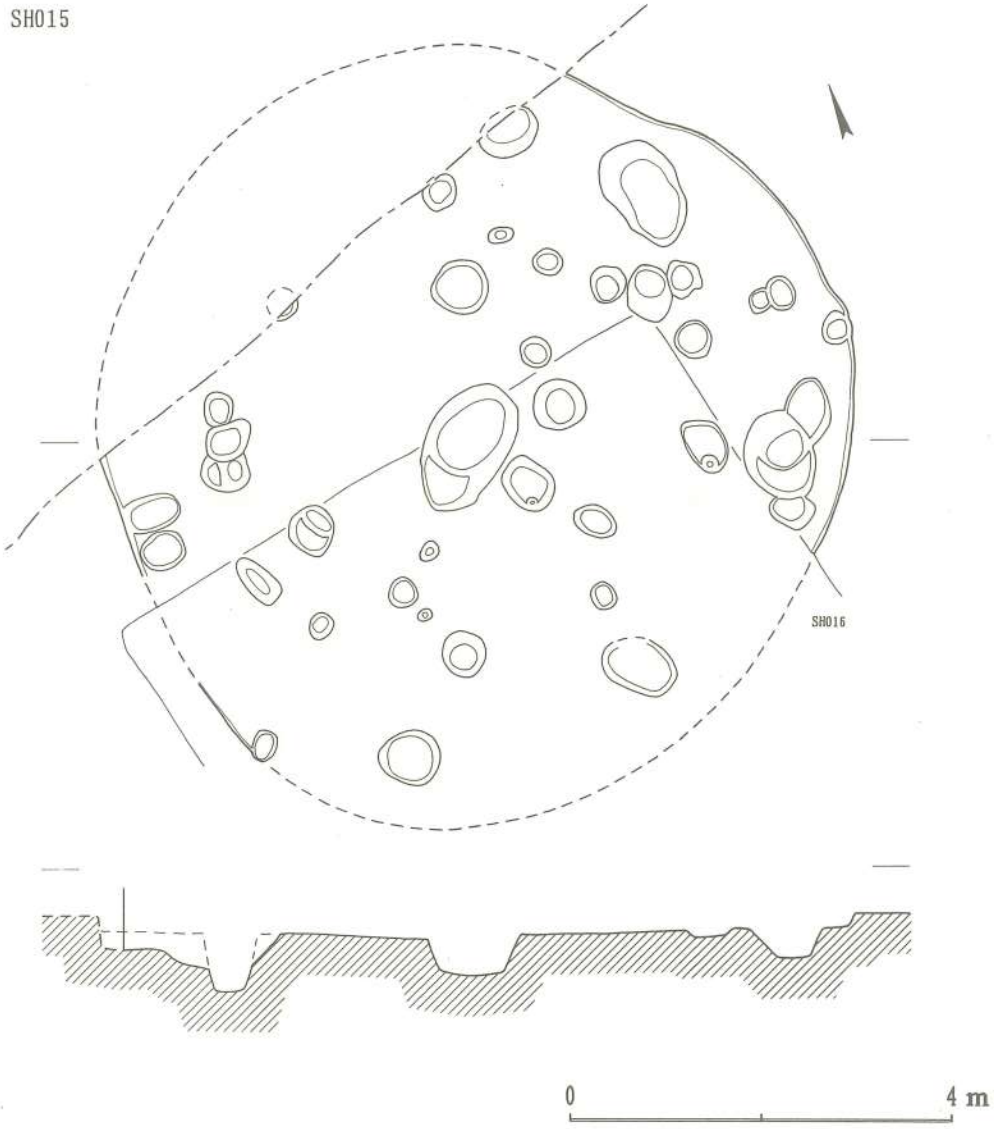


Fig. 7　竪穴式住居址実測図(4)　SH015

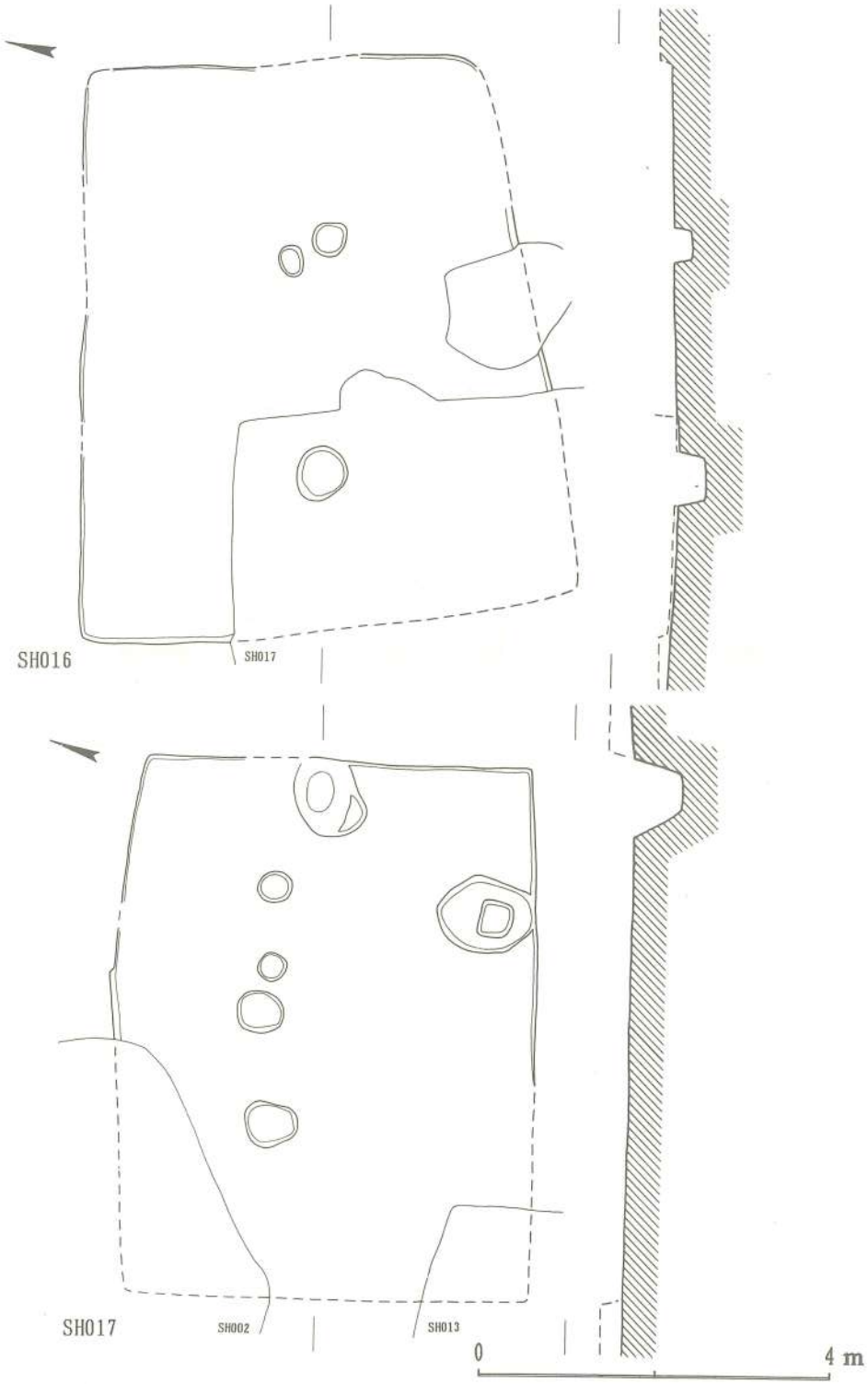


Fig. 8　竪穴式住居址実測図(5)　SH016・SH017

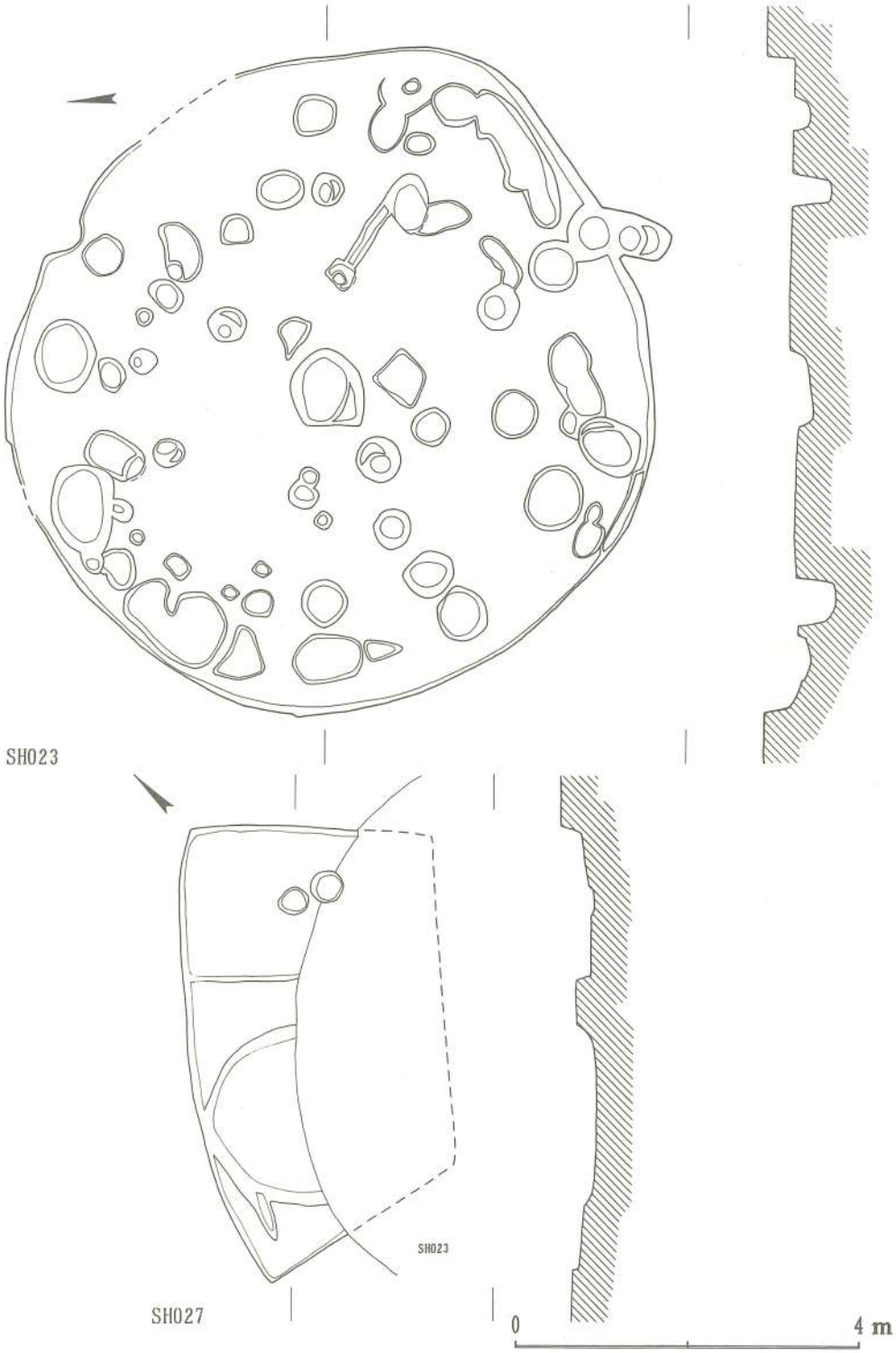


Fig. 9　竪穴式住居址実測図(6)　SH023・SH027

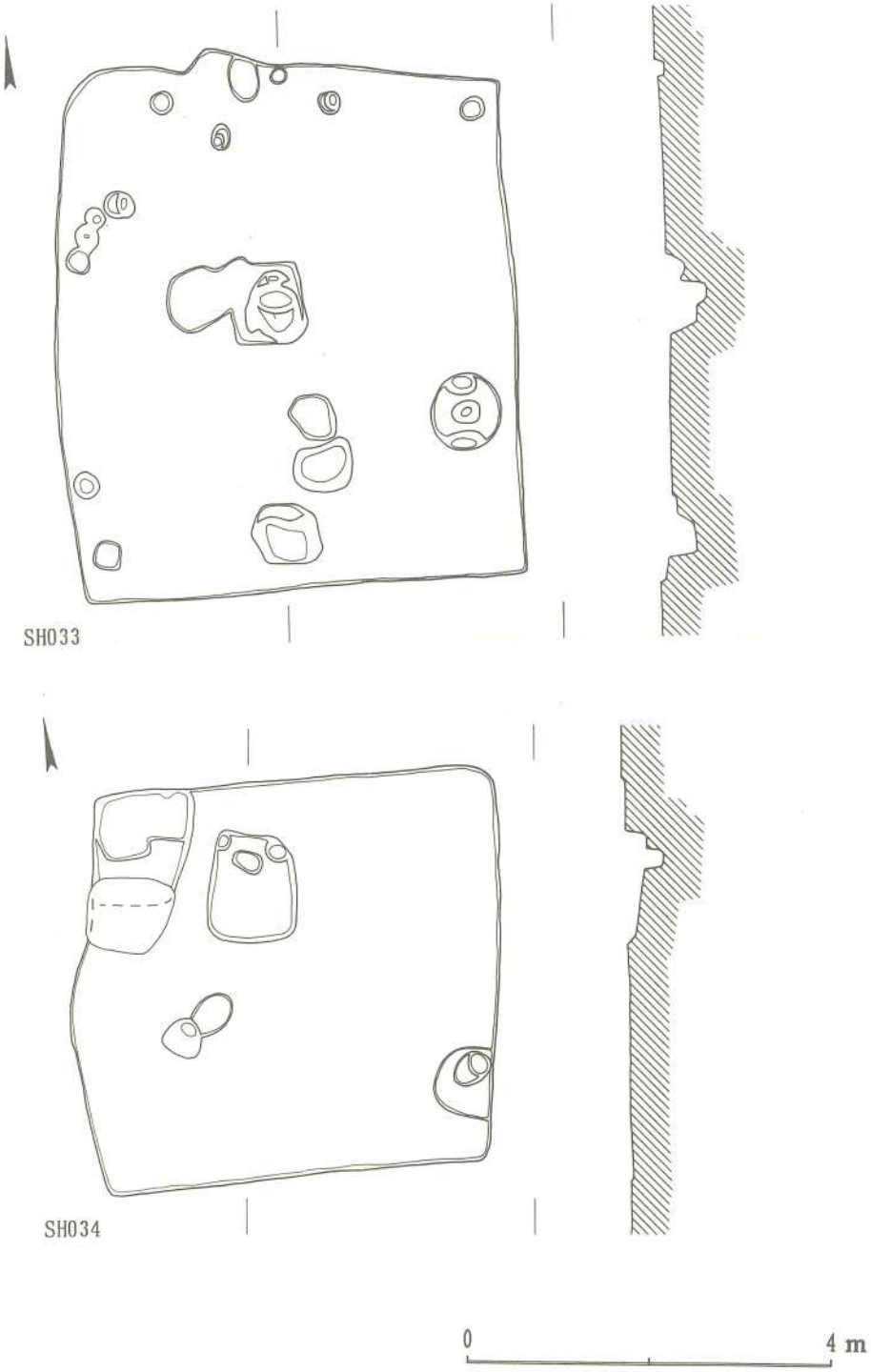


Fig. 10　竪穴式住居址実測図(7)　SH033・SH034

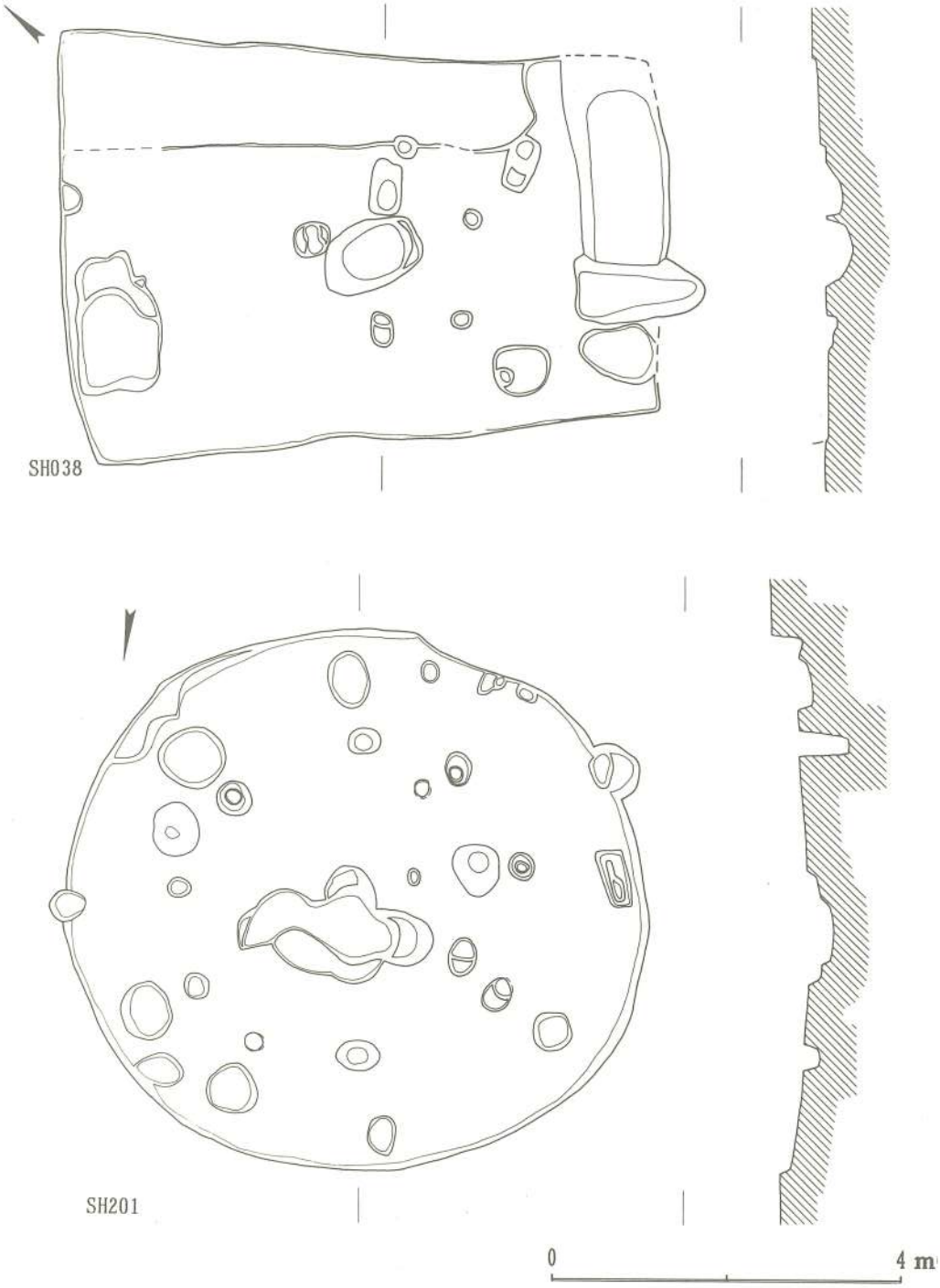


Fig. 11　竪穴式住居址実測図(8)　SH038・SH201

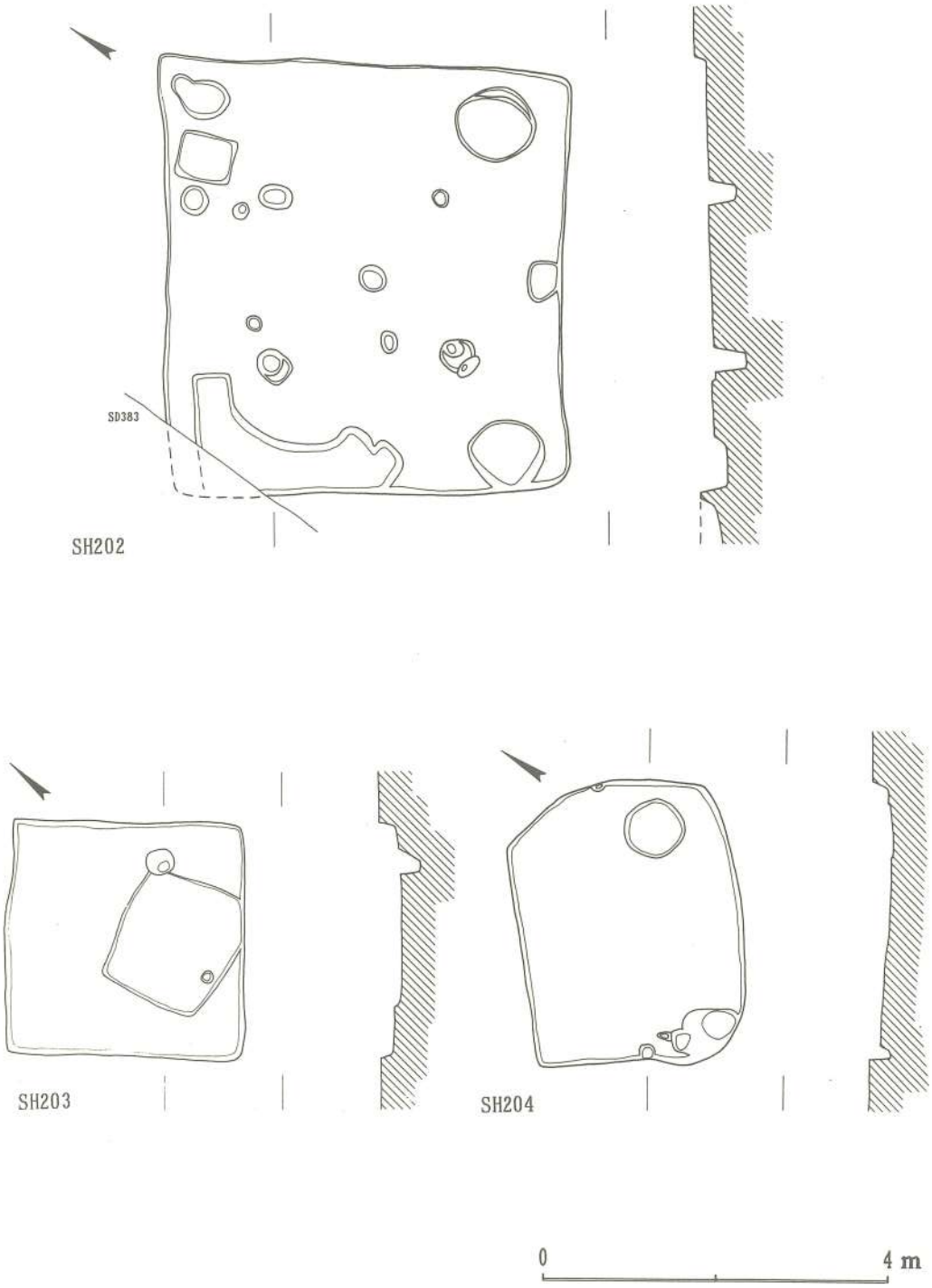


Fig. 12　竪穴式住居址実測図(9)　SH202・SH203・SH204

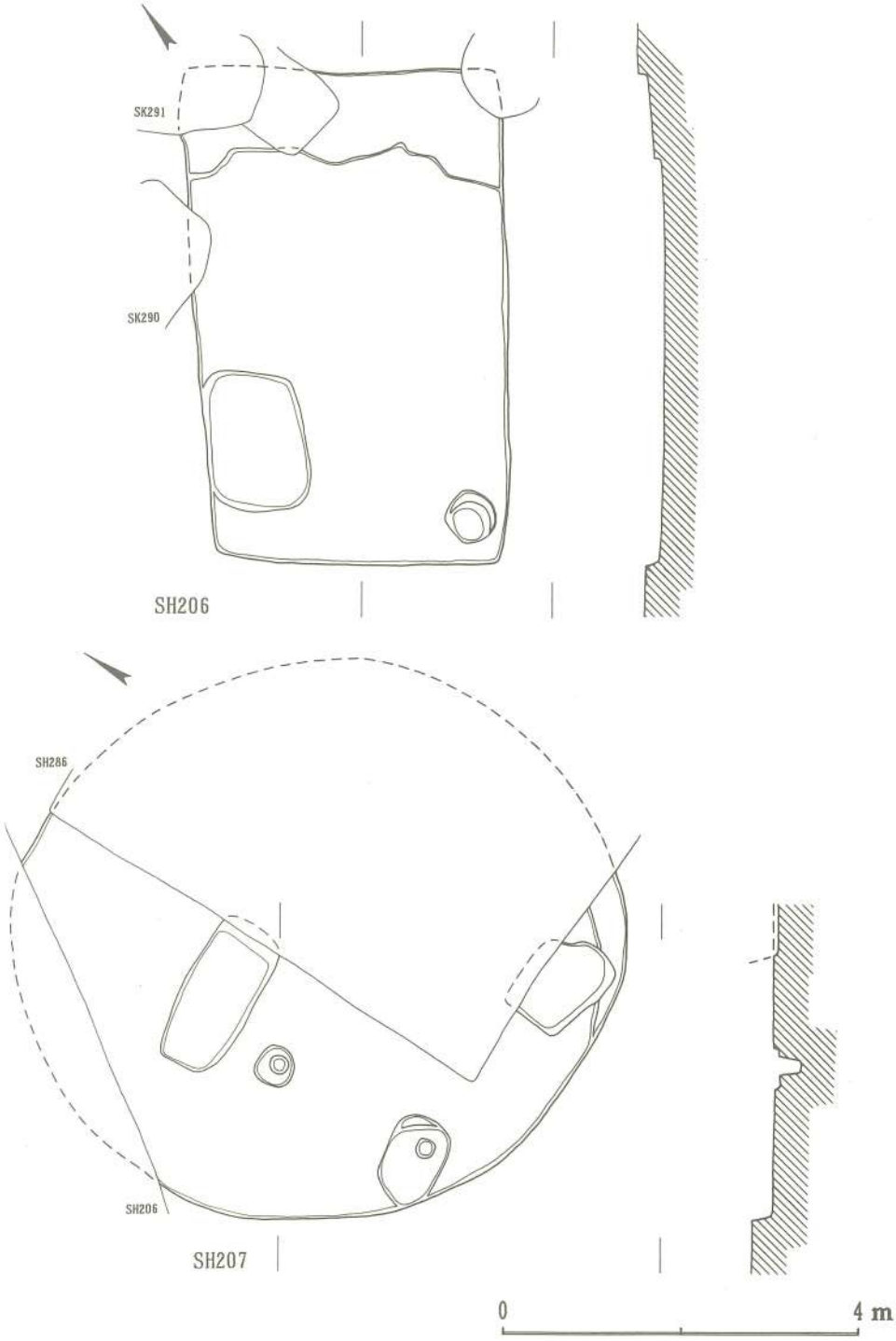


Fig. 13　竪穴式住居址実測図(10)　SH206・SH207

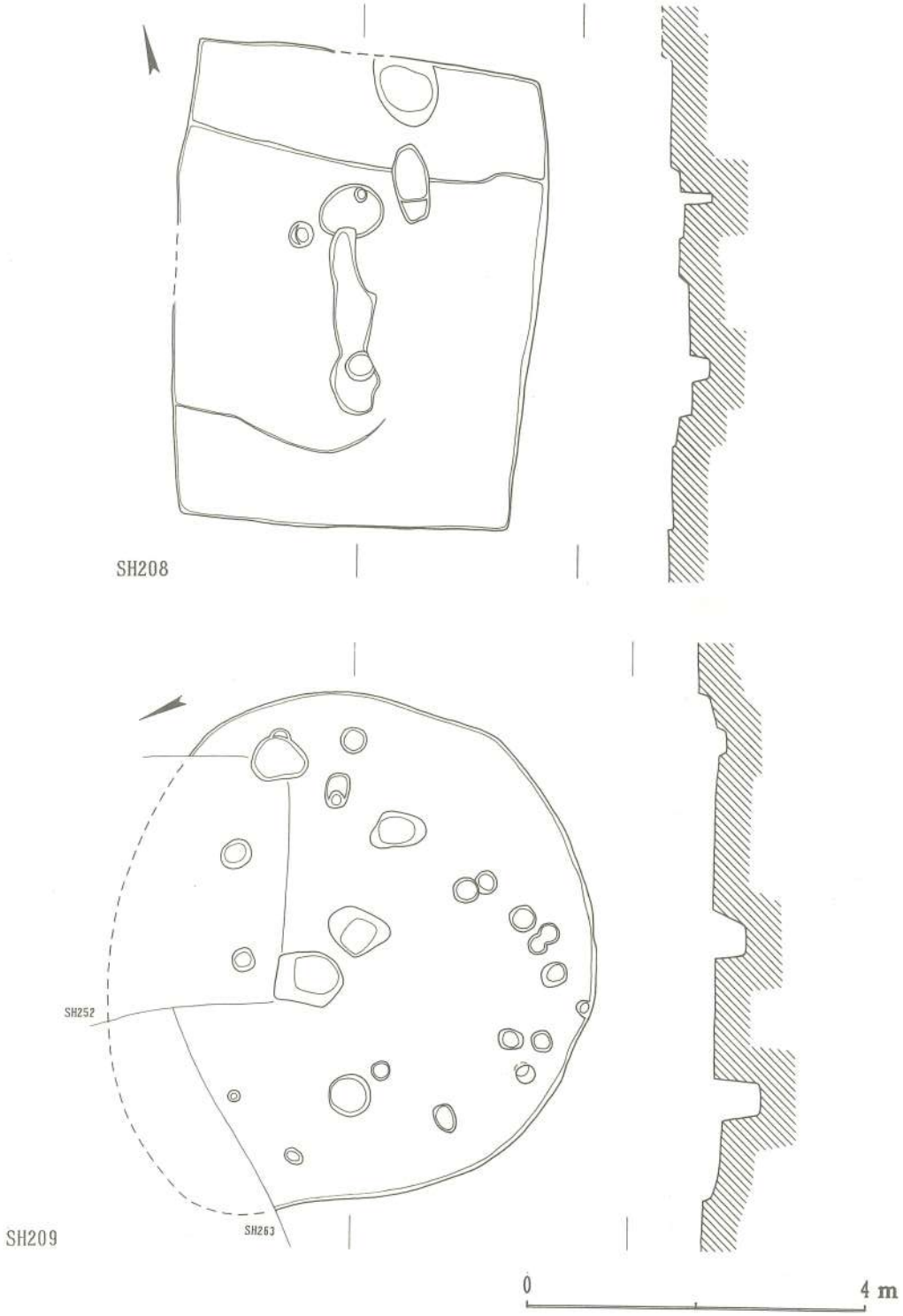


Fig. 14　竪穴式住居址実測図(11)　SH208・SH209

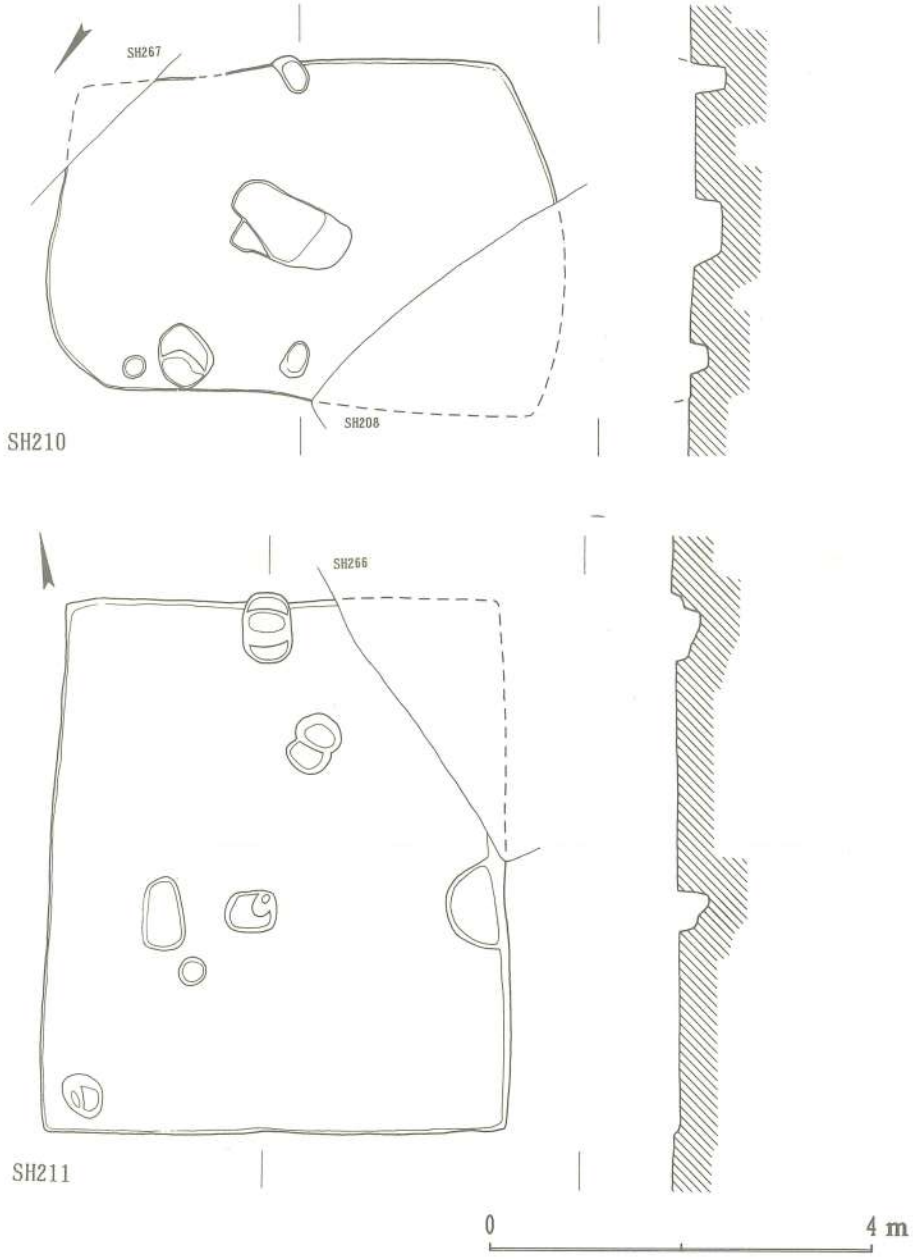


Fig. 15　竪穴式住居址実測図(12)　SH210・SH211

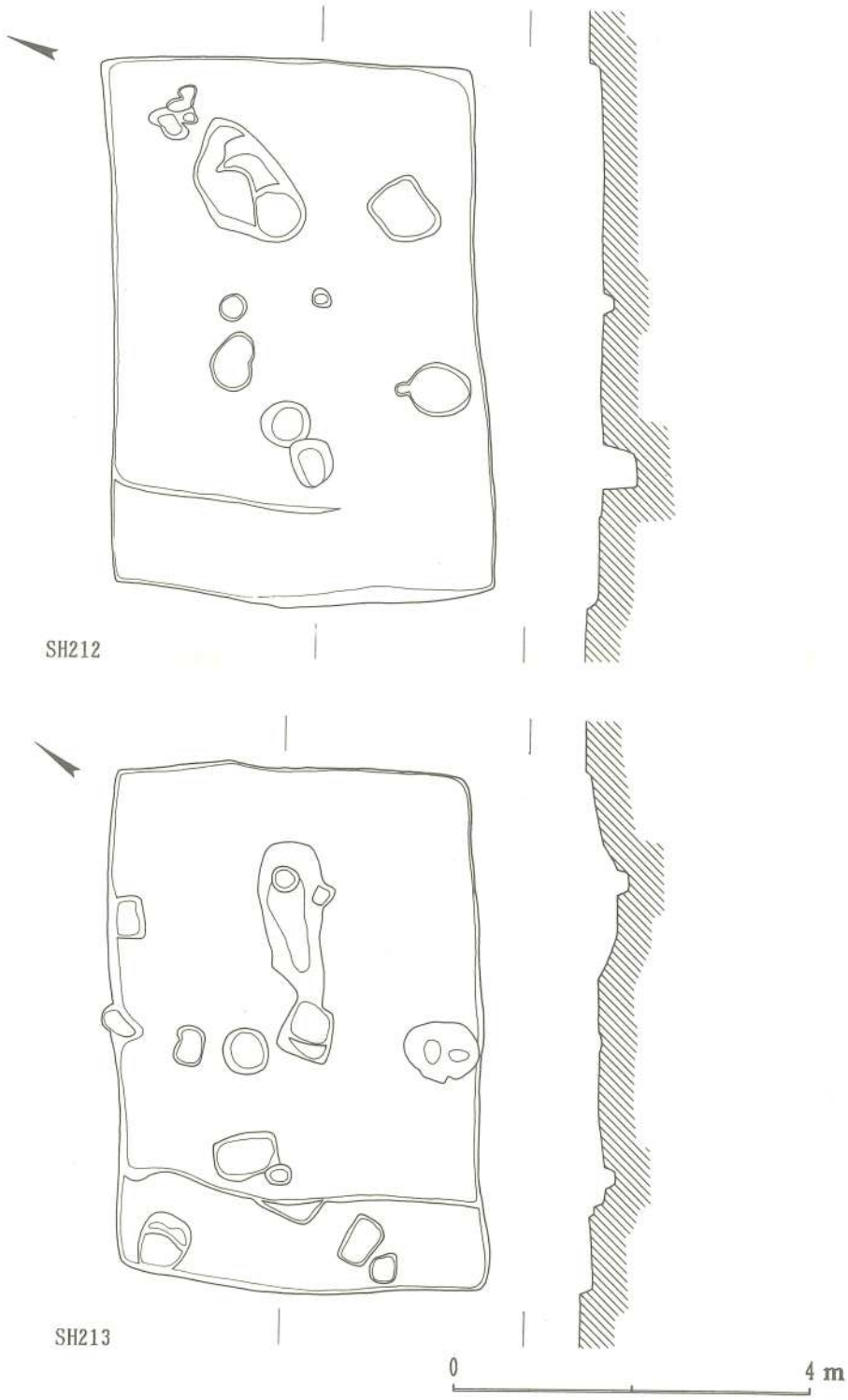


Fig. 16　竪穴式住居址実測図(13)　SH212・SH213

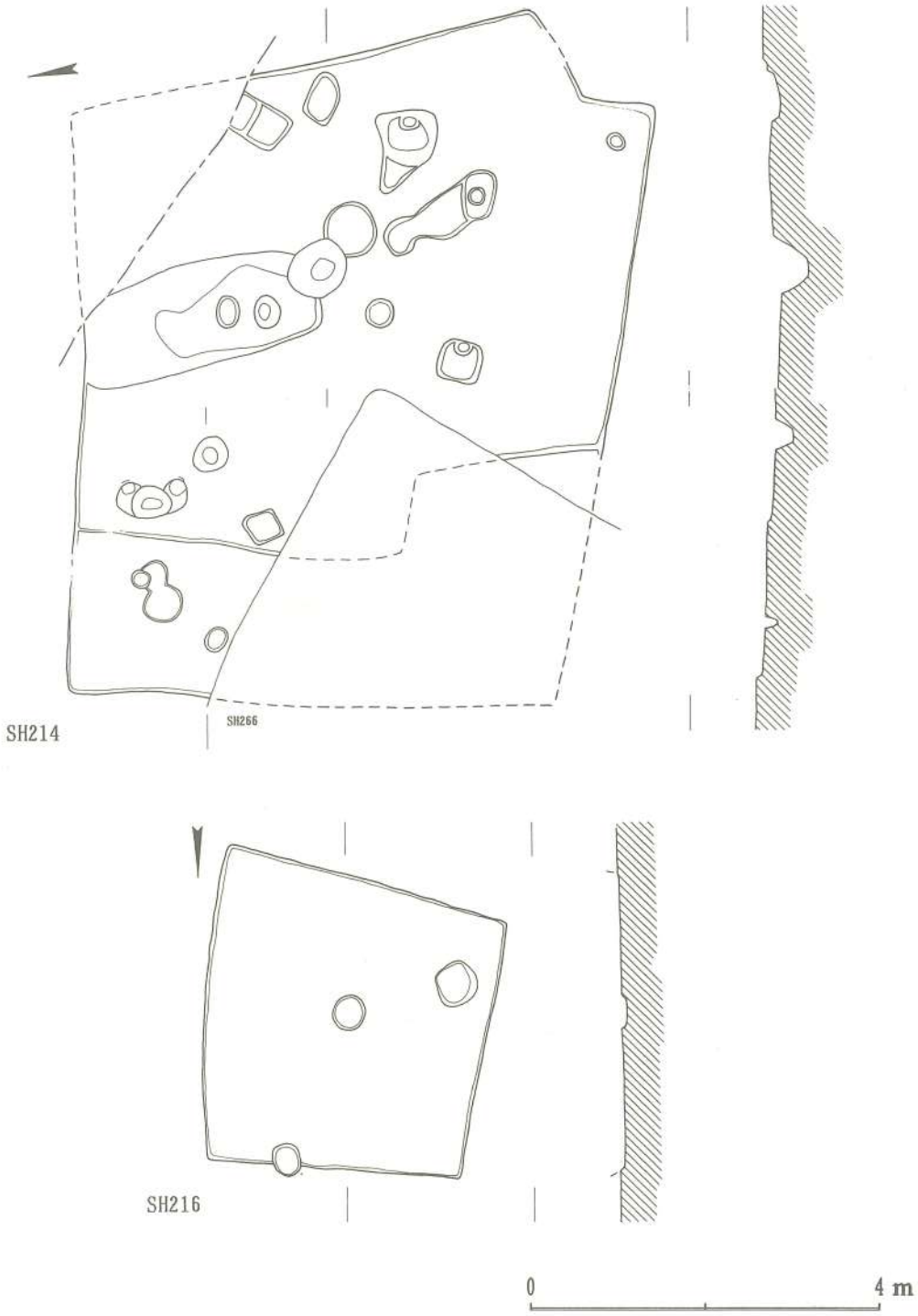


Fig. 17　竪穴式住居址実測図(14)　SH214・SH216

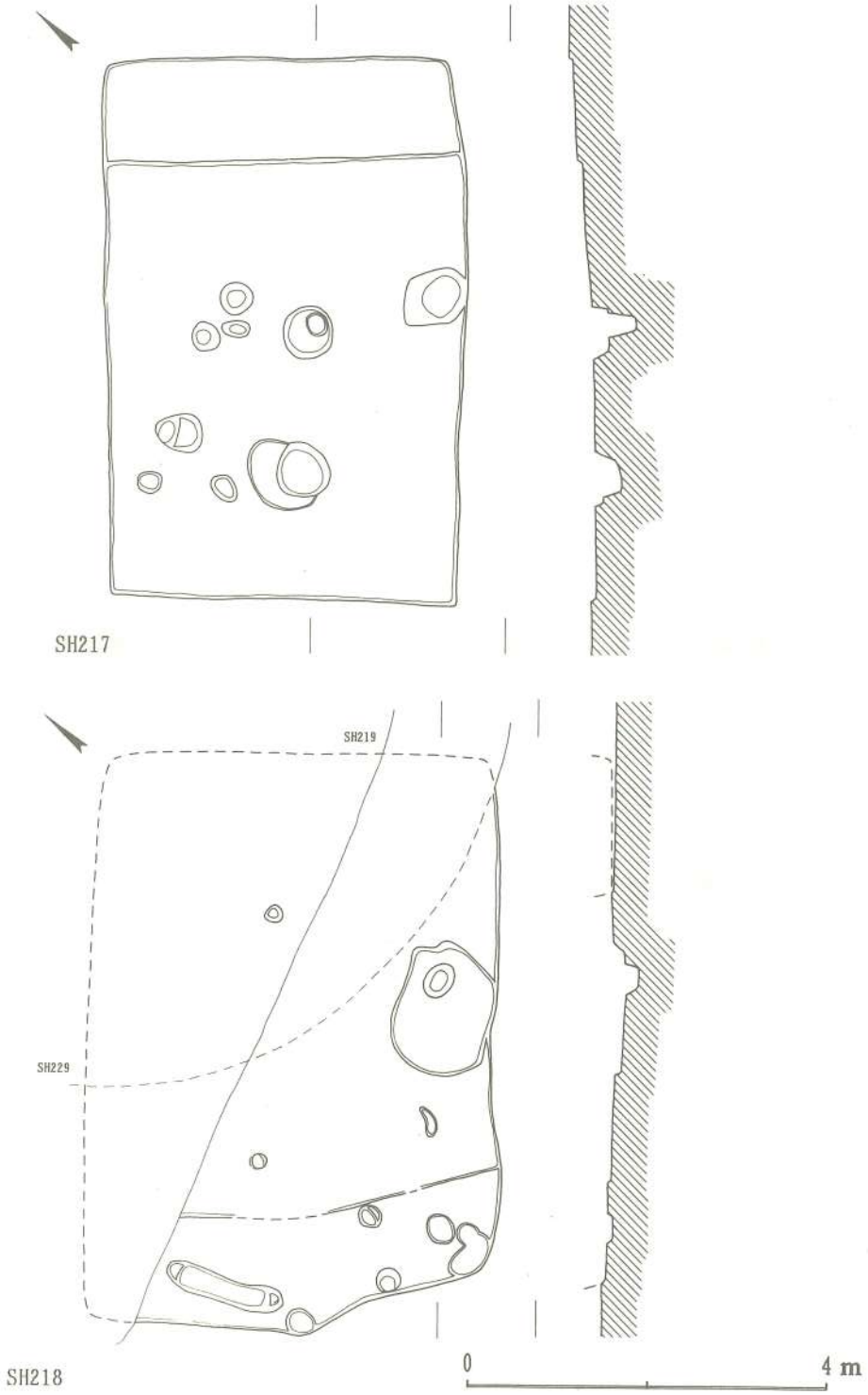


Fig. 18　竪穴式住居址実測図(15)　SH217・SH218

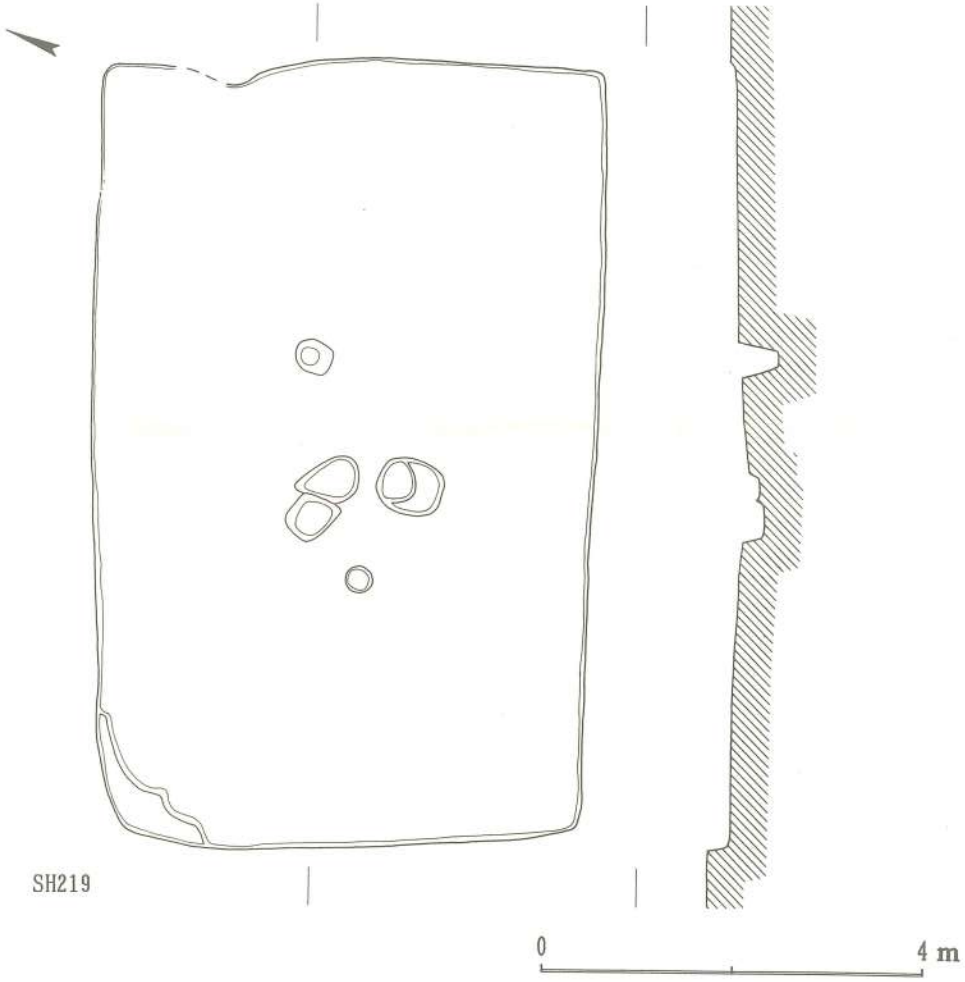


Fig. 19　竪穴式住居址実測図(16)　SH219

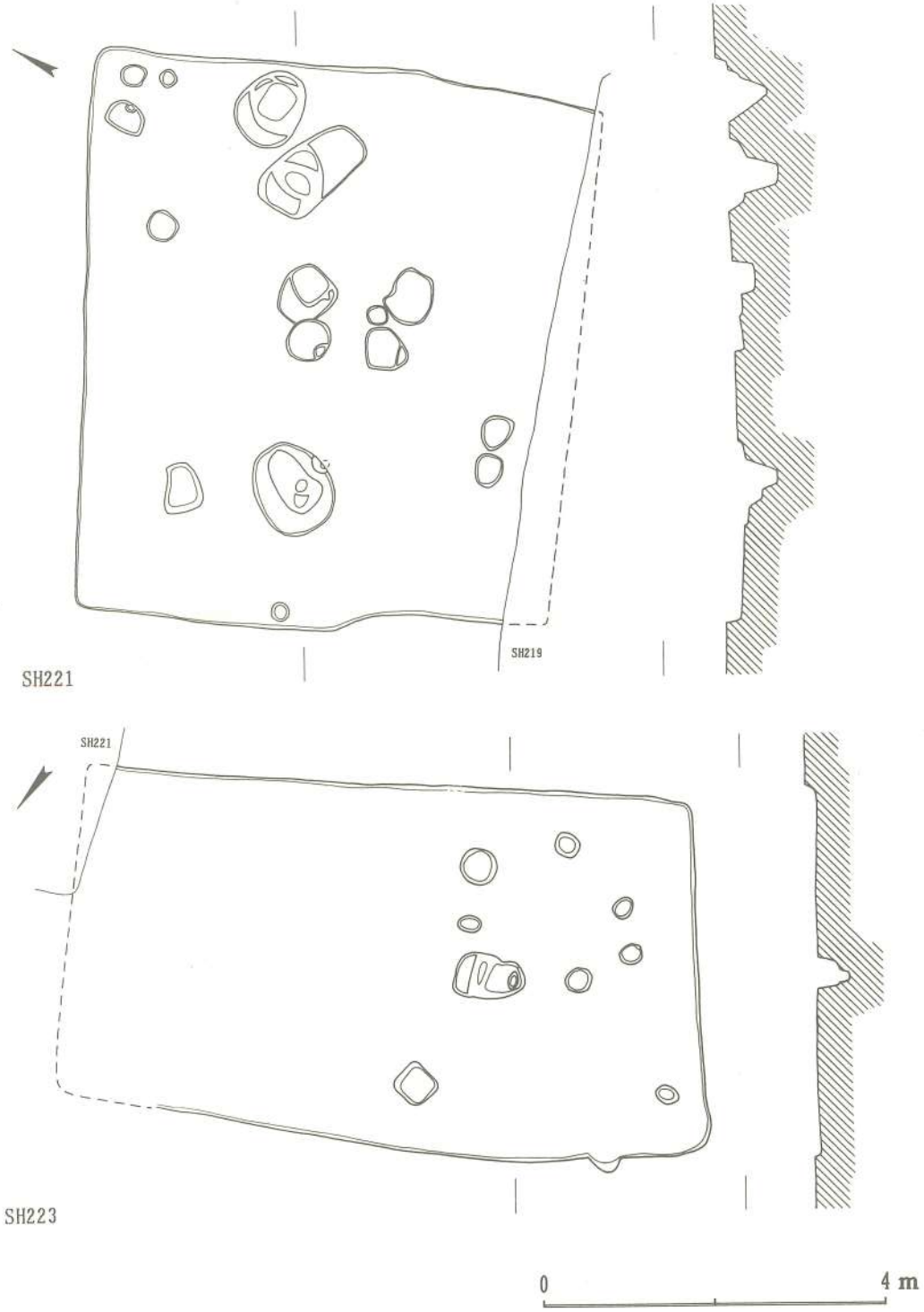


Fig. 20　竪穴式住居址実測図(17)　SH221・SH223

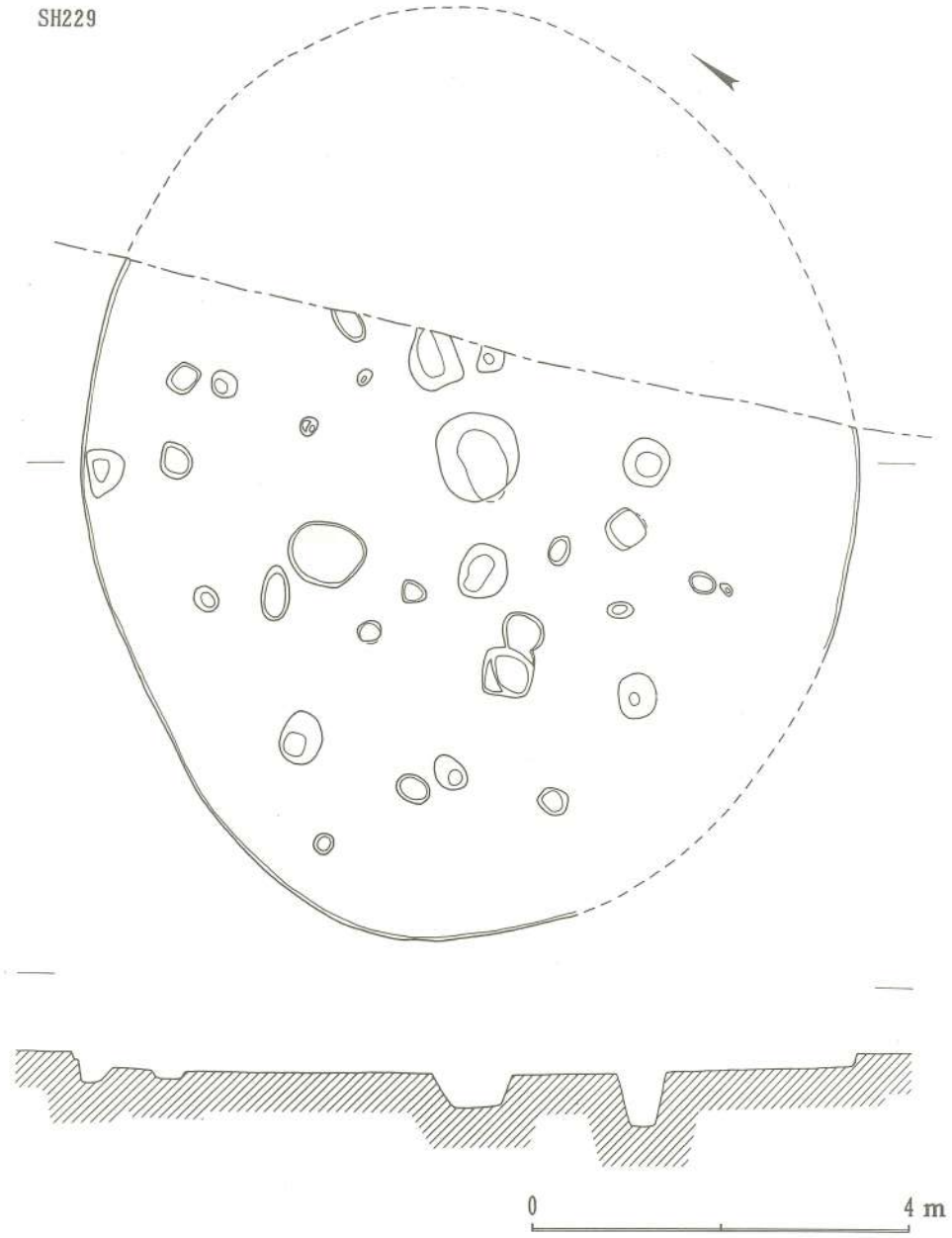


Fig. 21　竪穴式住居址実測図(18)　SH229

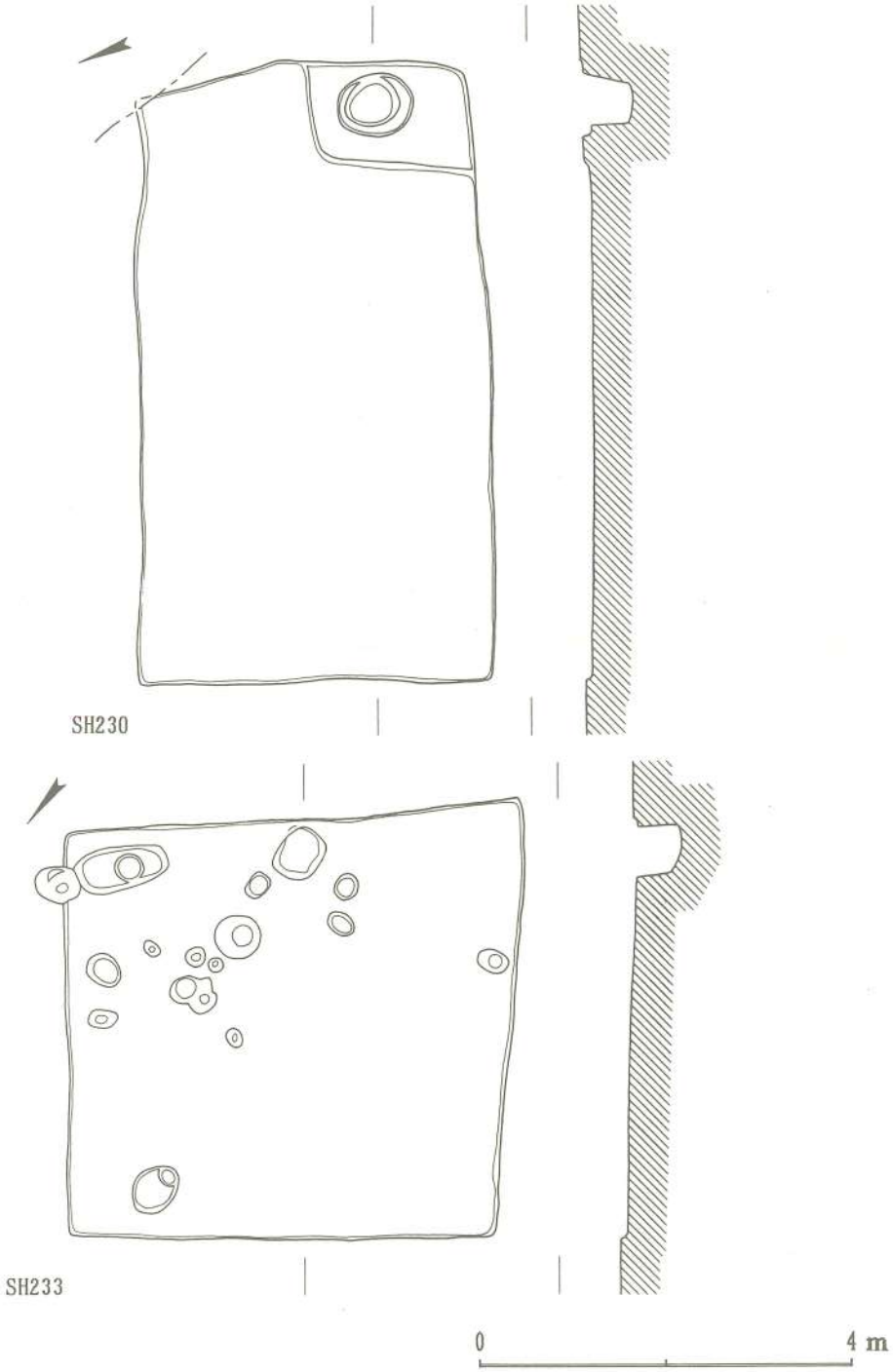


Fig. 22　竪穴式住居址実測図(19)　SH230・SH233

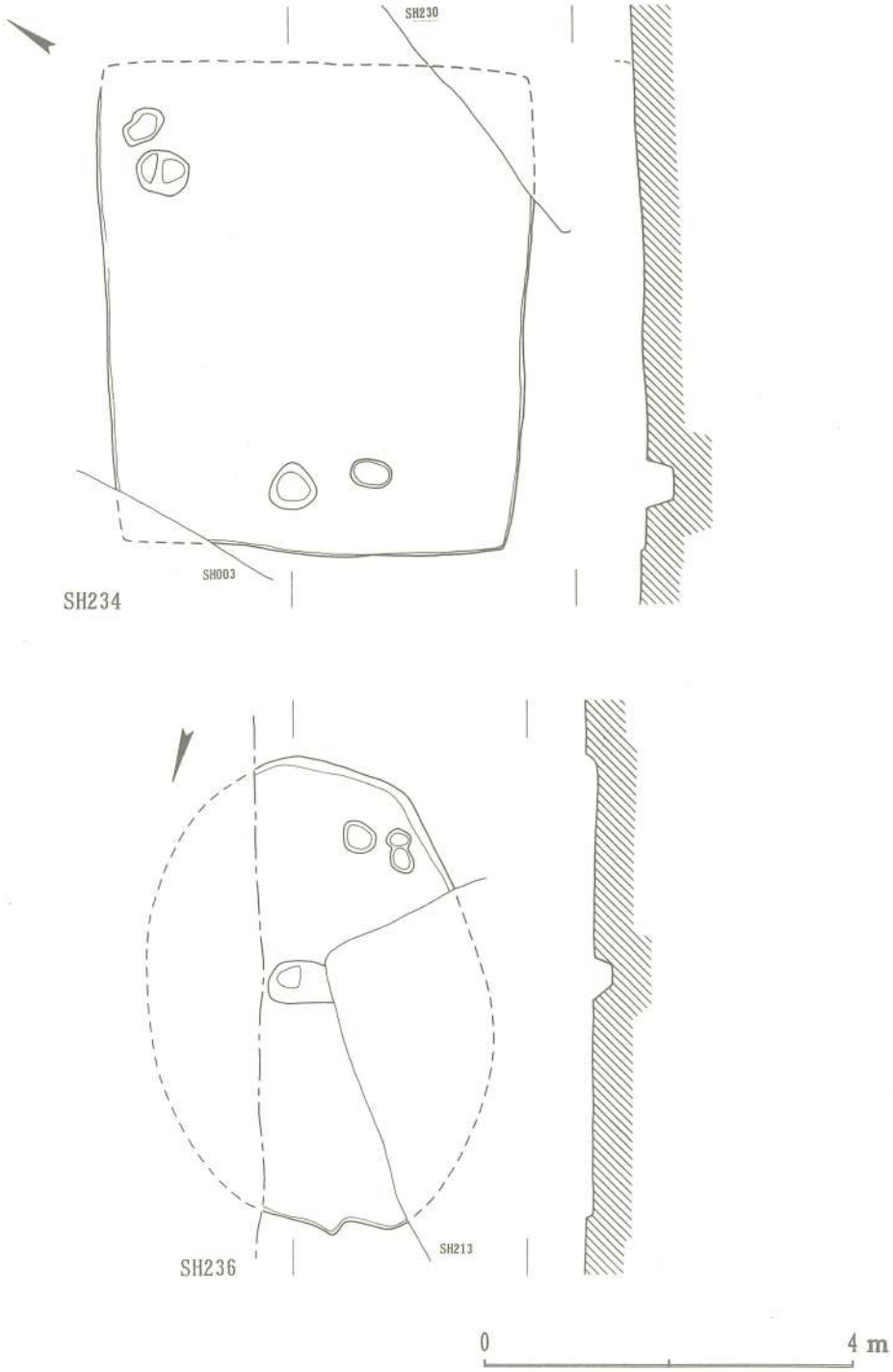


Fig. 23　竪穴式住居址実測図(20)　SH234・SH236

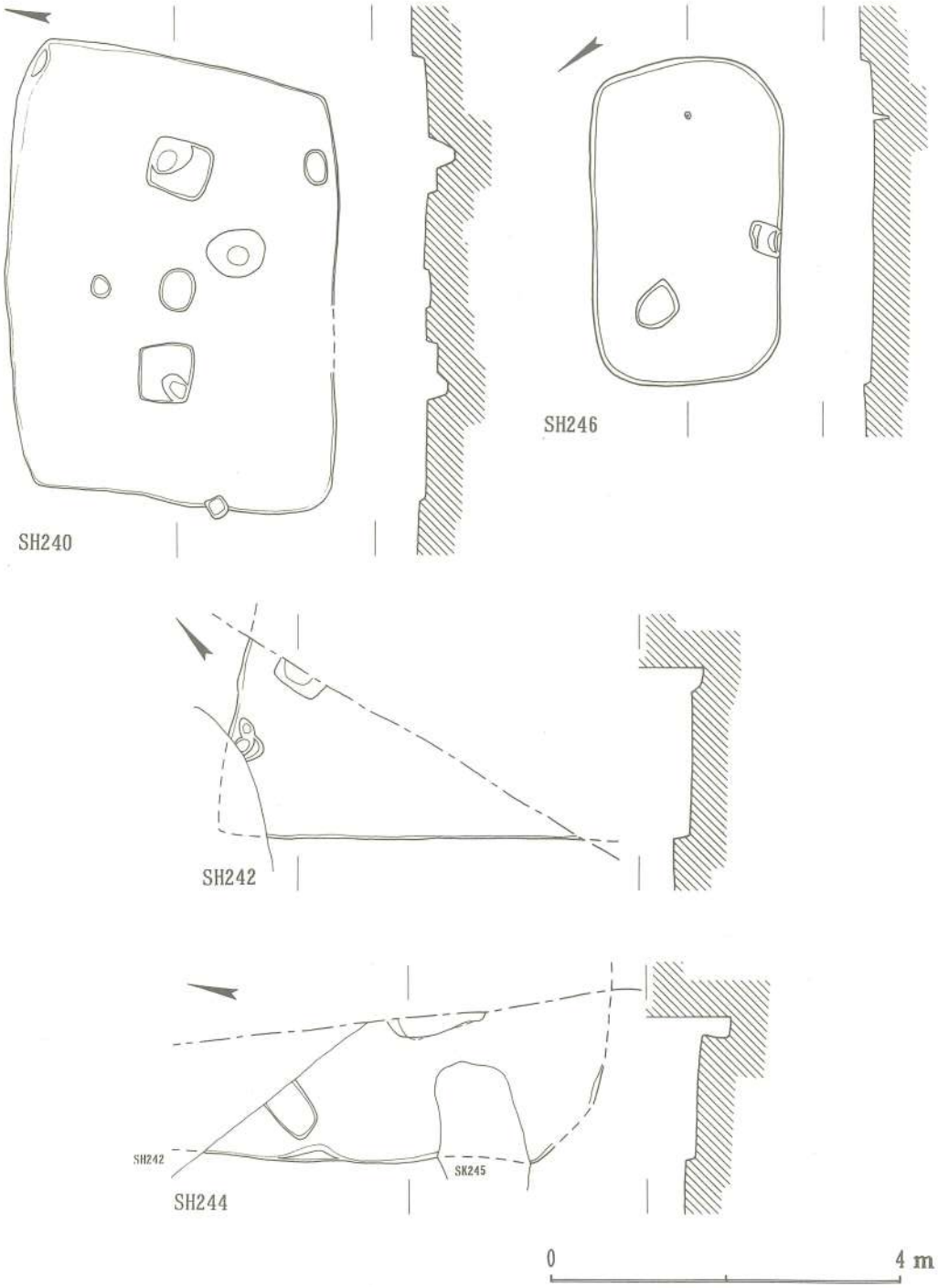


Fig. 24　竪穴式住居址実測図(21)　SH240・SH242・SH244・SH246

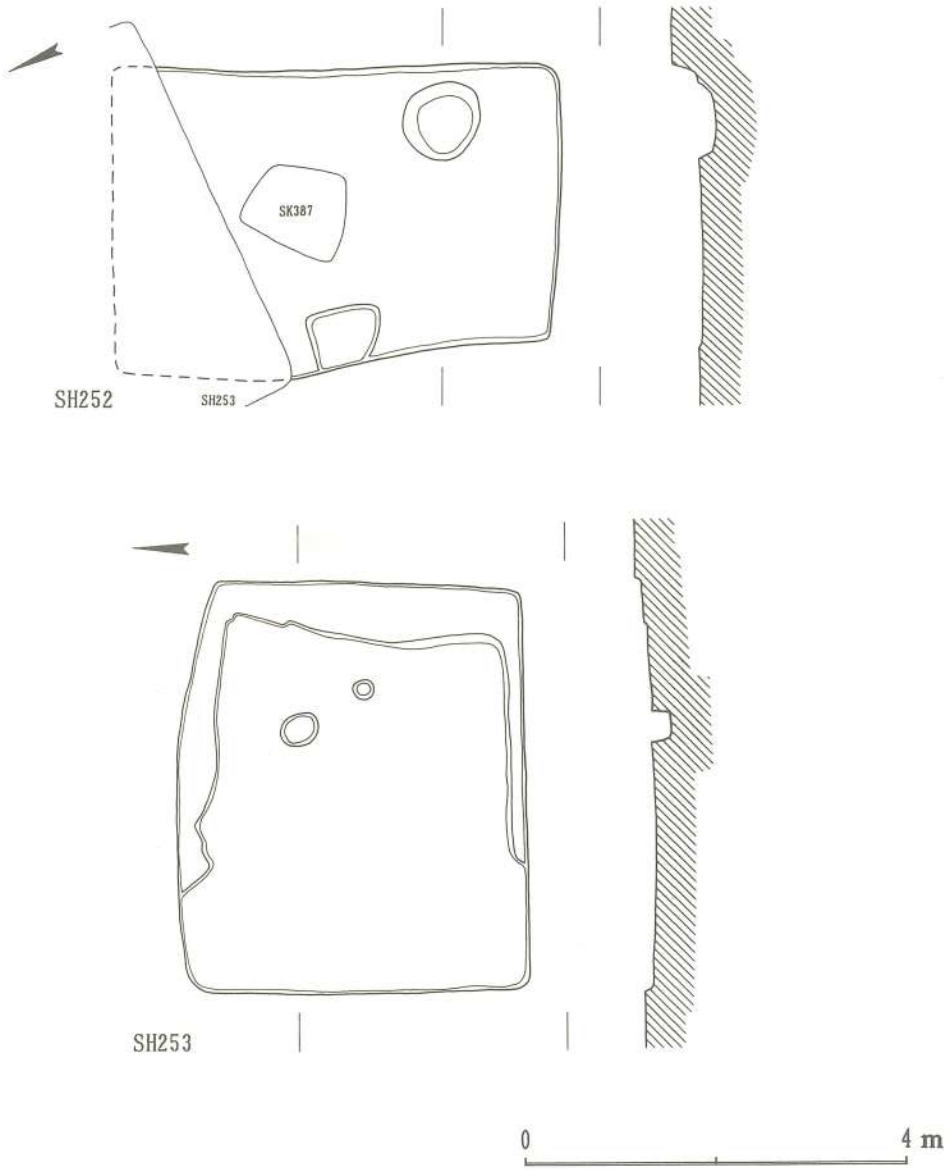


Fig. 25　竪穴式住居址実測図(22)　SH252・SH253

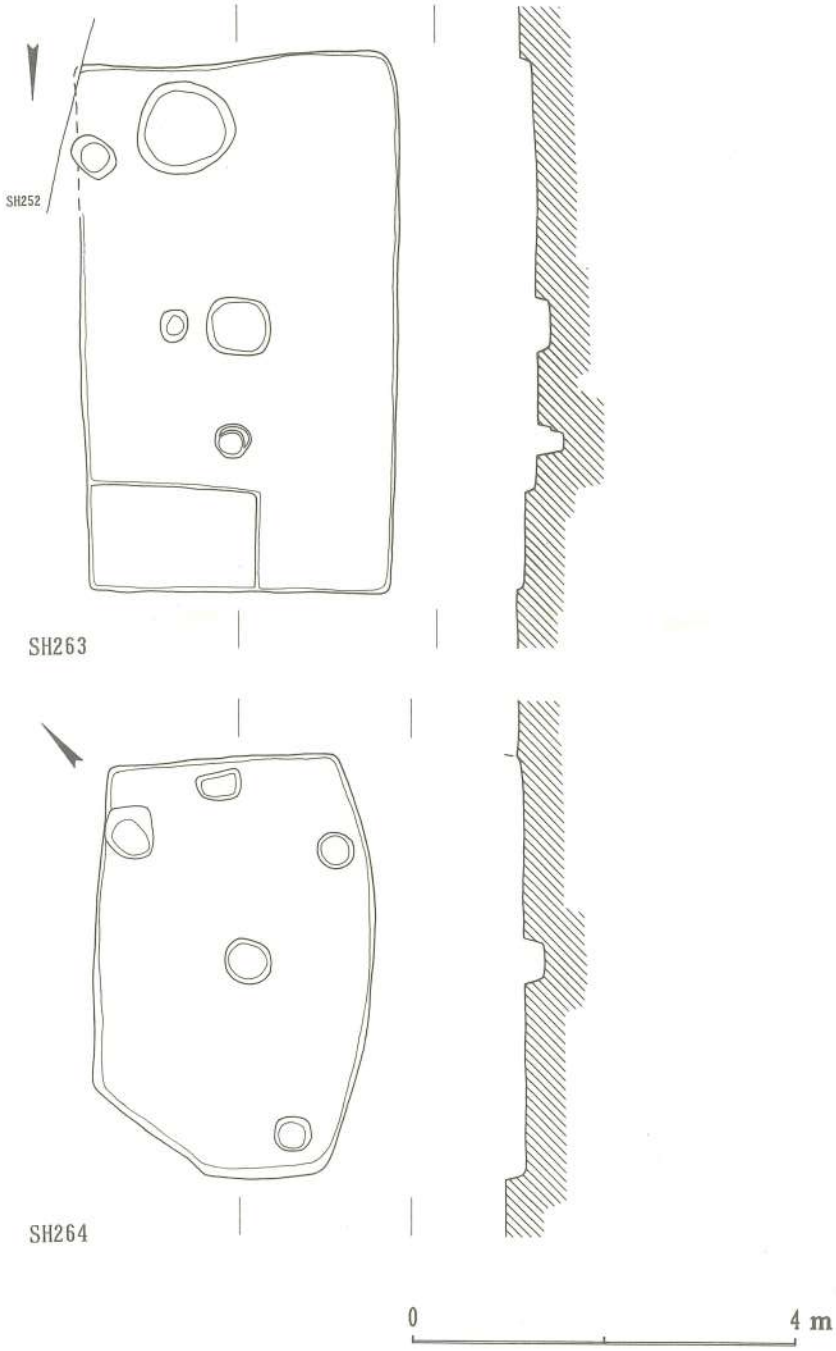


Fig. 26　竪穴式住居址実測図(23)　SH263・SH264

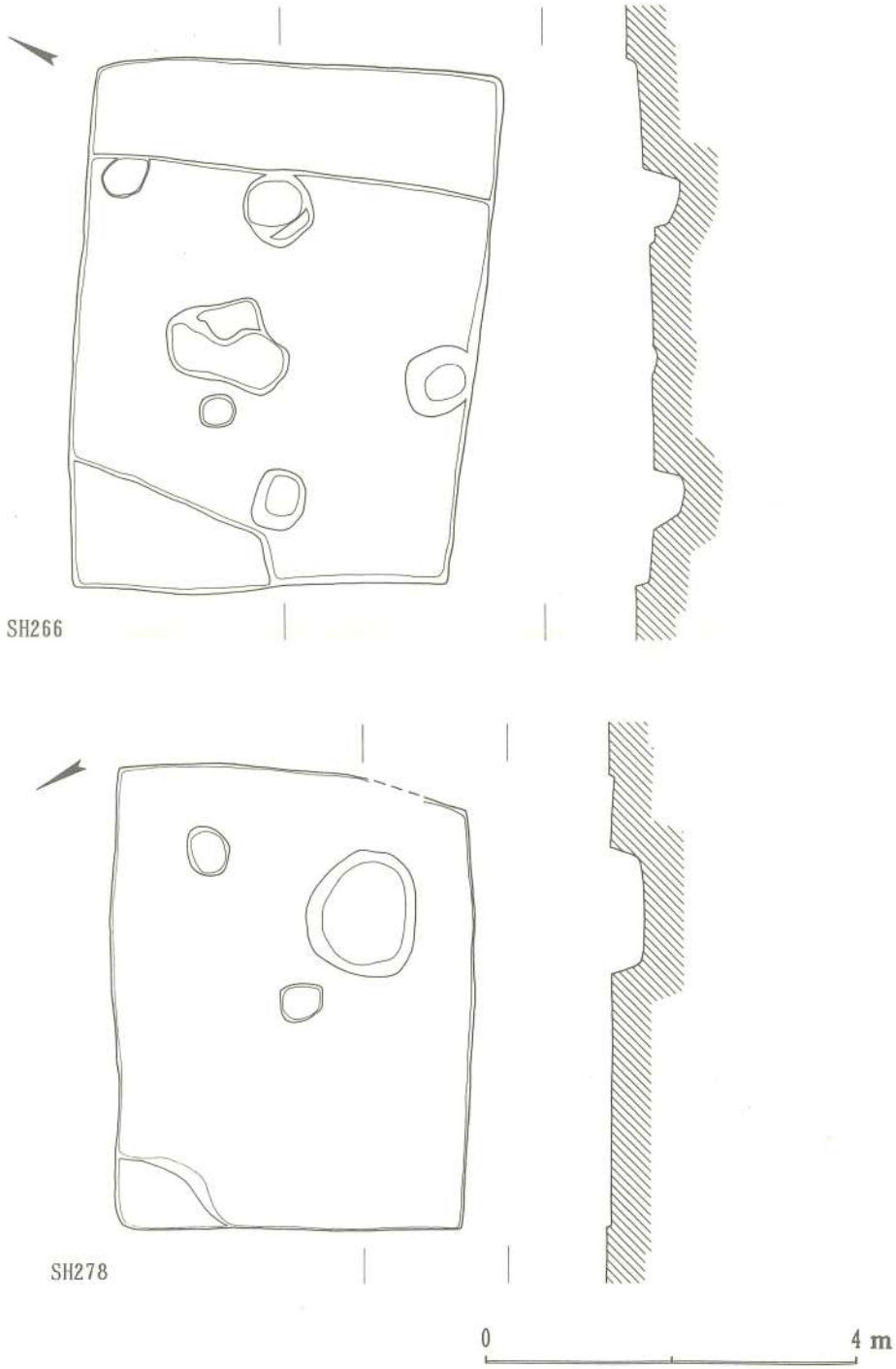


Fig. 27　竪穴式住居址実測図(24)　SH266・SH278

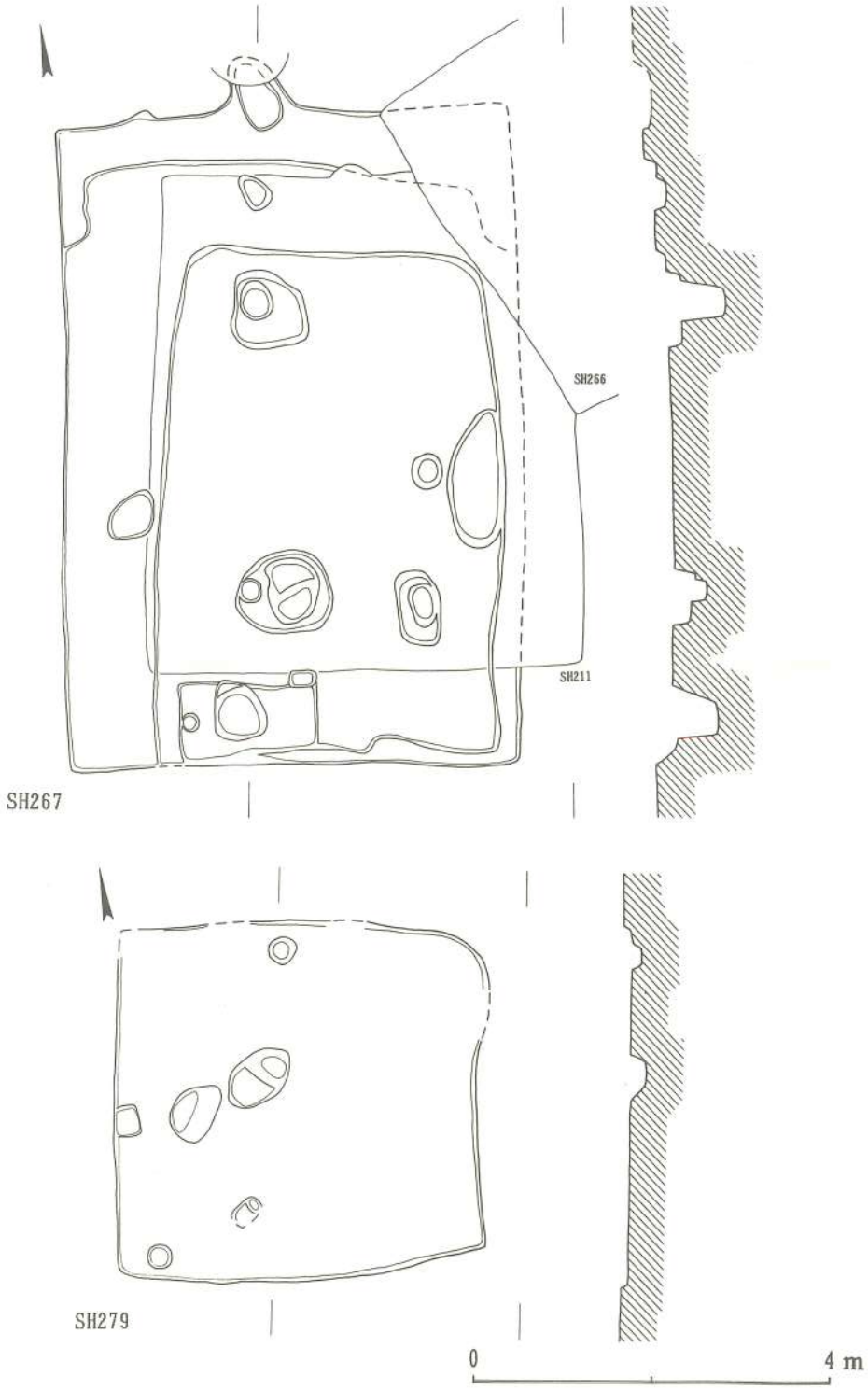


Fig. 28　竪穴式住居址実測図(25)　SH267・SH279

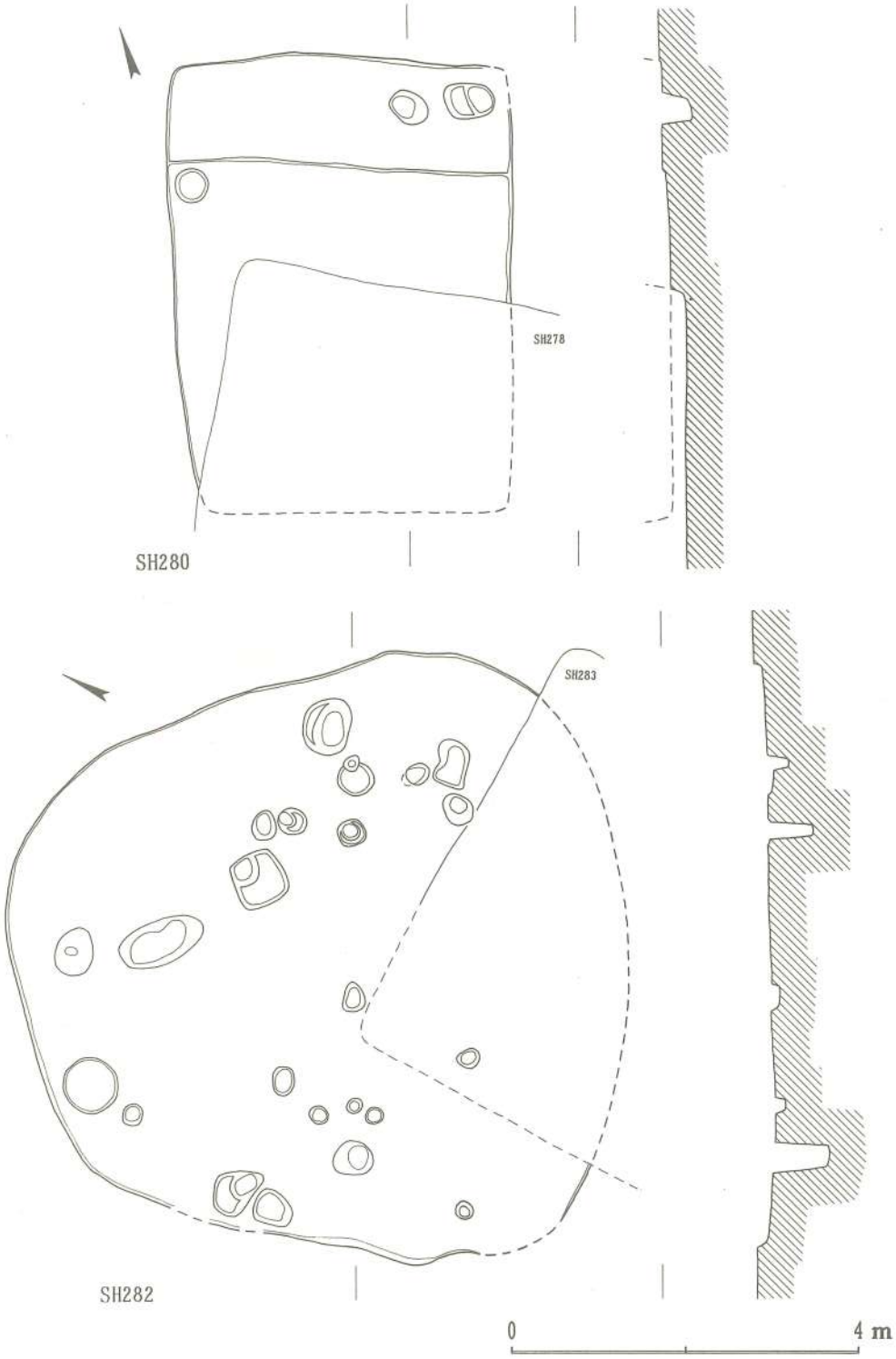


Fig. 29　竪穴式住居址実測図(26)　SH280・SH282

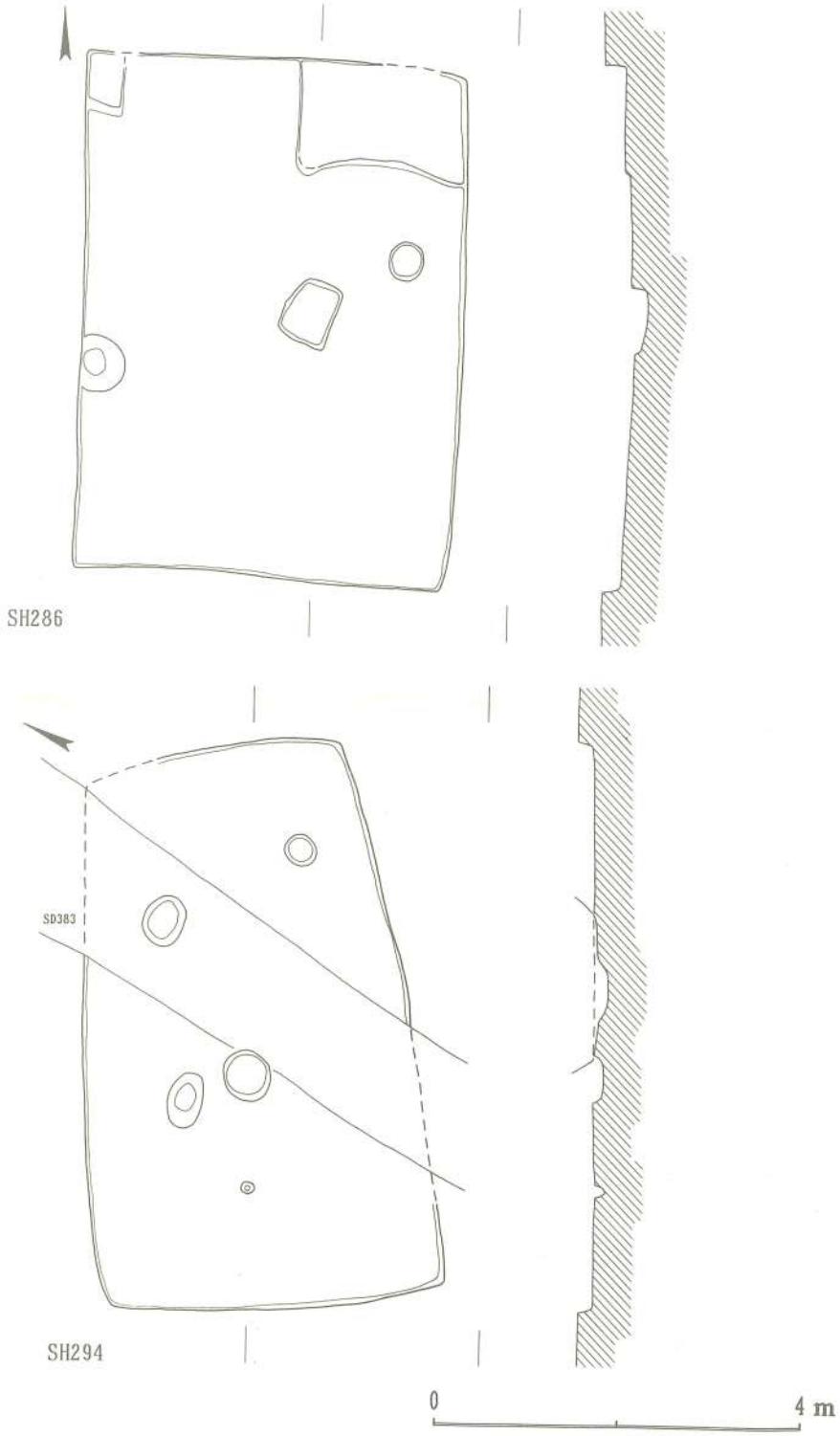


Fig. 30　竪穴式住居址実測図(27)　SH286・SH294

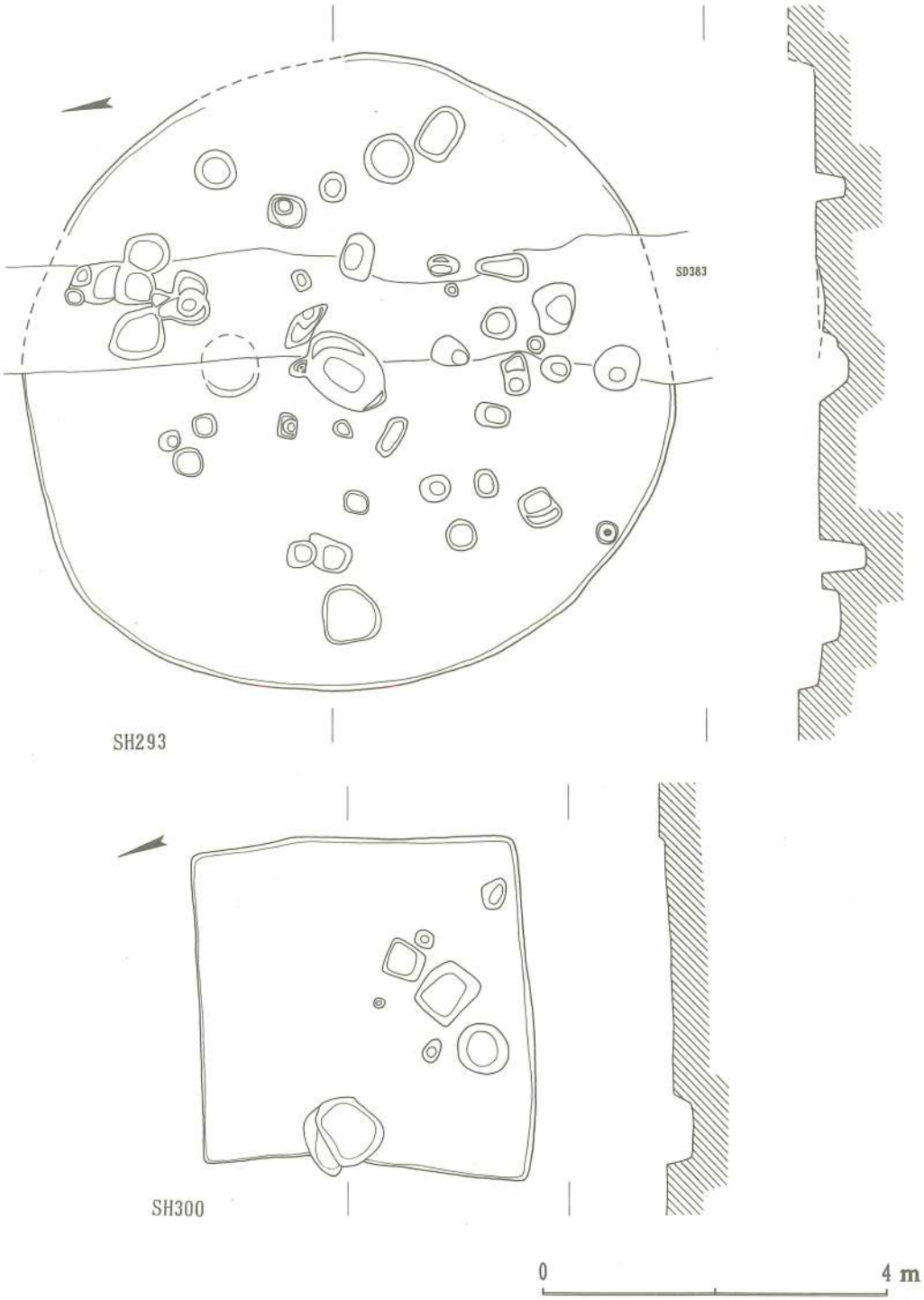


Fig. 31　竪穴式住居址実測図(28)　SH293・SH300

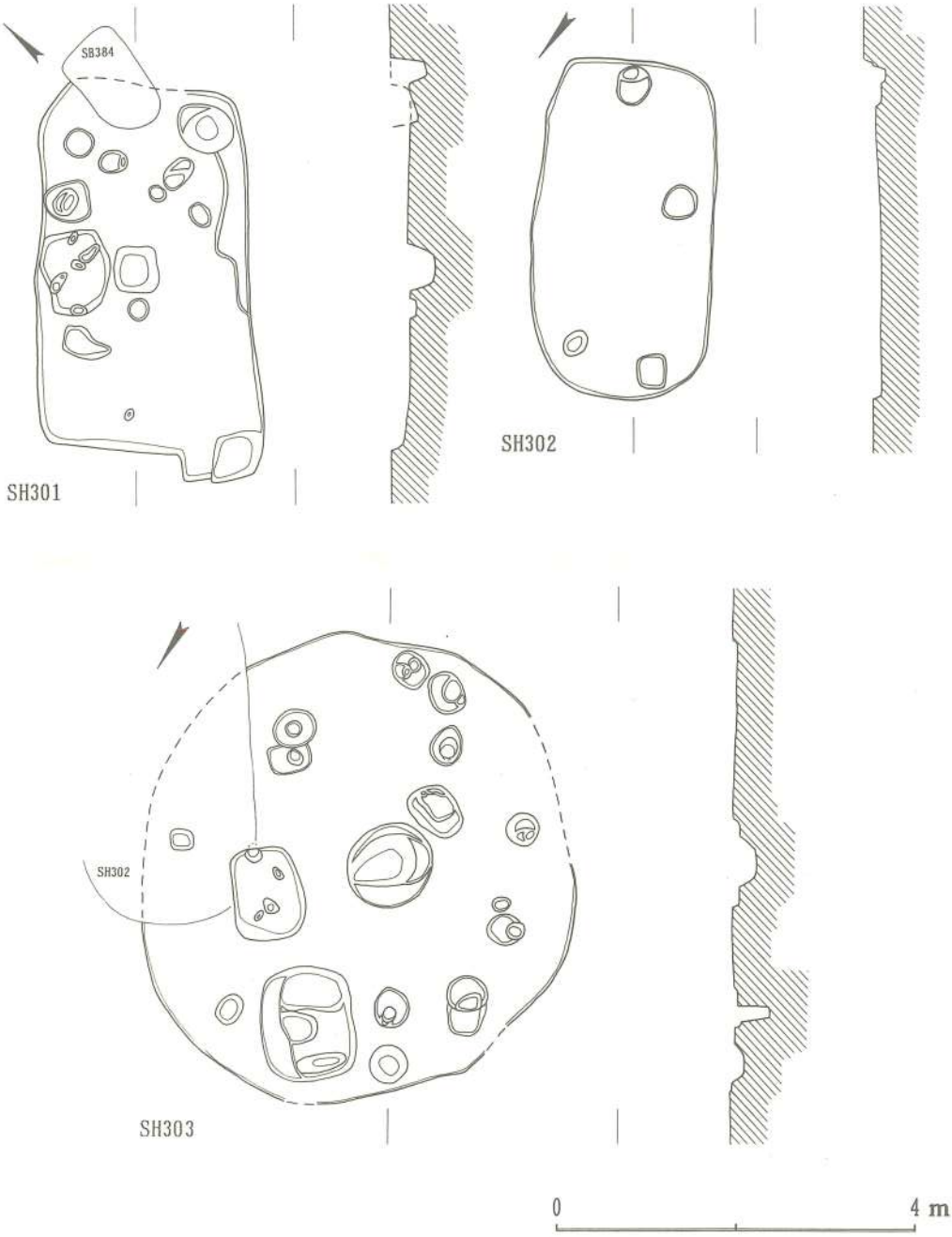


Fig. 32　竪穴式住居址実測図(29)　SH301・SH302・SH303

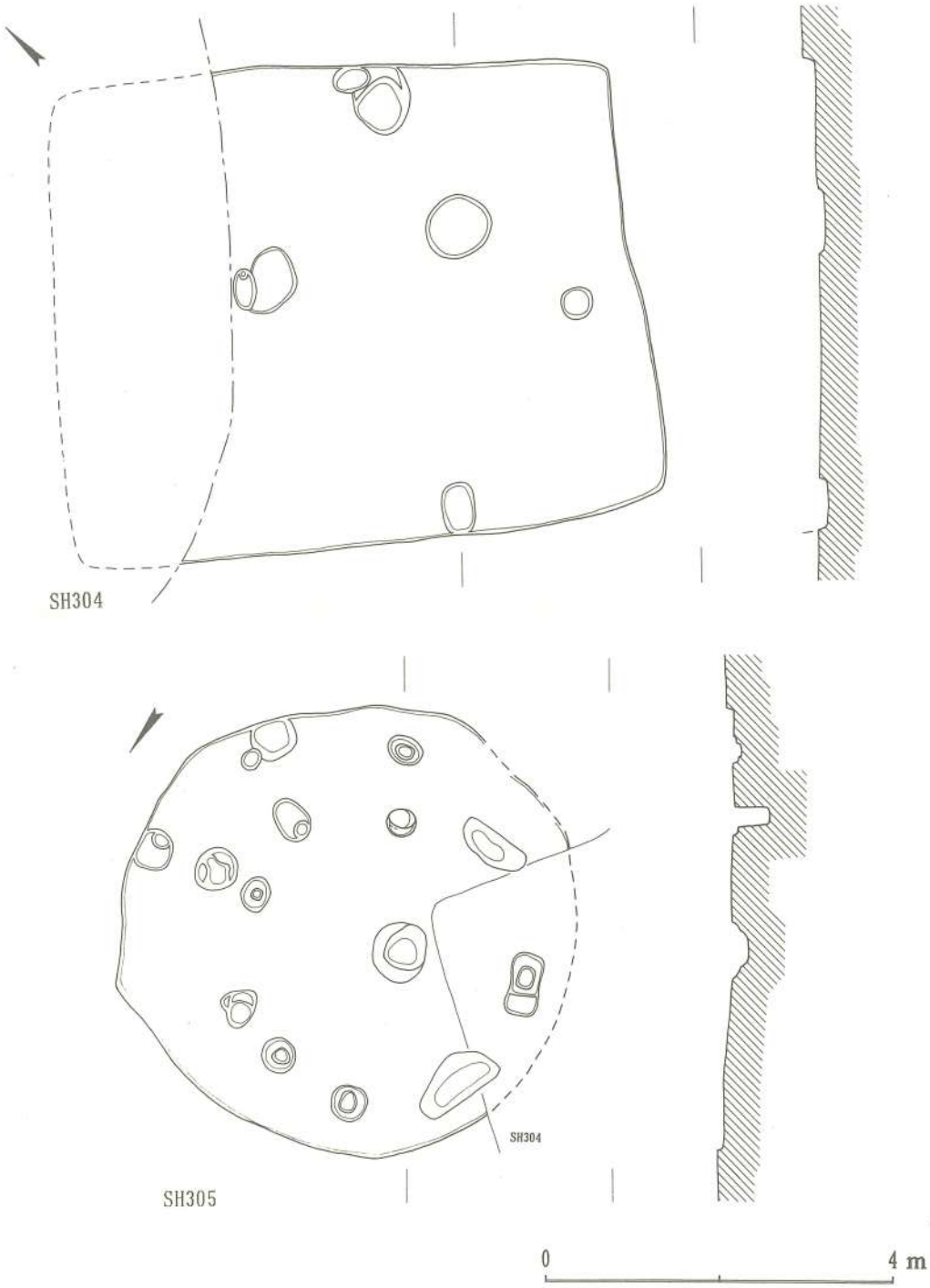


Fig. 33　竪穴式住居址実測図(30)　SH304・SH305

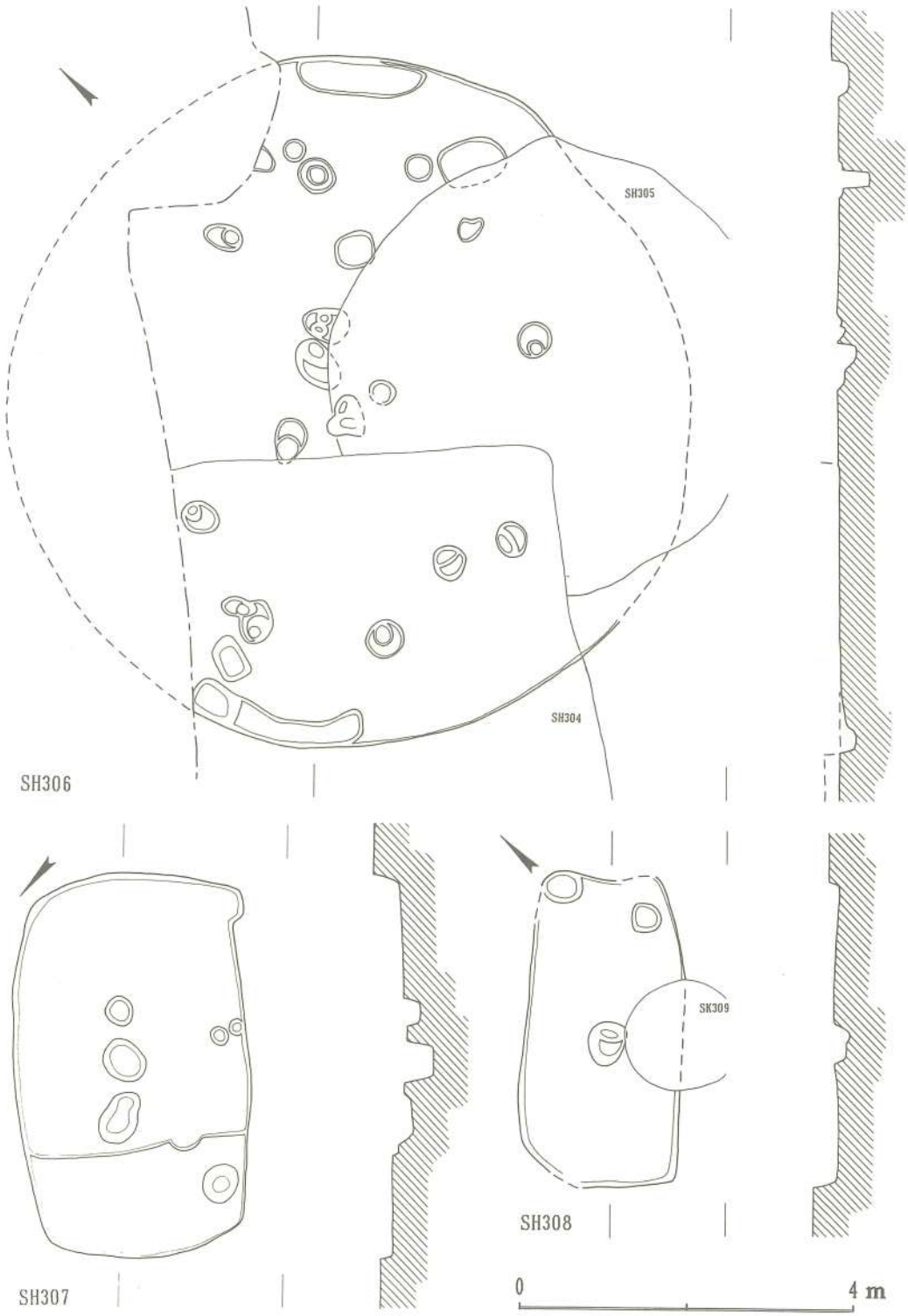


Fig. 34　竪穴式住居址実測図(31)　SH306・SH307・SH308

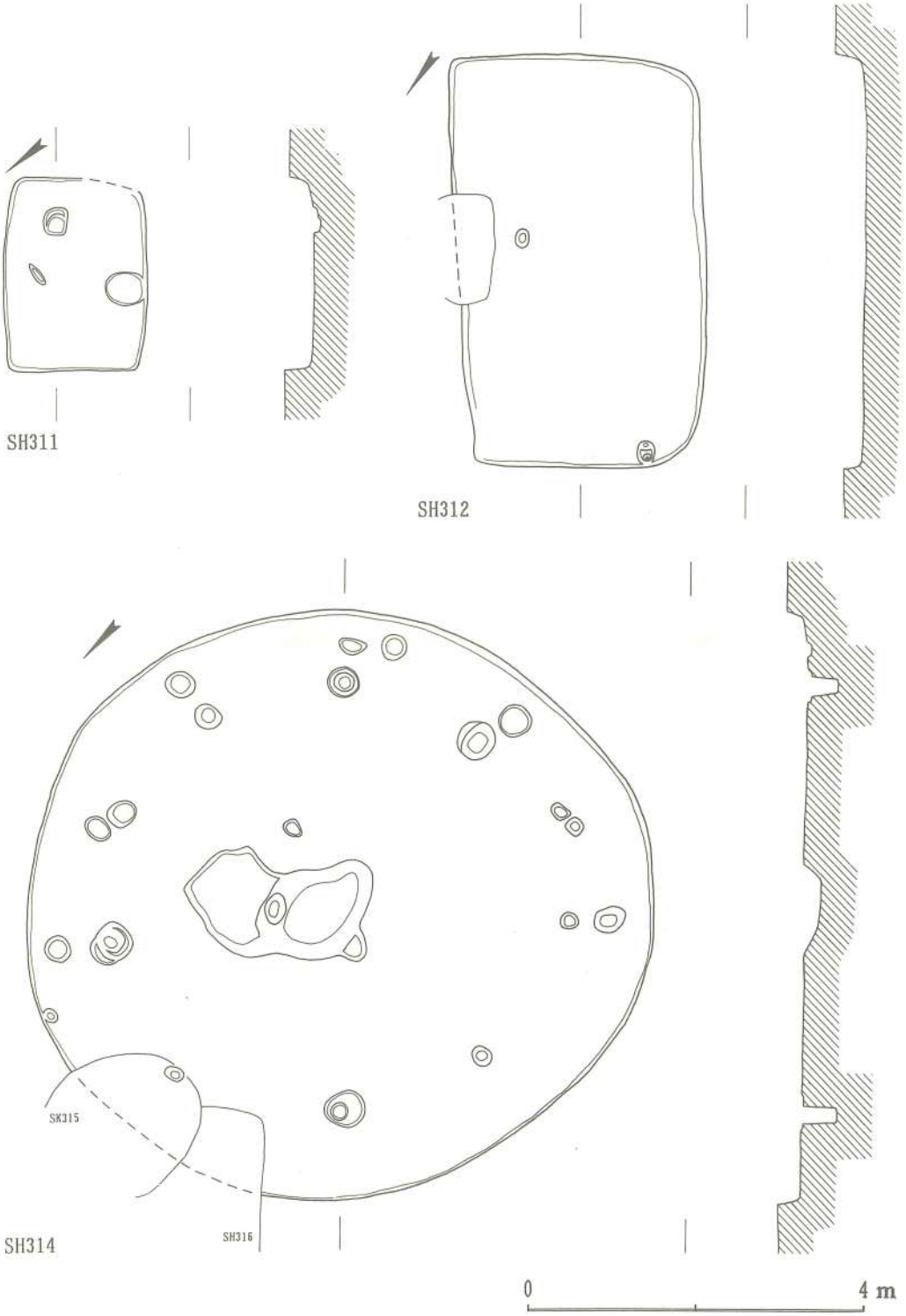


Fig. 35　竪穴式住居址実測図(32)　SH311・SH312・SH314

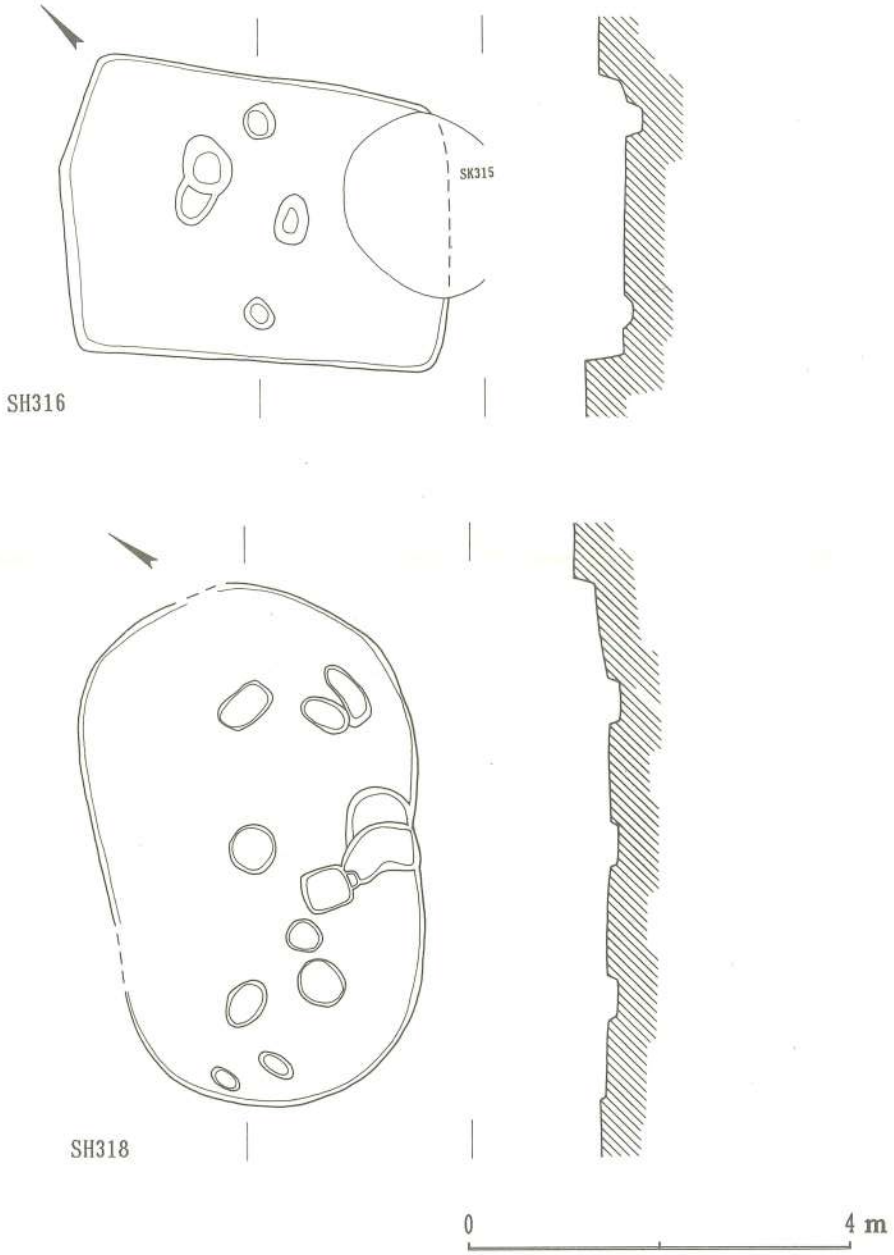


Fig. 36　竪穴式住居址実測図(33)　SH316・SH318

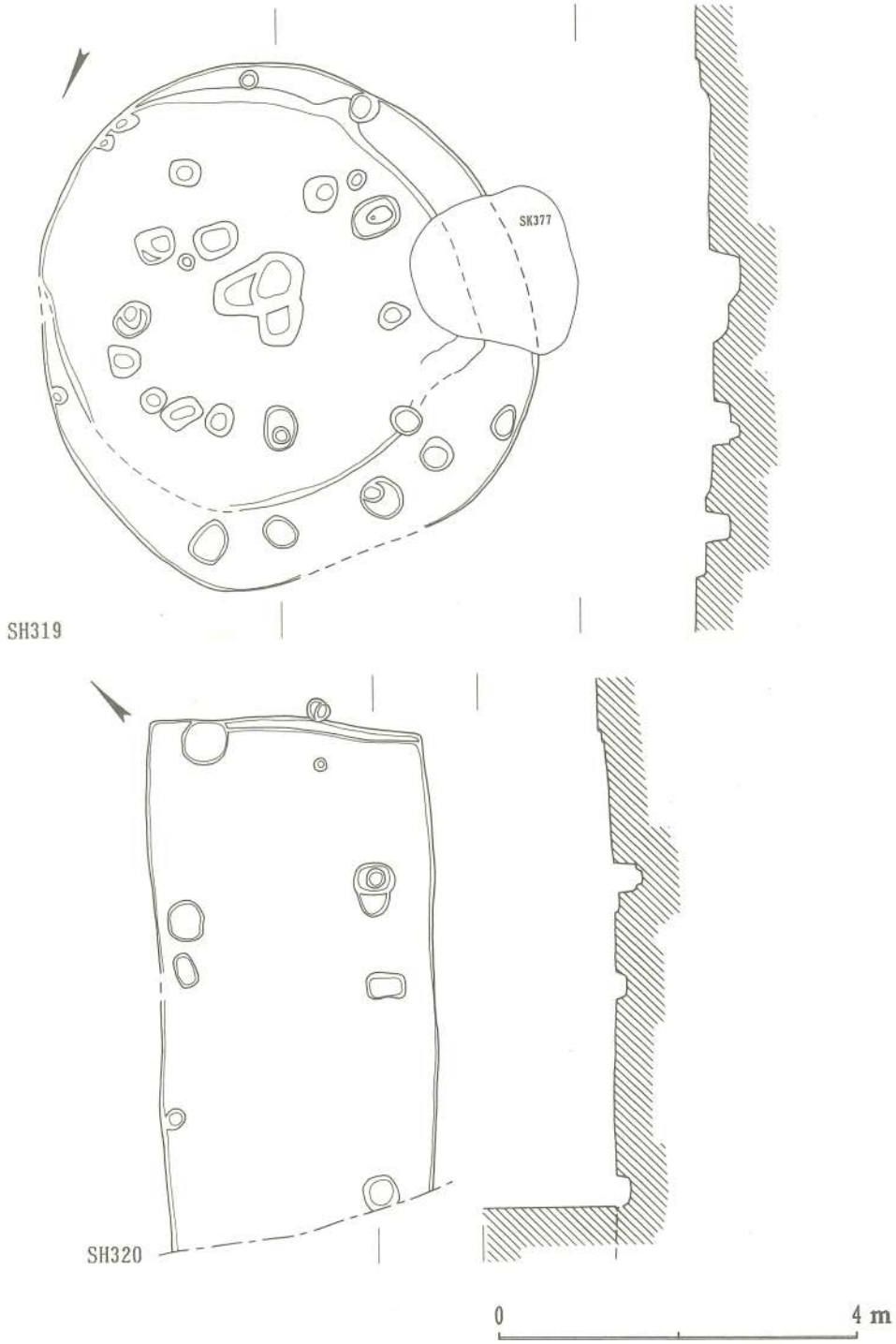


Fig. 37　竪穴式住居址実測図(34)　SH319・SH320

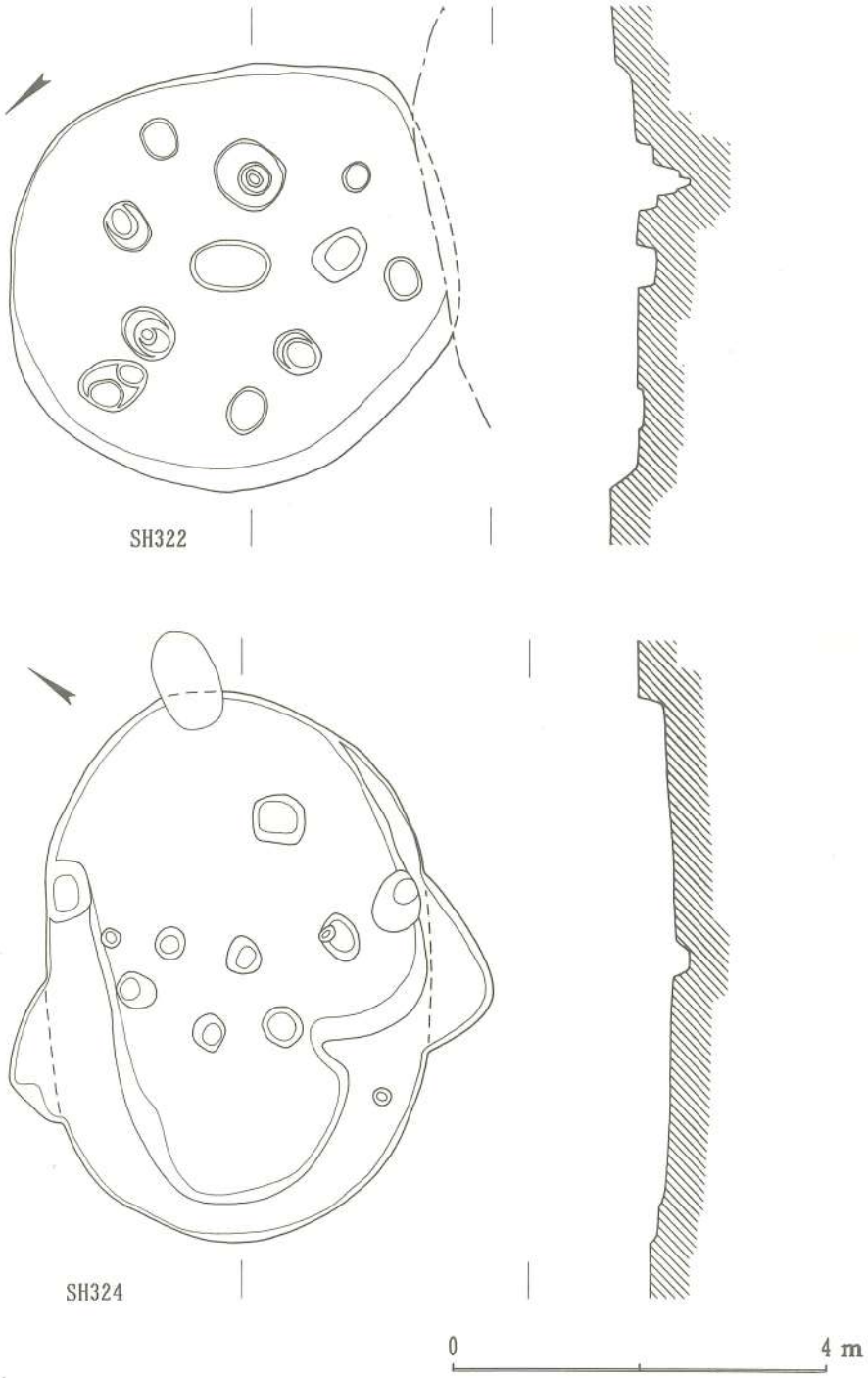


Fig. 38　竪穴式住居址実測図(35)　SH322・SH324

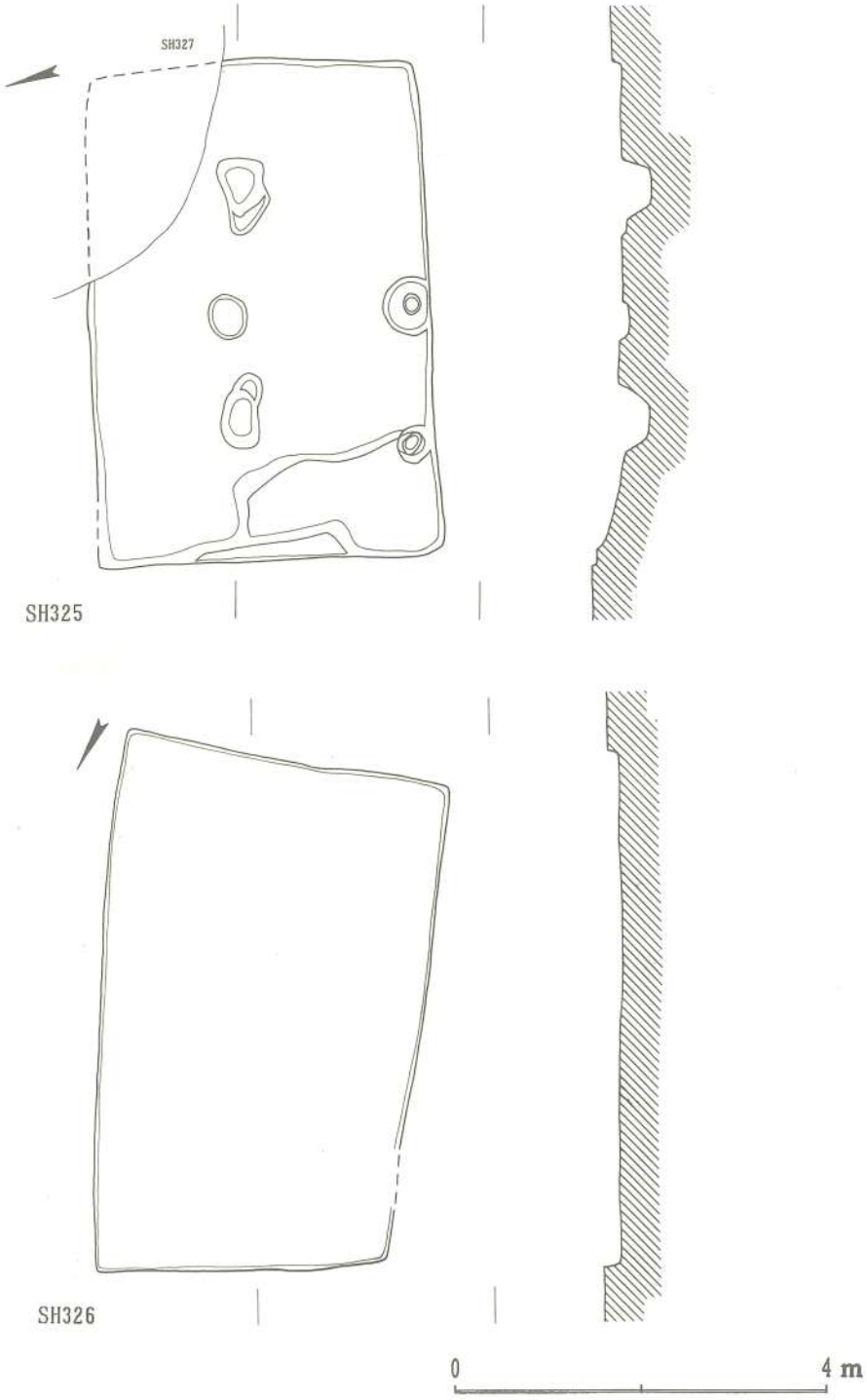


Fig. 39　竪穴式住居址実測図(36)　SH325・SH326

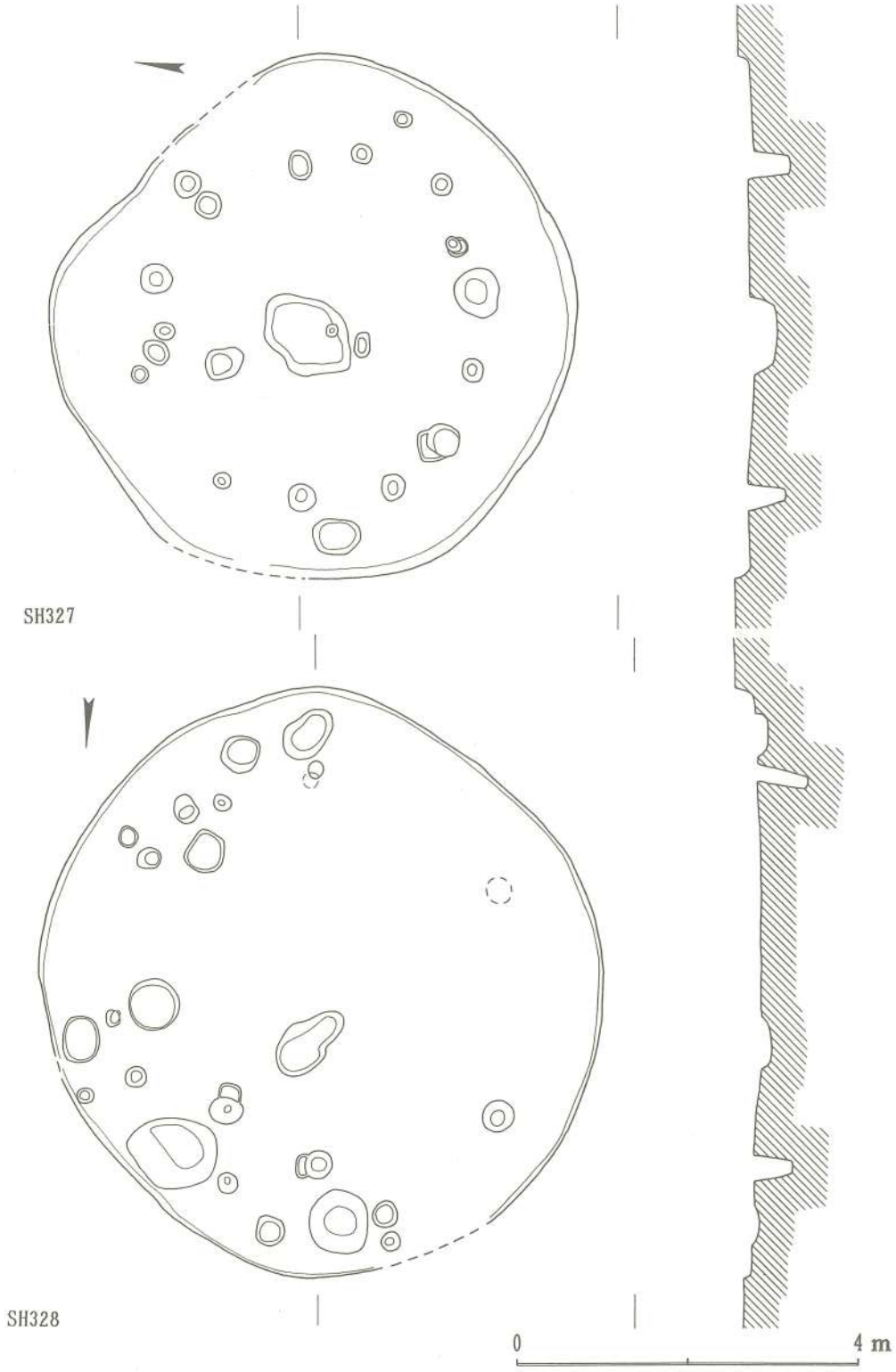


Fig. 40　竪穴式住居址実測図(37)　SH327・SH328

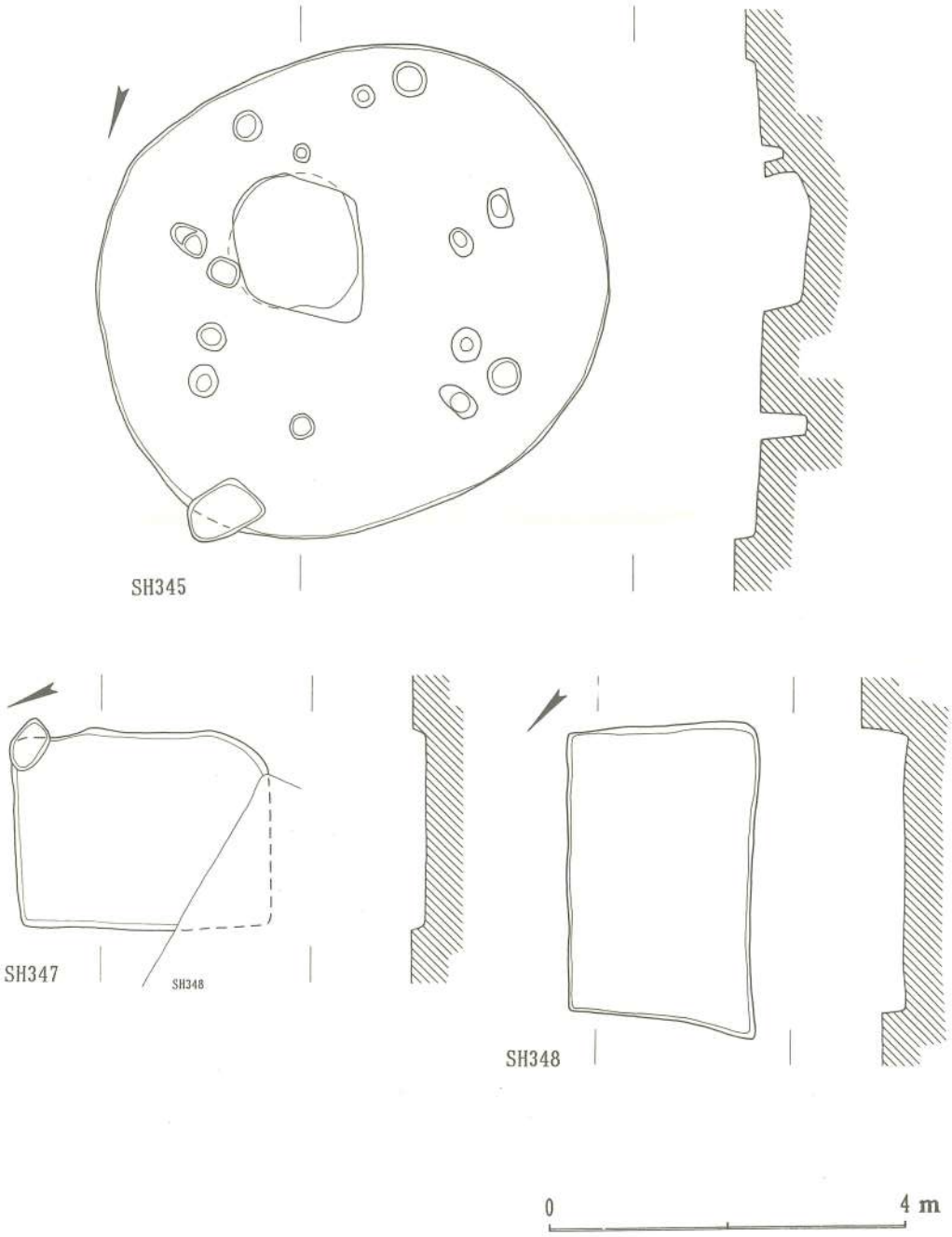


Fig. 41　竪穴式住居址実測図(38)　SH345・SH347・SH348

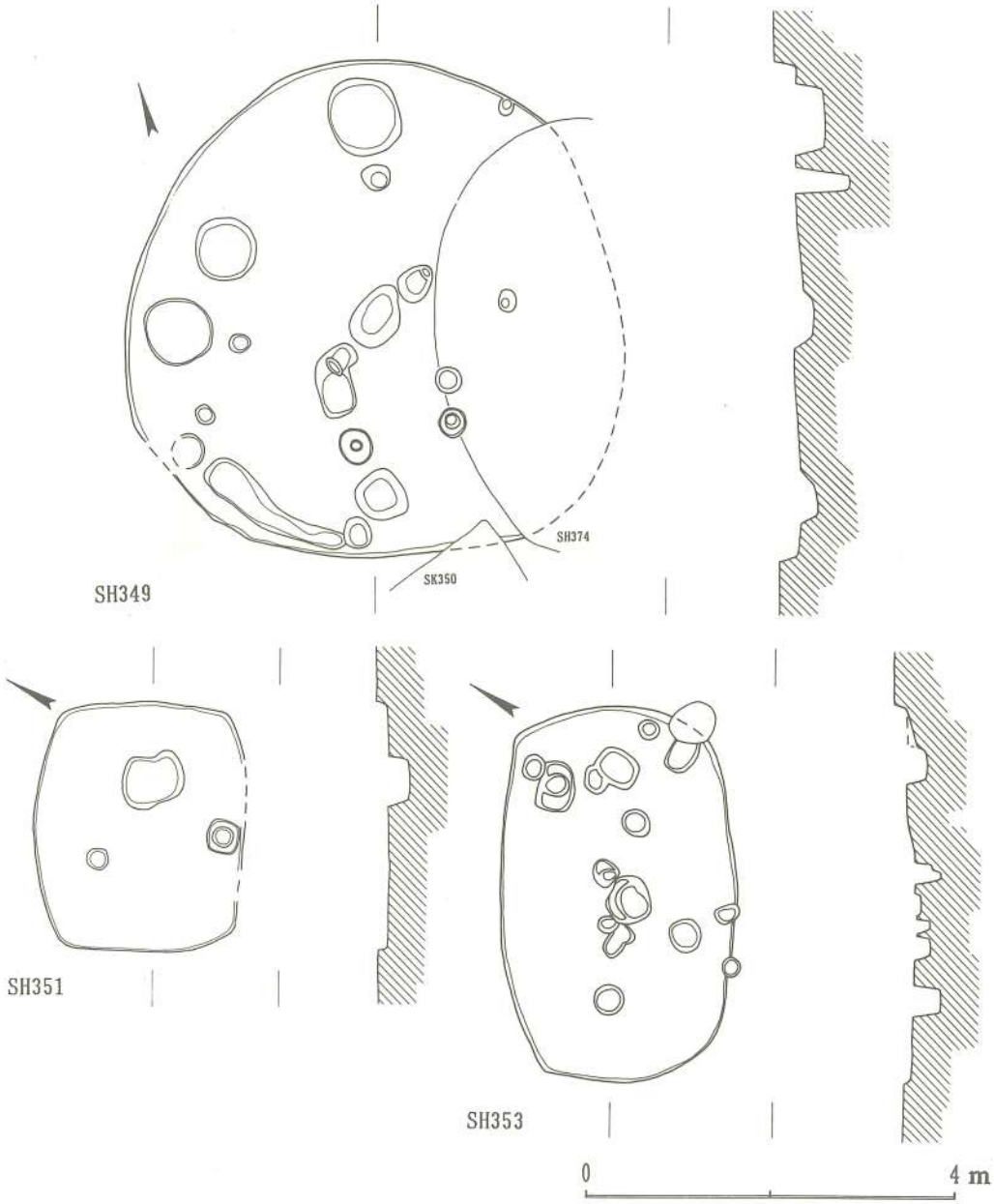


Fig. 42　竪穴式住居址実測図(39)　SH349・SH351・SH353

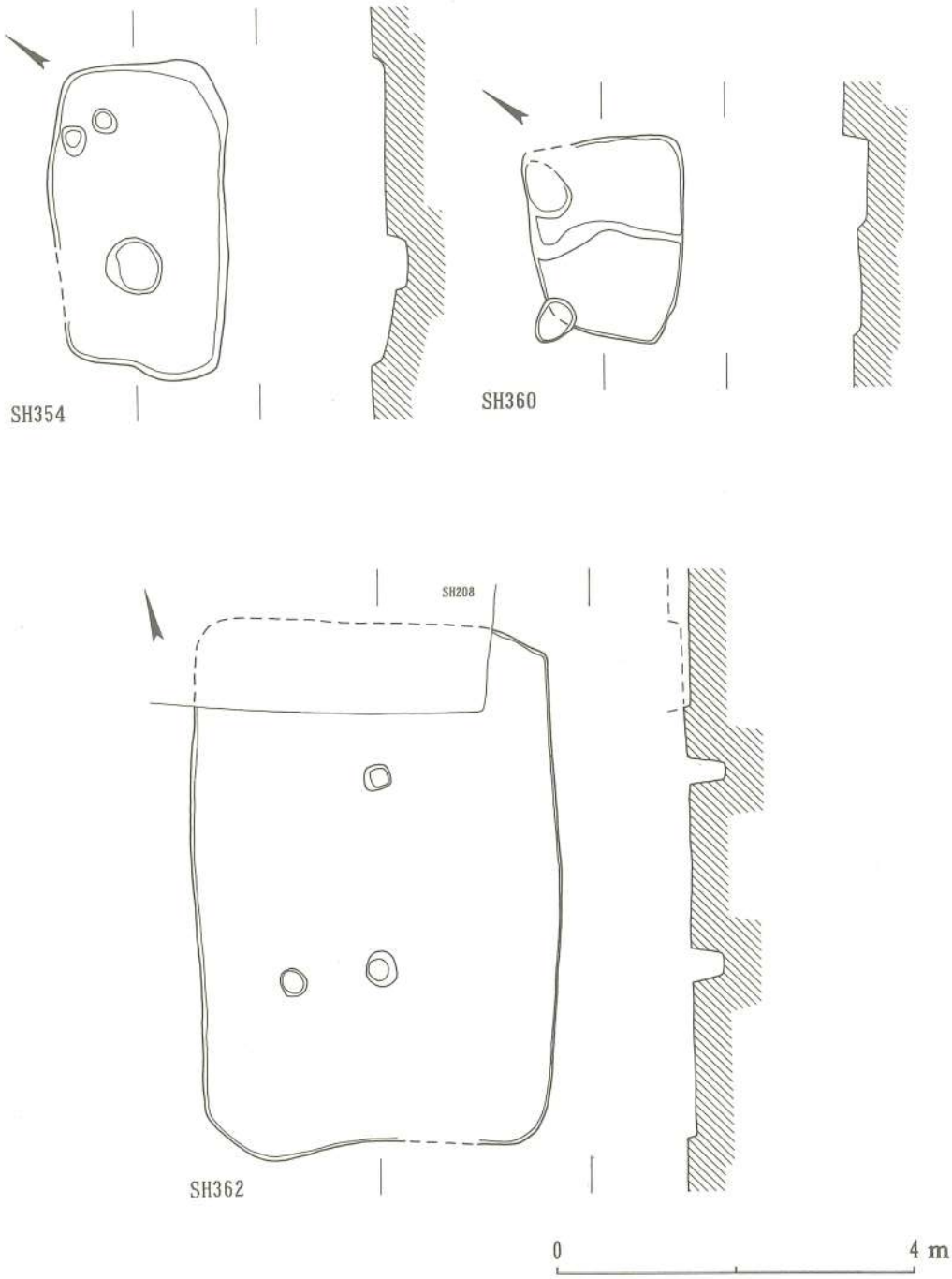


Fig. 43　竪穴式住居址実測図(40)　SH354・SH360・SH362

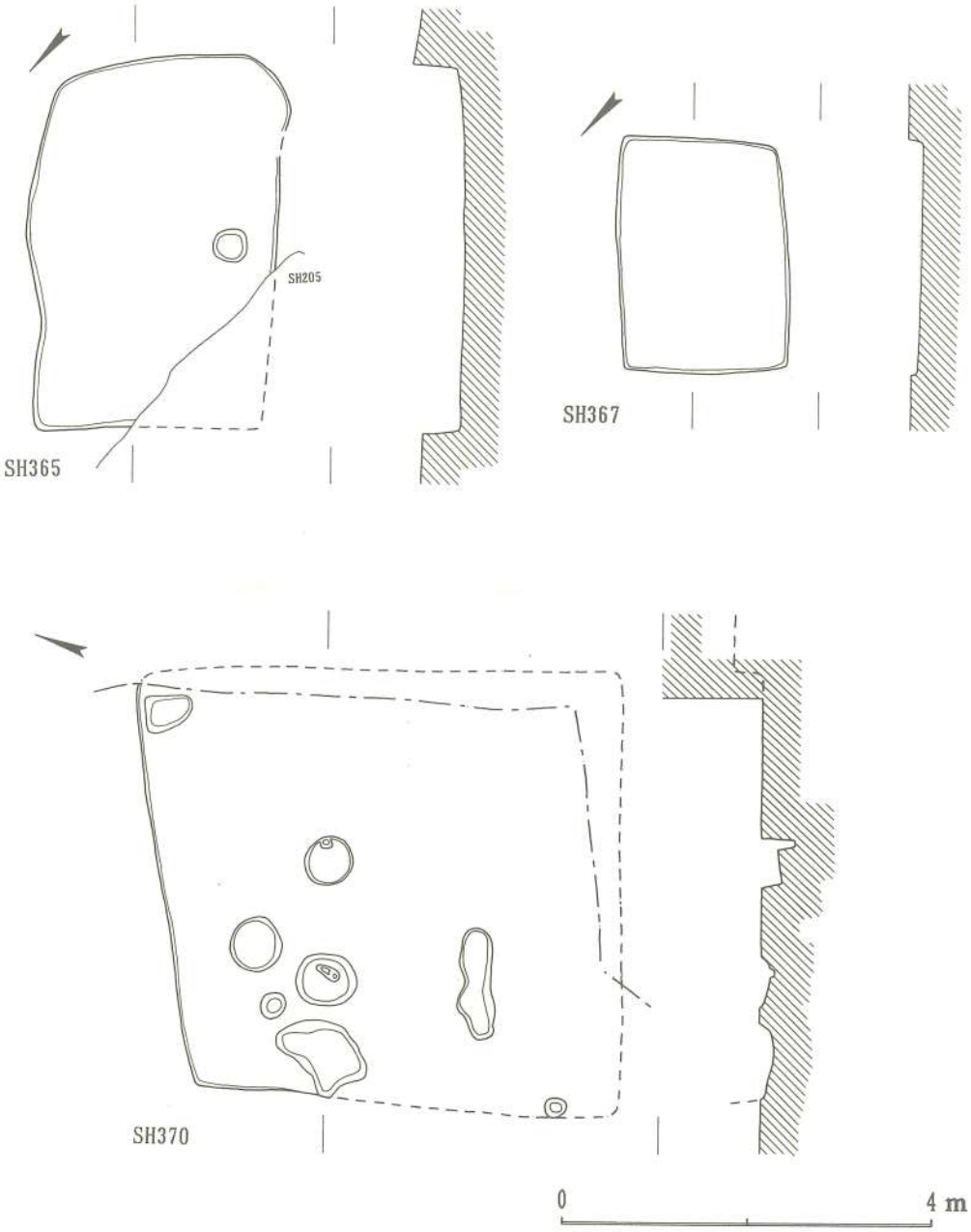


Fig. 44　竪穴式住居址実測図(41)　SH365・SH367・SH370

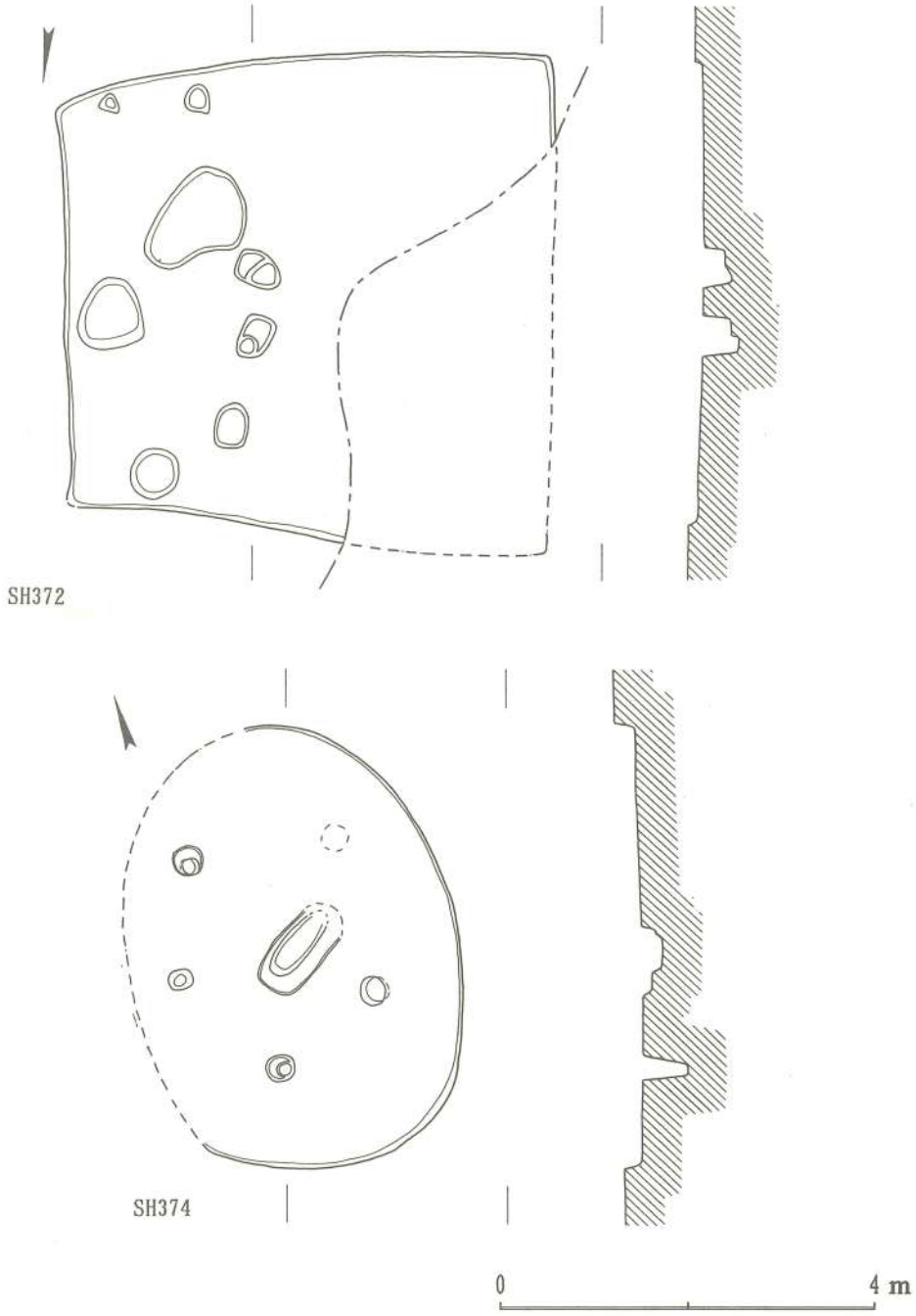


Fig. 45　竪穴式住居址実測図(42)　SH372・SH374

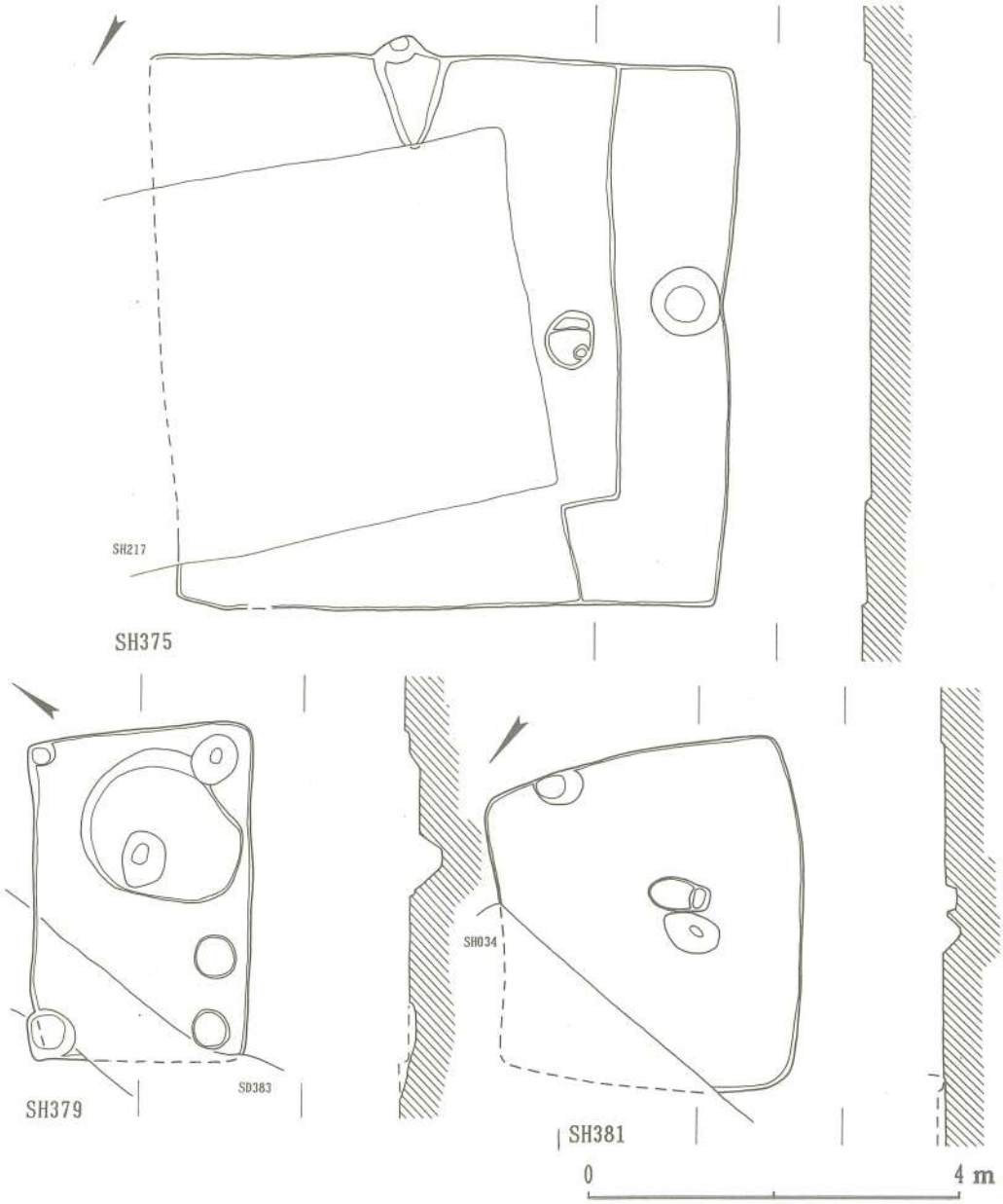


Fig. 46　竪穴式住居址実測図(43)　SH375・SH379・SH381

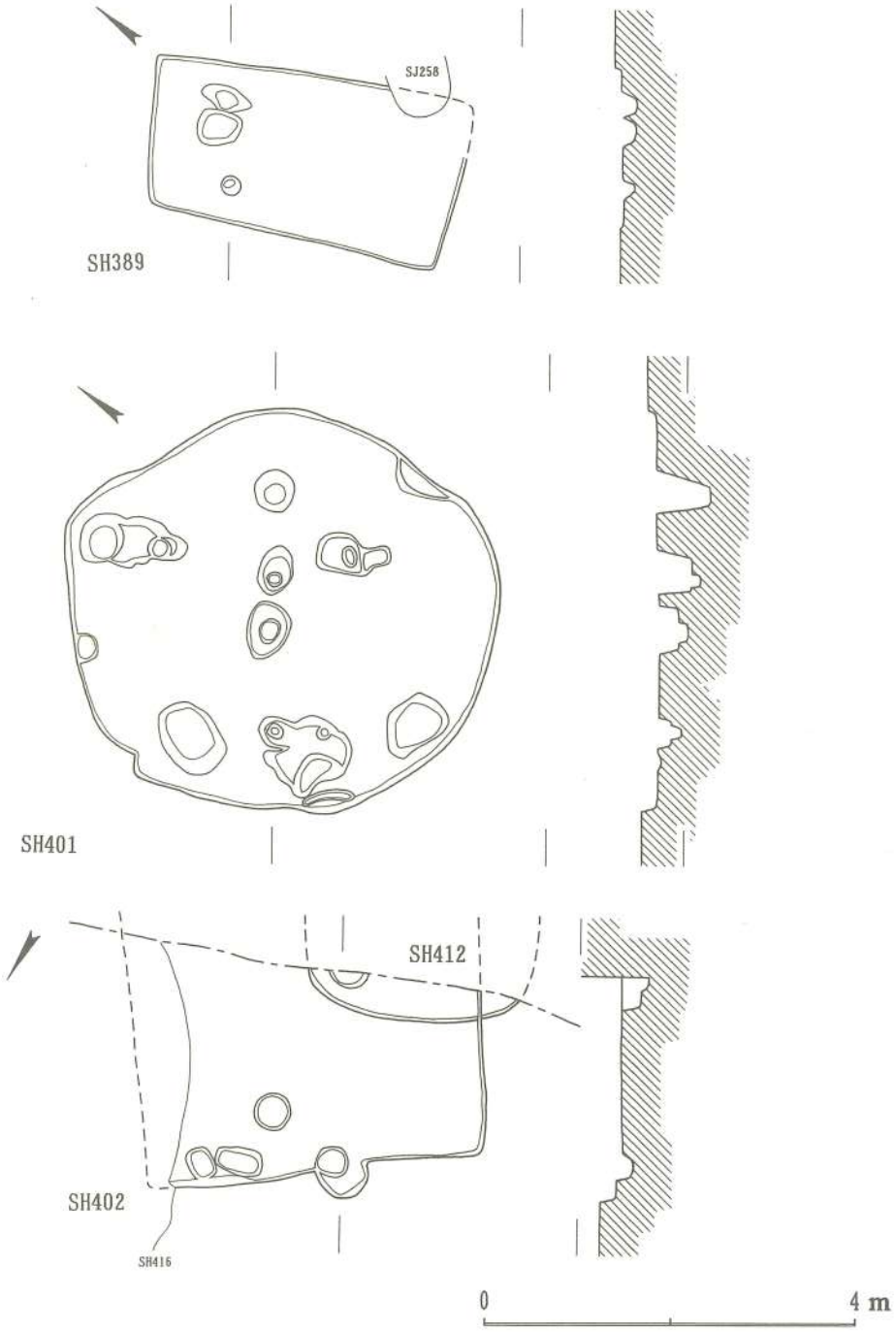


Fig. 47　竪穴式住居址実測図(44)　SH389・SH401・SH402・SH412

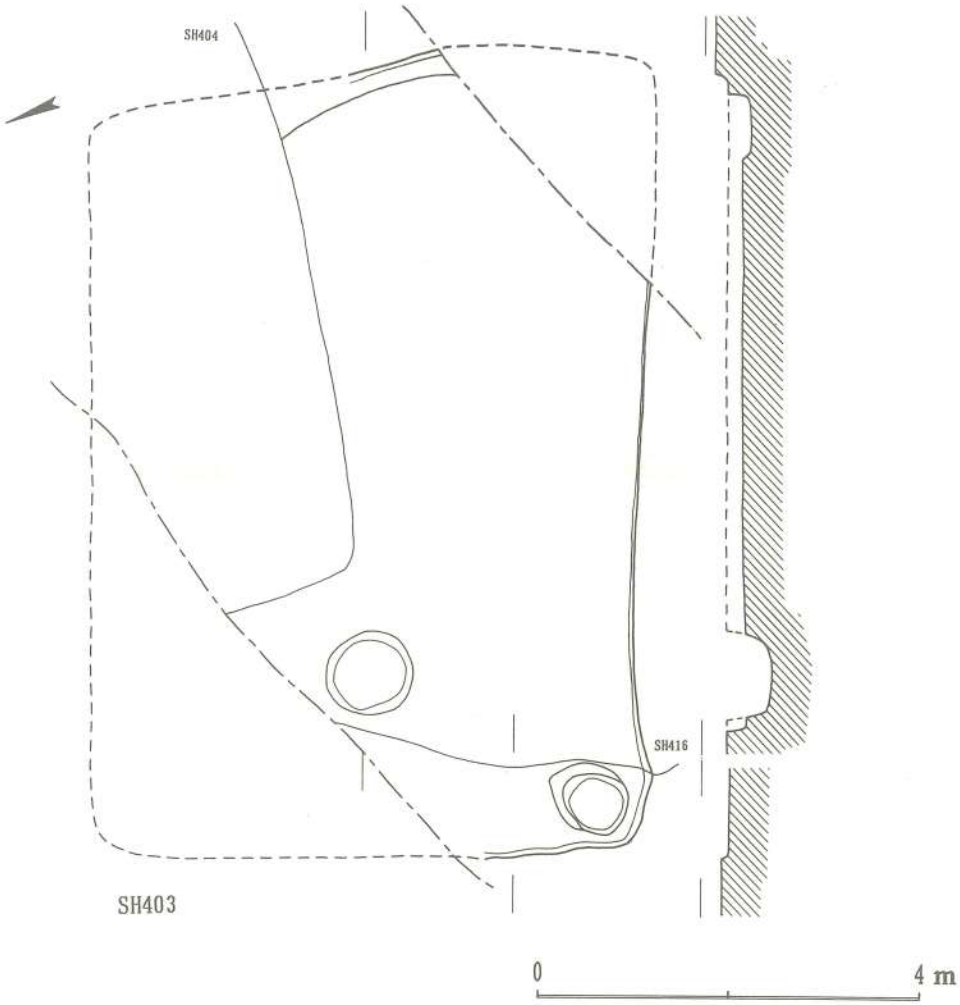


Fig. 48　竪穴式住居址実測図(45)　SH403

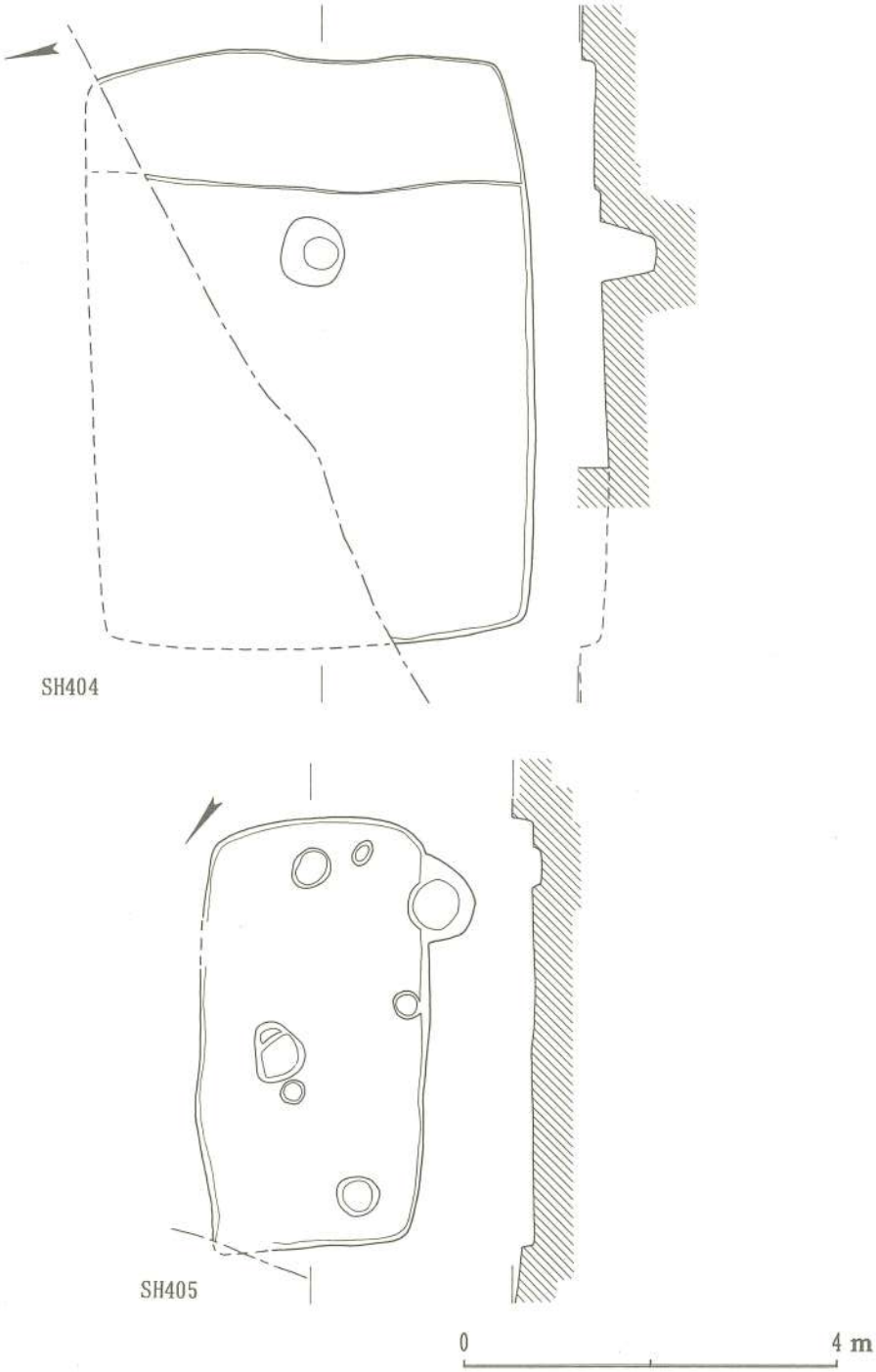
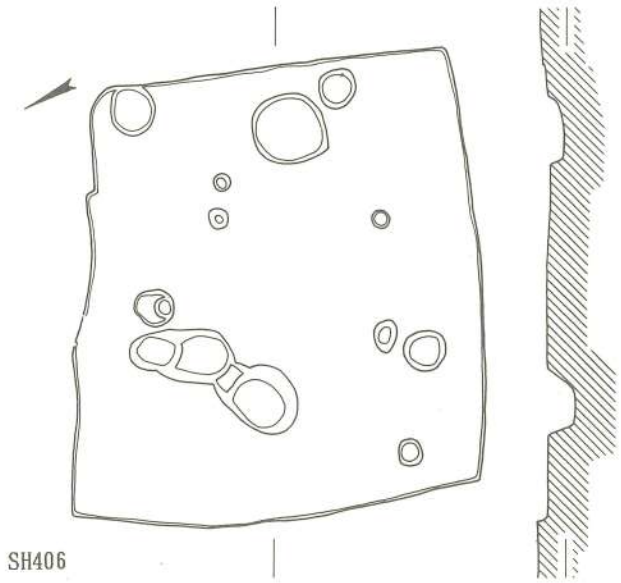


Fig. 49　竪穴式住居址実測図(46)　SH404・SH405



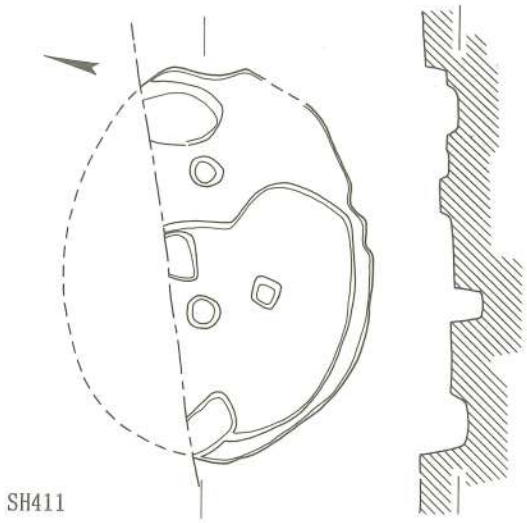


Fig. 50　竪穴式住居址実測図(47)　SH406・SH411

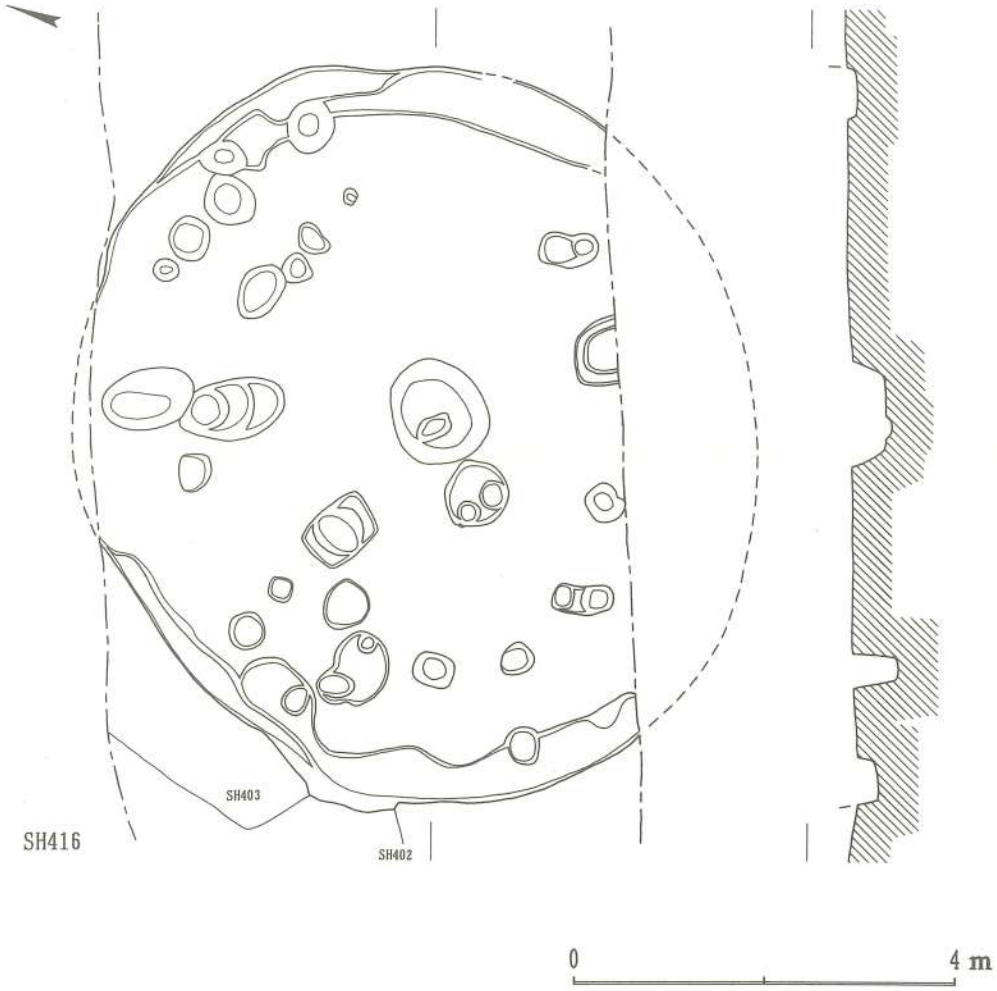


Fig. 51　竪穴式住居址実測図(48)　SH416

2．土壙・貯蔵穴

貯蔵穴を含んだ土壙は、調査当時土壙として調査したものは92基、性格不明遺構として調査したもの３基、住居址として調査したもの19基、全体で114基検出した。形態の相違により、方形を基調とするもの46基、円形あるいは楕円形のもの49基に分類できる。

貯蔵穴と考えられる竪穴遺構の内、ＳＫ271に代表される長方形の土壙についてみると、規模及び方向性が類似しており、ある程度同時期のものと考えられる。また、ＳＸ215など袋状になっているものも存在した。内部からは、甕・壺・器台など多数の弥生式土器が出土した。

土壙としたものの内で、貯蔵穴の範囲に入るものも存在するが、概して性格が不明なものが多い。　　（鶴田）

Tab. 2　船石遺跡出土土壙・貯蔵穴一覧表

土壙番号	平面形態	規模（上…上面・下…底面、m・m²） 長さ・長径	幅・短径	深さ	床面積	主柱穴の穴	出土遺物 上……土器・土製品 下……石製品・その他	備考
SK001	不整形	3.65 3.50	2.00 1.88	0.24	6.1		壺・甕・蓋・器台・支脚・石包丁	
SK006	隅丸長方形	1.28 1.20	0.90 0.83	0.16	0.9		壺・甕・器台	
SK008	不整方形	1.65 1.05	1.20 0.85	0.35	0.8			
SK010	不整形	1.40 1.16	0.92 0.87	0.39	0.7	中央にくぼみ	支脚	
SK014	隅丸長方形	1.89 1.45	0.95 0.70	0.29	1.0		石鏃・砥石・太形蛤刃石斧	貯蔵穴。
SK018	不整形	1.57 1.45	1.21 1.12	0.11	1.3			
SK019	不整形	1.50 0.92	1.25 0.57	0.26	0.3			
SK026	円形	※1.5 ※1.4	※1.2 ※1.2	0.05	※1.2		壺・甕	
SK028	不整形	3.00 2.93	1.42 1.21	0.24	2.0		壺・甕	
SK029	隅丸長方形	※2.3 ※2.3	※1.1 ※1.0	0.06	※2.3		壺・甕	貯蔵穴。
SK031	不整形	2.43 1.99	1.25 0.78	0.55	1.4		甕・器台	
SK032	不整形	3.77 3.40	3.55 3.18	1.54	8.2			
SK224	隅丸長方形	1.94 1.72	1.34 1.10	0.63	1.9			貯蔵穴。
SK226	不整形	2.60 2.54	2.52 2.48	0.11	3.8		甕・蓋	
SK288	不整形	※2.0 1.90	※0.9 0.89	0.11	1.3			
SK235	不整形	2.82 2.66	1.21 0.95	0.66	2.0		壺・甕	
SK238	隅丸長方形	※2.1 ※2.0	1.50 1.38	0.06	※2.1			
SK239	不整形	1.72 1.29	1.70 1.08	0.51	1.1		支脚	
SK241	不整形	※1.6 ※1.1	(1.0) (0.8)	0.61	※1.1			
SK243	不整方形	2.27 2.10	1.82 1.72	0.20	2.8			貯蔵穴。
SK245	不整形	1.45 1.10	0.40 0.33	0.15	0.3		甕 鉄鏃	
SK247	不整形	1.63 1.47	1.53 1.43	0.32	1.2			
SK248	隅丸長方形	2.86 2.75	※1.7 ※1.6	0.08	※4.1		甕	貯蔵穴。床面に浅い土壙様の掘り込みあり。

土壙番号	平面形態	規模（上…上面・下‥底面、m・m²）長さ・長径	幅・短径	深さ	床面積	主柱穴の穴	出土遺物 上……土器・土製品 下……石製品・その他	備考
SK249	隅丸長方形	2.00 1.93	1.21 1.11	0.19	2.0			貯蔵穴。床に段差あり。
SK250	不整形	1.98 2.26	1.83 2.15	1.24	4.1		壺	袋状貯蔵穴。
SK251	不整形	1.50 1.38	0.91 0.68	0.38	0.9		壺	
SK268	長方形	※1.5 ※1.4	1.22 1.15	0.17	※1.3		太形蛤刃石斧・砥石	貯蔵穴。
SK269	不整形	(1.2) (1.1)	(0.8) (0.8)	0.32	(0.5)			中央に柱穴状の穴あり。
SK270	不整形	1.30 1.23	1.15 1.08	0.15	1.1			
SK271	長方形	2.40 2.36	1.67 1.59	0.64	3.7		壺	貯蔵穴。
SK272	隅丸長方形	※2.3 ※2.25	1.50 1.44	0.62	※3.1			貯蔵穴。
SK273	隅丸長方形	1.95 1.85	1.45 1.36	0.56	2.4			貯蔵穴。
SK274	不整形	0.86 0.81	0.74 0.70	0.12	0.5			
SK277	円形	※1.1 ※1.0		0.09	※0.4			
SK281	不整形	2.22 2.12	2.08 2.15	0.45	3.6			
SK285	隅丸長方形	2.30 2.14	1.80 1.61	0.56	3.7			貯蔵穴。
SK289	隅丸長方形	3.67 3.50	1.43 1.13	0.25	3.9		壺・甕・高杯 太形蛤刃石斧	貯蔵穴。
SK290	不整形	2.58 2.18	1.87 1.53	0.28	7.3		石包丁・太形蛤刃石斧	
SK291	隅丸長方形	1.68 1.62	1.08 0.87	0.53	4.0			貯蔵穴。段差あり。床面隅にくぼみ。
SK292	不整形	2.07 1.98	1.88 1.70	0.14	6.2		碗・器台	
SK295	不整形	2.10 1.89	※1.3 ※1.1	0.38	※1.8			
SK296	隅丸長方形	1.65 1.12	1.03 0.85	0.30	3.5		壺	貯蔵穴。段差あり。
SK298	不整形	2.30 2.08	1.78 1.22	0.68	5.8			
SK299	円形	0.73 0.63	—— ——	0.41	0.3			大型の柱穴か？。
SK309	円形	1.37 1.21	1.30 1.00	0.07	1.0		甕	貯蔵穴？。
SK313	楕円形	※2.2 ※2.2	1.91 1.81	0.09	※3.4			
SK315	円形	1.95 1.84	1.74 1.66	0.53	2.7			
SK330	隅丸長方形	3.31 3.21	1.90 1.78	0.17	5.7			
SK331	隅丸長方形	2.40 2.18	1.60 1.44	0.22	3.2			貯蔵穴。
SK332	円形	2.58 2.52	2.32 2.27	0.05	7.8			
SK333	不整形	1.25 1.16	1.12 0.92	0.210	1.1			
SK334	不整形	2.17 1.41	1.43 0.62	0.43	0.7			
SK335	不整形	1.50 1.33	1.16 1.05	0.19	1.2			
SK336	不整形	2.35 2.21	0.90 0.74	0.41	2.2		鉢・甑	
SK337	不整形	2.38 2.28	1.92 1.82	0.08	3.5			
SK339	円形	2.25 1.85	1.81 1.47	0.29	2.1			
SK340	隅丸長方形	1.27 1.13	0.87 0.74	0.16	0.8			貯蔵穴。
SK341	不整形	1.13 0.74	0.74 0.37	0.31	0.3			
SK342	隅丸長方形	1.20 0.95	1.12 0.95	0.10	0.8			貯蔵穴。

土壙番号	平面形態	規模（上…上面・下‥底面、m・㎡） 長さ・長径	幅・短径	深さ	床面積	主柱穴の穴	出土遺物 上……土器・土製品 下……石製品・その他	備考
SK343	隅丸長方形	1.23 1.06	0.85 0.70	0.19	0.7			貯蔵穴。
SK346	正方形	1.57 1.54	1.44 1.32	0.32	2.0		甕・支脚	貯蔵穴。
SK350	長方形	1.56 1.50	1.01 0.94	0.18	1.4			貯蔵穴。
SK352	隅丸長方形	0.90 0.62	0.86 0.77	0.45	0.4			斜めに掘り込まれている。
SK355	楕円形	1.27 1.21	0.82 0.76	0.43	0.8			
SK356	円形	1.40 1.15	—— ——	0.30	(1.1)			
SK357	隅丸長方形	1.93 1.63	0.72 0.52	0.17	0.8			
SK358	不整形	1.23 1.11	1.09 0.93	0.28	0.7			
SK361	円形	1.51 1.41	1.42 1.34	0.54	1.5			
SK364	不整形	1.80 1.77	0.90 0.86	0.34	1.4			貯蔵穴。
SK366	円形	1.38 1.27	1.22 1.13	0.17	1.1		太形蛤刃石斧	貯蔵穴。
SK368	隅丸長方形	1.15 1.07	0.41 0.32	0.12	0.3			
SK369	不整方形	1.08 0.89	0.92 0.74	0.60	0.6		石包丁	
SK371	隅丸長方形	1.68 1.52	1.14 0.96	0.27	1.5			貯蔵穴。
SK373	不整形	1.11 0.97	0.84 0.62	0.21	2.6			
SK376	不整形	1.65 1.40	1.59 1.39	0.46	1.5			
SK377	不整形	1.91 1.78	1.88 1.66	0.44	2.4			
SK378	正方形	1.02 0.91	0.98 0.87	0.45	0.9			
SK380	隅丸長方形	3.16 2.96	2.30 2.06	0.32	6.1			
SK382	隅丸長方形	2.43 2.21	1.35 1.23	0.54	2.2			貯蔵穴。
SK385	不整形	1.15 0.89	0.85 0.66	0.14	2.6			
SK386	不整形	1.63 1.32	1.37 1.30	0.42	1.7			
SK387	不整方形	1.07 1.02	0.97 0.85	0.07	0.7		支脚	
SK390	楕円形	2.07 1.65	0.98 0.93	0.47	1.6			貯蔵穴。
SK391	不整形	2.73 2.30	2.51 2.25	0.84	4.2			
SK392	不整形	1.60 1.68	1.10 1.45	0.39	2.1			袋状貯蔵穴。
SK393	隅丸長方形	1.85 1.59	1.38 1.13	0.17	1.7			貯蔵穴。
SK394	不整形	1.88 1.66	※1.3 ※1.2	0.30	※1.6			
SK395	隅丸長方形	2.83 2.67	1.96 1.74	0.33	4.4			貯蔵穴。
SK409	不整形	2.30 2.28	0.84 0.81	0.23	1.8			
SK413	不整形	1.05 0.88	0.70 0.63	0.07	0.3			
SK414	隅丸長方形	1.00 0.88	0.72 0.69	0.47	0.6			
SK415	円形	1.86 1.73	1.72 1.51	0.77	2.5			貯蔵穴。壁が一部オーバーハングしている。
SX215	円形	0.96 1.22	0.86 1.15	0.58	1.1			袋状貯蔵穴。
SX310	不整形	2.86 2.59	2.84 2.35	0.74	5.1		蓋 扁平片刃石斧	
SX359	円形	0.82 1.05	0.72 1.02	0.72	0.8			袋状貯蔵穴。

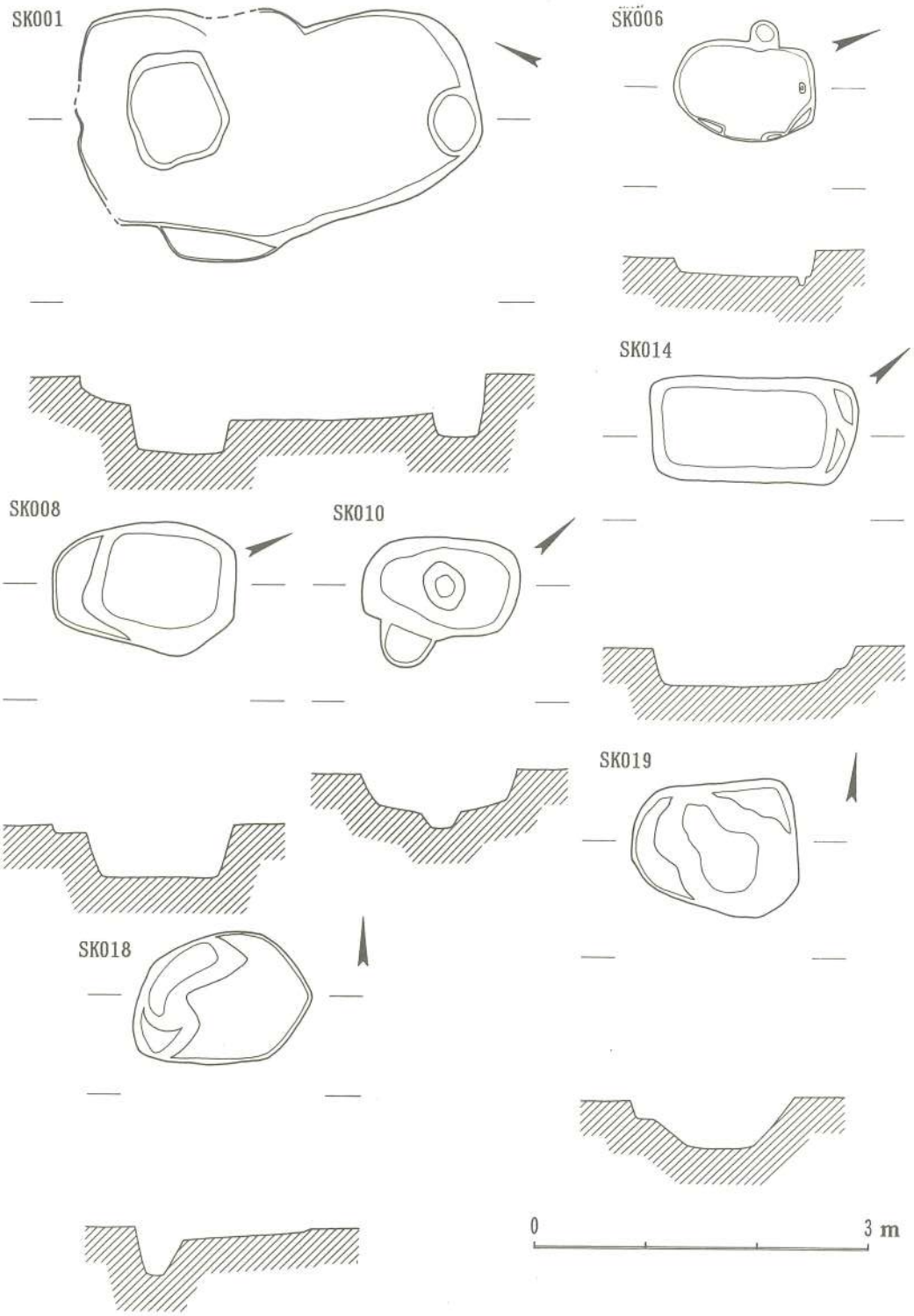


Fig. 52　土壙・貯蔵穴実測図(1)

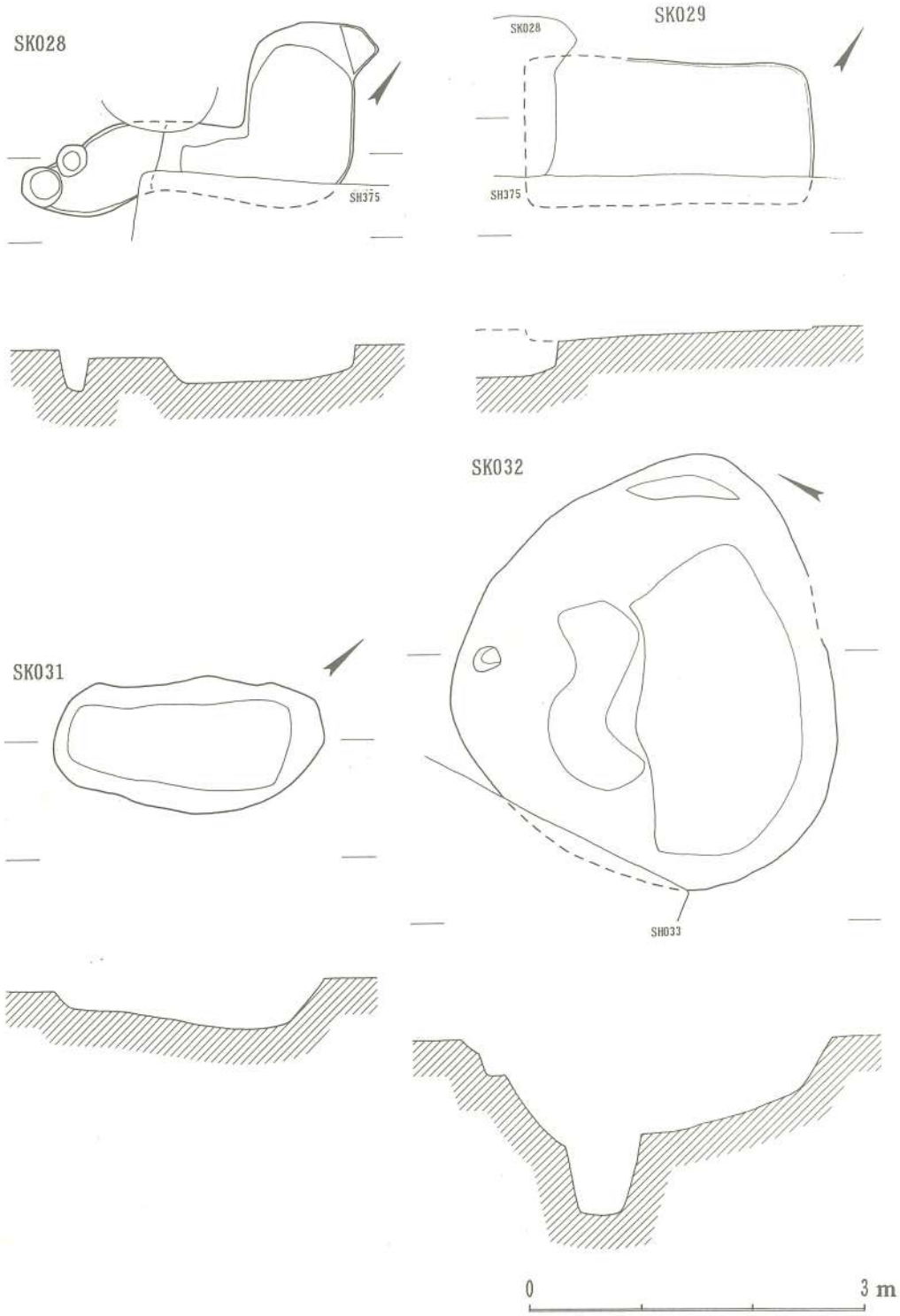


Fig. 53　土壙・貯蔵穴実測図(2)

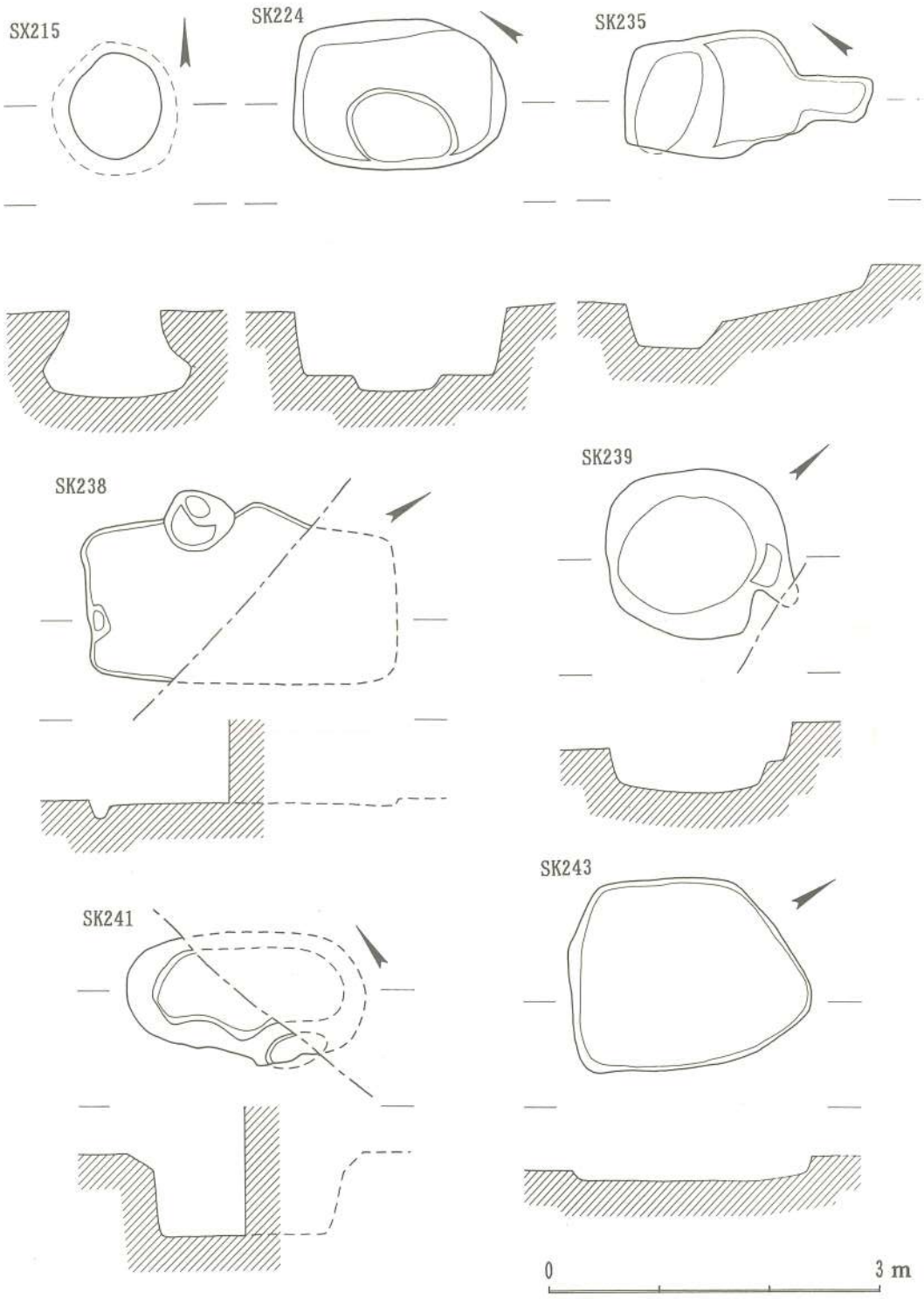


Fig. 54　土壙・貯蔵穴実測図(3)

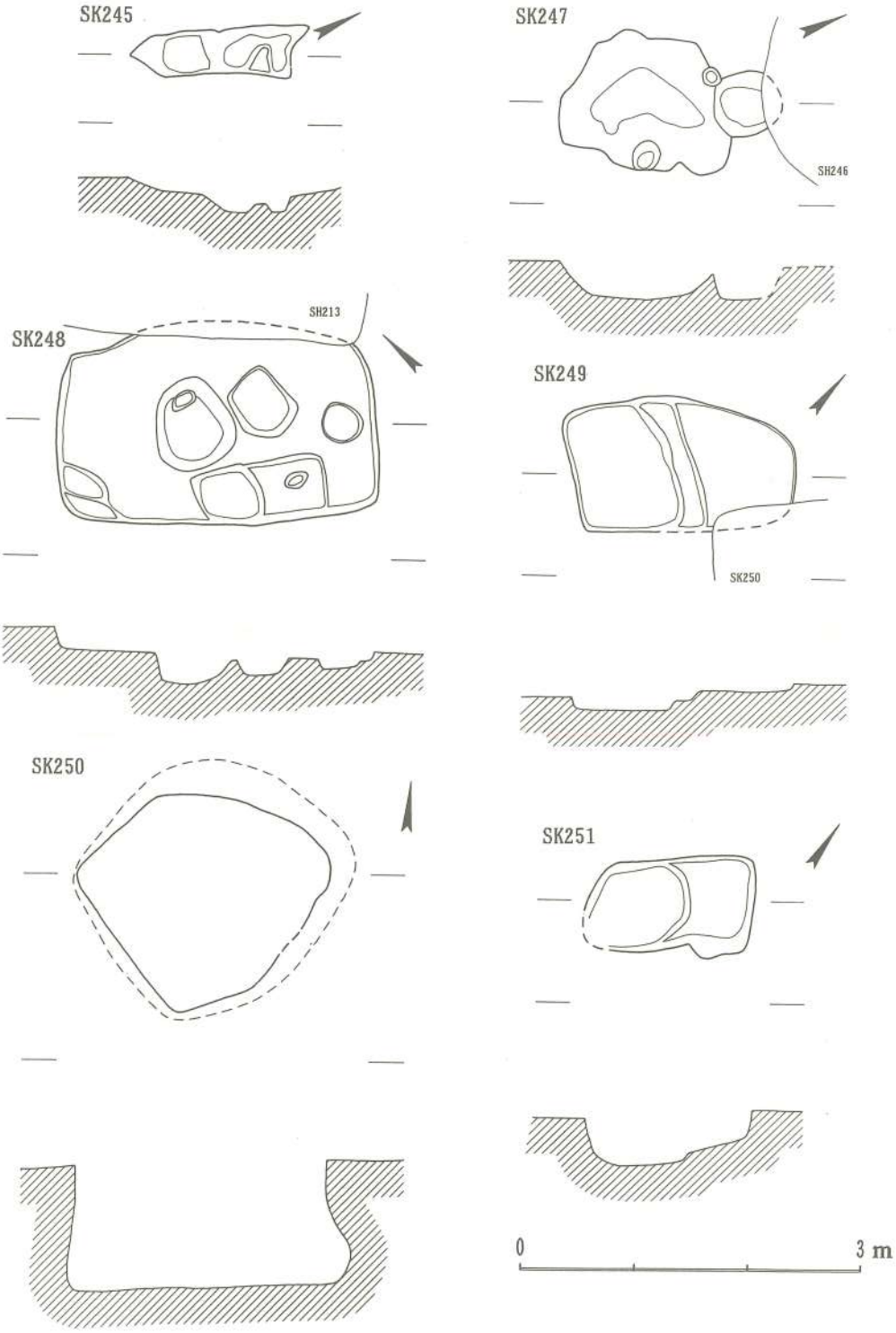


Fig. 55　土壙・貯蔵穴実測図(4)

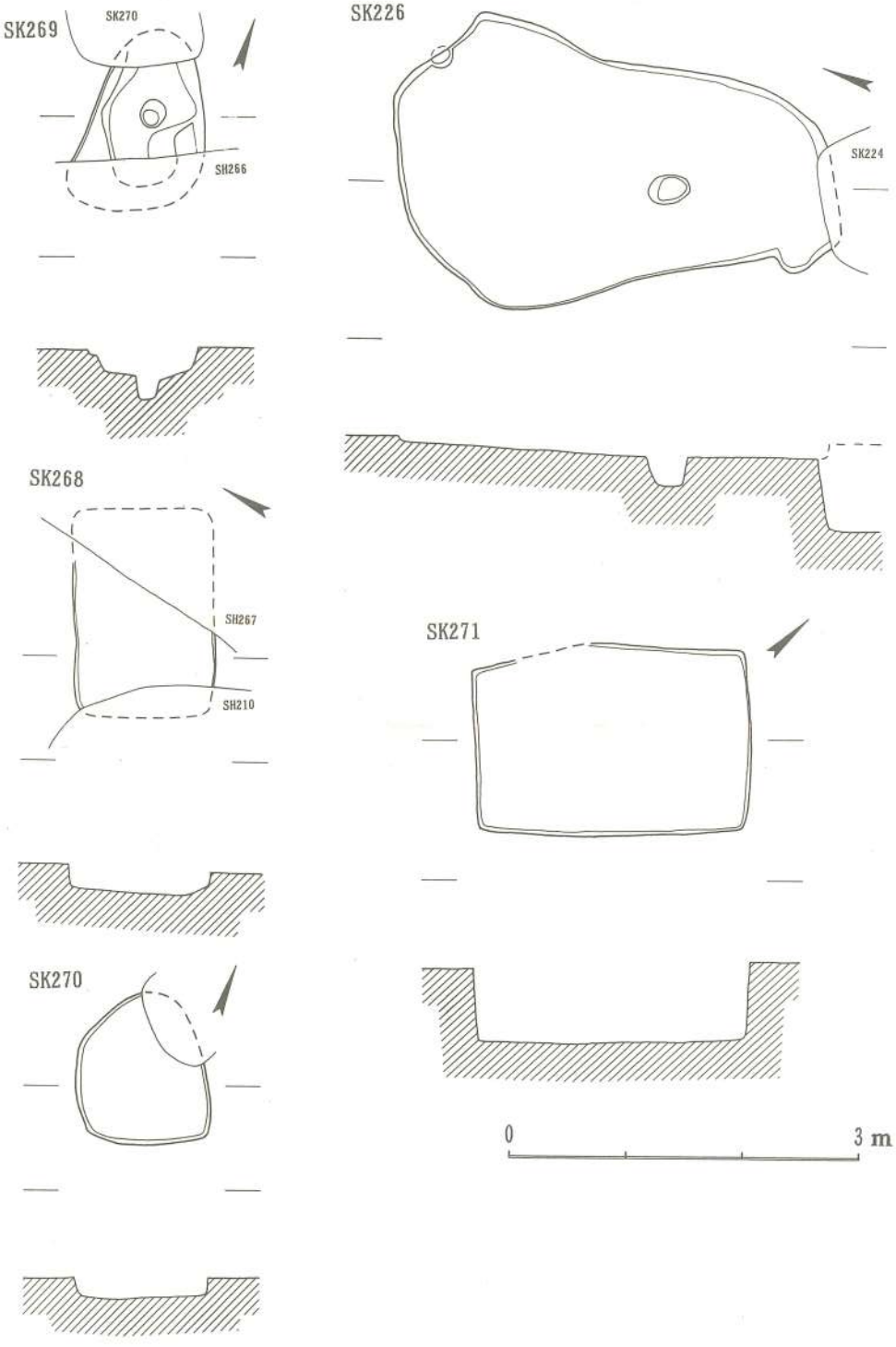


Fig. 56　土壙・貯蔵穴実測図(5)

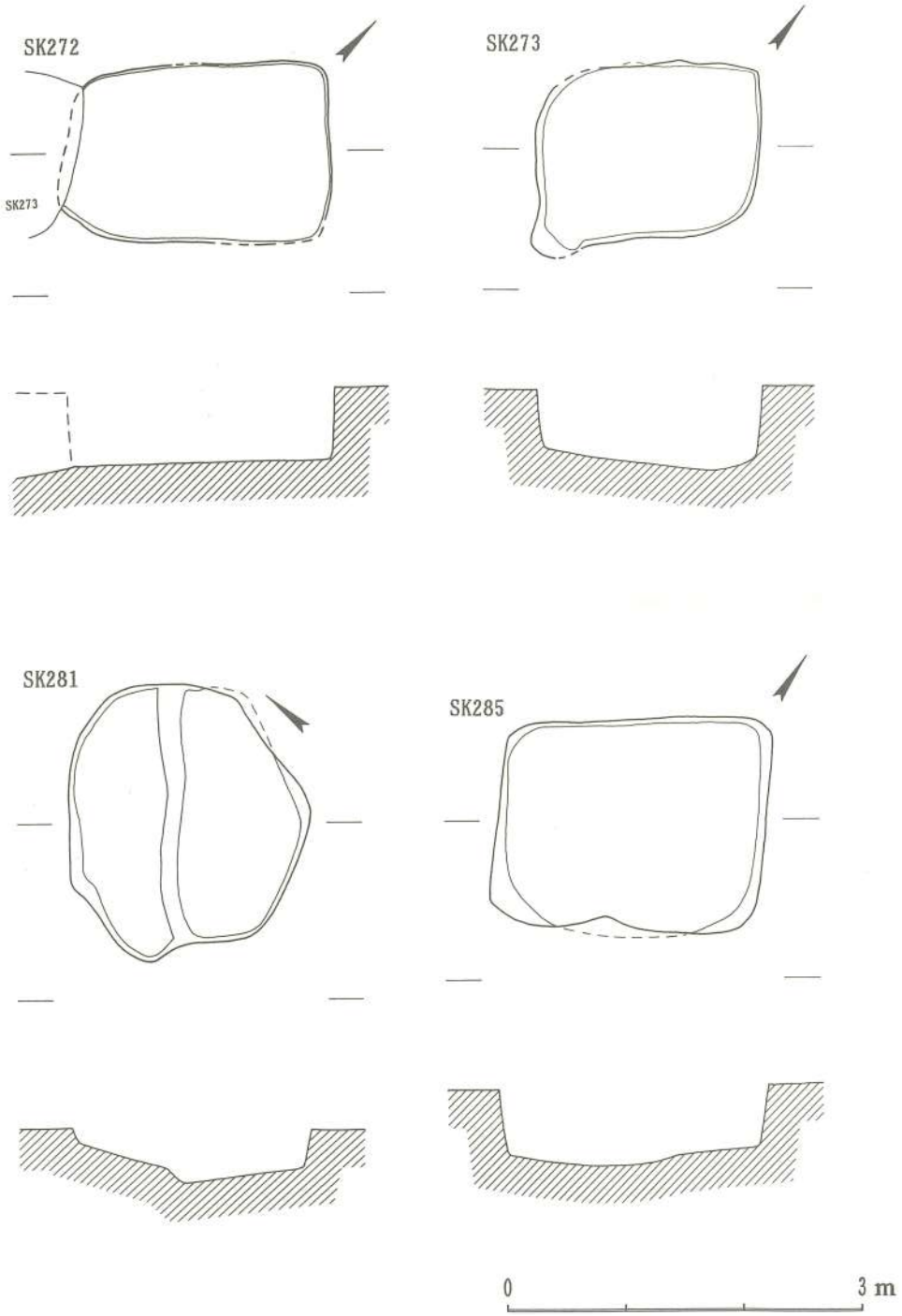


Fig. 57　土壙・貯蔵穴実測図(6)

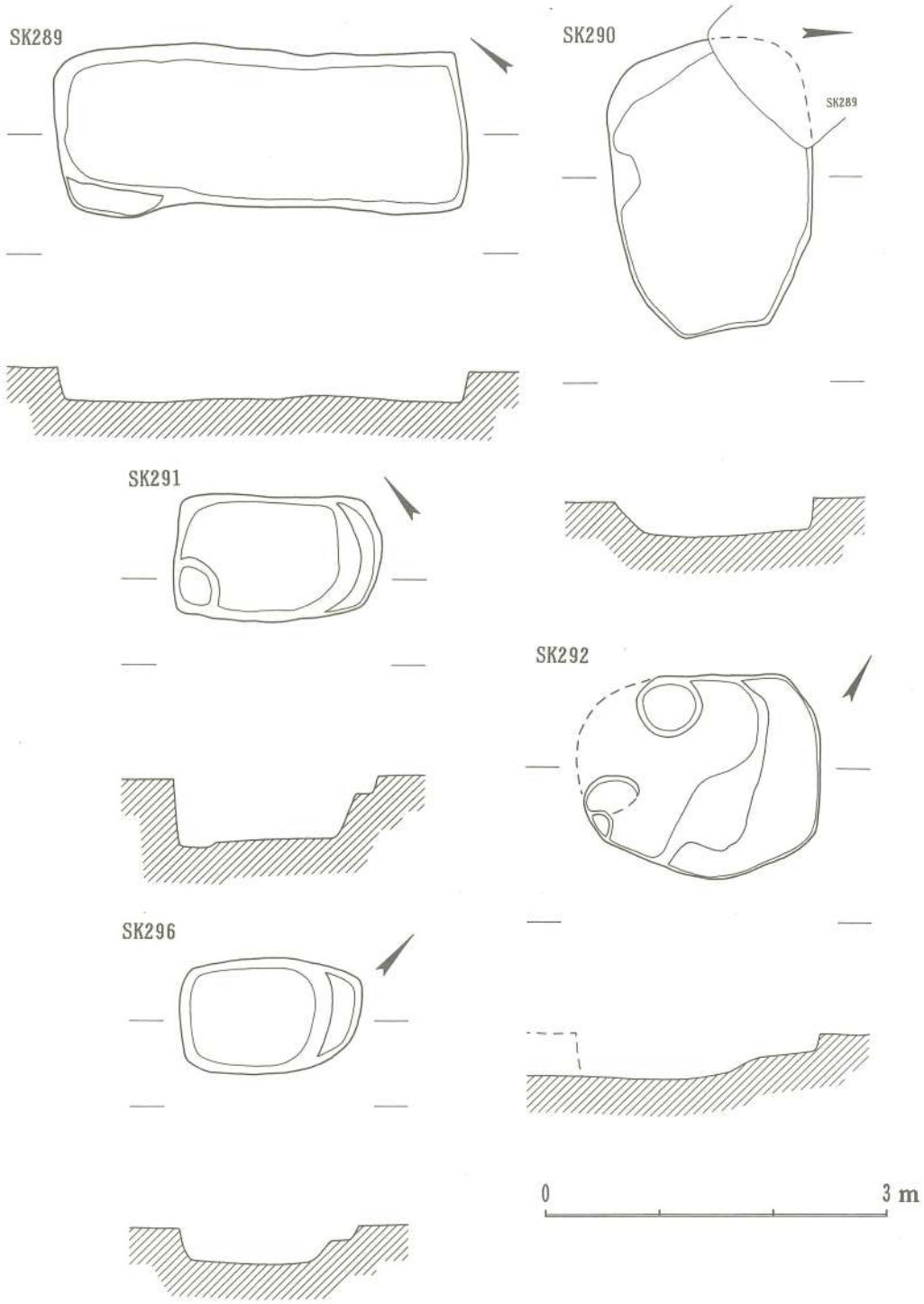


Fig. 58　土壙・貯蔵穴実測図(7)

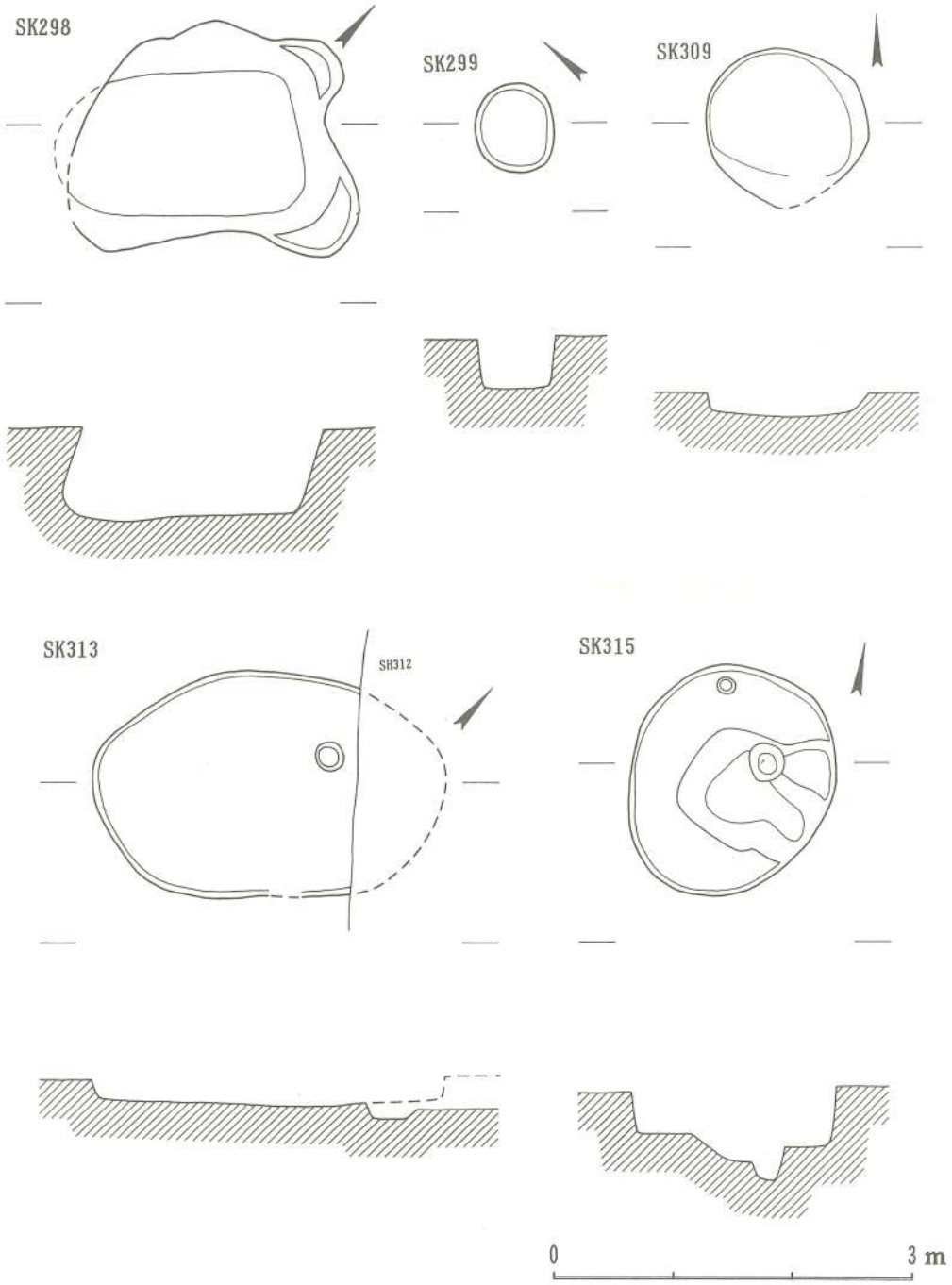


Fig. 59　土壙・貯蔵穴実測図(8)

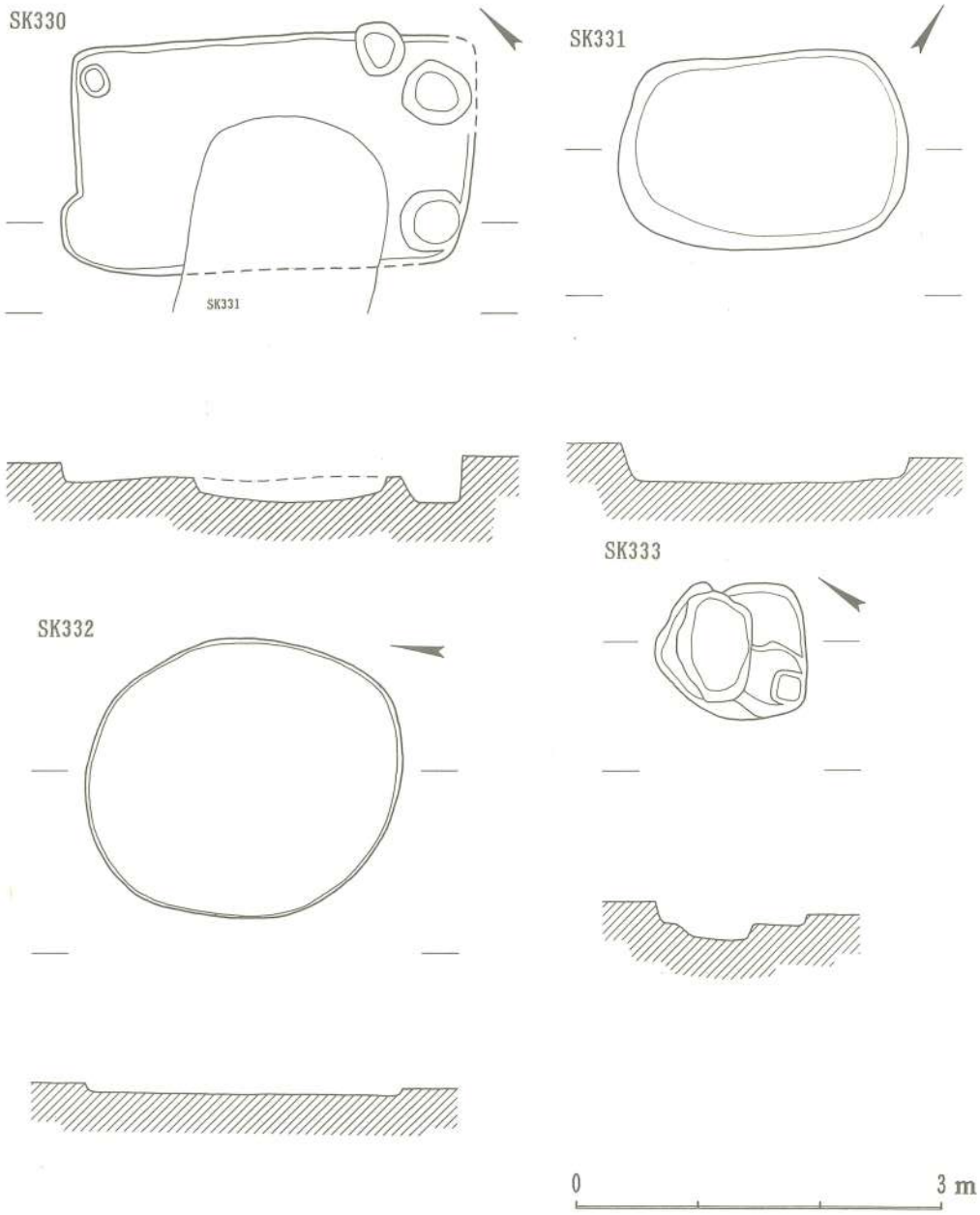


Fig. 60　土壙・貯蔵穴実測図(9)

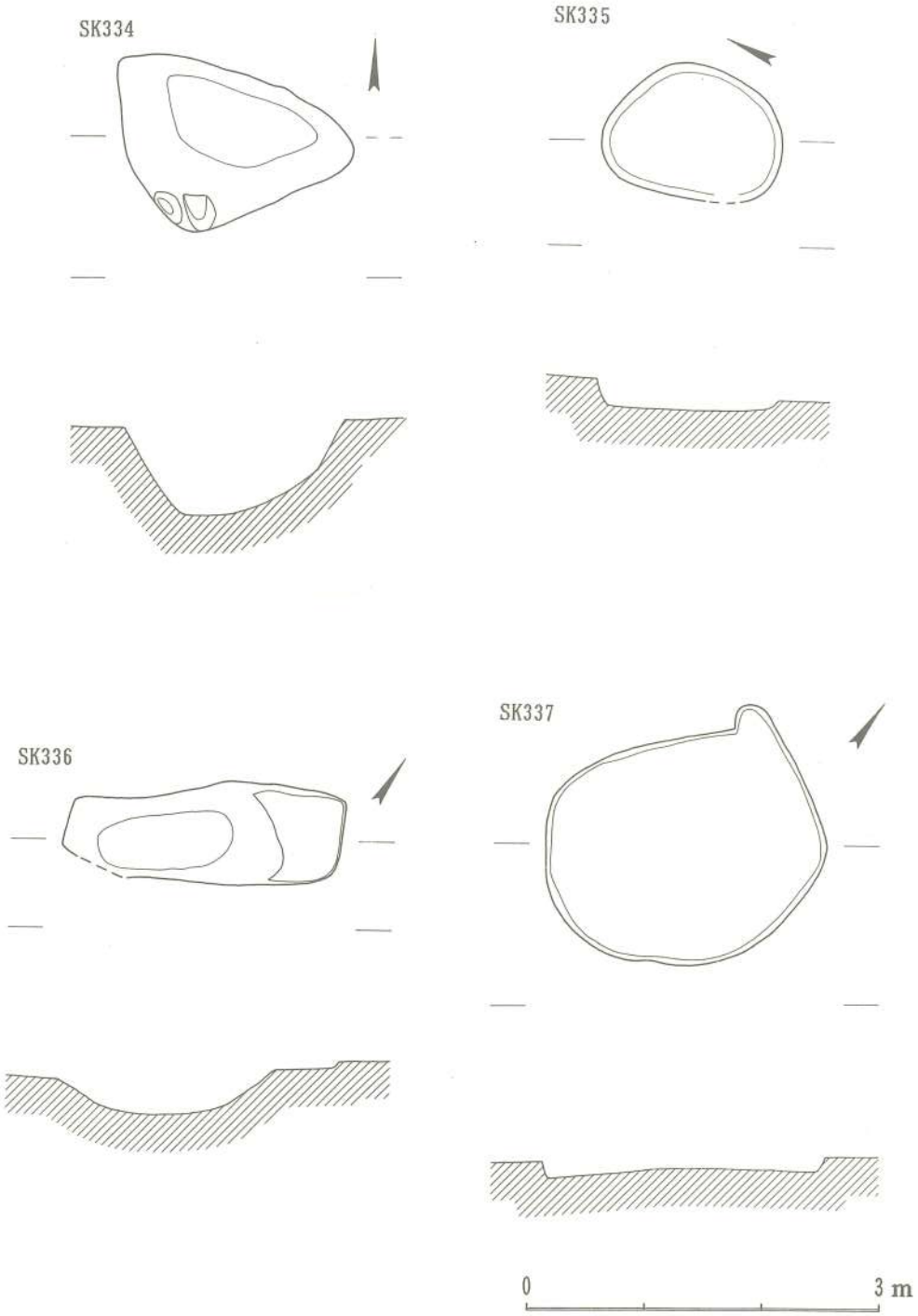


Fig. 61　土壙・貯蔵穴実測図(10)

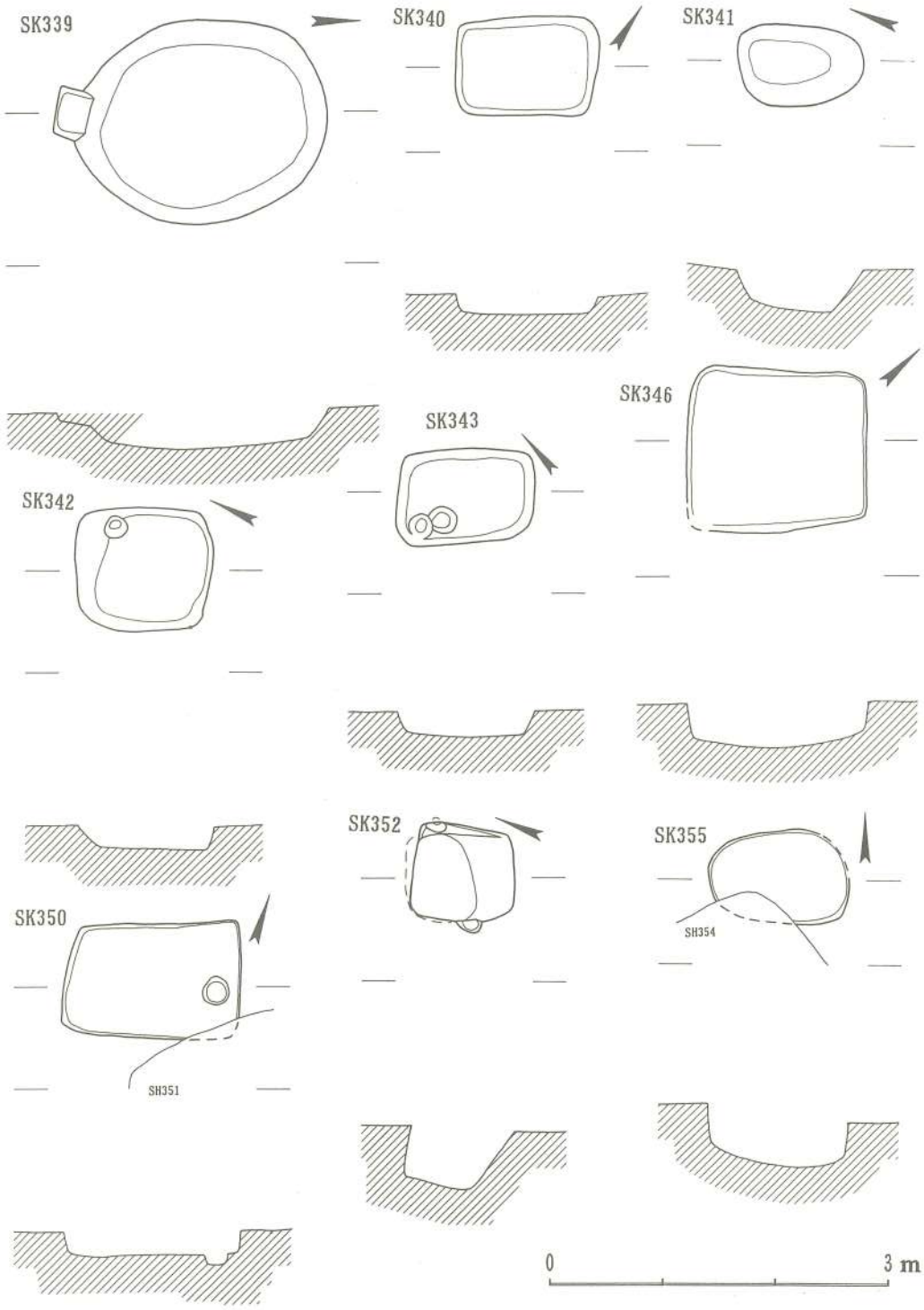


Fig. 62　土壙・貯蔵穴実測図(11)

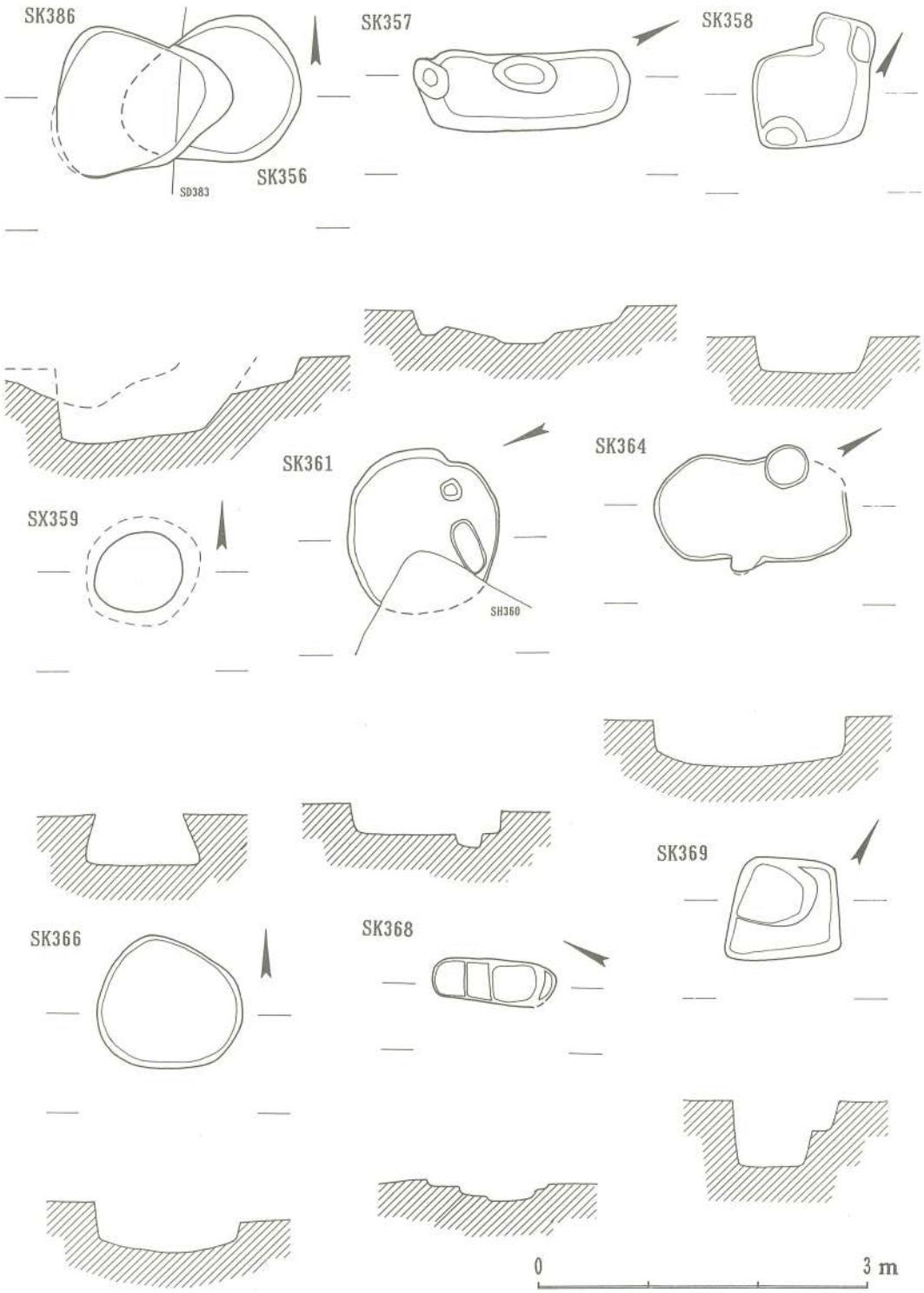


Fig. 63　土壙・貯蔵穴実測図(12)

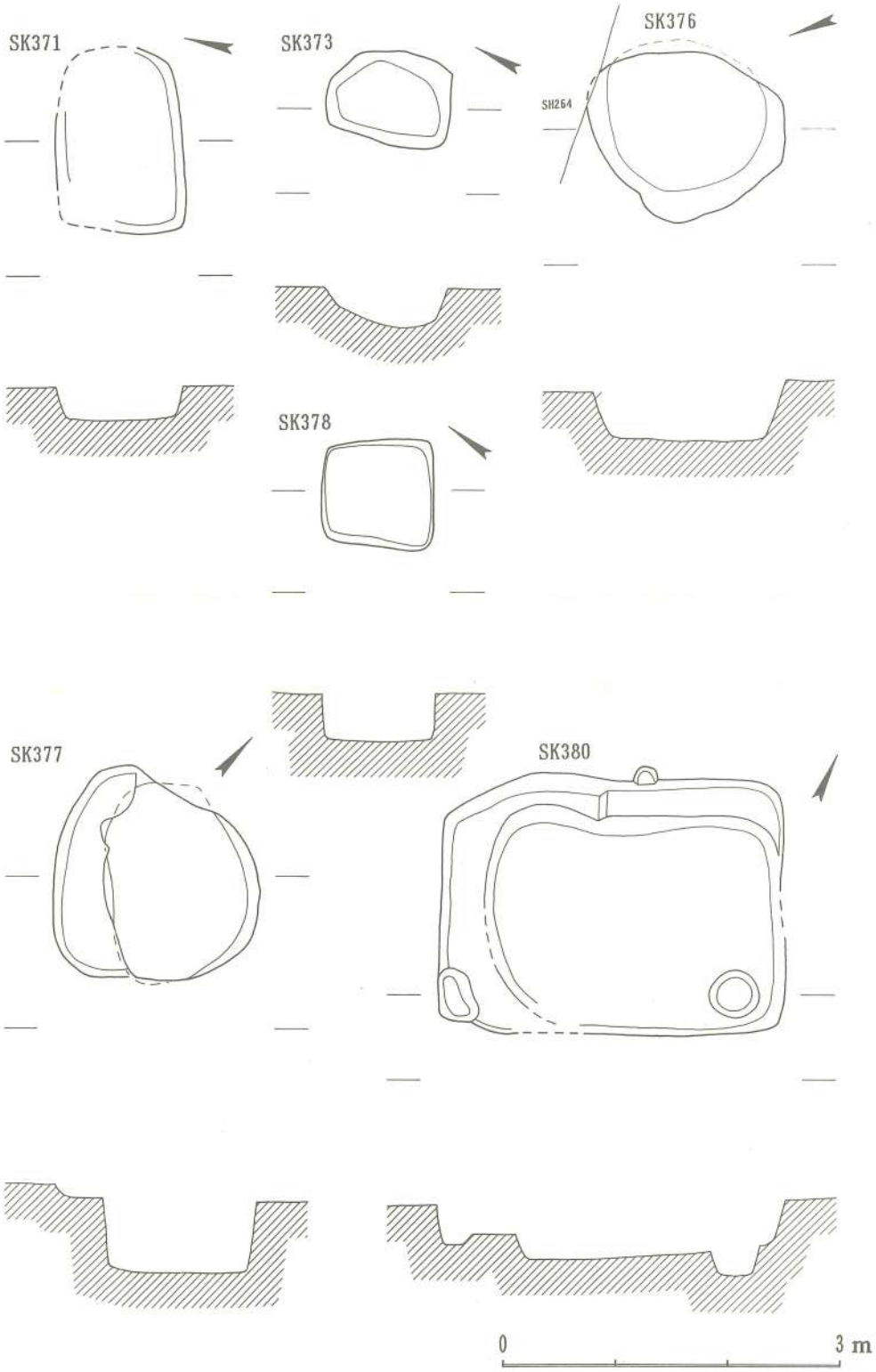


Fig. 64　土壙・貯蔵穴実測図(13)

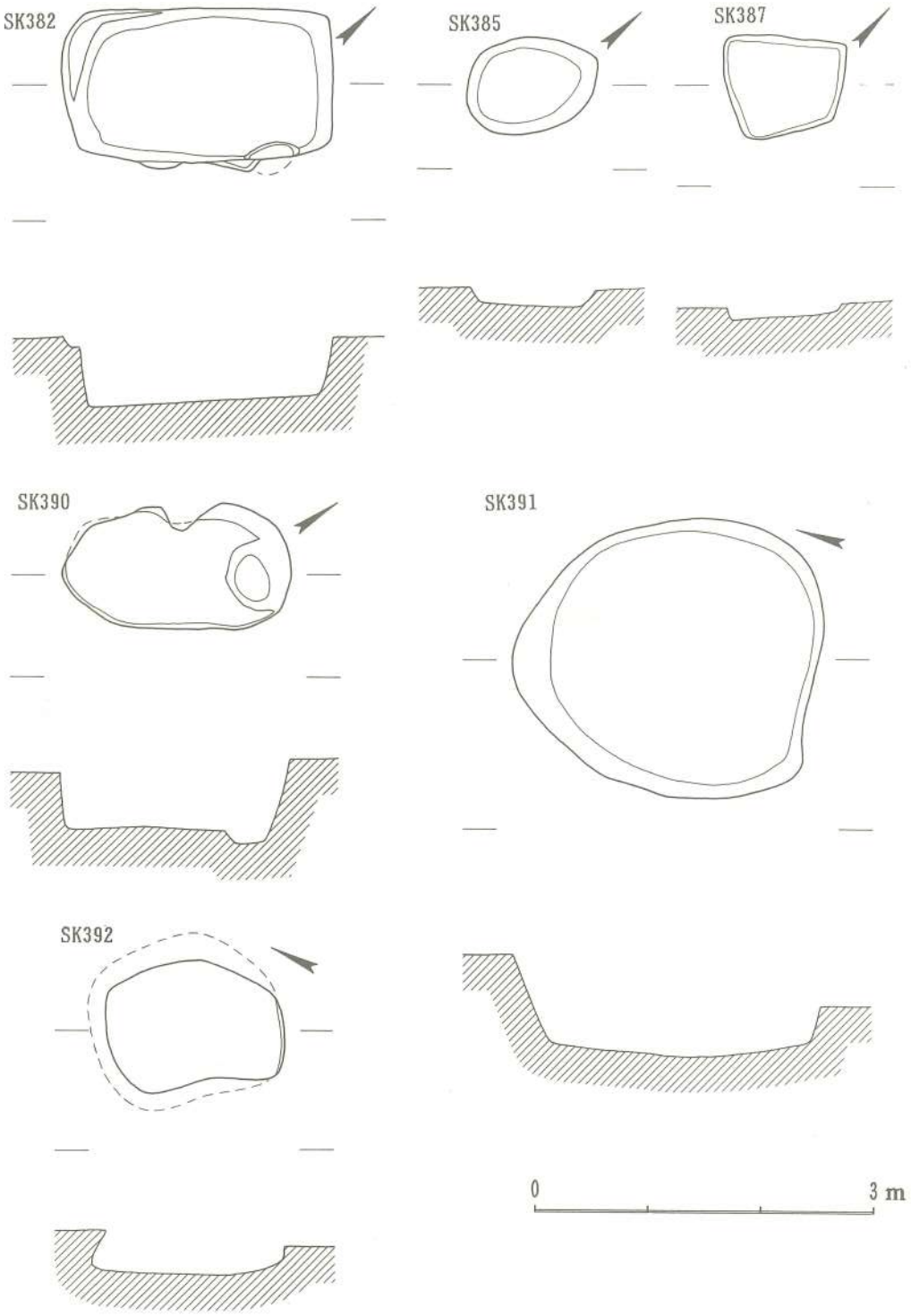


Fig. 65　土壙・貯蔵穴実測図(14)

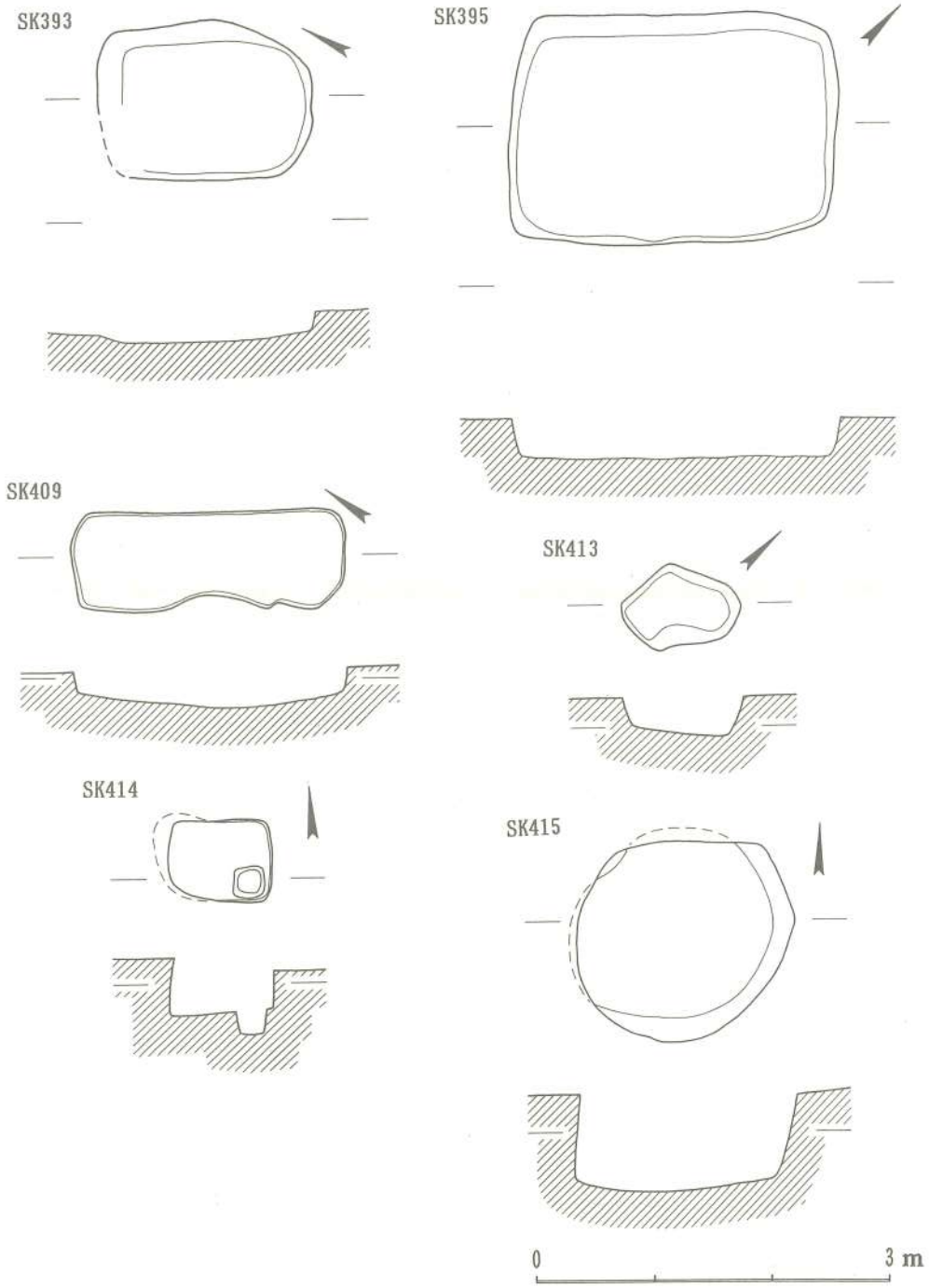


Fig. 66　土壙・貯蔵穴実測図(15)

3．甕棺墓

甕棺墓は、調査区（3区）の西側に集中し、全体で8基検出した。ほとんどの墓壙及び棺の上部は、後世の削平によって破壊を受けていた。墓壙は、ＳＪ011の隅丸長方形を除いて全て楕円形であり、ＳＪ257の上面の長さ2.73m、幅1.44mを除く7基が長さ0.61m～1.13m、幅0.51m～0.70mの範囲内で弥生時代中期の小児棺である。（鶴田）

Tab. 3　船石遺跡出土甕棺墓一覧表

甕棺墓番号	甕棺形式	組合せ器種（上・下）	成人・小児用の別	墓壙の規模 長さ×幅×深さ(m)	方位	傾斜
ＳＪ011	接口式	甕・甕	小児用	0.96×0.67×0.14	N－ 51°　－E	—
256	—	—・壺	小児用	0.61×0.54×0.32	N－123°　－W	(44.5)°
257	抗口式	鉢・甕	成人用	2.73×1.44×0.36	N－108°　－E	—
258	接口式	甕・甕	小児用	1.05×0.70×0.37	N－140°　－W	5°
259	接口式	甕・甕	小児用	1.01×0.64×1.5	N－ 79.5°－W	—
260	接口式	甕・甕	小児用	0.82×0.53×0.10	N－ 28.5°－W	—
261	接口式	甕・甕	小児用	1.13×0.51×1.6	N－153°　－E	—
262	—	・甕？	小児用	※0.80×0.64×1.3	N－113.5°－E	—

Tab. 4　船石遺跡出土甕棺一覧表

甕棺墓番号	上・下	器種	器高(cm)	口径(cm)	器体の形態	口縁部の断面形態	突帯
SJ011	上	小型甕	35	25.0	砲弾形	逆L字形	
	下	小型甕	—	26.8	砲弾形	逆L字形	口縁部下に断面三角形突帯1条
256	上	—	—	—			
	下	壺	—	—	壺形		胴部に断面三角形突帯1条
257	上	大型鉢	—	77.6	鉢形	逆L字形	口縁部下に断面三角形突帯2条
	下	大型甕	103	81.6	砲弾形	T字形(内側への張り出しが厚く大きい)	口縁部下に断面三角形突帯2条
258	上	小型甕	37	31.4	砲弾形	逆L字形	
	下	小型甕	37	31.5	砲弾形	逆L字形	
259	上	小型甕	—	32.0	砲弾形	逆L字形	
	下	小型甕	—	38.2	砲弾形	逆L字形	口縁部下に断面三角形突帯1条
260	上	小型甕	—	31.8	砲弾形	逆L字形	
	下	小型甕	—	30.6	砲弾形	逆L字形	
261	上	小型甕	36	31.4	砲弾形	逆L字形	
	下	小型甕	37	26.4	砲弾形	逆L字形	
262	上	—	—	—			
	下	小型甕	—	—			

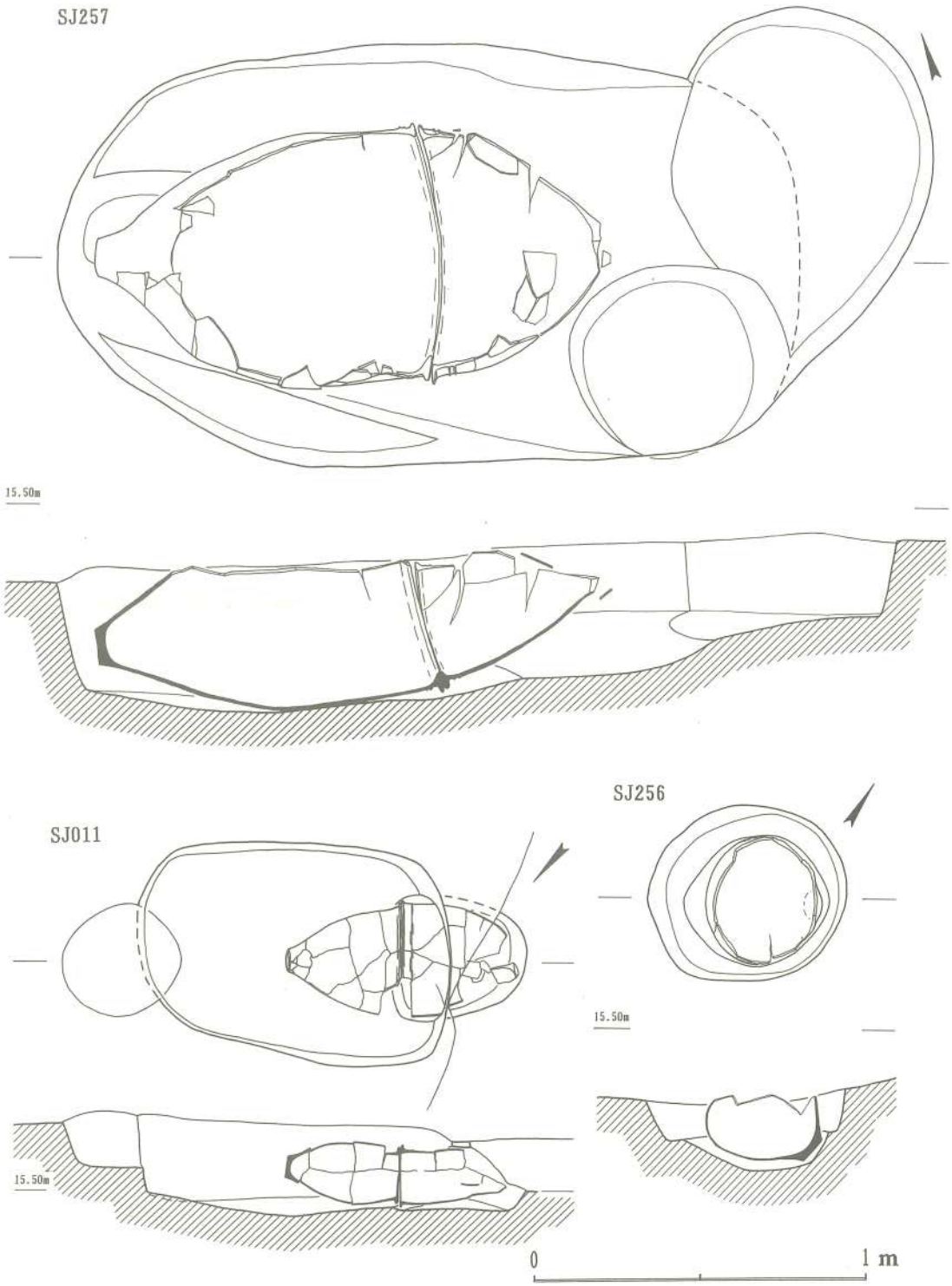


Fig. 67　甕棺墓実測図(1)

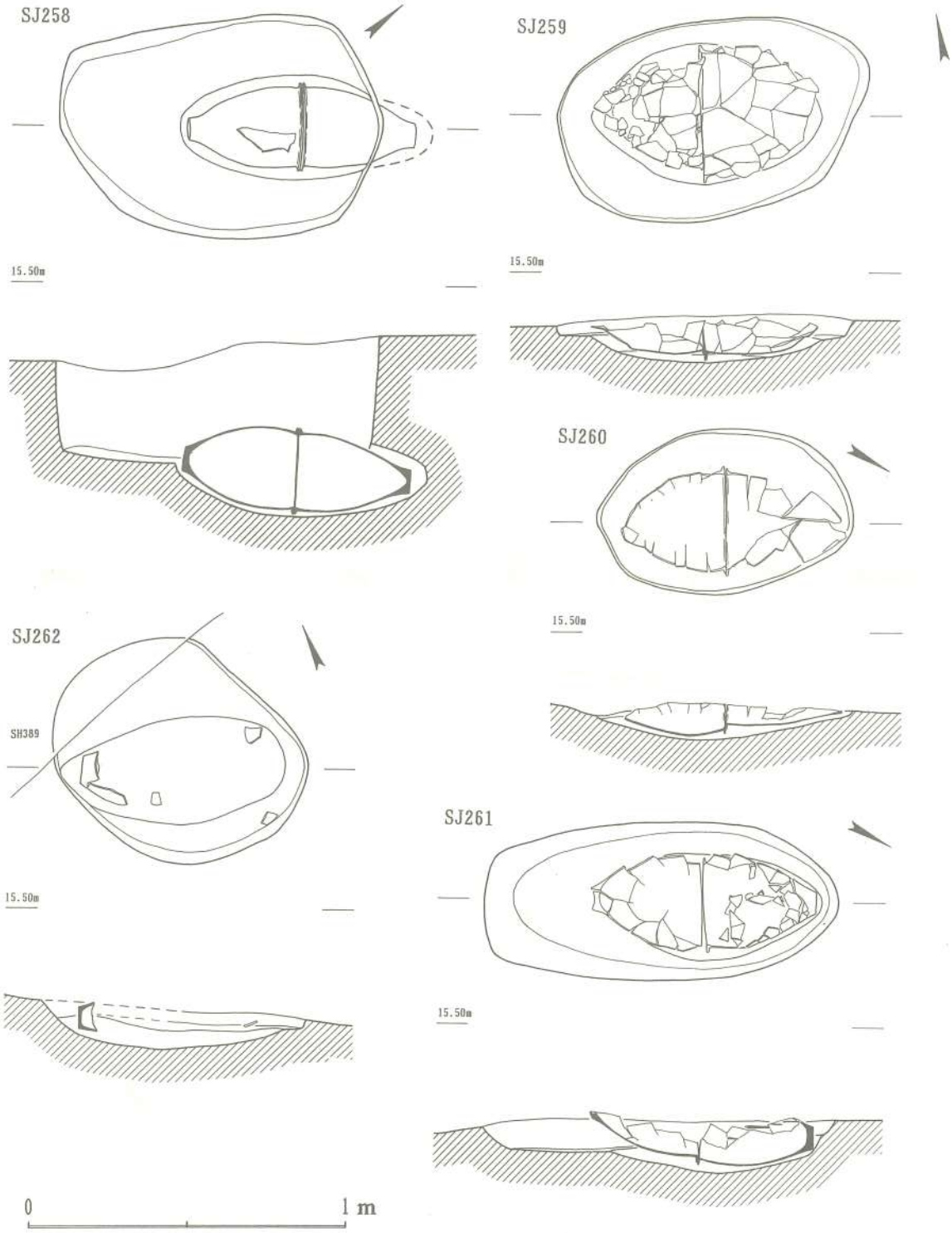


Fig. 68　甕棺墓実測図(2)

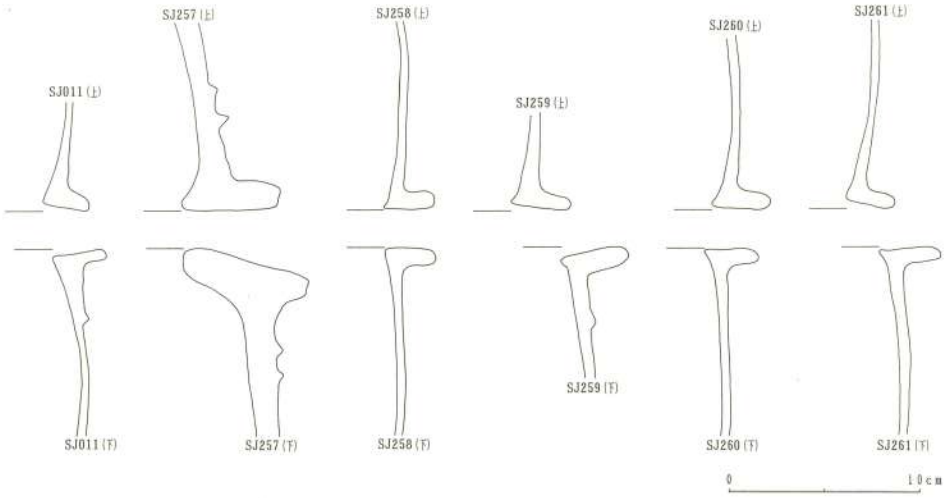


Fig. 69　甕棺口縁部実測図

4．石棺墓

石棺墓ＳＣ220は、Ｎ―12グリッドで検出した。ＳＨ229が放棄され埋没後につくられたものである。墓壙は、楕円形で長さ0.95m、幅0.51m、深さ0.12mで黒褐色土に掘り込まれている。石棺の蓋石はなく、側石は、南北各１枚づつ、東側１枚、西側２枚の花崗岩転石で覆っており、隙間を花崗岩割石で塞いでいる。石棺の内法は、長さ0.60m、幅0.16m、深さ0.24mで小児用と考えられる。主軸は、Ｎ―34.5°―Ｗを測る。　（原田）

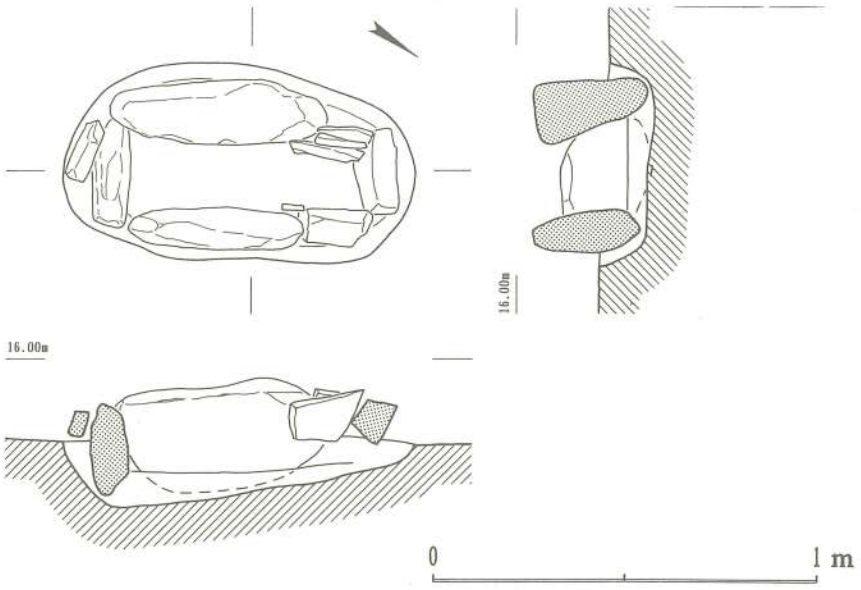


Fig. 70　石棺墓実測図

5．掘立柱建物址

掘立柱建物址は、３棟を検出した。全てが２間×１間の建物であるが柱痕跡は確認できなかった。Ｆ―14･15グリッドで検出されたＳＢ384が規模の点では他の２棟より一回り大きく、桁

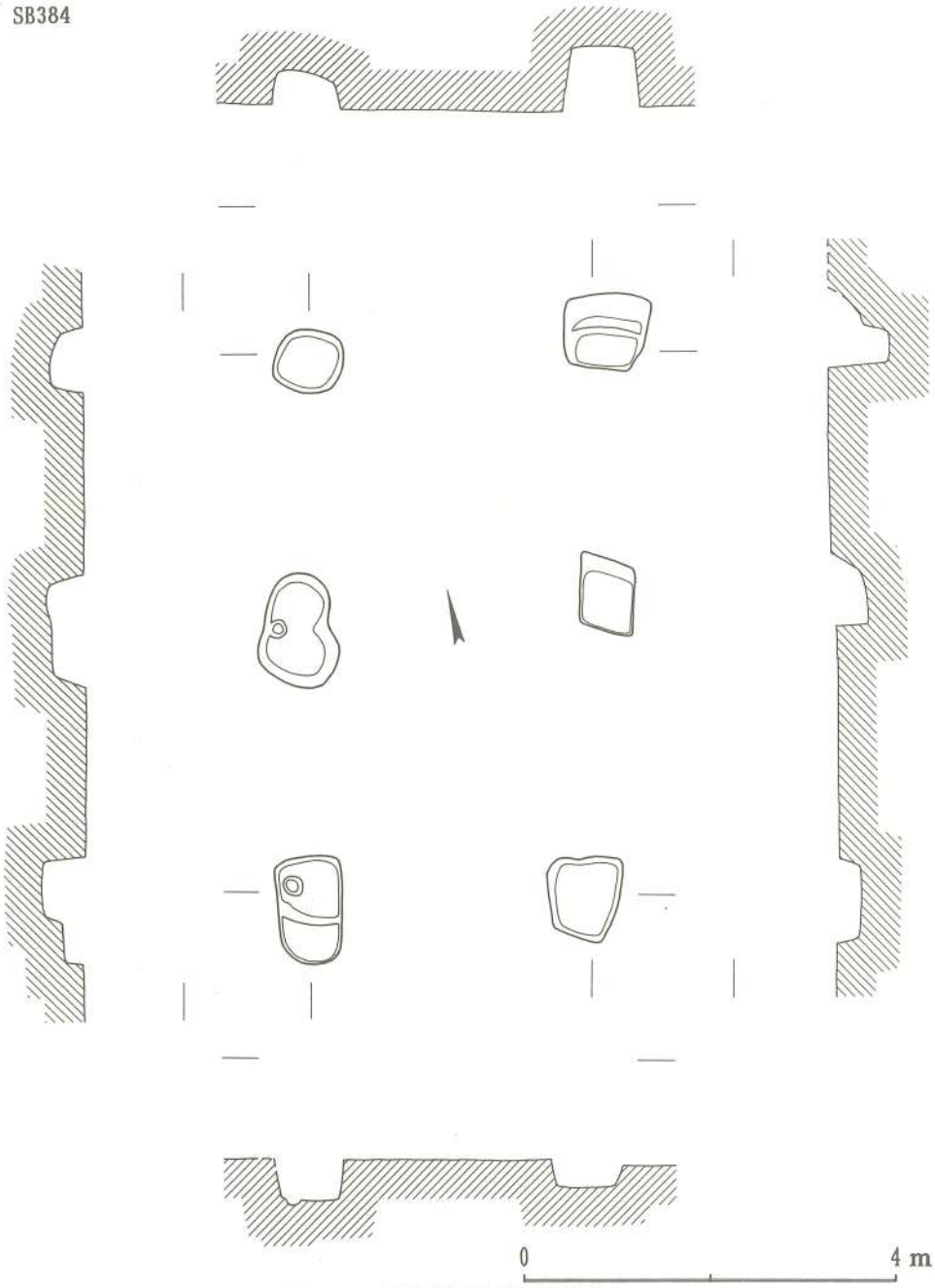


Fig. 71　掘立柱建物址実測図(1)

Tab. 5　船石遺跡出土掘立柱建物址一覧表

建物址番号	平面形態	規模 (m、m²)				棟方向
		桁行	梁行	長さ×幅	床面積	
SB384	1×2間	2.6・3.2	3.1	5.8×3.1	18.0	N−13°−E
SB417	1×2間	1.8・1.8	2.2	3.6×2.2	7.9	N−28°−E
SB418	1×2間	1.8・1.8	2.2	3.6×2.2	7.9	N−34.5°−W

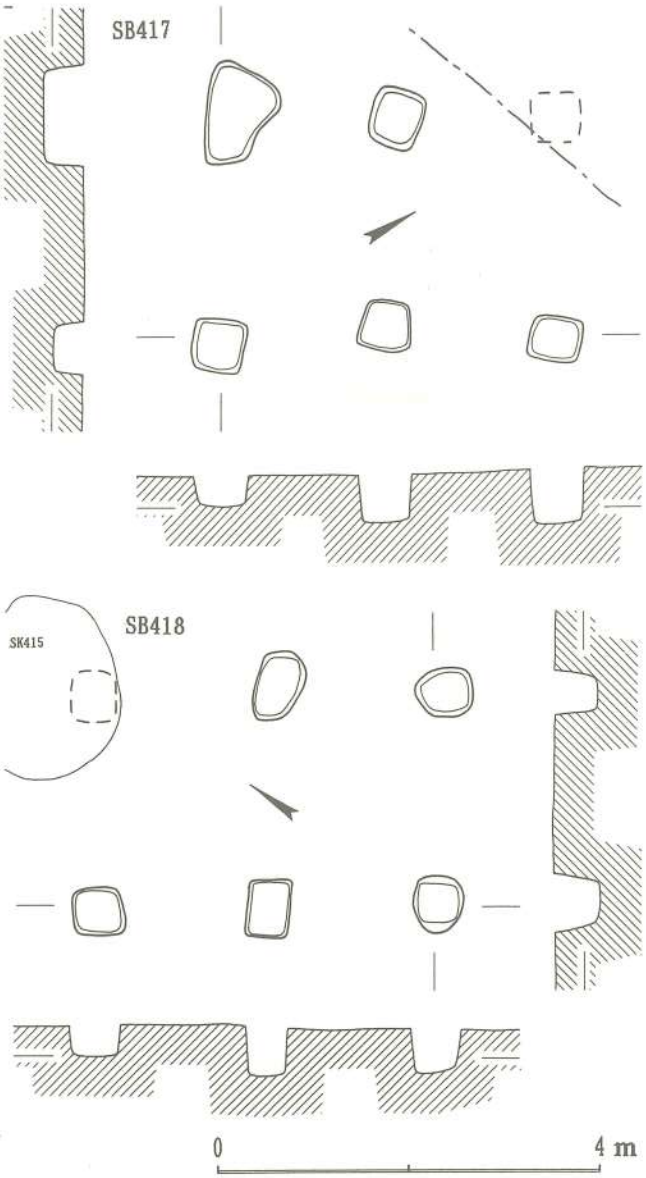


Fig. 72　掘立柱建物址実測図(2)

行5.8m、梁行3.1m、床面積18.0m²を測る。柱穴の掘り方は、隅丸長方形を呈し長さ0.6m〜1.2m、幅0.6m〜0.9m、深さ0.6〜0.8mである。棟方向は、N−13°−Eをとる。一方、4区東部で隣接して検出されたSB417とSB418は、ともに桁行3.6m、梁行2.2m、床面積7.9mで、柱穴の掘り方は、一辺0.5〜0.6mの方形を呈し、深さ0.4m〜0.6mを測る。棟方向は、それぞれSB417がN−28°−E、SB418がN−34.5°−Wである。

（原田）

6．その他

その他の遺構としては、3区中央部を南北に走る溝跡SD383を1条検出した。上部は削平されており、ほぼ直線上に延び、二段掘りで断面はU字形を呈す。南部にいくにしたがって幅広く深くなっている。確認できた長さ約49m、幅0.5m〜2.0m、深さ0.04m〜0.37mであった。

（鶴田）

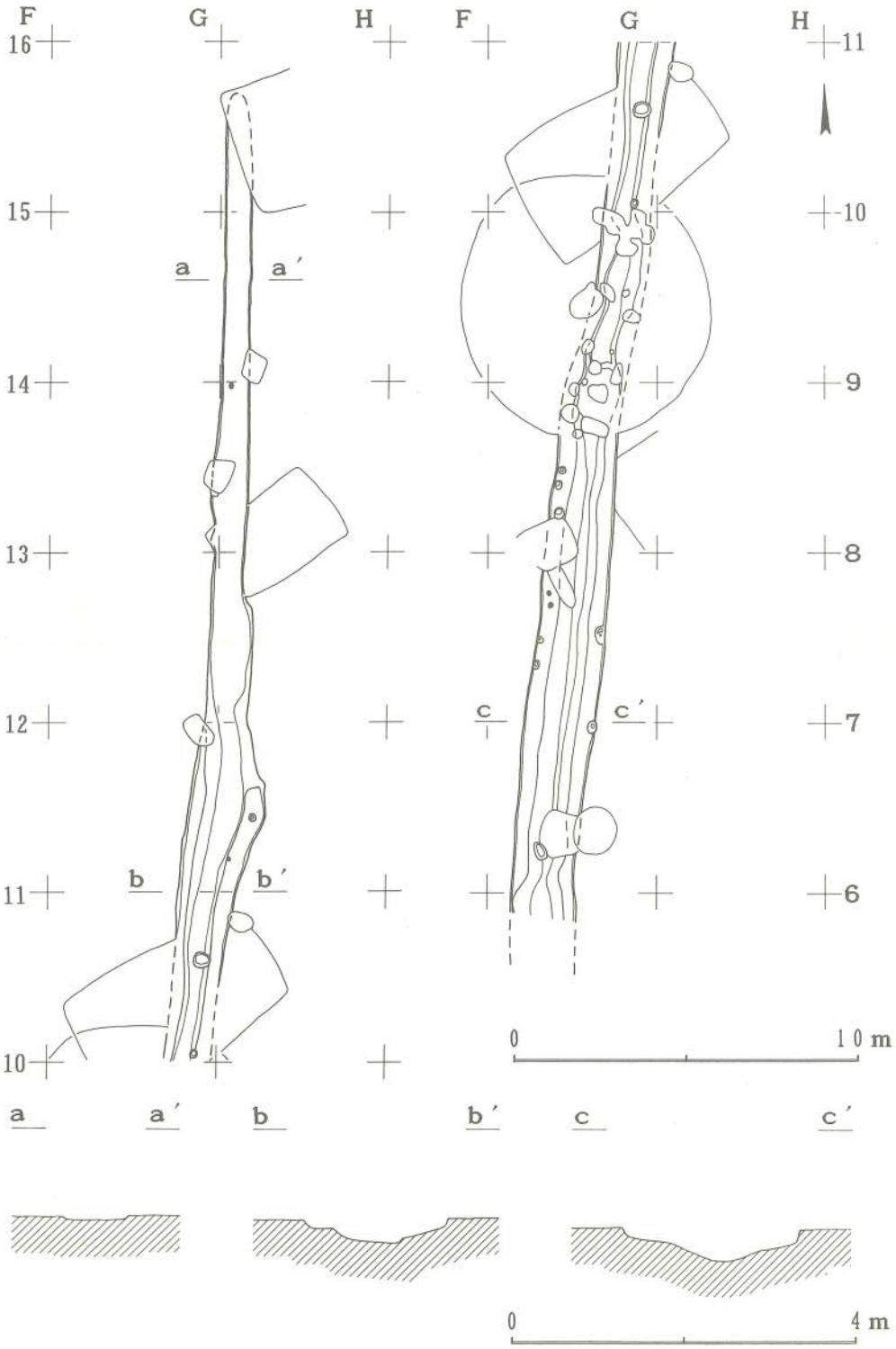


Fig. 73　溝跡実測図

V. 遺　　物

今回の調査で検出された遺物は、土器・土製品、石器、鉄製品と多岐にわたっているが、なかでも弥生時代の遺物が圧倒的に多い。また、一遺構から取り上げた遺物群のなかに弥生式土器と土師器が混在するなど、遺構内一括取り上げ出土遺物に時間差が認められる例が散見される。これは調査時の遺構切り合い関係の誤認などによるもので調査員の責に帰すべき問題であるが、ここでは、土器・土製品の代表的なものを出土遺構ごとに、石器、鉄器などその他の遺物は一括して報告したい。

土器・土製品（Fig. 74～Fig. 103・PL. 1～PL. 16）

SK-001出土遺物（Fig. 74・1～13）

1～6は甕でいずれも外面ハケ目、内面ナデ調整。1～3は断面逆L字形口縁、4～6は断面三角形口縁。1、5は口縁端に刻み目が施され、5、6は胴部上位に断面三角形の突帯がめぐる。7～10は壺形土器。7、9は口縁部が朝顔形に大きく開くもので、7は素口縁、9は断面鋤形口縁をもつ。10は広口壺で内外面ともにナデ調整、口縁下部に2個の小穴が焼式前に穿孔されている。8は小型丸底壺で外面は細かいヘラミガキ、内面はヘラナデ調整、SK-001の他の遺物群に比べると時期が下る。11は蓋。12は器台で外面縦方向のハケ目、内面ナデ調整。13は支脚、断面はほぼ正方形を呈す。

SH-003出土遺物（Fig. 75・14～26）

SH-003出土の遺物は、14～17の中期の様相を呈す一群と18～26の後期の様相を呈す一群が混在している。14～17は甕。14は断面三角形口縁、15～17は断面逆L字形口縁。17は口縁端部にヘラ状工具による刻み目が施され、胴部上位に2条の突帯をもつ。18は壺の口縁で、先端がつまみ上げられている。19、21は器台。19は脚部、内外面ともにハケ目調整。20は沓形器台の上部で上面にはハケ目、内面に指頭圧痕が残る。21、22は断面くの字形口縁の甕で内外面ともにハケ目調整。21は大型で口縁端部にヘラ状工具による刺突文が、胴部上位には断面三角形の突帯がめぐる。23～26は鉢。23は外面ナデ、内面ハケ目調整。25、26は内画面ともにハケ目調整。

SH-004出土遺物（Fig. 76・27～29）

27、28は甕。27は胴部上位に沈線がめぐり、外面ハケ目、内面ナデ調整、粘土帯の接合部で口縁部が剝離している。29は鉢で口縁部内面に横位のハケ目、他は内外面ともにナデ調整。

SH-005出土遺物（Fig. 76・30）

30は壺の底部で外面はていねいなナデ調整。

SK-006出土遺物（Fig. 76、96・31～40、276）

31～37は甕でいずれも断面逆Ｌ字形口縁をもつ。31～35は外面ハケ目、内面ナデ調整。36、37は内外面ともにナデ調整、36は胴部上位に断面三角形の突帯を持つ。38、39、276は壺。38は広口壺で内外面ともにナデ調整、口縁下部に２個の小穴が焼成前に穿孔され、内面胴部上位に指頭圧痕を残す。276は朝顔形に開く断面鋤形口縁の壺で口縁外面には３条を単位とする暗文が施されている。胴部上部に最大径をもち、ここに断面三角形の突帯がめぐる。40は器台で、外面ハケ目、内面ナデ調整。

SH-007出土遺物（Fig. 77・41～49）

SH-007 出土の遺物は、41～44、46、47の弥生時代の土器と45、48、49の古墳時代の土器が混在している。41、42は甕で外面ハケ目、内面ナデ調整。43は大型の壺で外面はハケ目の後にナデ、内面はナデ調整。44、47は鉢。44は外面ナデ、内面ハケ目の後に細かなヘラミガキ調整。47は内外面ともにハケ目調整。46は高坏の坏部で内外面ともにナデ調整。45は土師器の甕で外面はハケ目、内面はていねいなヘラ削り調整。48は土師器坏で手捏成形、口縁内面に横位のハケ目を施すが、他の部位には指頭圧痕を残す。49は須恵器坏でロクロ成形、底部は回転ヘラ削り。

SH-009出土遺物（Fig. 77・50、51）

50は断面逆Ｌ字形口縁の甕で遺存部はナデ調整。51は壺で頸部に断面三角形の突帯がめぐる。

SK-010出土遺物（Fig. 77・52）

52は支脚で断面不整円形を呈し、胴部下位に先端がコの字形を呈す工具により連続刺突されている。

SH-012出土遺物（Fig. 77、78・53～67）

53～59は甕。53、55は断面三角形口縁の甕で、55は口縁端部にヘラ状工具による刻み目が施されている。56、57は断面逆Ｌ字形口縁の甕で、57は口縁部下に断面三角形の突帯がめぐる。54はやや時期が下るもの。60は土師器の甑で手捏成形、外面に指頭圧痕を残し、内面は粗いヘラ削り調整。61～64は器台で63は外面裾部に叩き目調整。64は土師器。65は蓋。66、67は土師器坏、66は器壁が荒れており調整不明、67は手捏成形でナデ調整、内面に指頭圧痕を残す。

SH-013出土遺物（Fig. 78、79・68～88）

SH-013出土遺物は弥生時代の土器（68～82）と古墳時代の土器（83～88）が混在している。68、70、71、74、75は甕。68、70は断面三角形口縁の甕。71は断面くの字形口縁の甕で口縁内面に横位のハケ目調整。69、77、78は鉢。72、73は壺で内外面ともにていねいなナデ調整。72は広口壺、73は無頸広口壺で口縁部に２個の小穴が焼成前に穿孔されている。79、80は高坏、81は蓋。82は支脚で叩きの後ナデ調整。83～85は土師器甕。83、85は外面ナデ、内面ヘラ削り調整。84は外面ナデ、内面ハケ目調整。86、87は鉢で86は口縁部内面に指頭圧痕を残す。87は

手捏成形。88は須恵器坏で左回転のロクロ成形、底部に回転ヘラ削り痕を残す。

SH-017出土遺物（Fig. 79・89、90）

89は沓形器台の上部、90は甕底部。

SH-023出土遺物（Fig. 79・80、91～98）

91から94は甕。91、92は断面三角形の口縁をもつもので、91は外面及び口縁部内面にハケ目、内面ナデ調整。92は口縁端部にヘラ状工具による刻み目が施され胴部上位に断面三角形の突帯がめぐる。93は断面くの字形口縁の甕で内外面ともにハケ目調整。94は小振りの甕で内外面ともにナデ調整。95は前期の壺で内外面ともにナデ調整。96は鉢で内外面ともにナデ調整。97、98は器台である。

SK-028出土遺物（Fig. 80・99～104）

99～103は甕。99、100は断面三角形の口縁をもつもの。102は断面逆Ｌ字形口縁で口縁端部にヘラ状工具による刻み目が施され、胴部上位に断面三角形の突帯がめぐる。103はいわゆる刻み目突帯文土器である。104は断面鋤形口縁の壺。

SK-029出土遺物（Fig. 80・105、106）

105、106は甕。105は断面三角形口縁の甕。106は断面くの字形の口縁で内外面ともにハケ目調整。

SK-031出土遺物（Fig. 80・107、108）

107、108は断面逆Ｌ字形口縁の甕。

SH-033出土遺物（Fig. 80、81・109～116）

109、110は断面三角形口縁の甕で、内外面ともにナデ調整。111～115は壺。111、112は広口壺でともに外面ハケ目、内面ナデ調整。113～115は袋状口縁の壺で115は頸部に断面三角形の突帯がめぐる。116は鉢で外面ナデ、内面ハケ目調整。

SH-034出土遺物（Fig. 81・117～123）

117は断面逆Ｌ字形口縁の甕で外面ハケ目、内面ナデ調整。118は鉢。119、120、122は壺。119は朝顔形に開く素口縁の壺。120は頸部に断面三角形の突帯がめぐる。122は手捏成形の小形壺。121は支脚。123は高坏あるいは器台の脚部で円形の透かしをもつ。外面ヘラミガキ、内面ハケ目調整。

SH-037出土遺物（Fig. 81・124、125）

124は断面くの字形口縁の鉢で、外面ナデ、内面ハケ目調整。125は高坏の坏部遺存部は内外面ともにハケ目、脚との接合部はナデ調整。

SH-039出土遺物（Fig. 81、82・126～128）

126～128はいずれも甕で126、127は断面三角形の口縁の甕で外面ハケ目、内面ナデ調整。128は断面逆Ｌ字形口縁をもち、口縁部下に断面三角形の突帯がめぐる。

SH-040出土遺物（Fig. 82・129～131）

129～130は甕。129は断面三角形口縁、130は断面くの字形口縁をもつ。いずれも外面ハケ目、内面ナデ調整。131は朝顔形に開く素口縁の壺。

SH-202出土遺物（Fig. 82・132～138）

SH-202の出土遺物は図示した古墳時代の土器のほかに弥生式土器も多数出土しているが割愛した。132、133は坏、口縁部ヨコナデ、底部はヘラ削り、内面はナデ調整。134は須恵器甕、頸部に2条の波状櫛目文を施し、胴部には内外面ともに叩き目を残す。136、137は広口壺。138は甑で、外面ハケ目、内面ヘラ削り。

SH-203出土遺物（Fig. 82・139）

139は朝顔形に開く素口縁の壺で口縁端部にヘラ状工具による刻み目が施されている。

SH-204出土遺物（Fig. 82・140、141）

140、141はいずれも断面三角形の口縁をもつもので、140は甕、141は広口壺か。

SH-205出土遺物（Fig. 83・142～153）

142～145、147、148は甕。142～144は断面三角形口縁の甕で、144は口縁端部にヘラ状工具による刻み目が施されている。145は断面くの字形口縁の甕。146は蓋。150は鉢、内外面ともにナデ調整。152、153は壺。152は胴部上位に4条の、153は頸部に断面三角形の突帯がめぐる。

SH-206出土遺物（Fig. 83・154）

154は手捏の小型土器、内外面ともにナデ調整。

SH-208出土遺物（Fig. 83～88・155～190）

155は器台で外面ハケ目、内面ナデ調整、内面裾部には指圧痕を残す。156、157は支脚、156は台形状を呈し、上面は穿孔されており、外面ヘラナデ、内面には指頭圧痕を残す。157は沓形器台で上面は穿孔され角状の突起を持つ。外面ヘラ削り、内面ナデ調整で裾部にハケ目を施す。162、167、175、176は甕。162は土師器の甕で胴部外面下位に縦方向のヘラ削り。167、175、176は口縁がくの字形に開くもの、175は内外面共にハケ目調整。158～161、180、184～189は壺。158は断面くの字形の口縁をもち、外面ハケ目、内面ナデ調整。159～161は袋状口縁の壺で159、160は頸部と胴部下位にそれぞれ断面三角形の突帯が2条づつめぐる。180は広口壺、外面ハケ目、内面ナデ調整。184は台付きの広口壺と考えられ、内面はヘラナデ、外面脚部との接合部にはヘラ削りが施されている、185、187、189は外反する短い口縁下部に断面三角形の突帯がめぐる。185、189は外面ハケ目、内面ナデ調整。187は外面ナデ、内面ハケ目調整。186は須恵器の壺で、胴部は叩き目を残す。163～166、177～179、181～183、190は鉢。163、164、166は大きく開く口縁部下に断面三角形の突帯がめぐる。166は口縁外面に鋸歯状のハケ目文が施されている。181、182は大きく外反する口縁をもつもので181は外面に、182は内面にそれぞれハケ目を残す。183、190は体部の立ち上がりをそのまま口縁としたもので、183は外面が、190は内面が

ハケ目調整。168～174は高坏。173は脚部に円形の透かしを持つ。

SH-209出土遺物（Fig. 88．191～193）

191は断面鋤形口縁の壺で、口縁反部の上下の稜線上にヘラ状工具による刻み目がめぐる。192は小型の無頸壺で内外面共にハケ目調整。193は断面逆L字形口縁の甕で外面はハケ目調整。

SH-210出土遺物（Fig. 88・194）

194は円錐台形を呈す支脚。

SH-211出土遺物（Fig. 89・195～206）

195は手捏成形の碗。196、201は高坏の坏部。197、200、203は甕。197は断面くの字形口縁で外面ハケ目調整。200は内外面共にハケ目調整。203は断面逆L字形口縁をもつ。198、202、204、205は壺。198は丸底の広口壺で口縁内面、頸部外面にハケ目、底部外面は粗いヘラ削り調整。202、204は断面鋤形口縁の壺で、202は口縁端部にヘラ状工具による刻み目がめぐる。205は素口縁の壺。199は鉢で、内外面に暗文が施されている。206は大型の鉢で口縁部が大きく外反しながら開き胴部上位に断面三角形の突帯をもつ。

SH-212出土遺物（Fig. 90・207～215）

207、210、215は壺。207は袋状口縁をもつと考えられ胴部下位に断面三角形の刻み目突帯がめぐる。210は丸底の広口壺で内面ハケ目調整。215は胴部中位に最大径を持つもので胴部外面、底部外面はハケ目調整。208、212は鉢。208は内面にハケ目を残す。212はやや肥厚する口縁上端にヘラ状工具による刻み目が施されている。209は碗で内外面共にナデ調整。211、213は器台。211は器台の裾部と思われるもので内外面共にハケ目調整、裾端部にはヘラ状工具による刻み目がめぐる。

SH-213出土遺物（Fig. 91・216～228）

216～221は碗。217、218、221は底部ヘラ削り、220、221は内面ハケ目調整。219は手捏成形。222、226は口縁がくの字形に開く短頸壺で、222の口縁端部にはヘラ状工具による刻み目が施されている。223～225は甕。223は断面三角形を呈すもので口縁端部にはヘラ状工具による刻み目が施されている。224は甕棺に用いられた大甕の口縁部。225は丸底のもので、内外面共にハケ目調整痕を残す。227は高坏の脚部、228は器台の裾部である。

SH-214出土遺物（Fig. 92、93・229～242）

229、230、237は高坏の坏部。231、234、236、241、242は壺。231は断面鋤形口縁、234は袋状口縁をもつもの。241、242は球形の胴部に大きく開く短い口縁が付くもので、内外面共にハケ目調整。232、233、235、240は甕。235は口縁部内面、胴部内外面ハケ目調整。238は碗で、内面ハケ目調整。239は沓形器台で、上面が傾斜を持ち、一部がつまみ状に突起している。

SH-217出土遺物（Fig. 93・243～252）

243～245は碗で、243は口縁部外面にハケ目、他の部位はナデ調整。244はナデ調整。245は口

縁内面にハケ目、他の部位はナデ調整。246、248、249、252は壺。246、249は広口壺で内外面共にハケ目調整。248は無頸壺で内外面共にナデ調整。252は袋状口縁を持つもので、口縁上部が粘土帯の接合部より剝離しており、屈折部分の外周にはヘラ状工具による刻み目が施され、内外面共にハケ目調整。247は碗形の坏部をもった高坏で、脚部との接合部に近い坏部底部はヘラ削り調整。250は断面くの字形口縁の甕で、内外面共にハケ目調整。251は鉢で半球形の体部にやや開く口縁がつく。外面はハケ目調整されているが、一部に叩き目を残す。

SH-218出土遺物（Fig. 94・253、254）

253は胴部中位に最大径をもつ小型の壺で、内外面共にハケ目調整。254は半球形の鉢で、口唇部は肥厚し平坦面を呈す。口縁部内面にハケ目調整。

SH-219出土遺物（Fig. 94・255～259）

255～257は壺。255は内湾しながら開く短い口縁をもつもので、頸部に断面三角形の突帯が1条巡り、内面ハケ目調整。256は胴部下位の破片で、ヘラ状工具による刻み目をもつ断面三角形の突帯が巡る。内面ハケ目調整。257は球形の胴部をもつ広口壺で内外面共にハケ目調整。258は口縁がやや内湾する碗で、口縁外面にハケ目、底部はヘラ削り調整。259は断面くの字形口縁の甕で、内外面共にハケ目調整。

SH-221出土遺物（Fig. 95・260～270）

260、267、268、270は甕。260は断面逆L字形口縁。267は甕棺用の甕かと思われる大型の甕で、口縁下に断面三角形の突帯がめぐる。268は断面くの字形口縁で、内外面共にハケ目調整。270は甕の胴部上位と思われる破片で、外面にハケ目調整後2条の細い沈線をもつ。261は壺の胴部下位の破片で刻み目をもつ断面三角形の突帯がめぐる。262は碗で口縁内面はハケ目、底部はヘラ削り調整。263～265は高坏。266は壺と思われる丸底の底部で、内外面共にハケ目調整。269は鉢で半球形の体部にやや開く口縁がつく。体部外面はヘラ削り調整。

SH-223出土遺物（Fig. 95・271、272）

271はやや開く直線的な口縁の壺で、内外面共にハケ目調整。272は円錐台形を呈す、中空の支脚。

SK-226出土遺物（Fig. 96・273～275）

273は口縁がくの字形に開く広口壺で、口唇部は肥厚し玉縁状を呈す。274は蓋。275は甕の底部で外面ハケ目調整。

SH-230出土遺物（Fig. 96・277～279）

277は上部が袋状を呈す支脚。278は台坏甕の脚部。279は口縁がくの字形に短く開く広口壺で内面に圧痕を残し、外面は調整不明。

SH-231出土遺物（Fig. 96、97・280～284）

280は碗で内面ハケ目調整。281はくの字形口縁の台坏甕で外面はハケ目調整、胴部上位に煤

が付着している。282は浅い体部に外反する口縁を持つ高坏で、屈曲部に明瞭な稜をもつ。283は甕の底部。284は逆Ｌ字形口縁の甕。

SH-232出土遺物（Fig. 97・285～288）

285は断面逆Ｌ字形口縁甕で、胴部上位に断面三角形の突帯がめぐる。286、287は断面鋤形口縁の高坏で、287は同一個体と考えられる長い脚部も出土している。288は朝顔形に開く素口縁の壺。

SH-234出土遺物（Fig. 97・289～291）

289、290は甕。289は断面逆Ｌ字形口縁で、胴部上位に１条の沈線がめぐる。290は断面三角形口縁で胴部上位に断面三角形の突帯がめぐり、外面ハケ目調整。291は外反する短い口縁を持つ広口壺、調整不明。

SK-235出土遺物（Fig. 98・292、293）

292は断面逆Ｌ字形口縁の甕で、胴部上位に断面三角形の突帯が巡り、外面ハケ目、内面ナデ調整。293は素口縁の壺。

SK-239出土遺物（Fig. 98・294）

294は器台あるいは支脚と思われる土製品で、調整不明。

SH-240出土遺物（Fig. 98・295）

295は器台で裾部を欠く。外面および受け部内面はハケ目、脚部内面はナデ調整で、受け部端にヘラ状工具による刻み目が施されている。

SH-244出土遺物（Fig. 98・296、297）

296、297は丸底の壺で、296は口縁部ナデ、胴部はハケ目調整。297は口縁部内面がハケ目、胴部外面はヘラミガキ調整。

SK-245出土遺物（Fig. 98・298）

298は断面くの字形口縁の甕で、内外面共にハケ目調整。

SK-248出土遺物（Fig. 98・299）

299は断面逆Ｌ字形口縁の甕で、胴部上位に断面三角形の突帯が巡る。胴部外面はハケ目、内面はナデ調整。

SK-250出土遺物（Fig. 98・300）

300は壺で、朝顔形に開く口縁の先端は小さく折り返され袋状を呈す。内外面共にていねいなナデ調整。

SK-251出土遺物（Fig. 98・301）

301はくの字形に開く口縁の壺で、内外面共にナデ調整。

SH-253出土遺物（Fig. 99・302、303）

302は腰が張った体部とやや外反しながら立つ高い口縁の高坏で、口縁部はナデ、体部は内外

面共にハケ目調整。303は丸底の広口壺で、内面はナデ、外面に叩き目を残す。

SH-263出土遺物（Fig. 99・304）

304は甕の底部で、外面はナデ、内面はヘラ状工具によるナデ調整。

SH-264出土遺物（Fig. 99・305）

305は口縁がくの字形に開く広口壺で、内外面共にハケ目調整。

SH-265出土遺物（Fig. 99・306～308）

306は断面逆L字形口縁の甕で胴部上位に断面三角形の突帯がめぐる。外面ハケ目、内面ナデ調整。307、308は手捏成形の小型土器でナデ調整。

SH-266出土遺物（Fig. 99・309～311）

309は台付きの壺と思われるもので、内外面共にハケ目調整。310、311は高坏。310はヘラミガキによる暗文が施されている。

SK-271出土遺物（Fig. 99・312）

312はタマネギを倒置したような胴部に内径しながら立ち上がる頸部と外反する口縁部を持った壺で、内外面共にナデ調整。

SH-282出土遺物（Fig. 99・313、314）

313も312と同様の壺で、外面ハケ目、内面ナデ調整。314は断面が不整方形を呈す柱状の支脚で、上面に凹部をもつ。ナデ調整。

SH-286出土遺物（Fig. 100・315～317）

315は如意形口縁の先端にヘラ状工具による刻み目がめぐる甕で、内外面共にナデ調整、外面底部付近には粘土を絞ったような痕跡を残す。316は碗で口縁内面は粗いハケ目、その他はナデ調整。317は断面くの字形口縁の甕で、口縁部ナデ、胴部は内外面共にハケ目調整。

SK-289出土遺物（Fig. 100、101・318～325）

318は断面三角形口縁の鉢で、内外面共にナデ調整。319は断面逆L字形口縁の広口壺で胴部上位に断面三角形の突帯がめぐる。320は台付き甕の脚部と考えられるもので外面はハケ目、内面はナデ調整。321、322は肩が張る胴部に直立する頸部をもつ壺で内外面共にナデ調整、同一個体の可能性が強い。323は断面逆L字形口縁の甕で、胴部上位に断面三角形の突帯がめぐる。外面一部にハケ目を残すが、他の部位は調整不明。324は肩が張る胴部に直立する頸部をもつ壺で胴部上位に断面三角形の突帯が2条めぐる。内外面共にナデ調整。325は上下がやや広がった円柱状の支脚で上下両面は受け状の窪みをもつ。ナデ調整。

SK-292出土遺物（Fig. 101・326）

326は坏。口縁部及び内面はナデ、底部外面はヘラミガキ調整。見込みにもヘラの痕を残し、底部に「キ」の字状のヘラ描きが焼成前に施されている。

SH-293出土遺物（Fig. 101・327）

327は外反しながら開く口縁をもつ壺で頸部と胴部の境界に断面三角形の低い突帯がめぐる。内外面共にナデ調整。

SK-296出土遺物（Fig. 101・328）

328はやや丸底の壺の底部と考えられる破片で、底面に十文字に組んだ2本の棒状工具の圧痕を残す。

SH-304出土遺物（Fig. 101・329）

329は断面三角形口縁の甕で内外面共にナデ調整。

SK-309出土遺物（Fig. 101・330）

330は断面逆L字形口縁の鉢で、口縁下に断面三角形の突帯がめぐる。内外面共にナデ調整。

SX-310出土遺物（Fig. 102・331）

331は笠状を呈す蓋で、つまみ上面は窪みをもつ。内外面共にナデ調整。

SH-327出土遺物（Fig. 102・332）

332はタマネギ状の胴部に直立する口縁をもつ広口壺で、口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面は調整不明。口縁と胴部の境界にヘラ状工具の圧痕を残す。

SK-336出土遺物（Fig. 102・333、334）

333、334はいずれも断面三角形口縁をもつ甕と鉢。333は胴部上位に一条の沈線が巡り、外面ハケ目、内面ナデ調整。底部は焼成後穿孔され、甑として使用されている。334は内外面共にナデ調整。

SK-346出土遺物（Fig. 102・335）

335は断面三角形の台付き甕で、内外面共にナデ調整。

SK-356出土遺物（Fig. 102・336、337）

336、337はいずれも支脚で、336は先端がつぶれた砲弾形を呈す。337は上面に窪みをもち、底面は円形、断面は方形を呈す。

SH-402出土遺物（Fig. 102、103・338～345）

338、339、342～345は壺。338は断面くの字形口縁の丸底壺で、外面ハケ目、内面ナデ調整。339も断面くの字形口縁の壺で、内外面と底面はハケ目調整。342はタマネギ状の胴部にやや外反しながら立つ口縁をもつ。内外面共にハケ目調整の痕跡を残し、胴部下位が直径約4cmの不正円形にうち欠かれている。343は断面くの字形口縁の壺で、器面があれており調整不明。345は袋状口縁の壺で頸部、胴部中位にそれぞれ断面三角形の突帯がめぐり、後者にはヘラ状工具による刻み目が施されている。内外面共にハケ目調整。340は断面くの字形口縁の甕で、内外面共にハケ目調整。341は甑で、砲弾形の器形を呈し、底部には直径約1.5mmの穴が焼成前に穿孔され、内面に粗いハケ目調整の痕跡を残す。344は器台で受け部は内側に小く折り返され袋状を

呈す。外面ハケ目、内面ナデ調整。

土弾（PL. 17・1～5）

いずれも素焼きの土製品で側面観楕円形、断面円形を呈す。それぞれ1はSK-014、2はSH-209、3はSH-212、4はSH-214、5はSH-218から出土している。（原田）

石器・石製品・鉄製品（PL. 17～PL. 21）

今回の調査では土器や土製品のほかに石器・石製品・鉄製品も出土している。ここでは代表的なものを報告する。なお写真図版の縮尺はおおむねPL. 17が2/3、PL. 18～21は1/2である。また本文中の遺物番号と写真番号は一致する。

石鏃（PL. 17・6～8）

1はSH-303出土、サヌカイト製の凹基式で側辺は鋸歯状に細かい刃が作りだされ、基部に近い部位二カ所に矢柄に装着するための抉りをもつ。2はSH-014出土、サヌカイト製の凹基式、側辺は直線的で二等辺三角形を呈す。3はSH-126出土、サヌカイト製の柳葉形、側辺は湾曲し基部に抉りをもつ。

石剣（PL. 17・9）

SH-033出土、泥岩製のもので、断面菱形を呈す幅2.9cmの剣身部分が3.7cmが遺存している。

片刃石斧（PL. 17・10～15）

10～14は偏平片刃石斧、15は抉り入り柱状片刃石斧で、9は側面が砥石として使用されている。石材は12が頁岩、15が砂岩、他は粘板岩が使用されている。それぞれ10はSH-013、11はSX-310、12はSH-327、13はSH-402、14はSH-280、15はSH-005から出土している。

太型蛤刃石斧（PL. 18・16～19）

いずれも玄武岩製でそれぞれ16はSH-327、17はSH-289、18はSH-034、19はSH-014から出土している。

磨製石斧（PL. 18・20）

花崗岩質の石材を使用したもので、SH-329から出土した。縄文期のものか。

石包丁（PL. 19・21～31）

石包丁は図示したものを含めた18点が出土した。側辺が張った矩形を呈する31を除き、外湾刃半月形を呈す。使用されている石材は、23の変成岩以外は体積岩が使用されており、21、22、28、30は砂岩質、24、25、30は泥岩質、26、27、31は頁岩質である。出土遺構はそれぞれ、21はSK-001、22はSH-034、23はSH-208、24はSH-219、25はSH-231、26はSH-222、27はSH-231、28はSH-253、29はSH-222、30はSH-329、31はSK-369である。

砥石（PL. 20・32～39）

出土した砥石はすべて堆積岩を使用し、石質の疎密で荒砥・中砥・仕上げ用とされている。32～35は砂岩質、36～39は泥岩質である。35の写真下方の側面は全体が使用されているものの、中央部に「矢柄研磨器」様の沈線状の溝をもつ。36は写真下方に石斧の刃部状の加工が見られ転用された可能性もある。出土遺構と使用面数は、それぞれ32はSK-014・3面、33はSH-211・5面、34はSH-222・4面、35はSK-268・5面、36はSH-216・4面、37はSH-216・2面、38はSH-319・4面、39はSH-402・4面である。

鉄製品（PL. 21・40～46）

40～43は鋤先あるいは鍬先と思われる鉄製品で、40、41は側辺を袋状に折り返すことによって柄との装着部としている。45は凹基式の鉄鏃で錆がひどく断面形態は不明、長さ2.6cm、幅1.5cm。43、44、46は用途不明の鉄片で、43、44は偏平な鉄片、46は直径約4㎜、断面円形の鉄片で鉄鏃などの茎かと思われる。（原田）

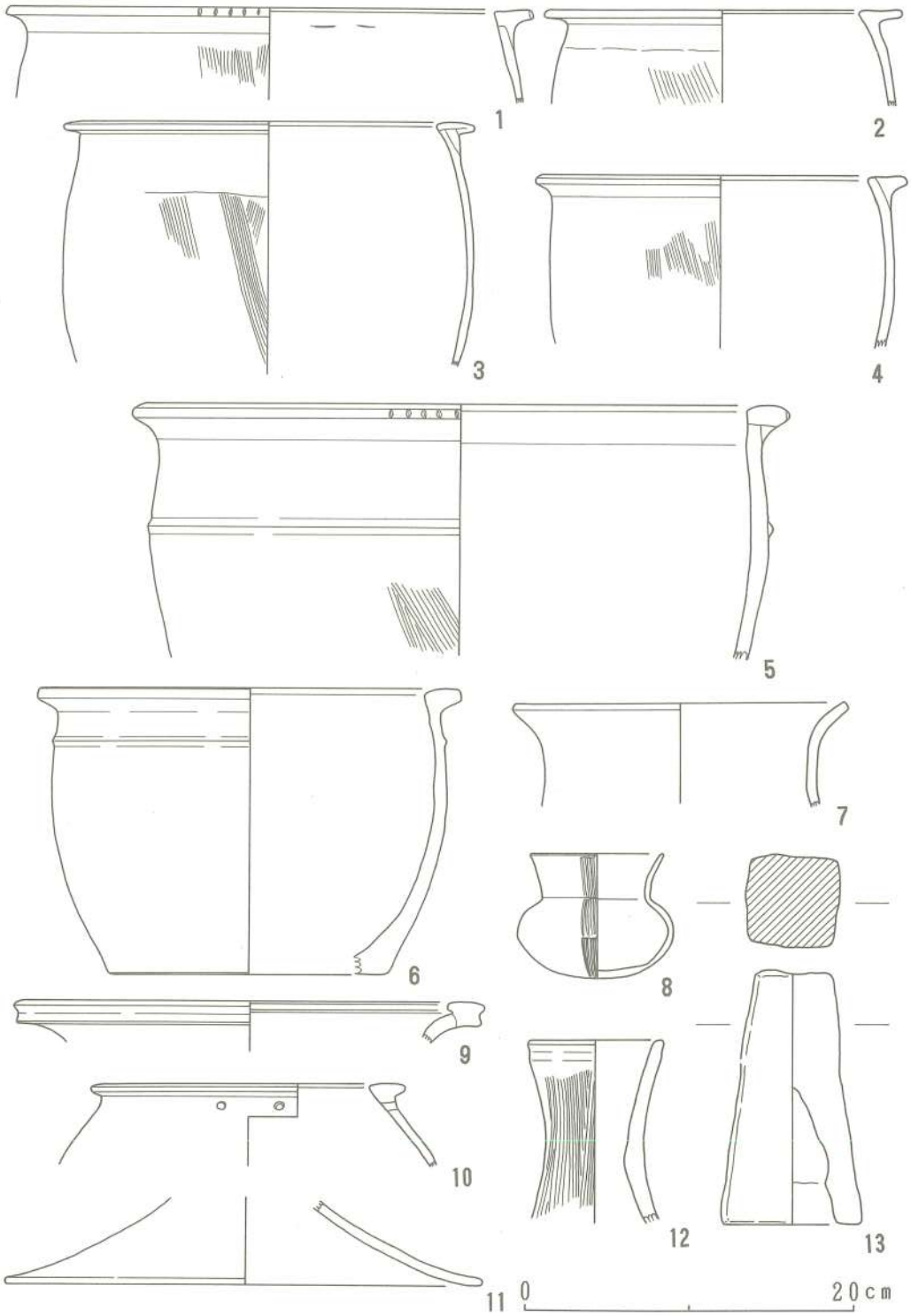


Fig. 74　出土遺物実測図(1)　SK001(1～13)

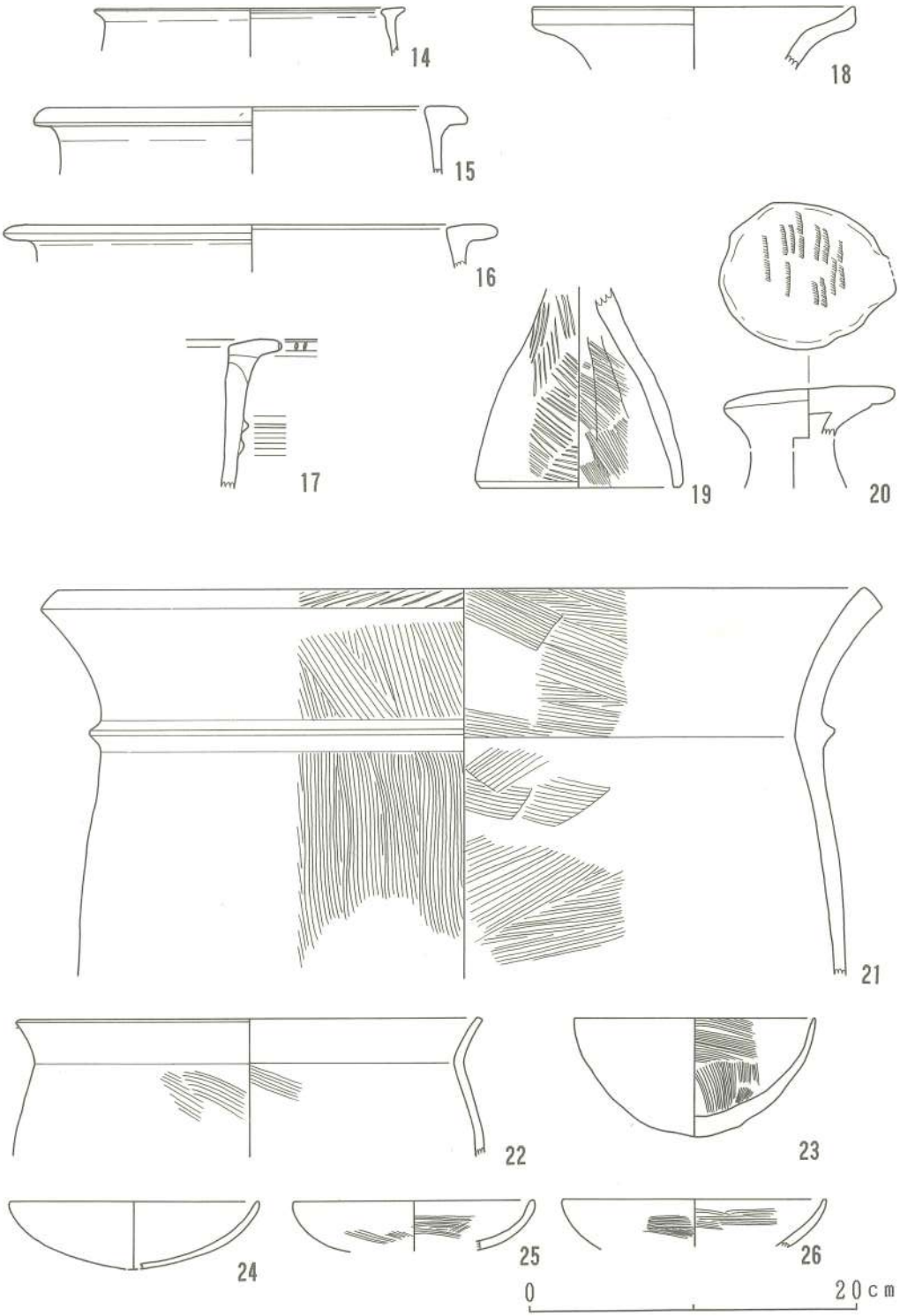


Fig. 75　出土遺物実測図(2)　SH003(14～26)

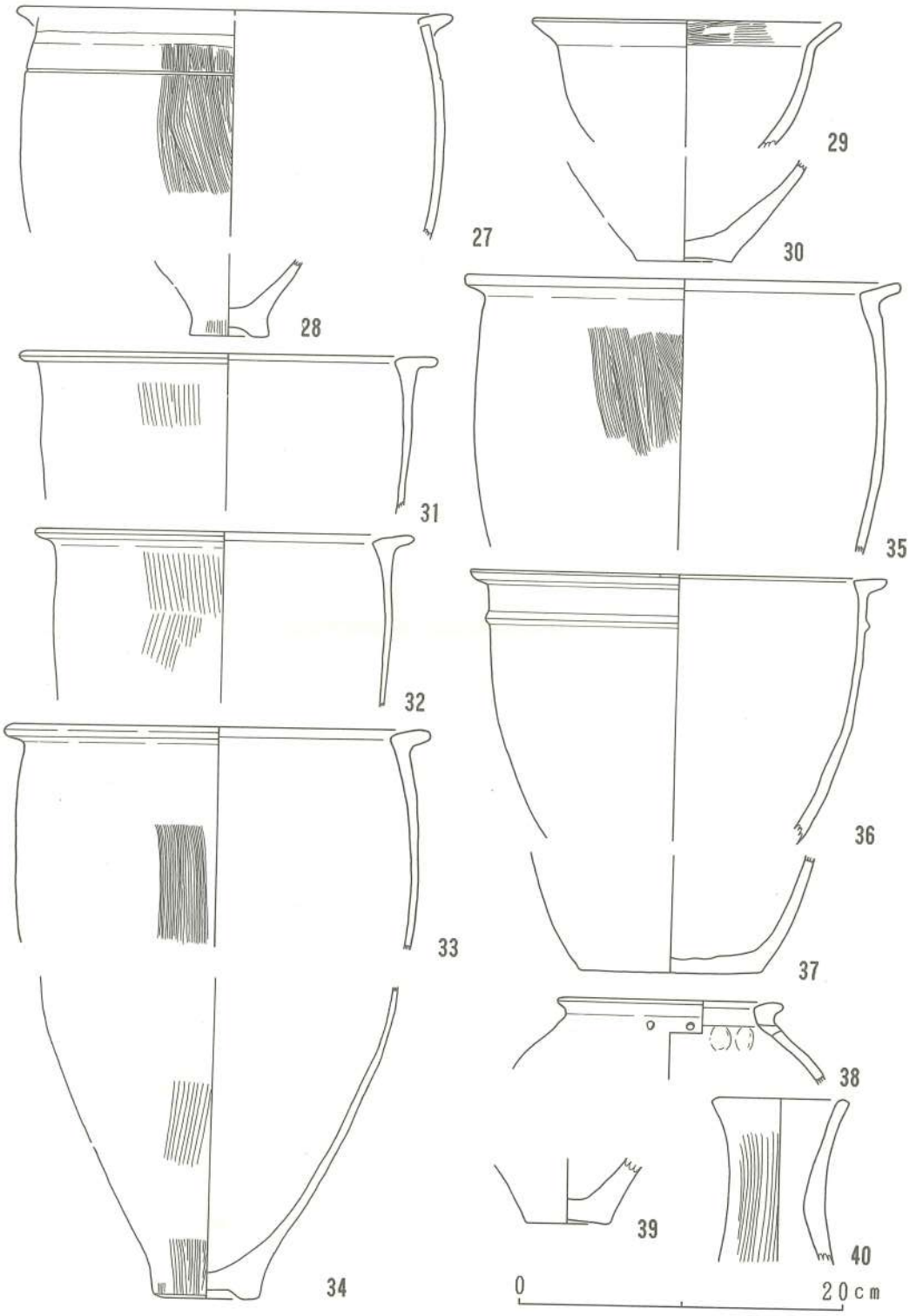


Fig. 76　出土遺物実測図(3)　SH004(27～29)・SH005(30)・SK006(31～40)

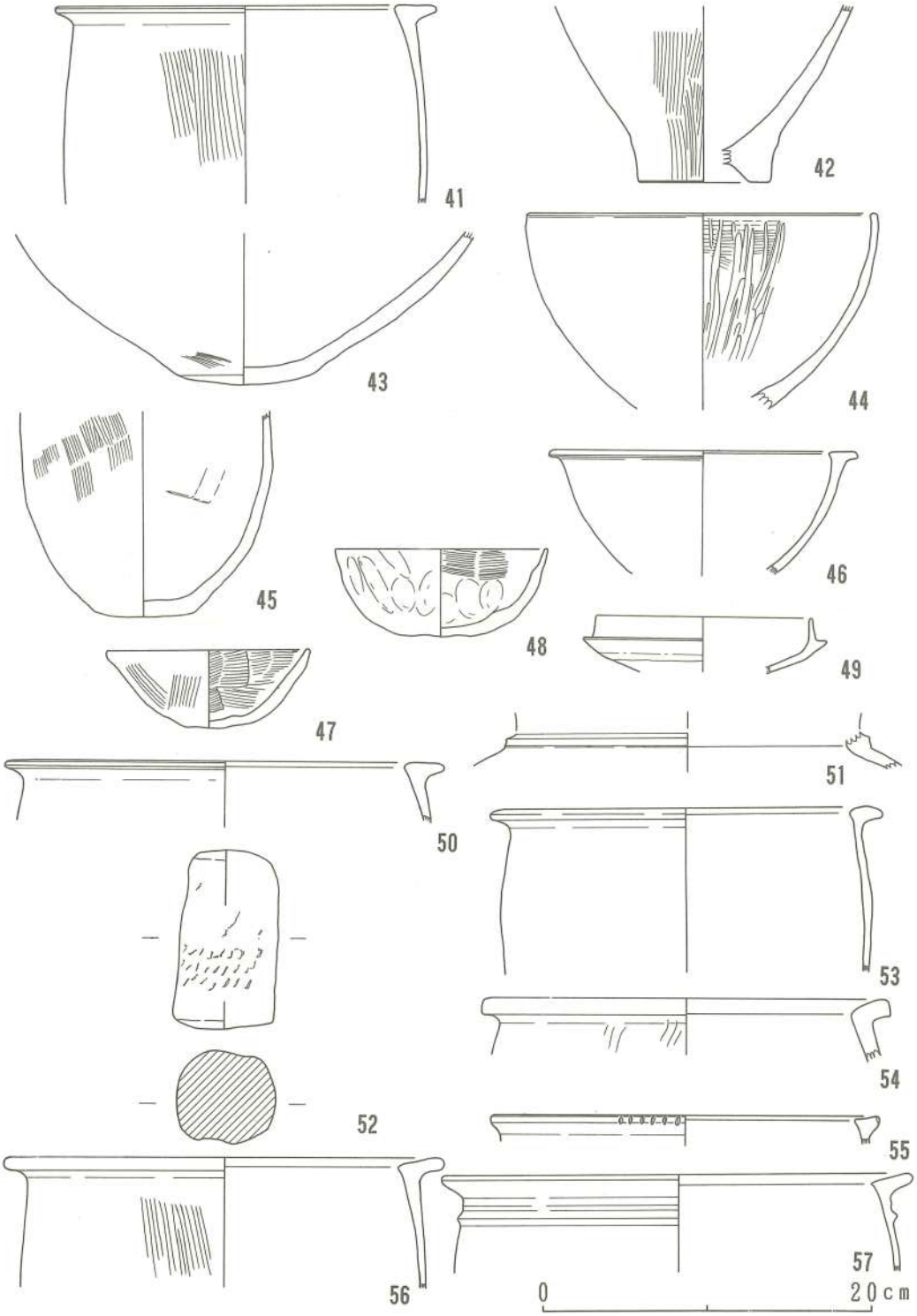


Fig. 77　出土遺物実測図(4)　SH007(41～49)・SH009(50、51)・SK010(52)・SH012(53～57)

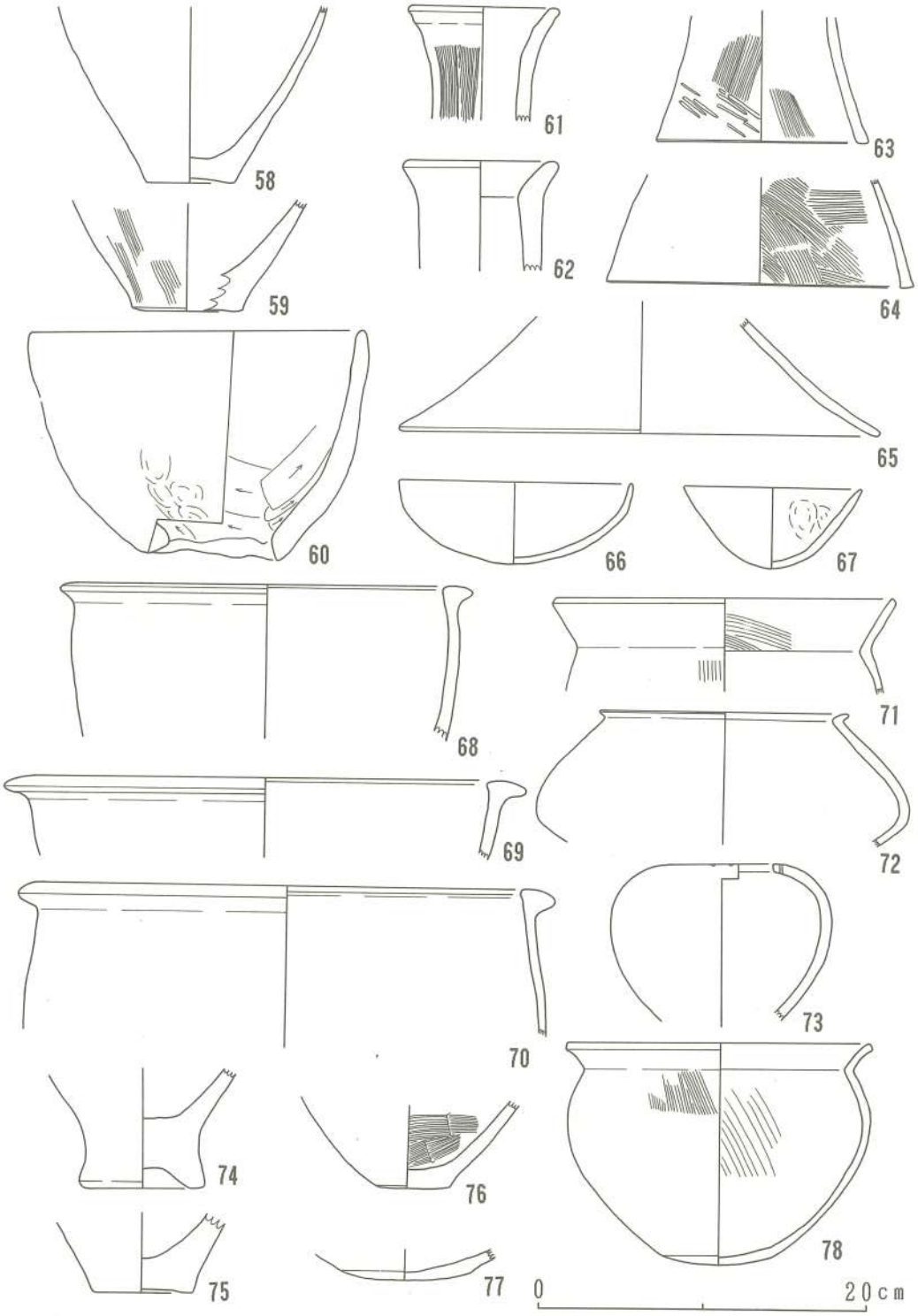


Fig. 78　出土遺物実測図(5)　SH012(58～67)・SH013(68～78)

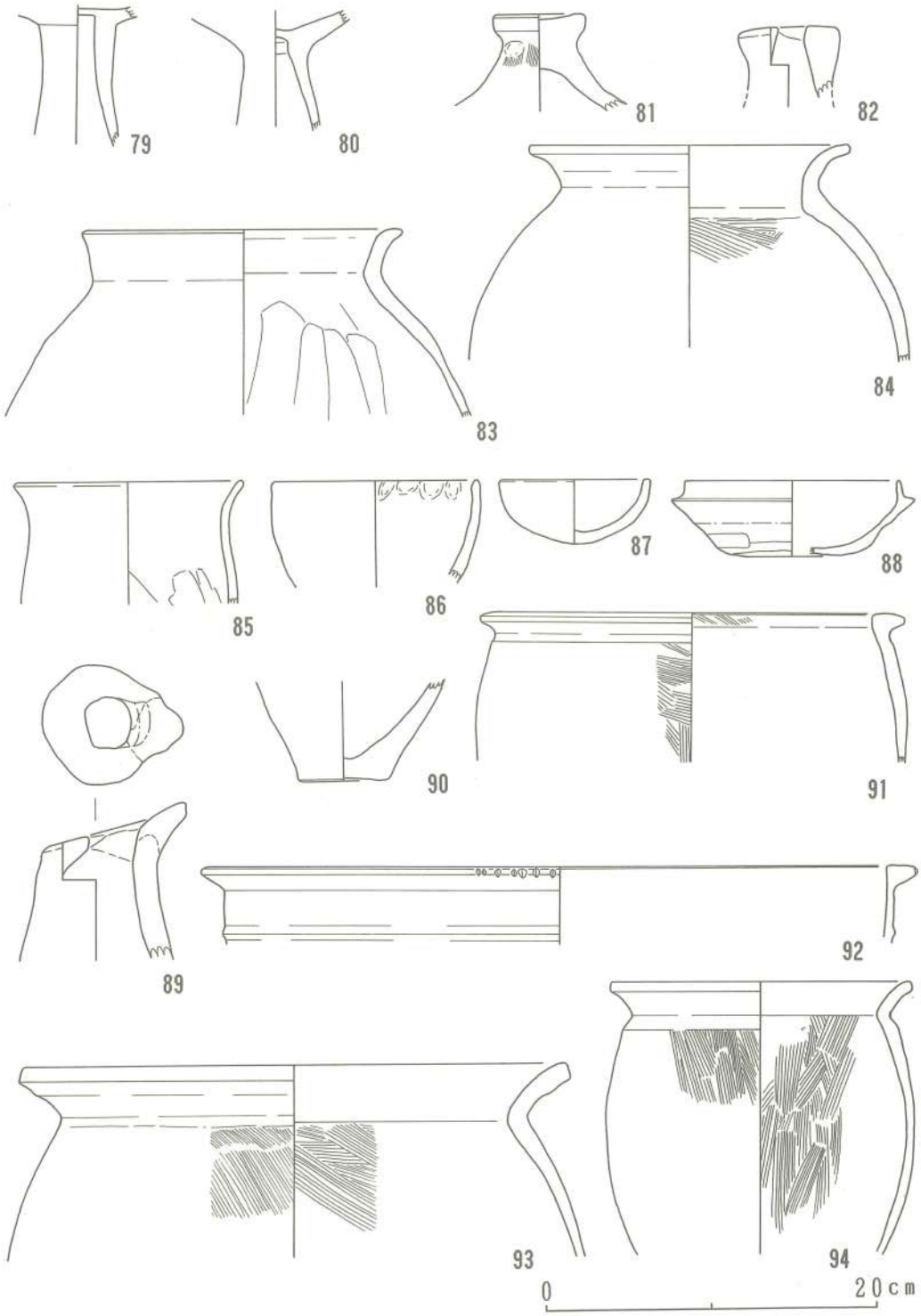


Fig. 79　出土遺物実測図(6)　SH013(79～88)・SH017(89、90)・SH023(91～94)

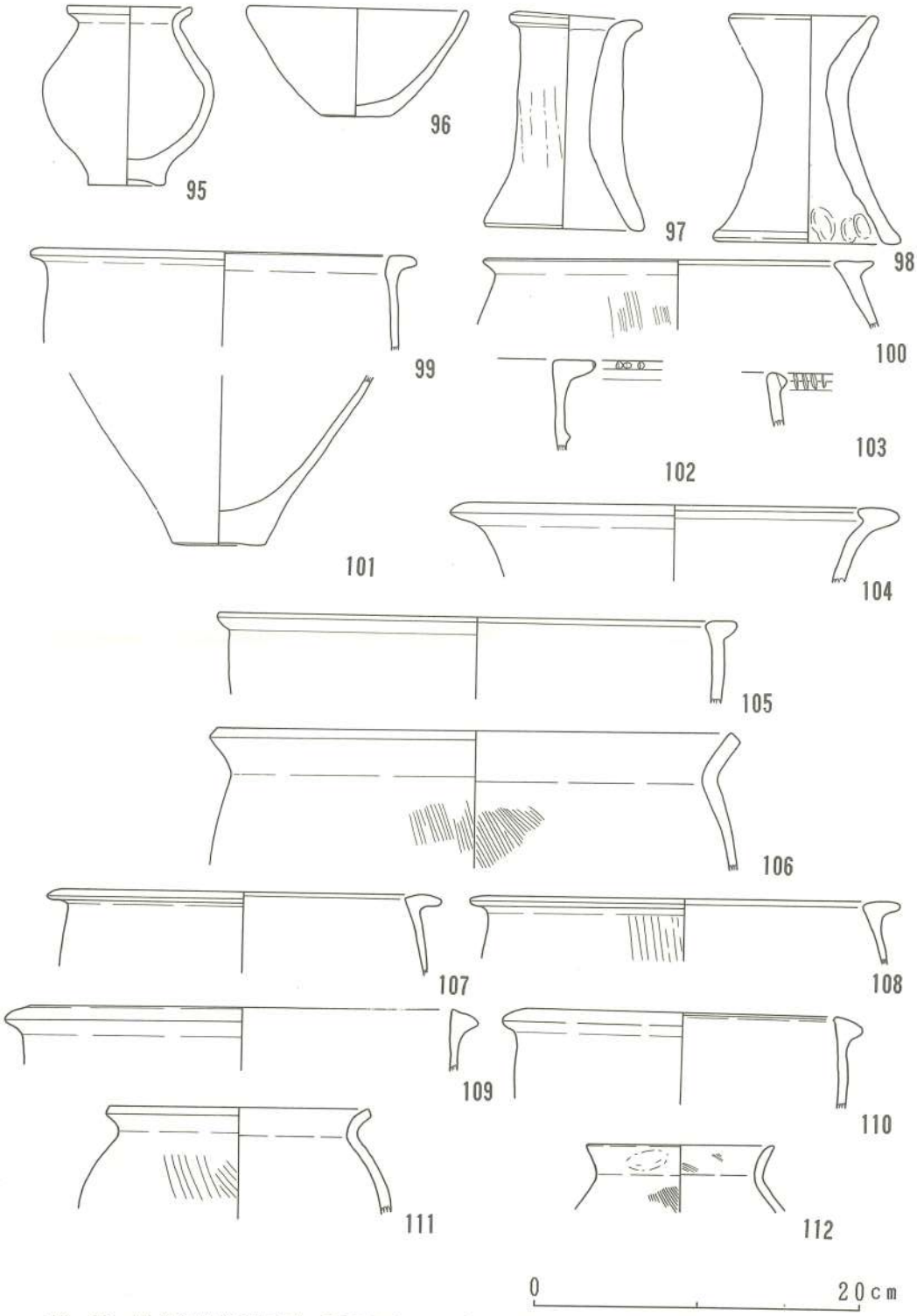


Fig. 80　出土遺物実測図(7)　SH023(95～98)・SK028(99～104)・SK029(105、106)・SK031(107、108)・SH033(109～112)

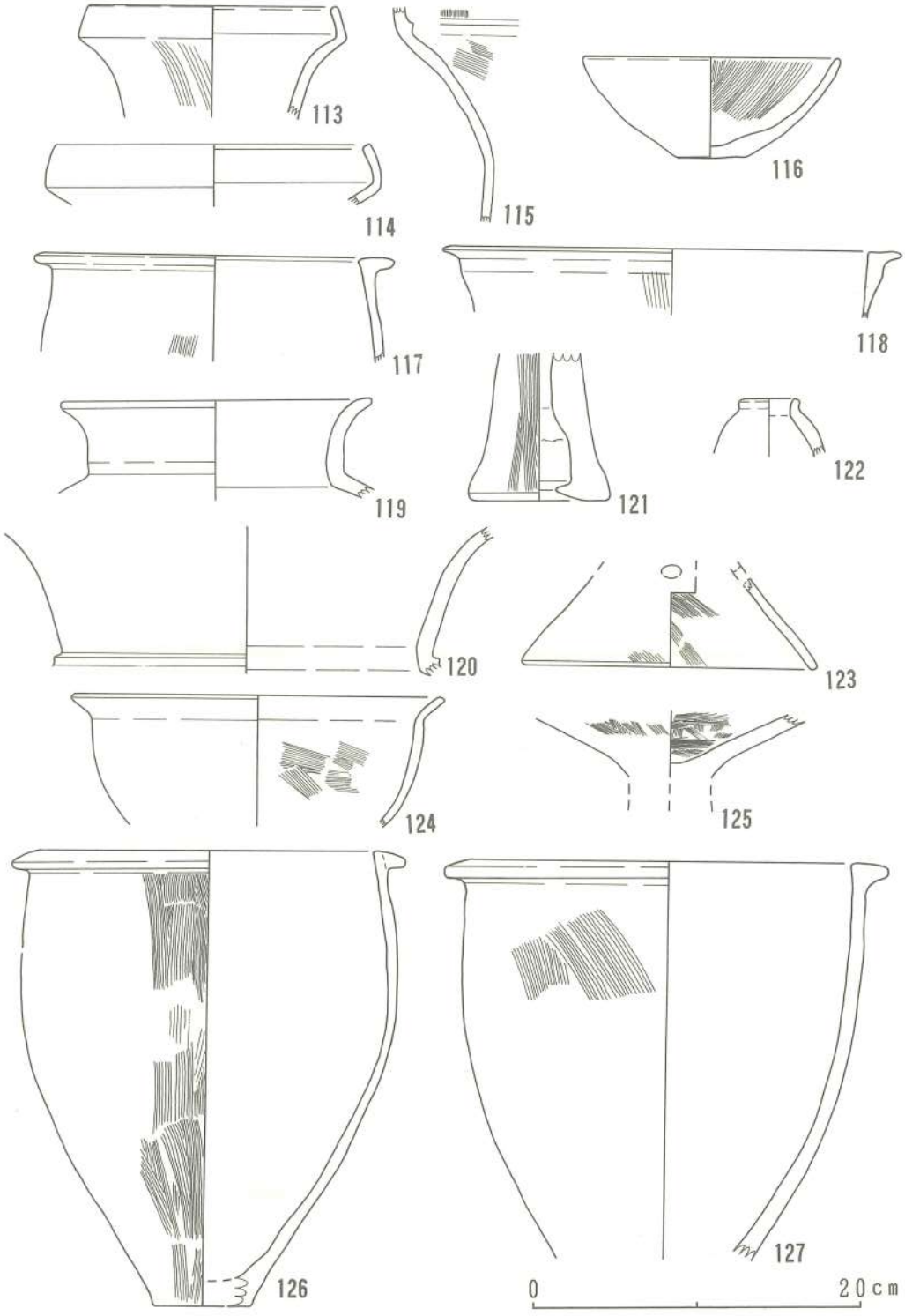


Fig. 81　出土遺物実測図(8)　SH033(113-116)・SH034(117～123)・SH037(124、125)・SH039(126、127)

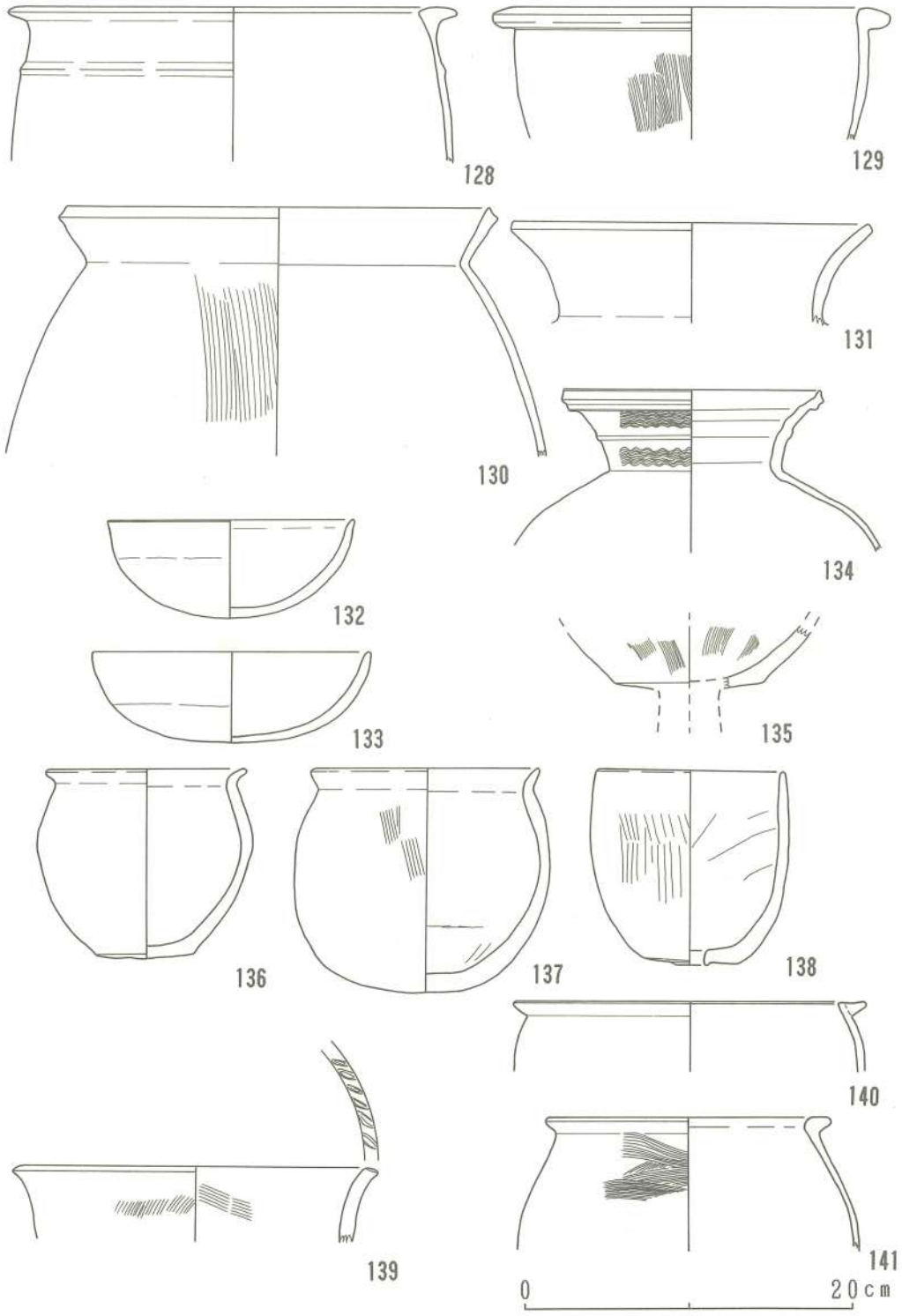


Fig. 82　出土遺物実測図(9)　SH039(128)・SH040(129～131)・SH202(132～138)・SH203(139)・SH204(140、141)

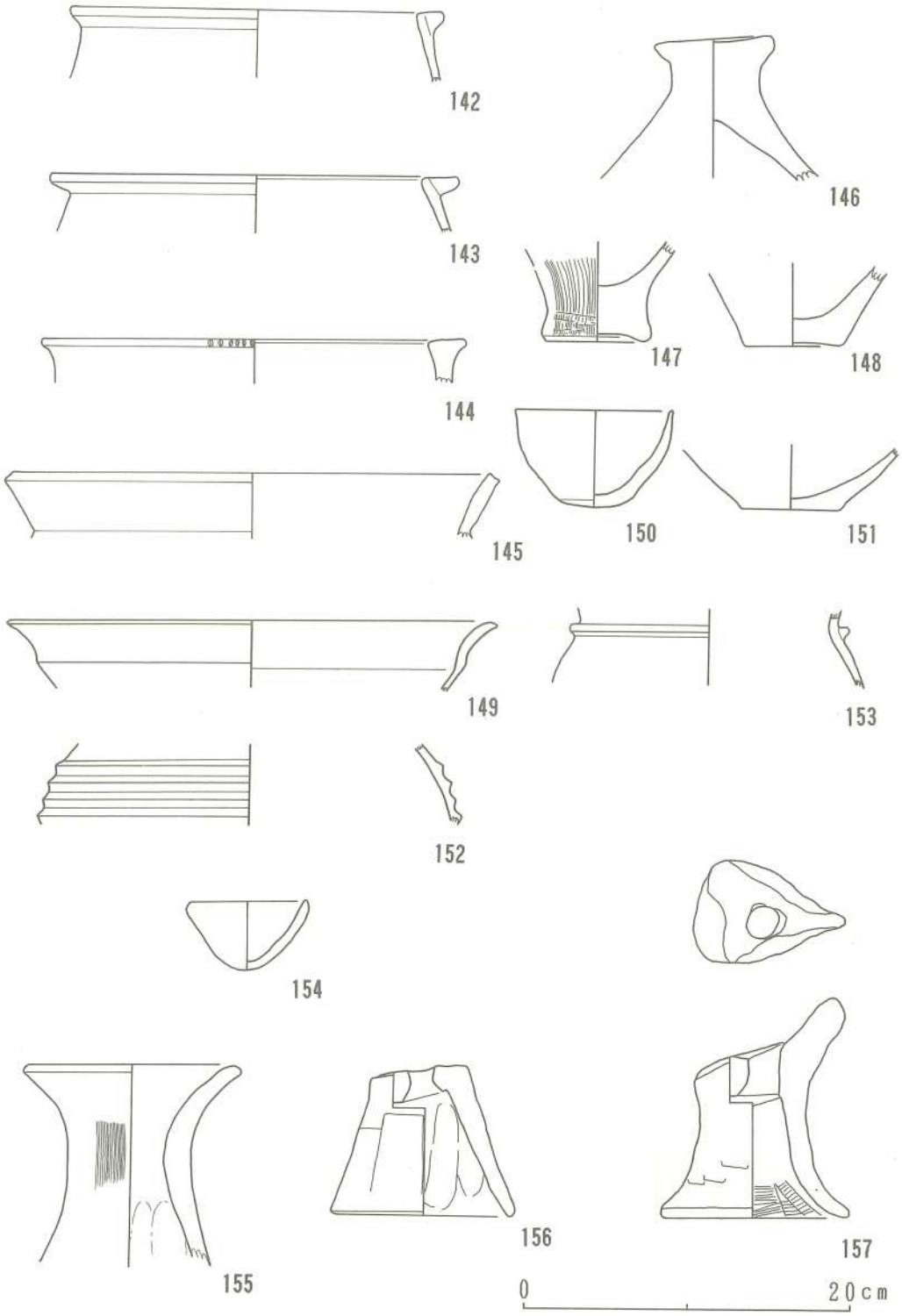


Fig. 83　出土遺物実測図(10)　SH205(142～153)・SH206(154)・SH208(155～157)

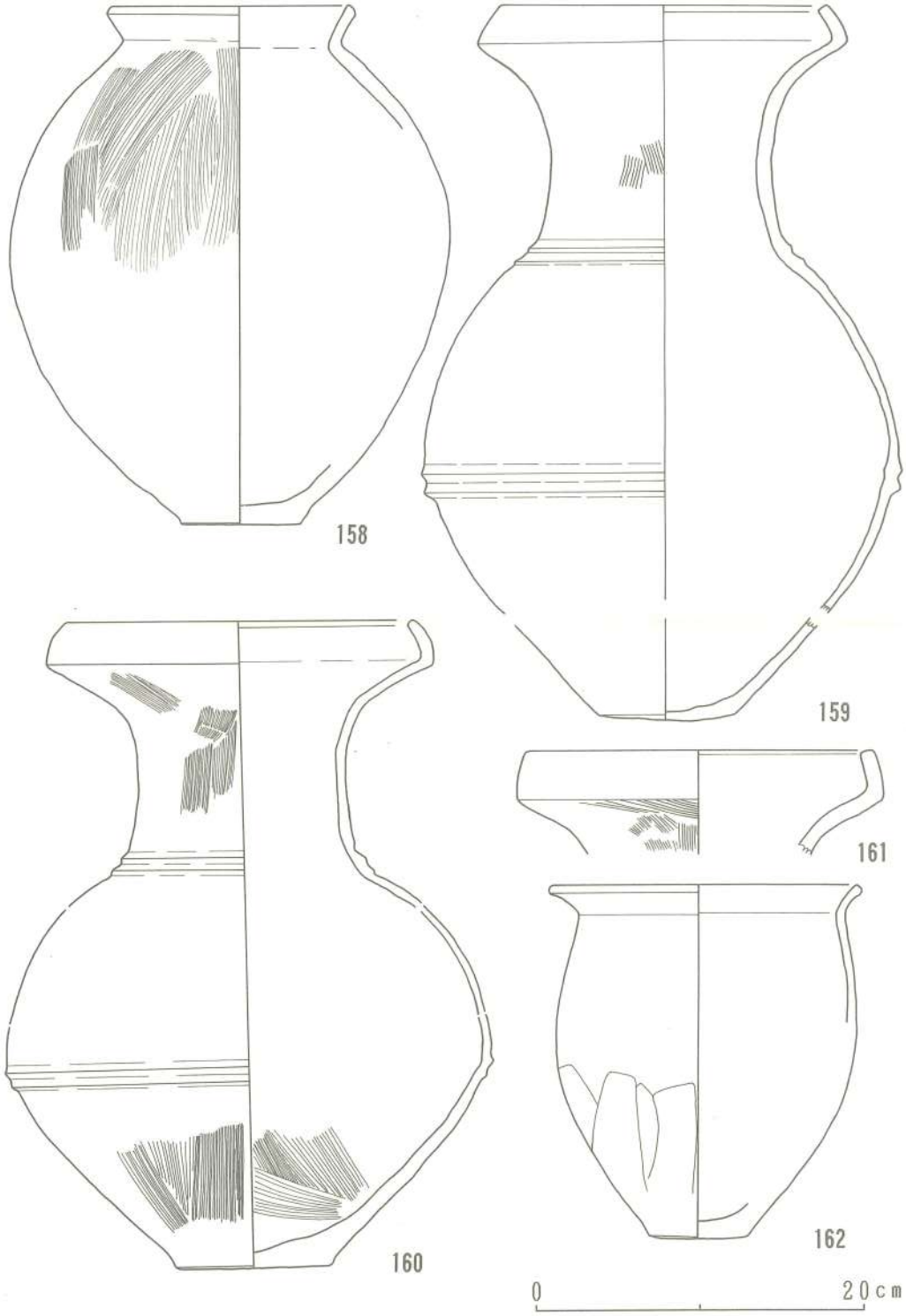


Fig. 84　出土遺物実測図(11)　SH208(158～162)

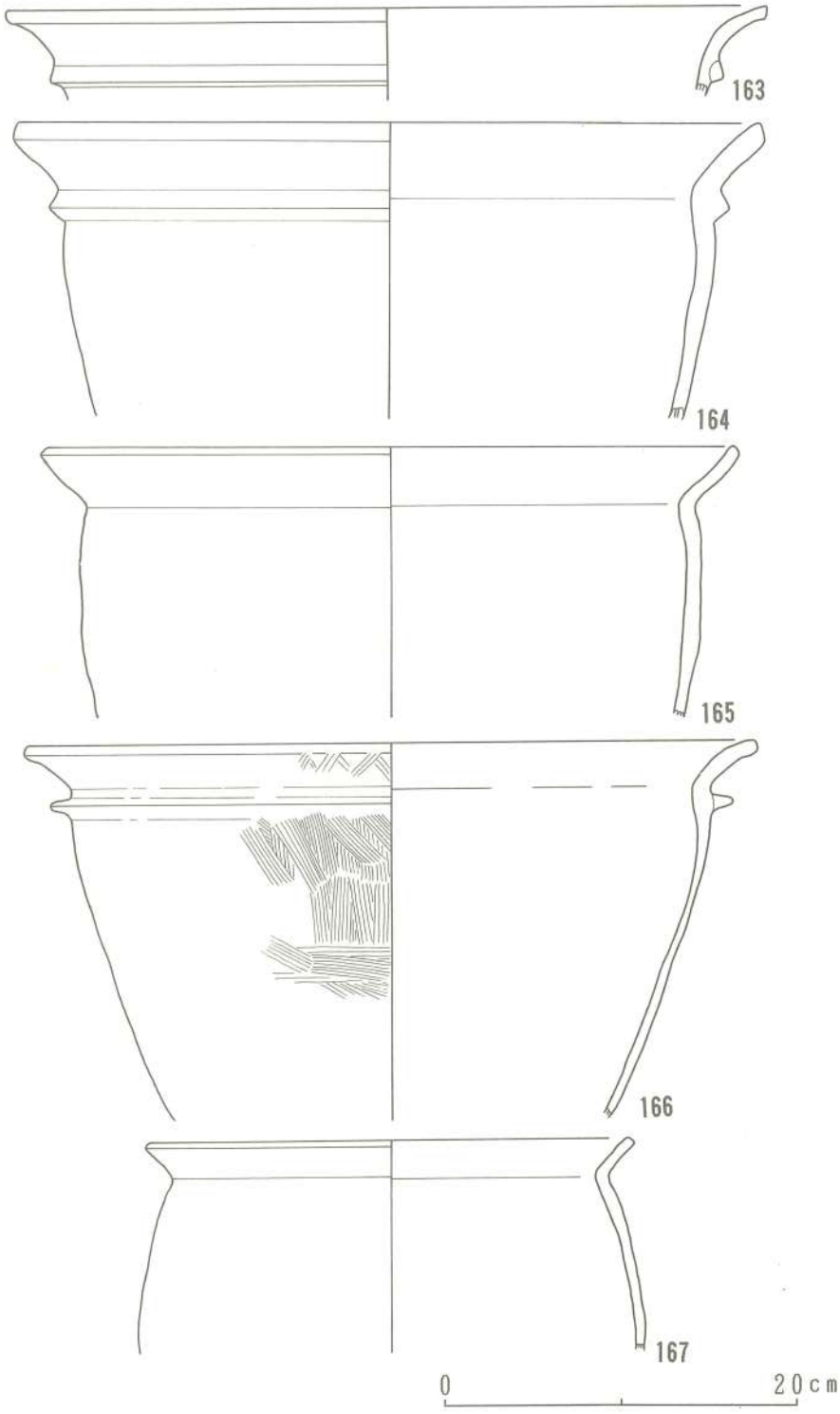


Fig. 85　出土遺物実測図(12)　SH208(163～167)

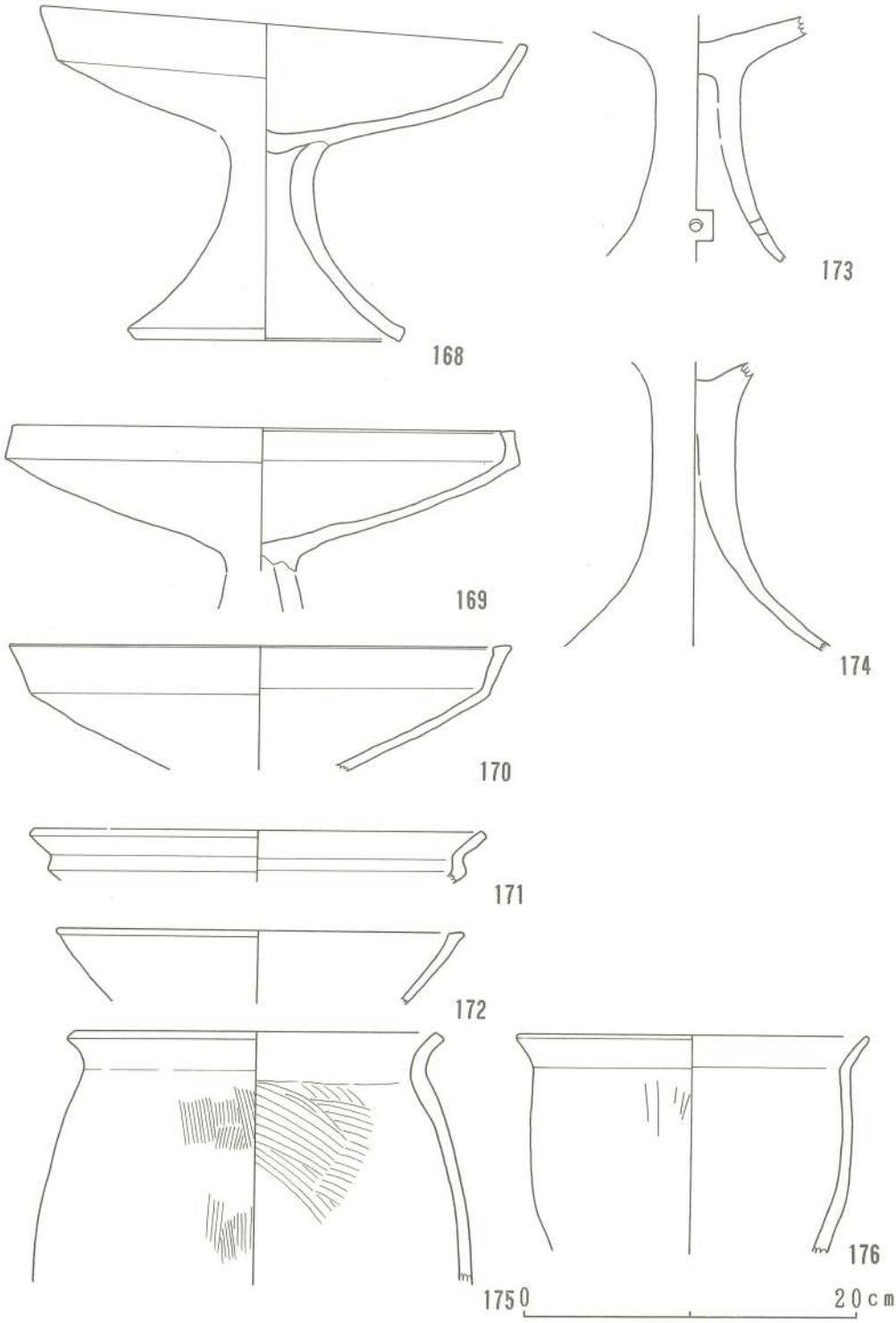


Fig. 86　出土遺物実測図(13)　SH208(168～176)

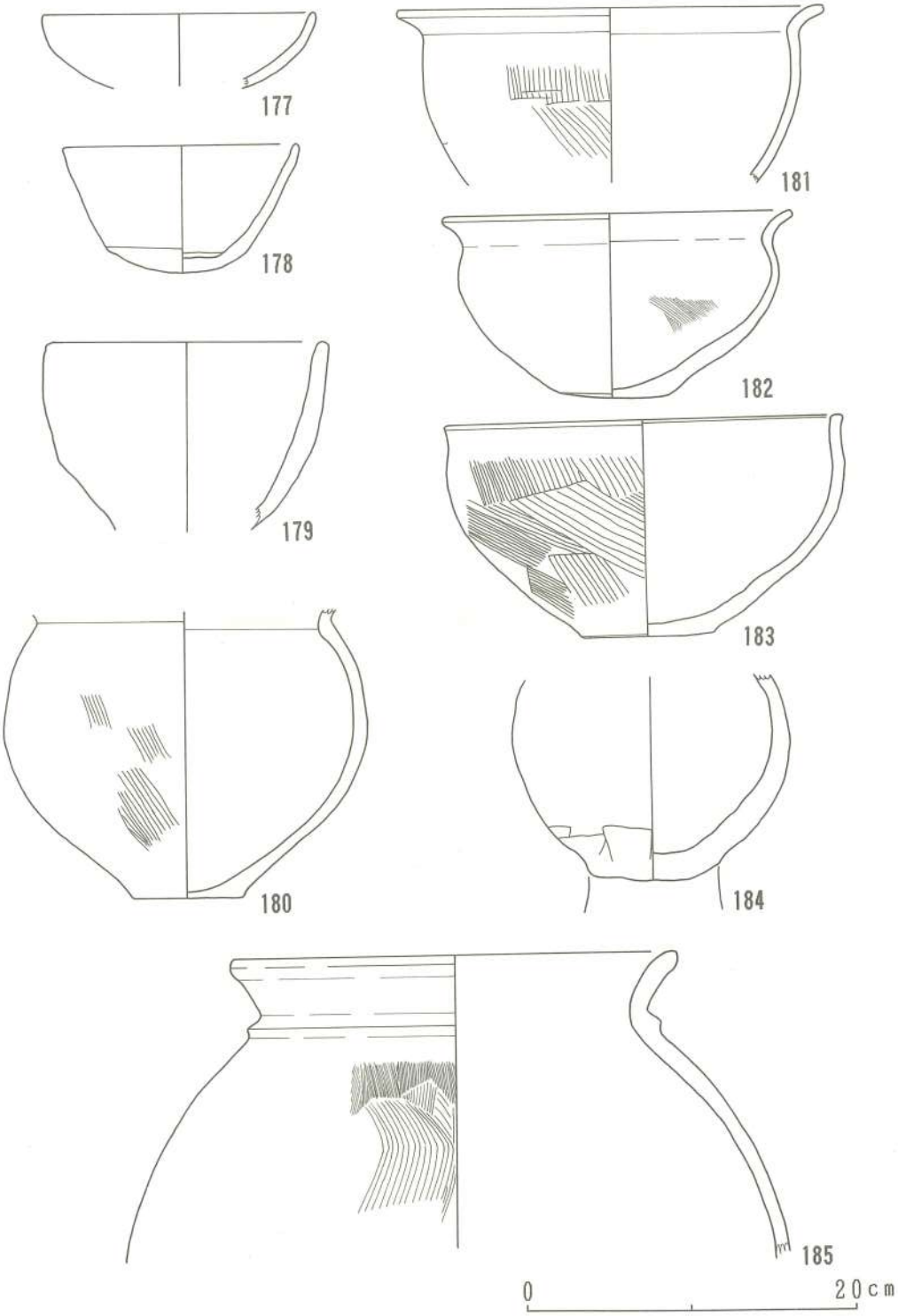


Fig. 87　出土遺物実測図(14)　SH208(177～185)

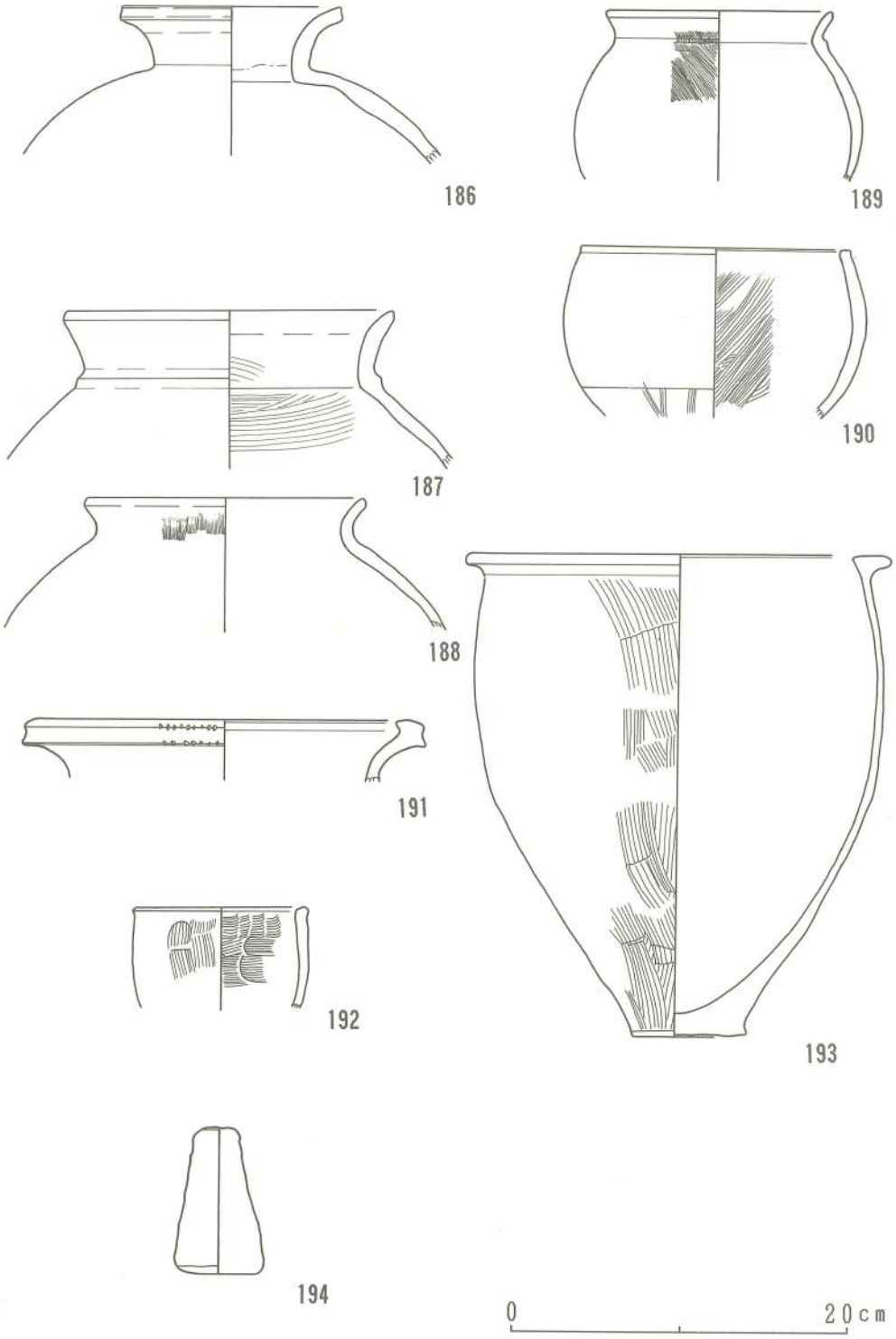


Fig. 88　出土遺物実測図(15)　SH208(186～190)・SH209(191～193)・SH210(194)

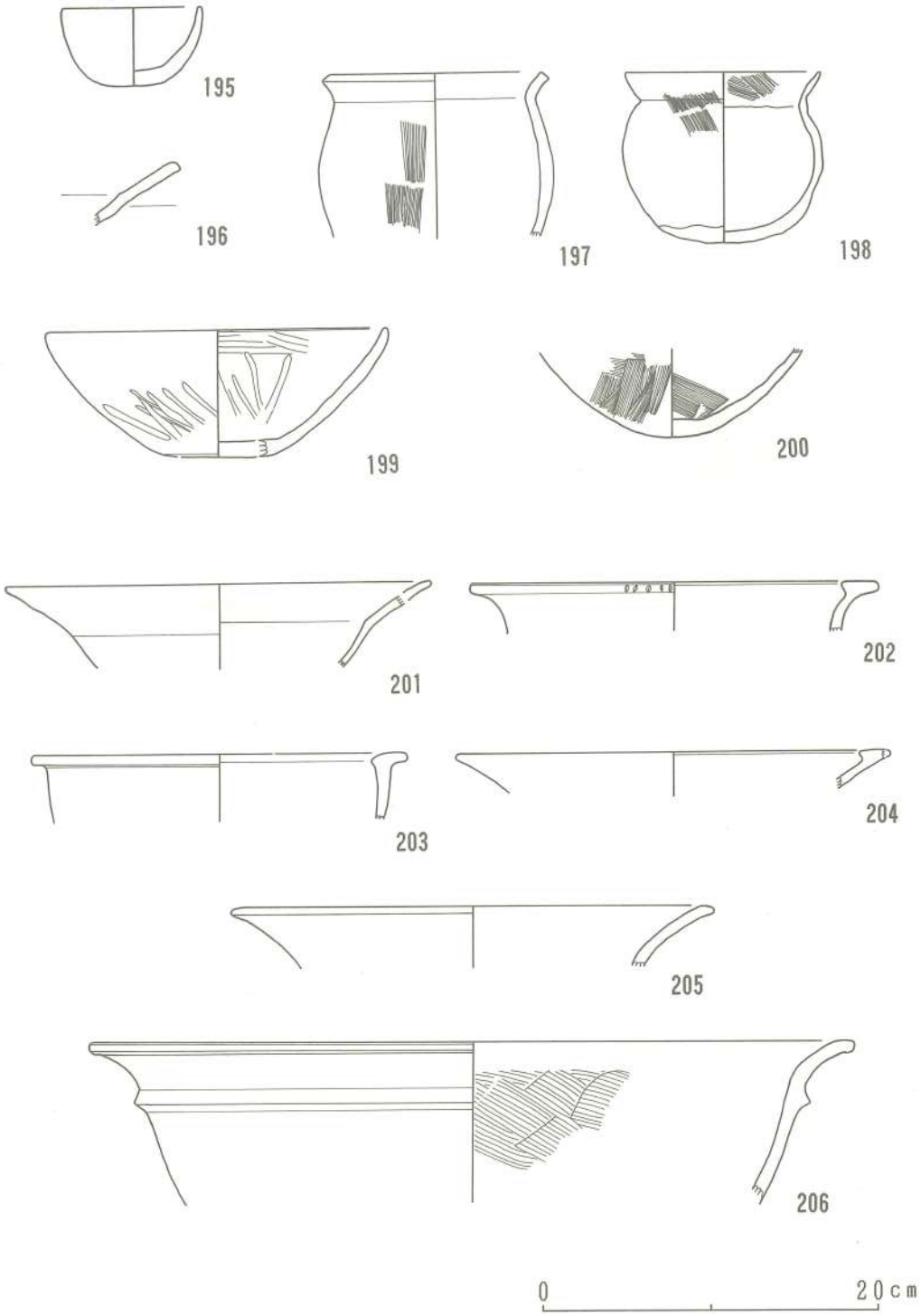


Fig. 89　出土遺物実測図(16)　SH211(195～206)

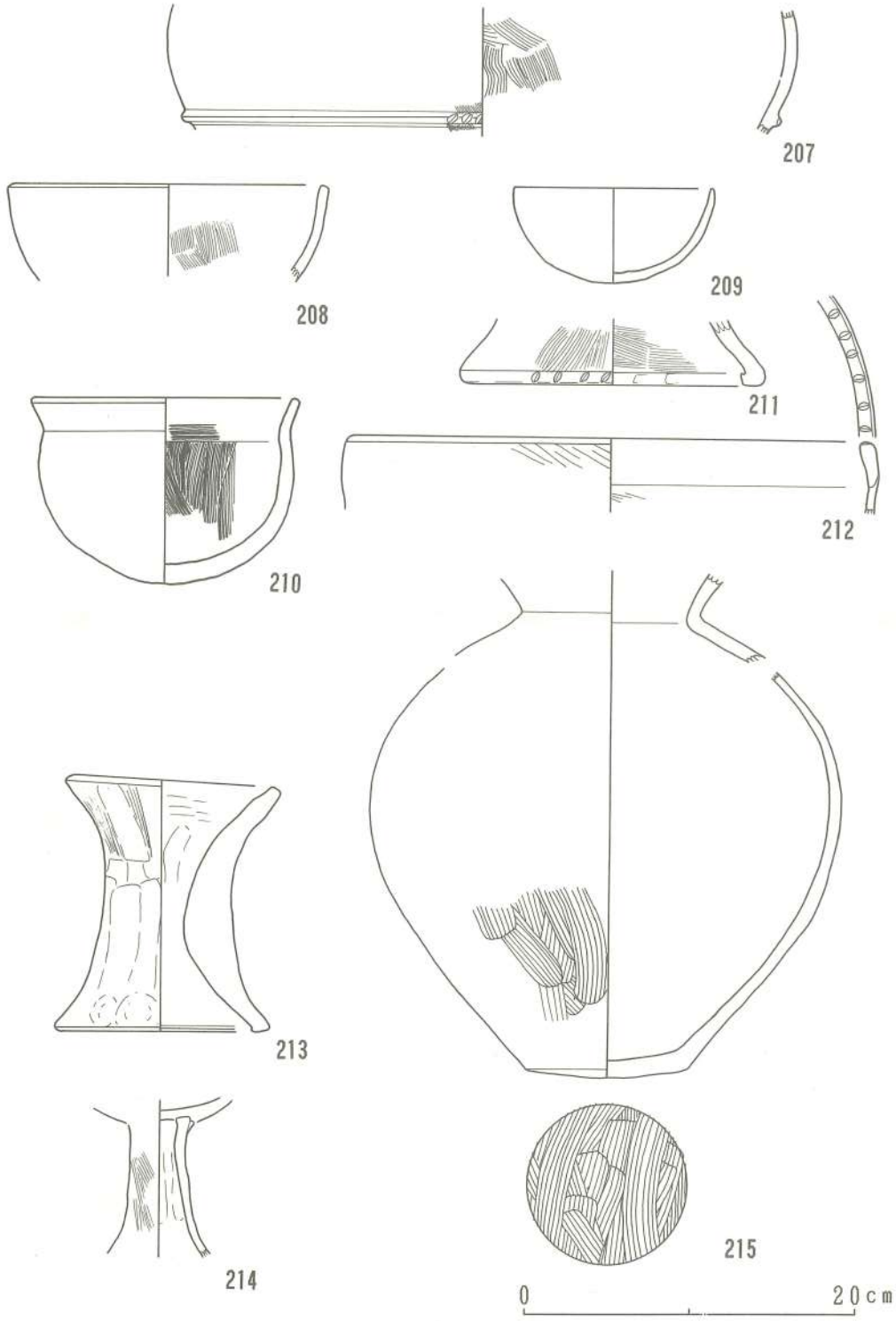


Fig. 90　出土遺物実測図(17)　SH212(207～215)

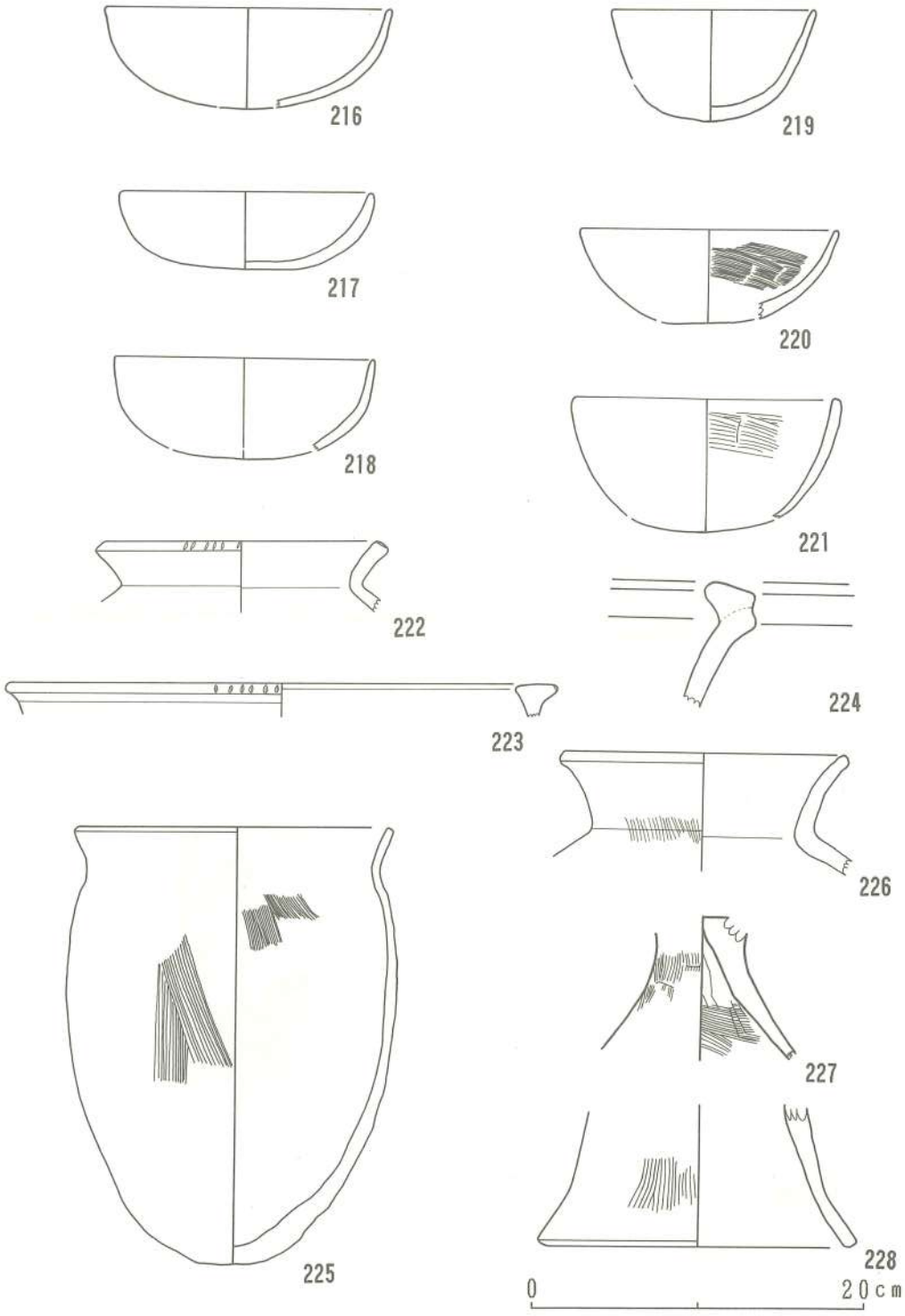


Fig. 91　出土遺物実測図(18)　SH213(216～228)

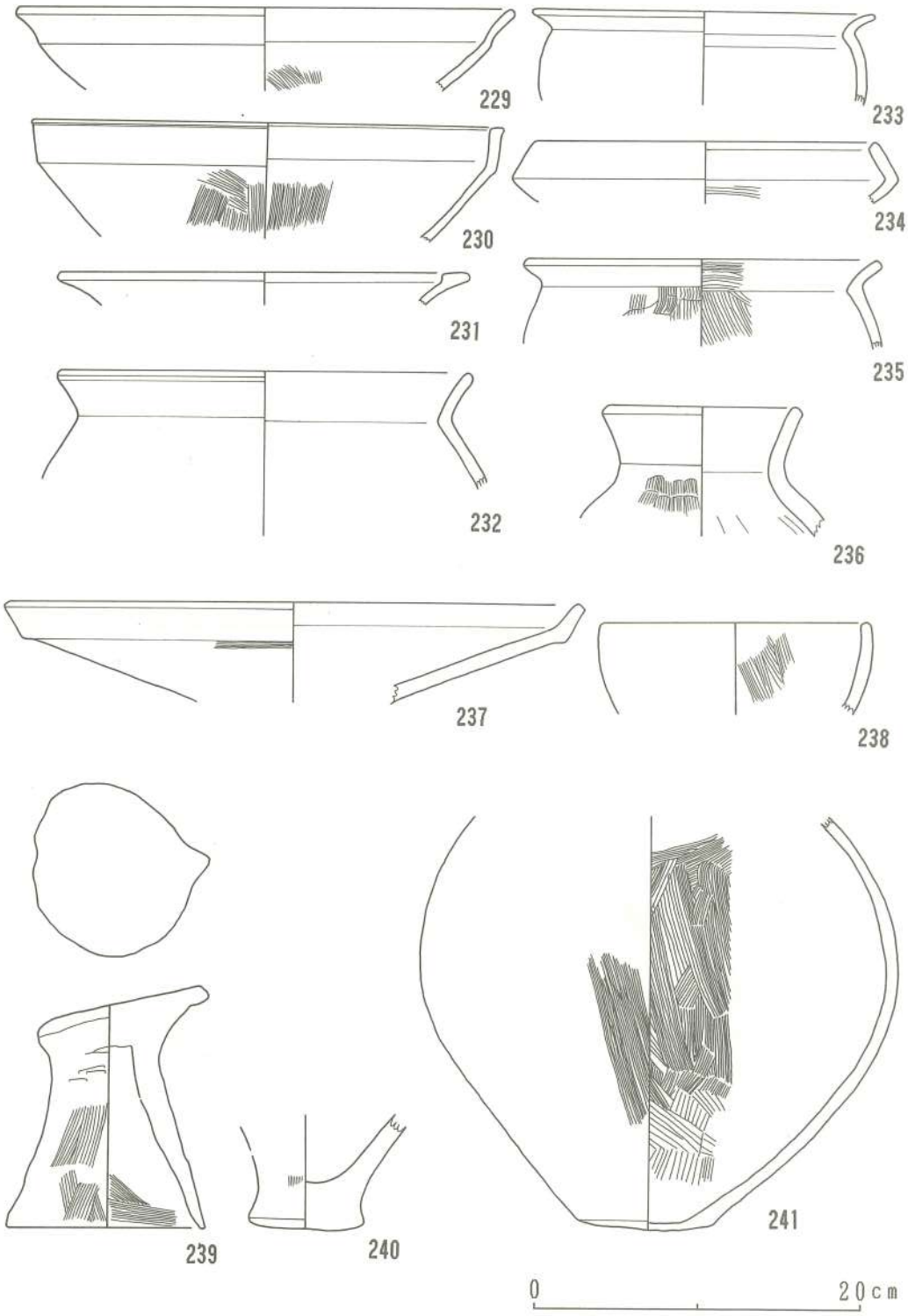


Fig. 92　出土遺物実測図(19)　SH214(229～241)

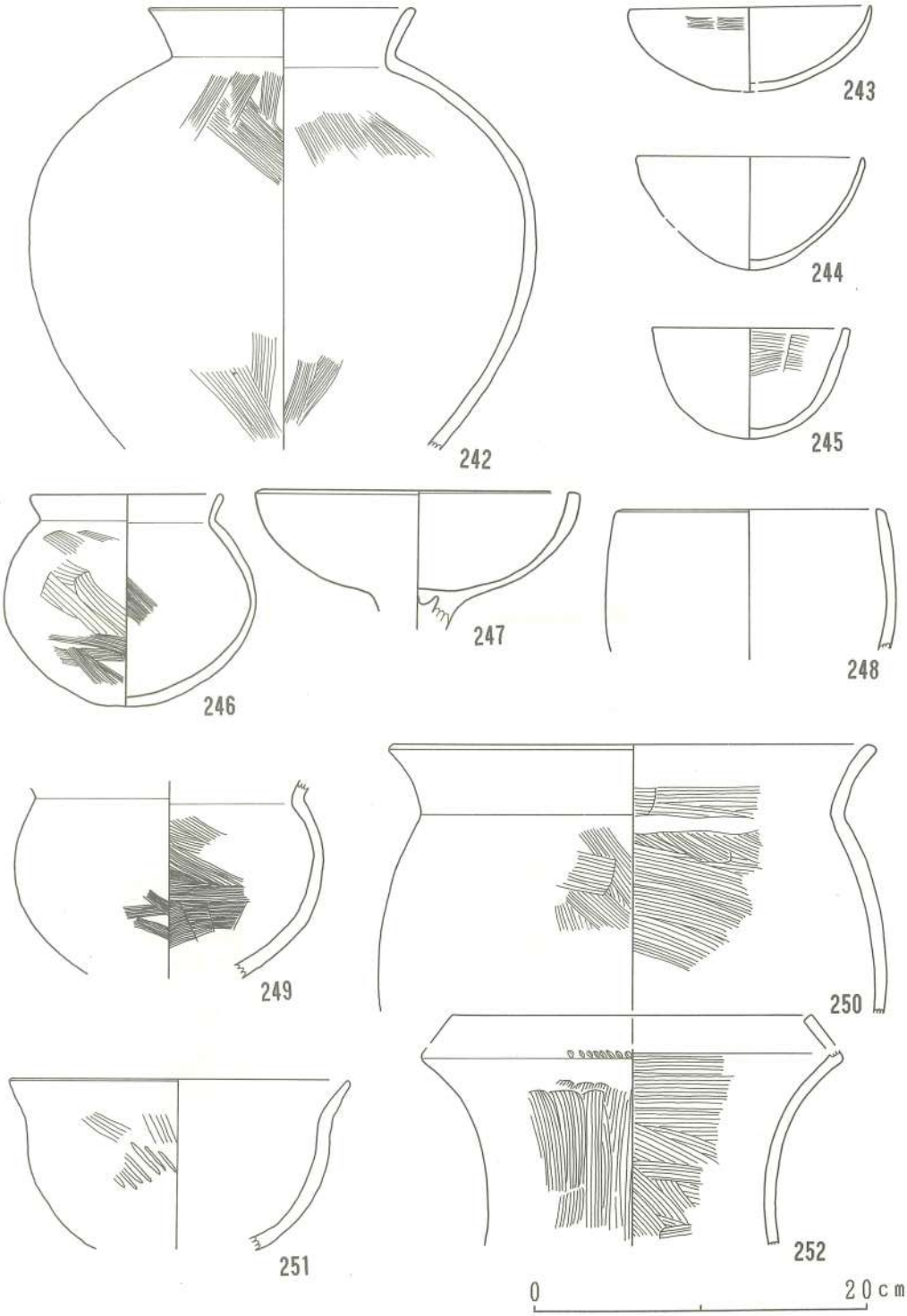


Fig. 93　出土遺物実測図(20)　SH214(242)・SH217(243～252)

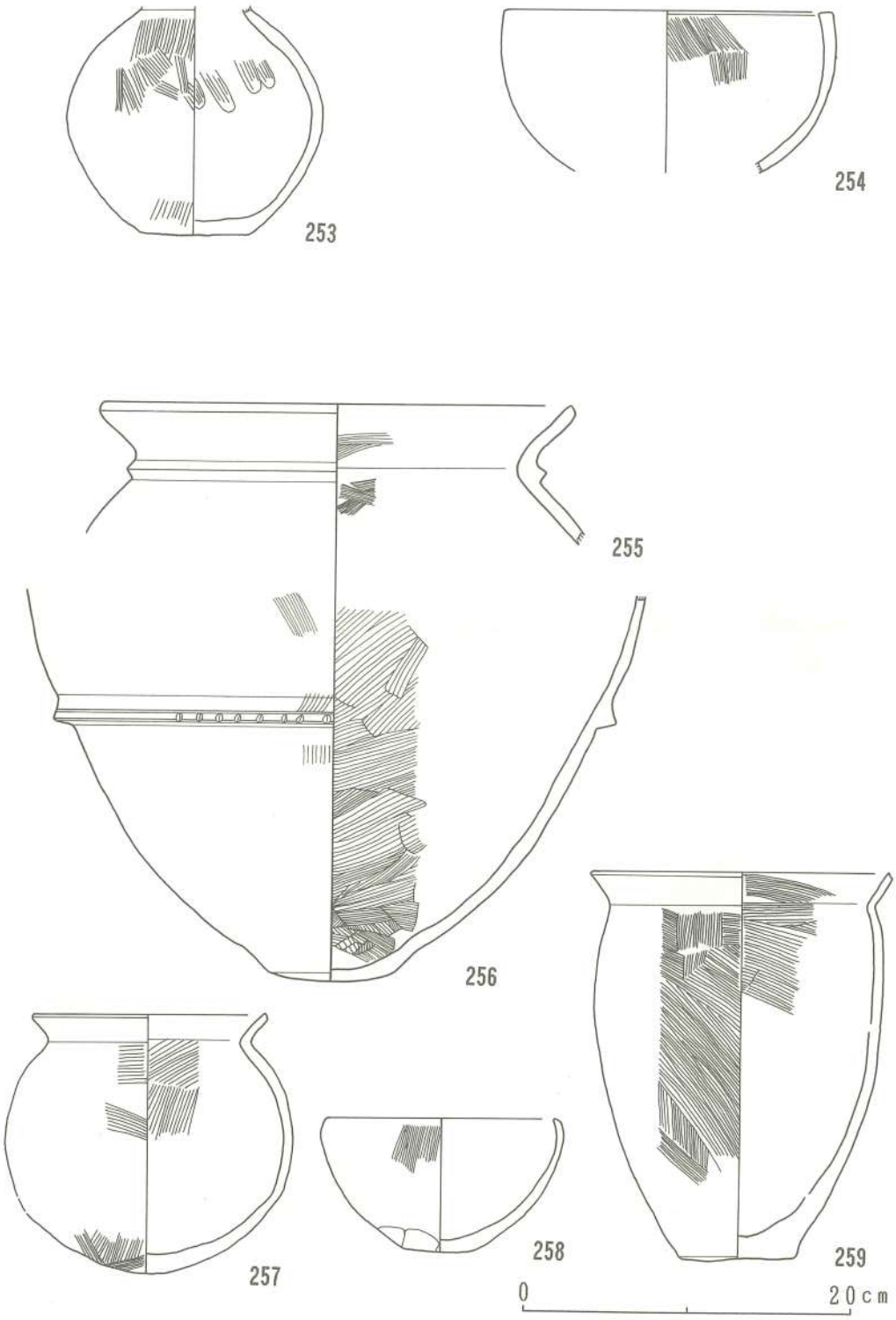


Fig. 94　出土遺物実測図(21)　SH218(253、254)・SH219(255～259)

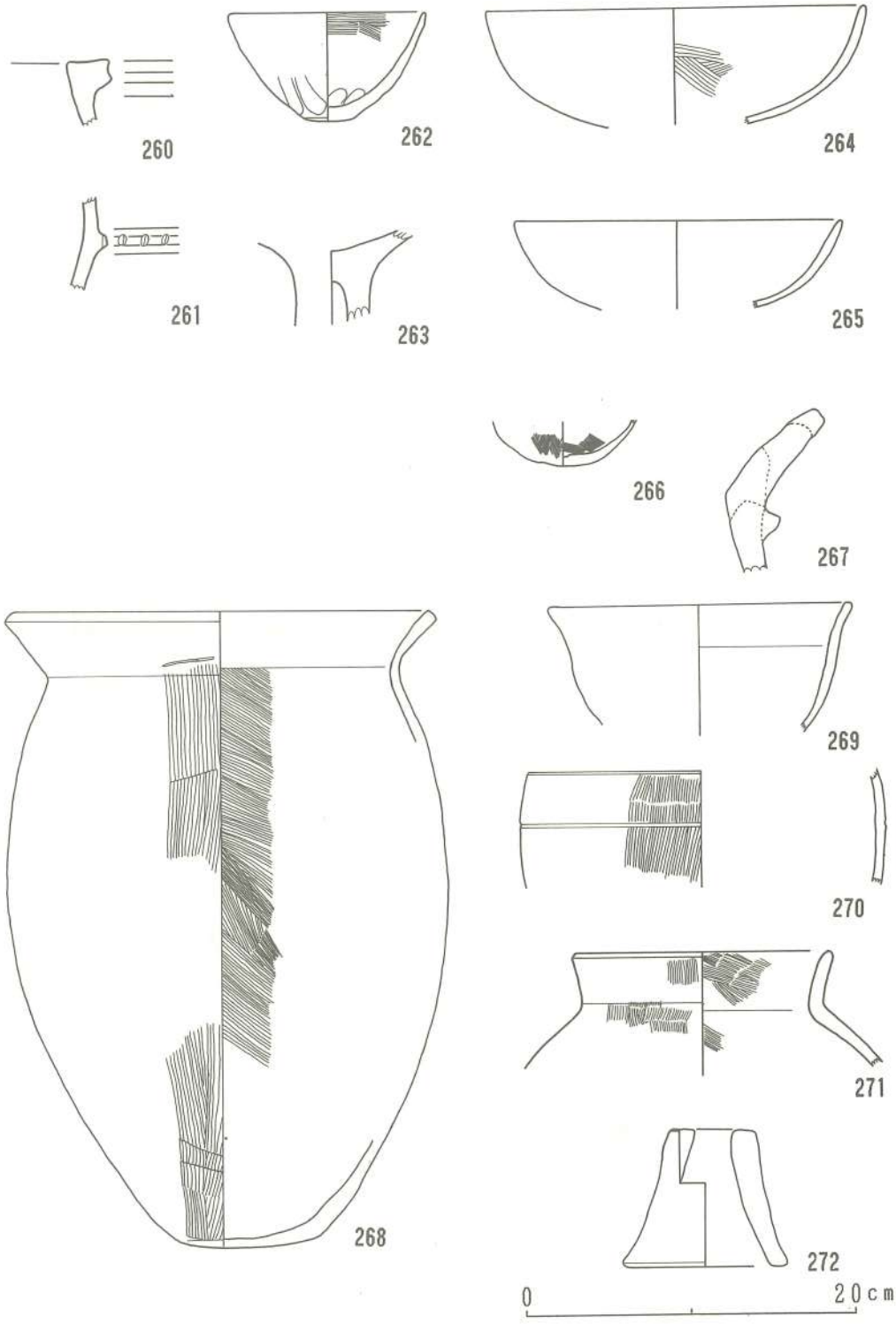


Fig. 95　出土遺物実測図(22)　SH221(260～270)・SH223(271、272)

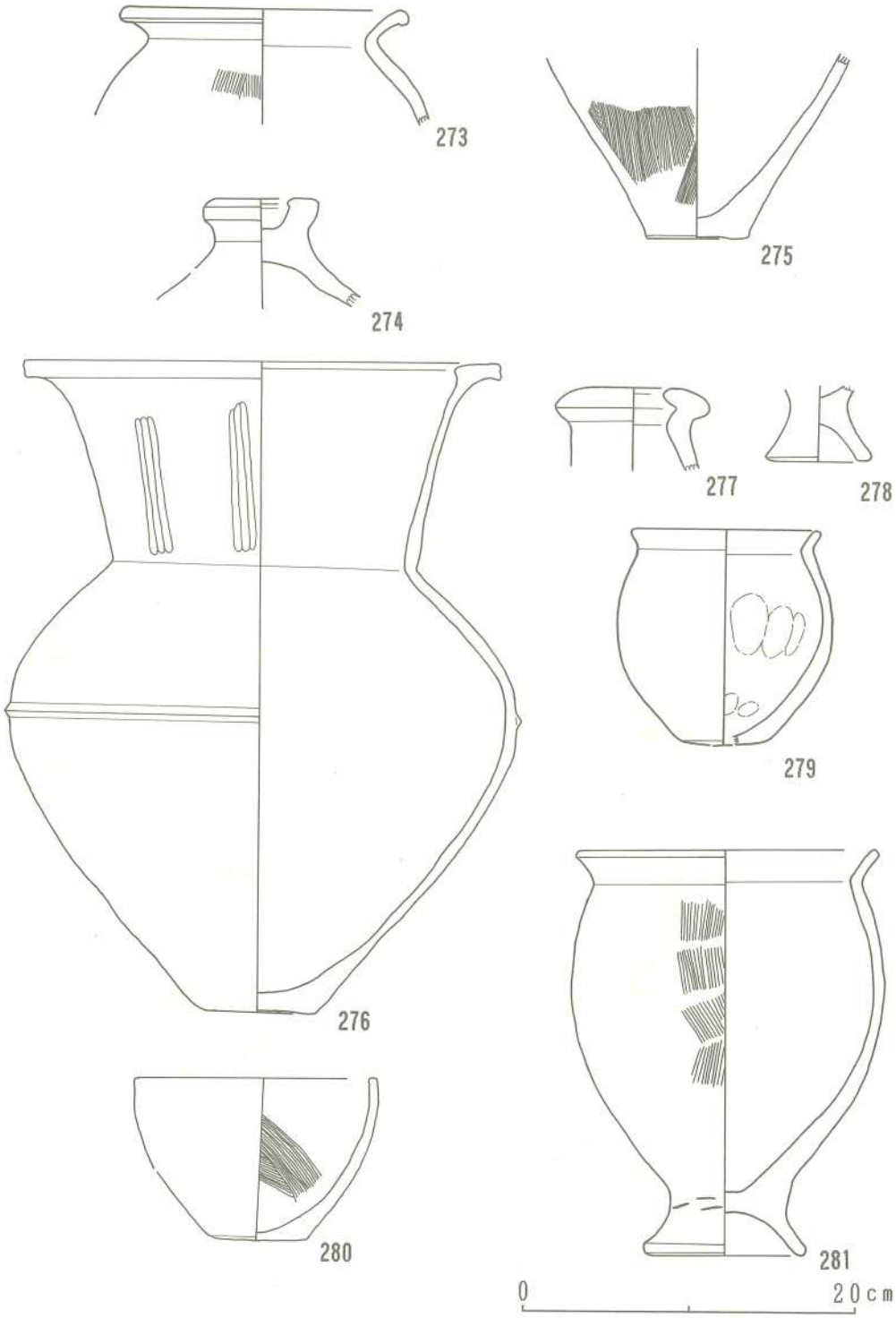


Fig. 96　出土遺物実測図(23)　SK226(273～275)・SK006(276)・SH230(277～279)・SH231(280、281)

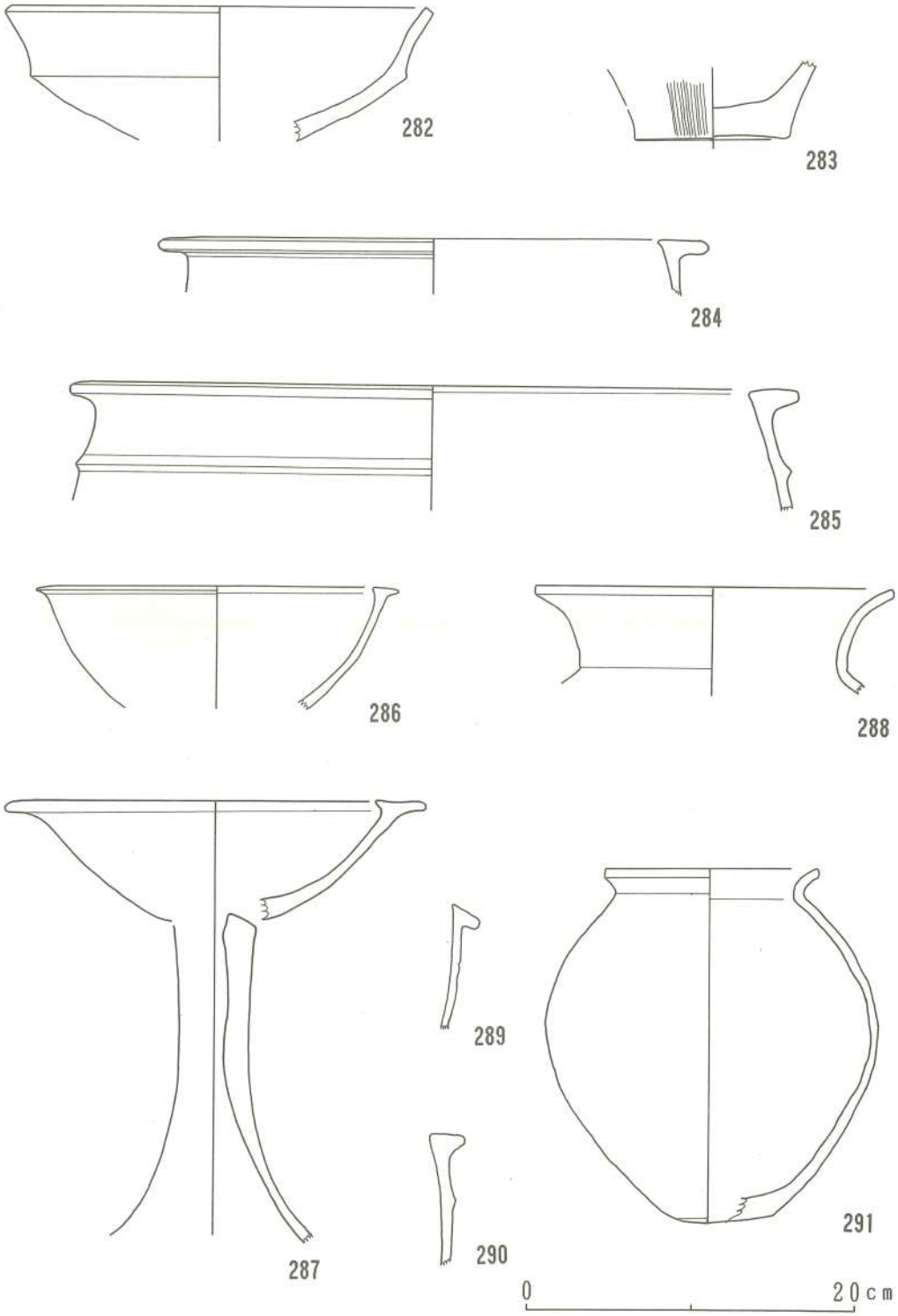


Fig. 97　出土遺物実測図(24)　SH231(282～284)・SH232(285～288)・SH234(289～291)

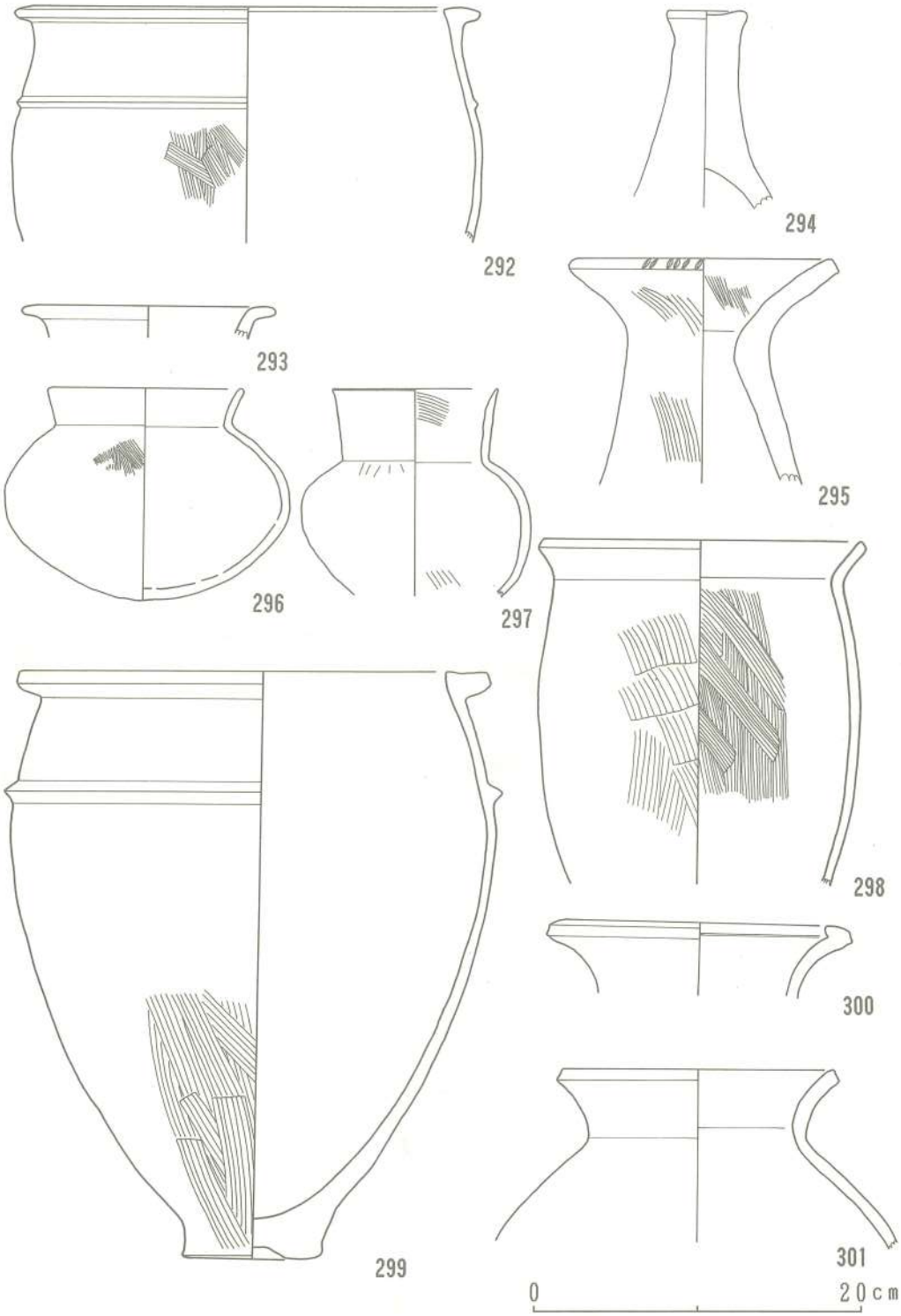


Fig. 98　出土遺物実測図(25)　SK235(292、293)・SK239(294)・SH240(295)・SH244(296、297)・SK245(298)・SK248(299)
SK250(300)・SK251(301)

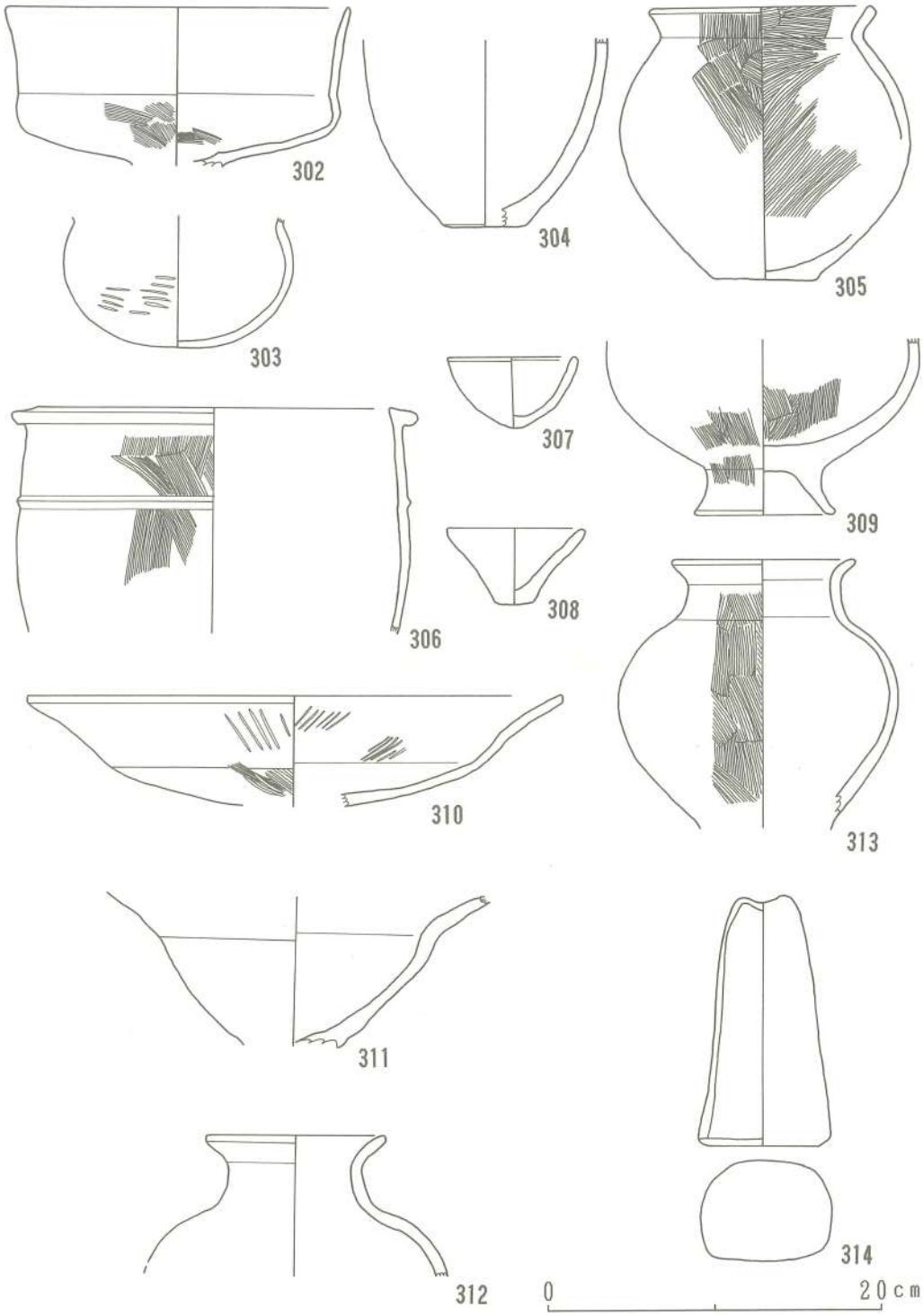


Fig. 99　出土遺物実測図(26)　SH253(302、303)・SH263(304)・SH264(305)・SH265(306～308)・SH266(309～311)・SK271(312)・SH282(313、314)

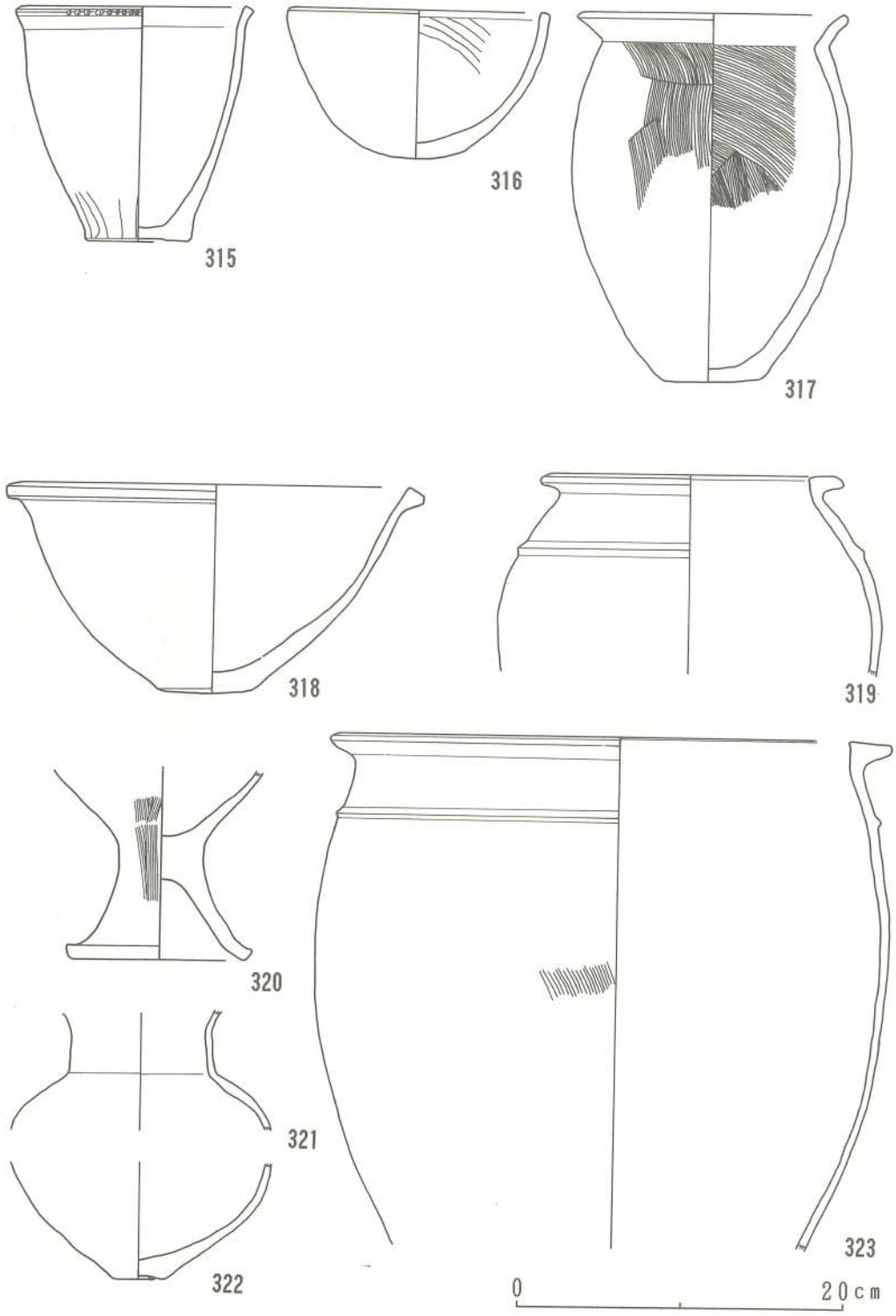


Fig. 100　出土遺物実測図(27)　SH286(315～317)・SK289(318～323)

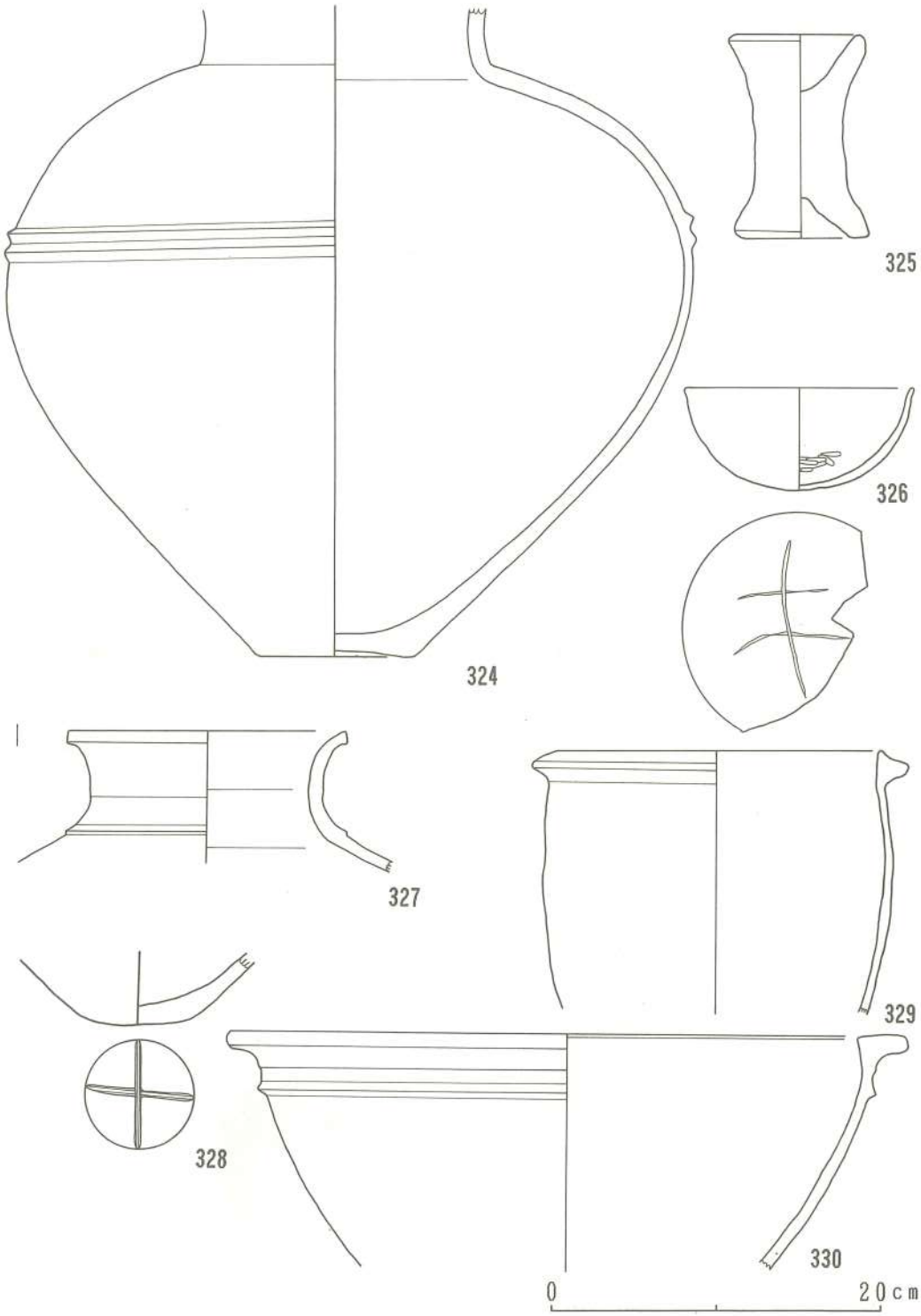


Fig. 101　出土遺物実測図(28)　SK289(324、325)・SK292(326)・SH293(327)・SK296(328)・SH304(329)・SK309(330)

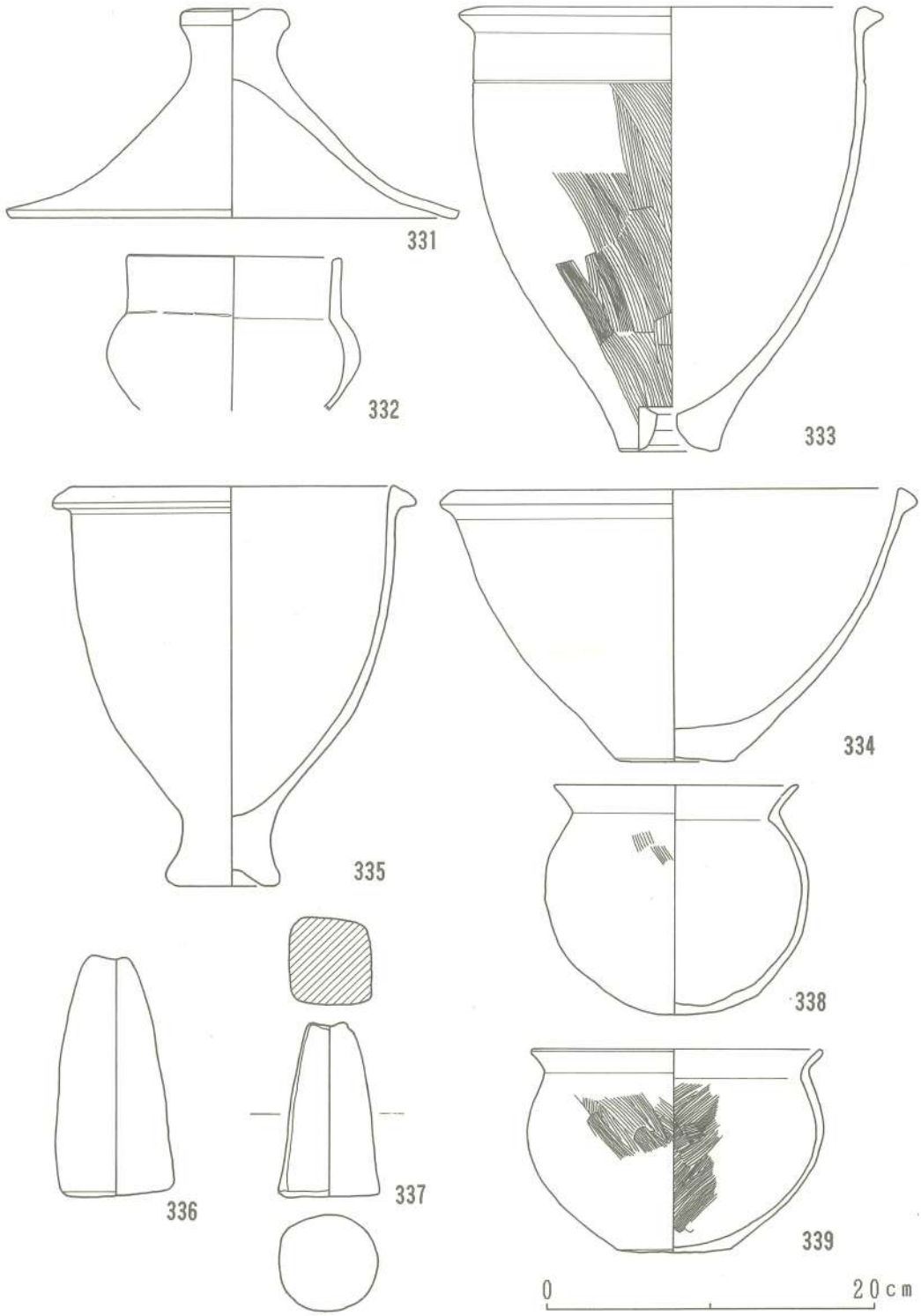


Fig. 102　出土遺物実測図(29)　SK310(331)・SH327(332)・SK336(333、334)
SK346(335)・SK356(336、337)・SH402(338、339)

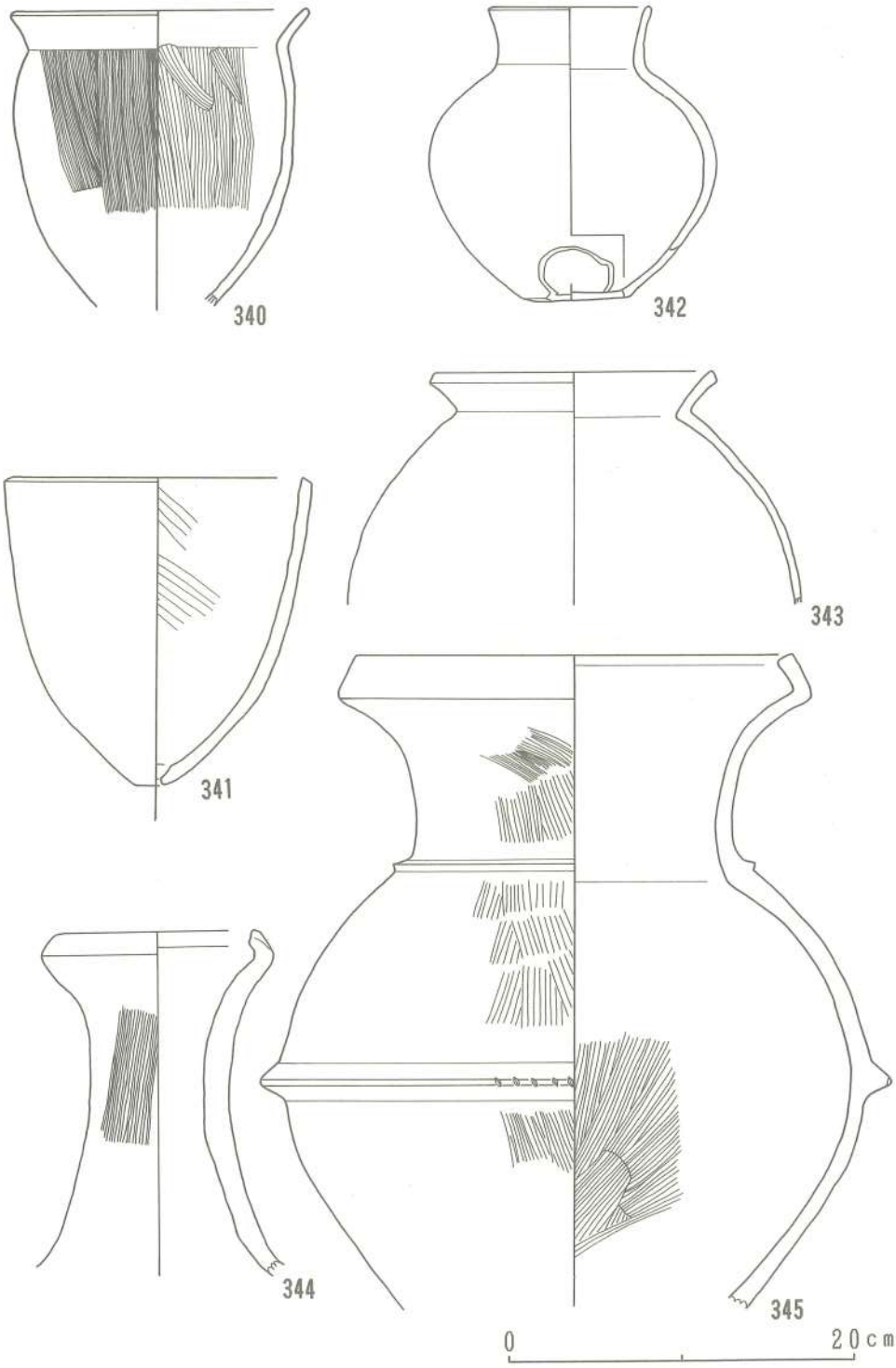


Fig. 103　出土遺物実測図(30)　SH402(340～345)

VI. ま と め

船石遺跡は、昭和57年に船石天神宮を中心とする区域の調査が行われ、弥生時代の竪穴式住居址・甕棺墓・支石墓、5世紀後半代の古墳などが調査され、注目されてきた。今回、船石丘陵に展開する遺跡の広がりのなかで、さいわいにも弥生時代の集落の中心部と推定できる部分を調査することができた。以下、調査の成果と問題点を簡単に述べて、まとめとしたい。

1．弥生時代

船石遺跡は、前述のように船石丘陵に立地しているが、この丘陵は大きく分けると、「坊所面」と呼ばれる中位段丘面、「舟石面」と呼ばれる低位段丘面から成っている。現在、前者は宅地又は畑地として、後者は主に水田としてそれぞれ利用されている。

この船石丘陵では、縄文時代の遺跡として中位段丘先端付近に船石四本杉遺跡があるが、本格的な集落が形成されるのは弥生時代前期末から中期にかけてのことである。この時期の円形住居址は25軒ほど確認されているが、各々は10m～20mの間隔をもって分布しているが、規則性は特に認められないようである。

これに対して、弥生時代中期後半から後期の所産である方形住居址は90軒ほど確認されているが、SD383より東部に密に分布する傾向にある。また住居の主軸をみると、SH017、SH003、SH033など南北を基調とする一群と、その他の45°を中心に軸を東西に振る一群が認められるが、現場での切り合い関係などから判断すると、前者の一群が新しいものと考えられる。

掘立柱建物址は、3棟が確認された。3区から検出されたSB384は、弥生後期のSH034を切っており時期が下るものと推定される。他のSB417、SB418は規模もほぼ同じことから同時期のものと考えられる。本年度調査区域の南東部に隣接する船石南遺跡の昭和60年度調査においても、弥生時代中期から後期の住居址群の東側に掘建柱建物群、さらに東部に甕棺墓を主体とする墓域が確認されていることから、この時期には船石低位段丘の西斜面が居住区、中央部に倉庫群、東斜面に墓域という構成で集落が営まれていたものと推定される。

今回の調査で確認されて弥生時代の墳墓は、甕棺墓8基、石棺墓1基の合計9基である。甕棺墓は調査区の西部から北部にかけて集中しており、すべて弥生時代中期の所産である。船石南遺跡の同時期の甕棺墓の密度、中期以降の竪穴式住居址が調査区の東側即ち丘陵の中央部に集中する傾向などから推測すると、これらの甕棺墓が営まれた時期に居住区西部に墓域の移転拡張を図ったが、何らかの原因で中断し、以後再び居住区東部の元の墓域に復したものと考えられる。

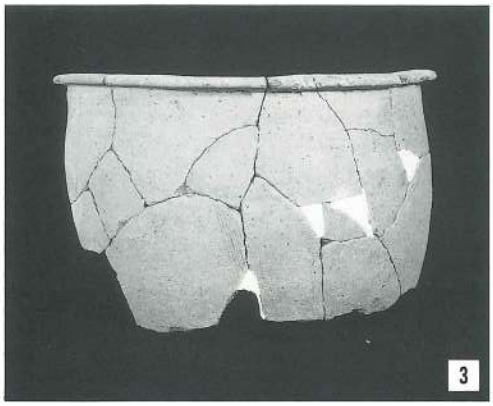
一方、切通川をはさんで本遺跡の対岸に位置し、東部中核工業団地造成に伴い調査が行われた二塚山丘陵の墳墓を主体とする遺跡群では、当時の首長層のものと考えられる副葬品をもっ

た甕棺墓、石棺墓が多数検出され注目されているが、今回の調査ではそのような首長層の存在に直接結びつくと考えられるような特殊な遺構は検出されなかった。船石の集団と二塚山丘陵に墓地を営んだ集団との関連は、今後も本遺跡の調査の大きな課題と言えよう。

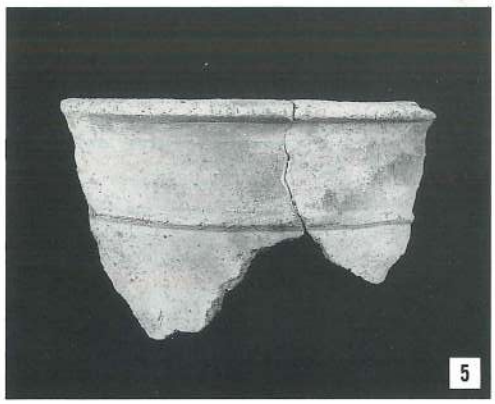
2．古墳時代

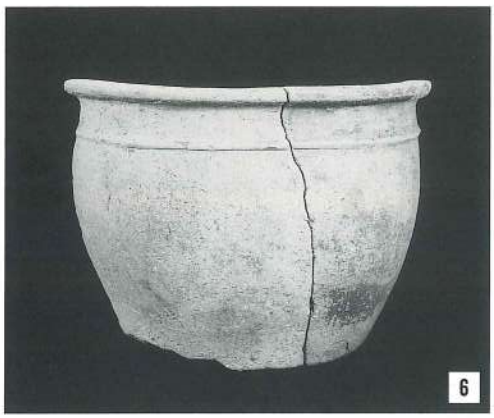
今回の調査で古墳時代の所産であると考えられる住居址は2軒が検出されているが、いずれも古墳時代後期のもので、舟石天神宮境内の古墳群（以下、「船石古墳群」と呼ぶ。）が築かれた5世紀後半代のものは検出されなかった。このことから、船石古墳群の被葬者の占有地域がこの地区になかったことを示唆するものとして注目される。当時、切通川西岸の丘陵上には、米多国造一族により前方後円墳を主体とする目達原古墳群が営まれており、船石の弥生時代集団の国造集団への吸収、あるいは、遺跡南東方向に広がる現船石工業団地が位置する丘陵低位面への進出を考えねばならない。いずれにせよ、町内遺跡の全体的動向からみても有明海沿岸沖積地の陸化により、生産の場を南方に移したことは明らかで、その意味では今後の町南部の遺跡の調査に期待したい。（原田）

図　　版

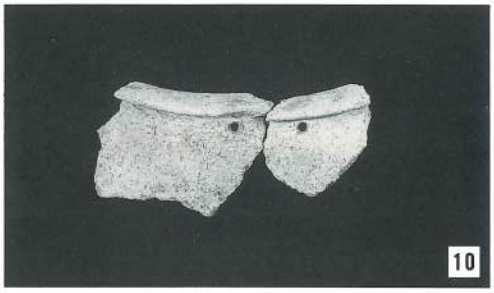

3

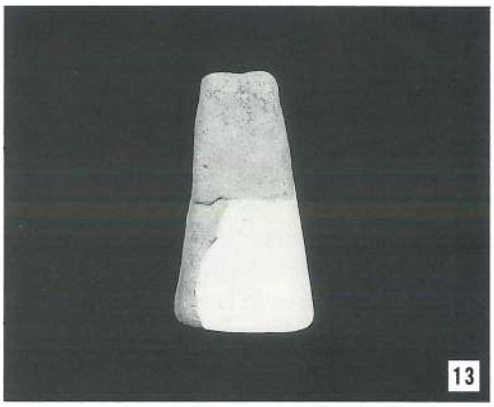
4


5


6

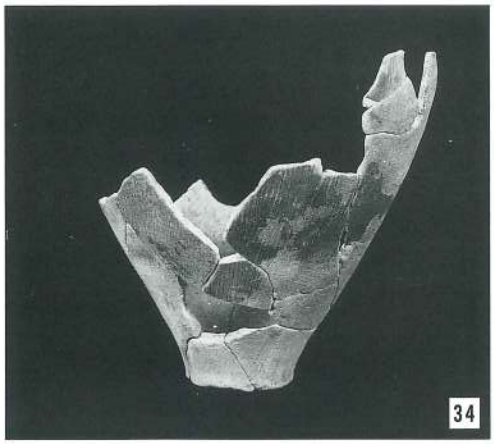
8


10

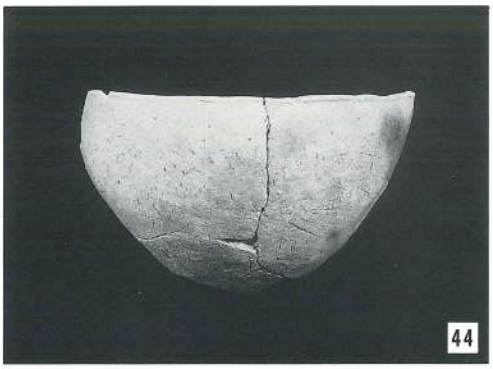

13

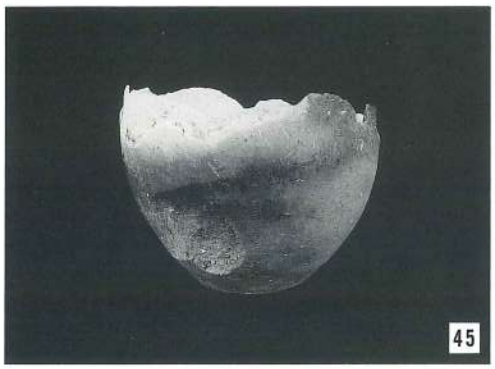
23

33


34

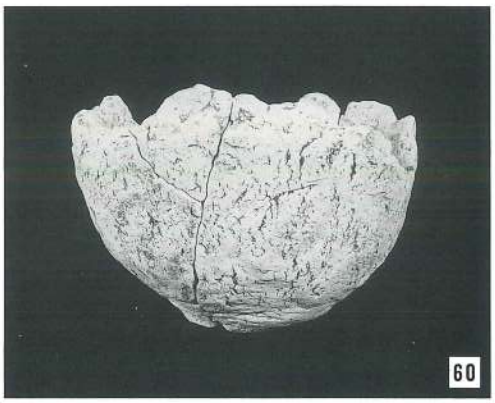
38

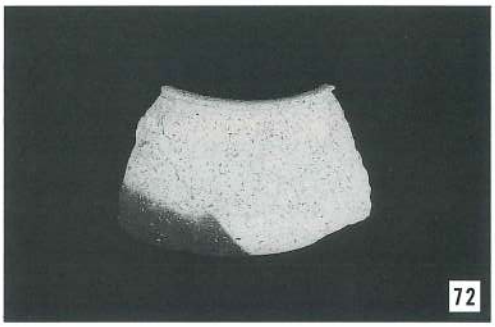

44

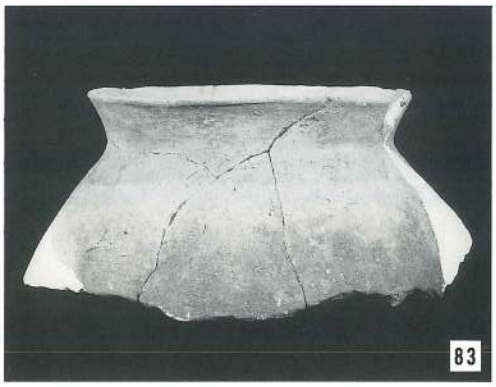

45

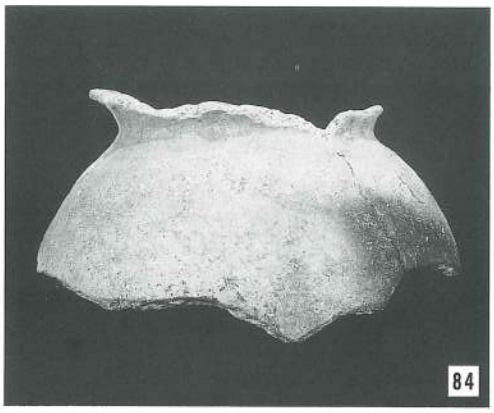
47

52

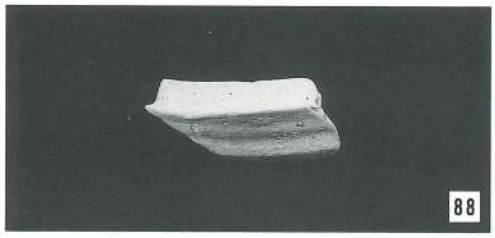

60


72

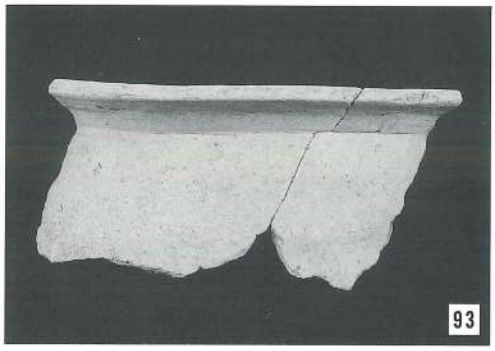

83


84

97


88

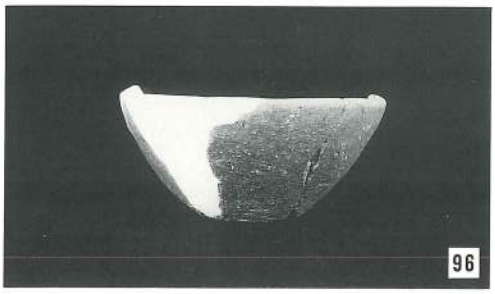
98


93

116

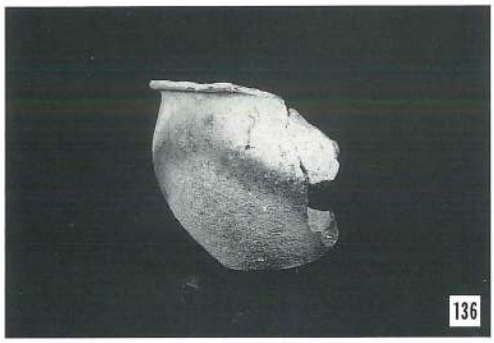
94

126


96

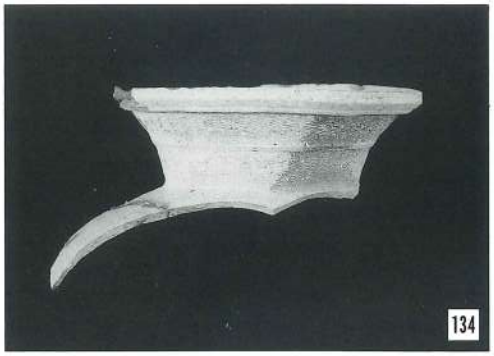
127

132


136

137

138


134

150

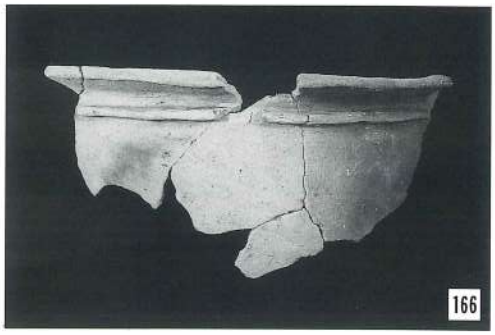
156

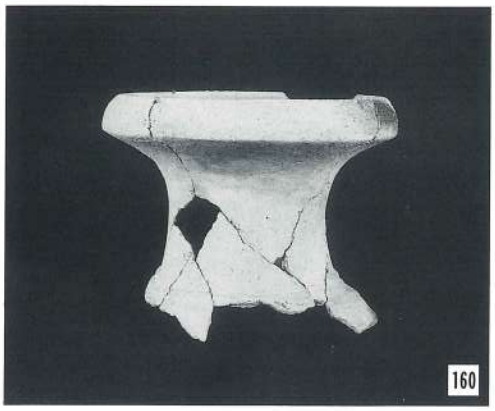
157

158

162

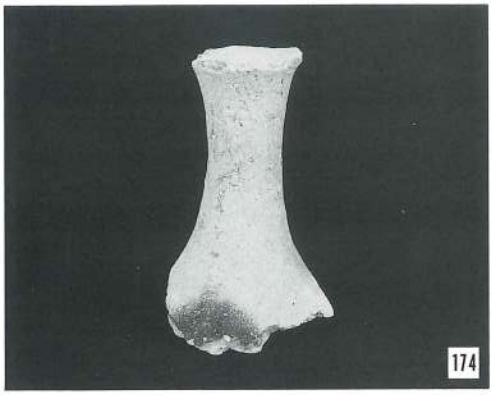
159

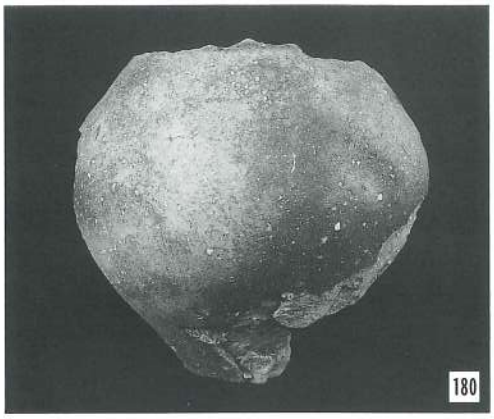

166

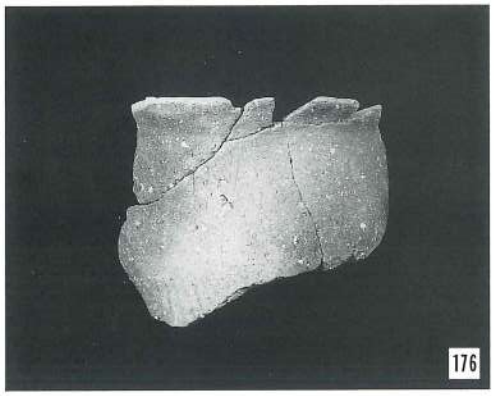

160

168

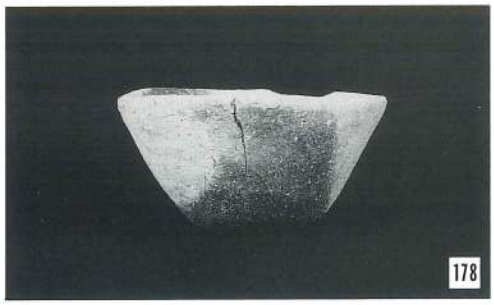
173

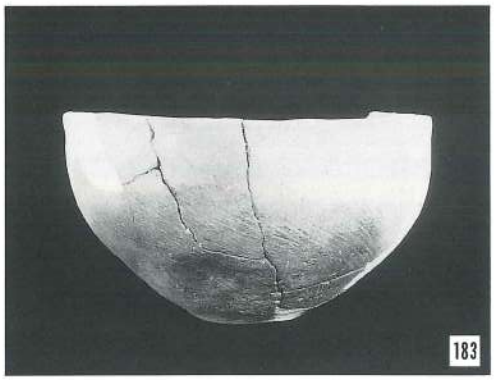

174


180

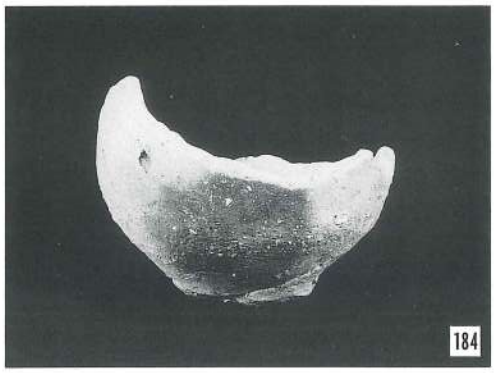

176

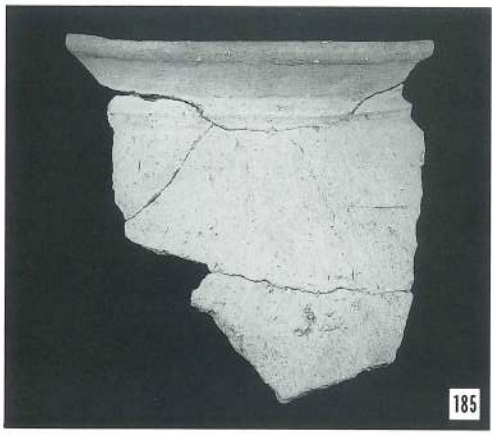
182


178

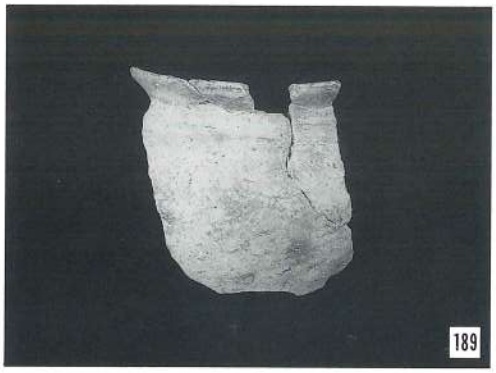

183

179


184

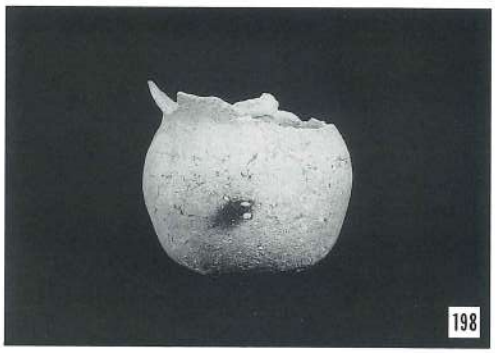

185

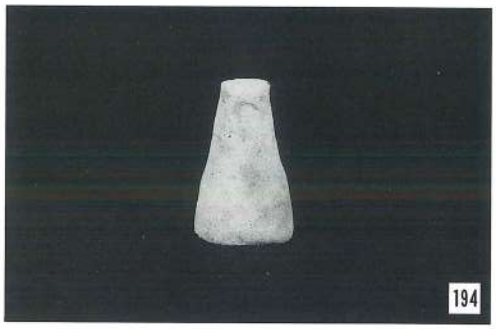
186

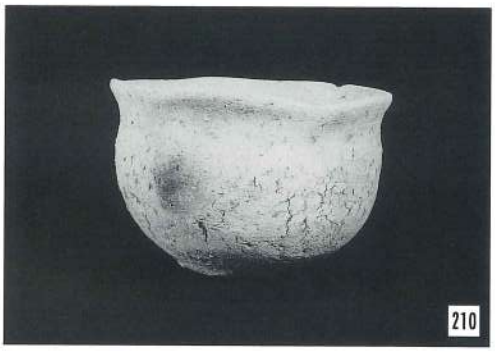

189

193

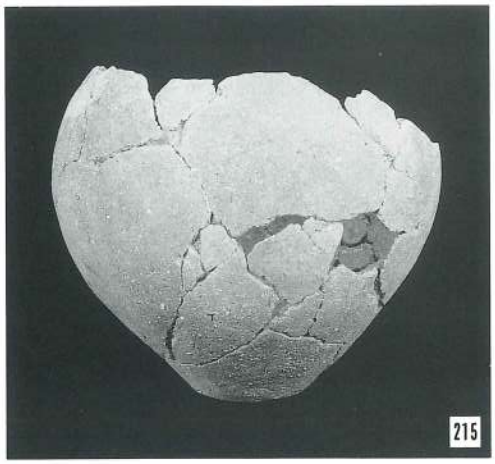
195


198


194


210

213

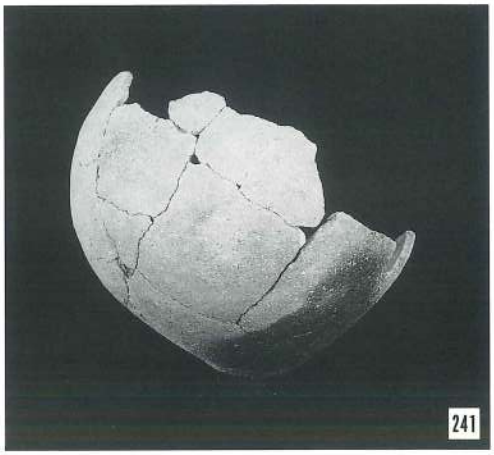

215

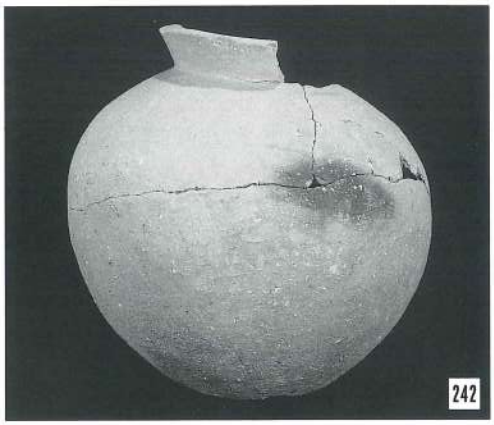
217

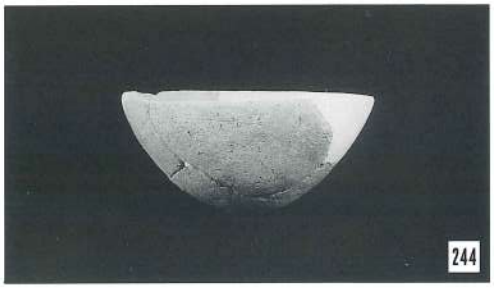
219

225

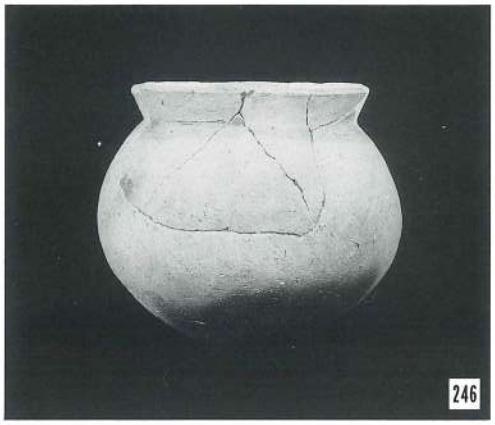
239

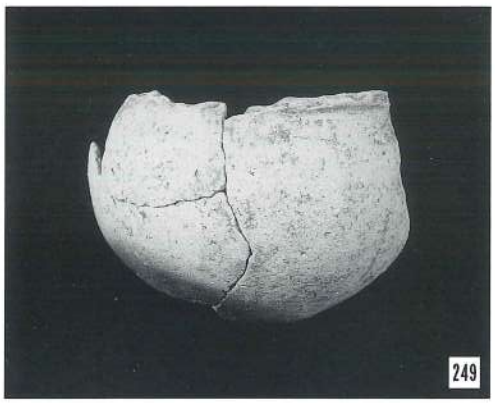

241

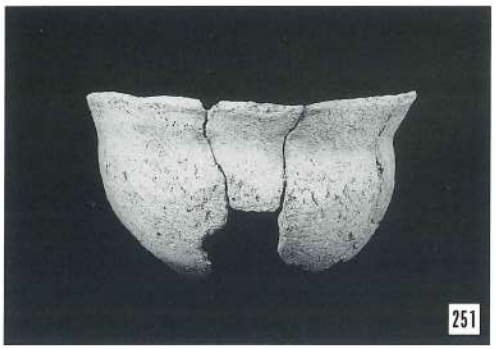

242

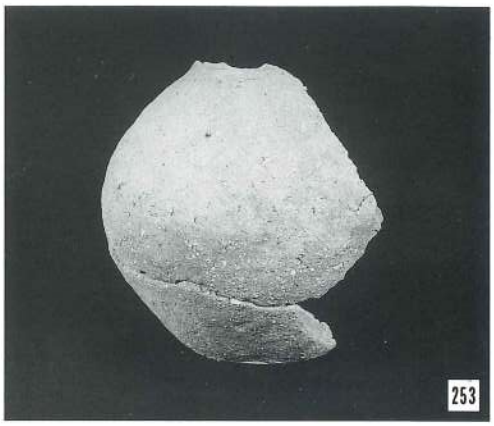

244

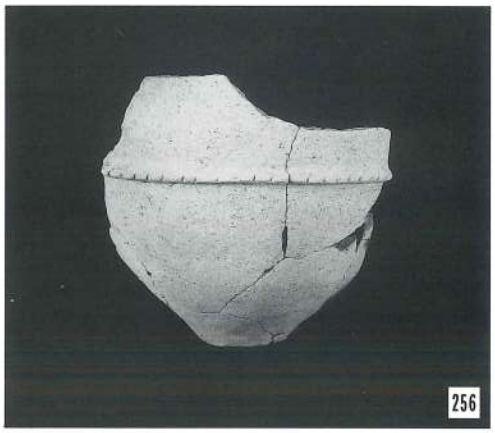
245

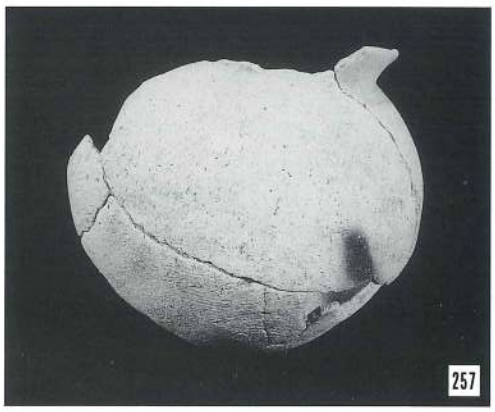

246

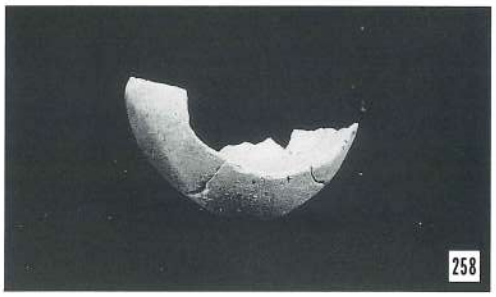

249


251

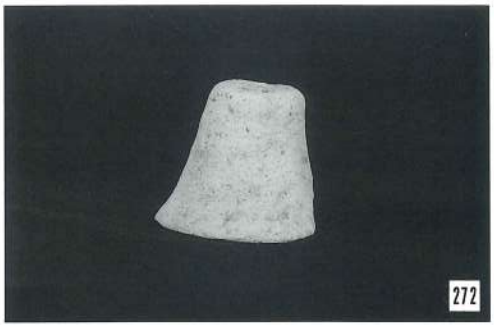

253


256


257

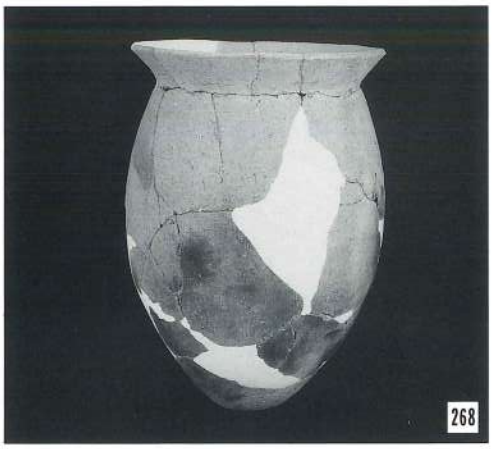

258

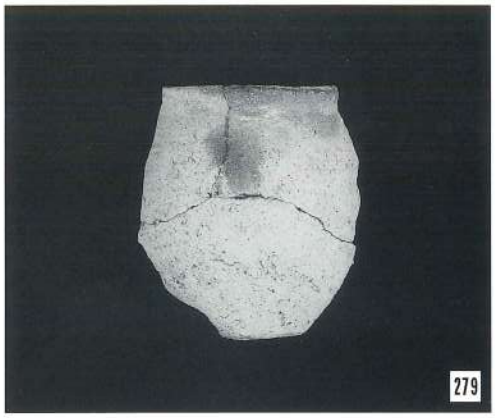
259


272

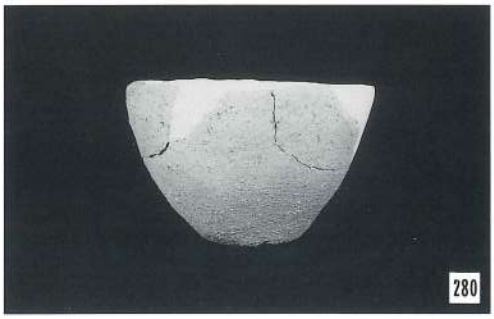
262

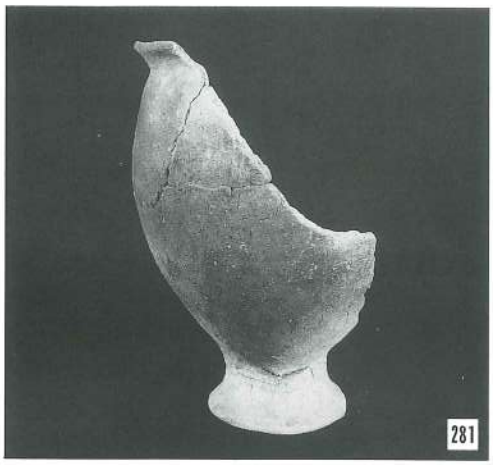
276


268

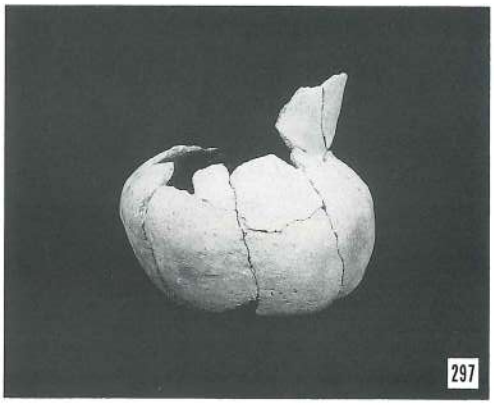

279

269

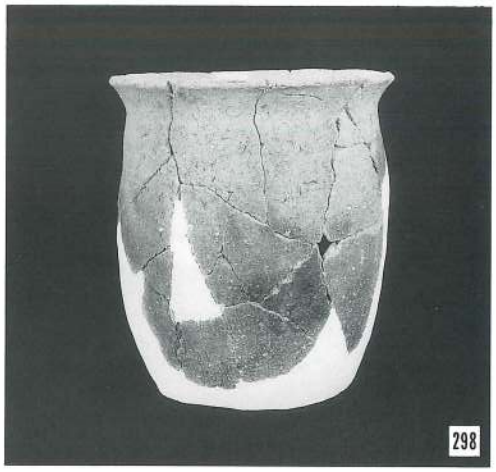

280

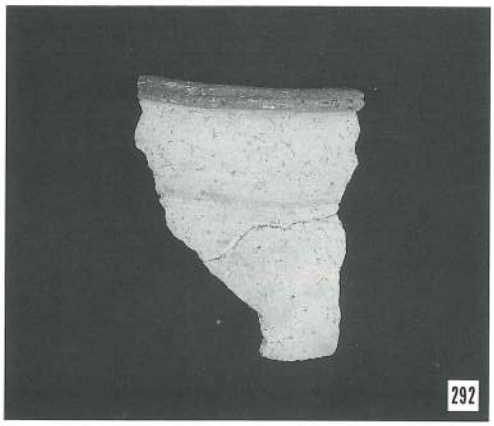

281

296


297

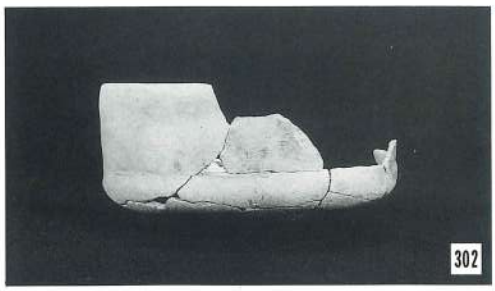
291


298

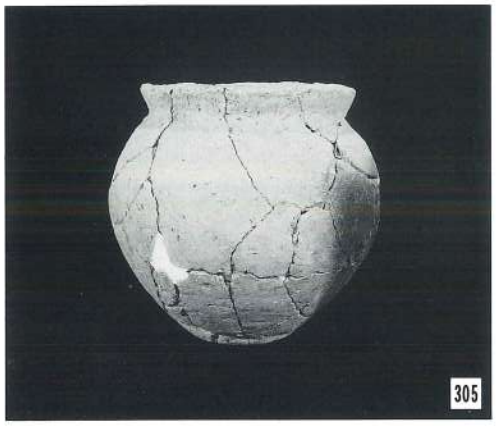

292

299

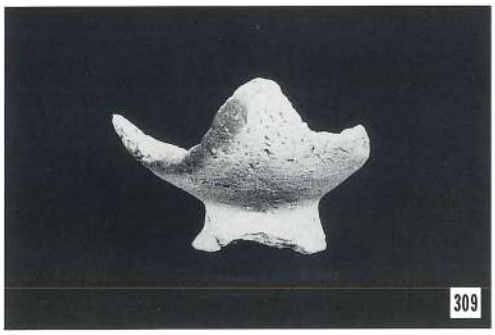
295

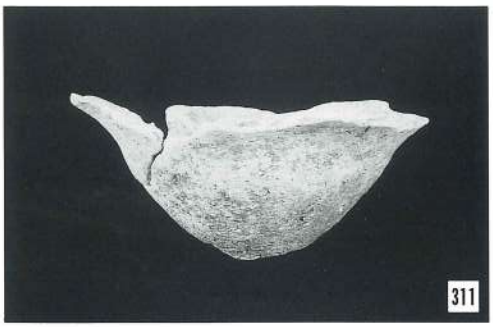

302

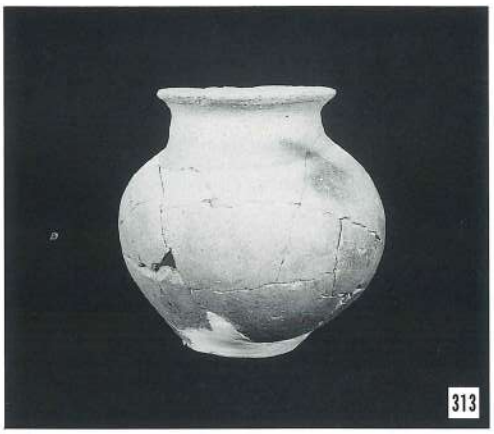
304

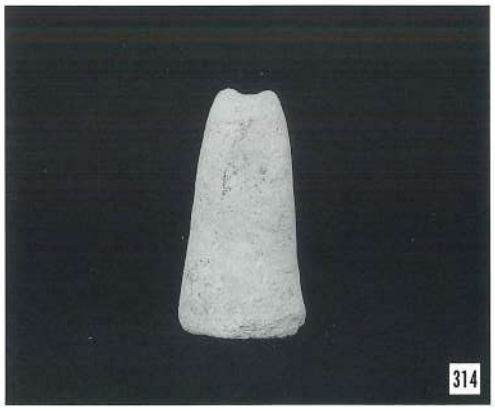

305

306


309


311


313


314

315

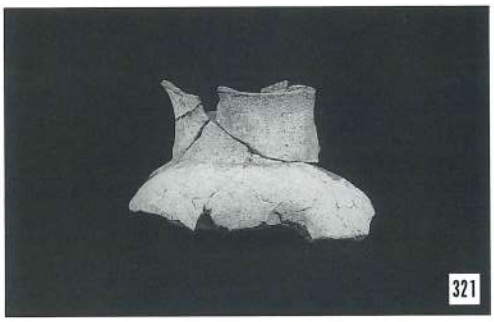
316

317

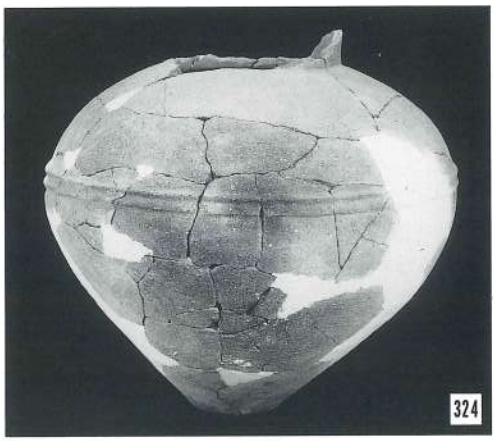
318

319

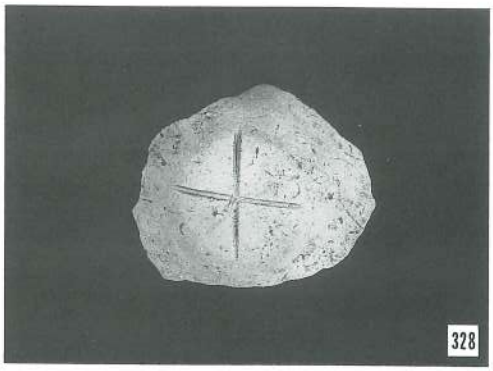
320


321

323

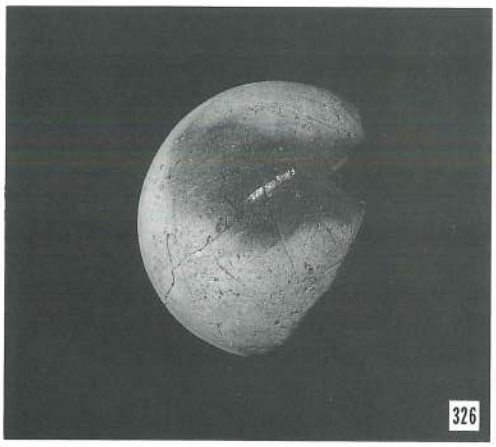

324

325

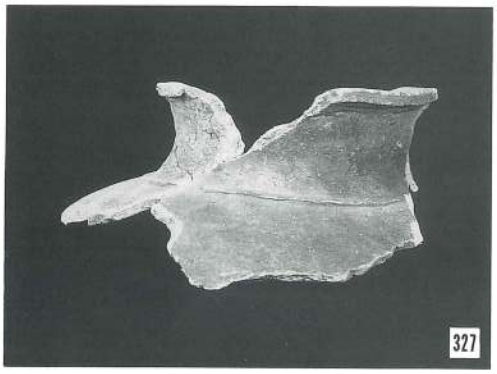

328

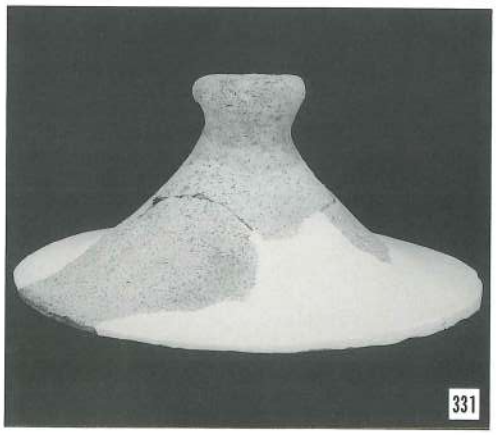
326

329


326

330

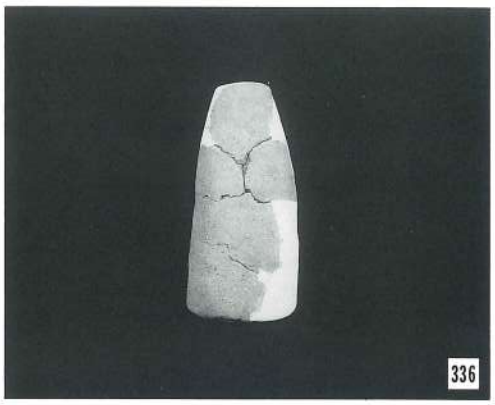

327


331

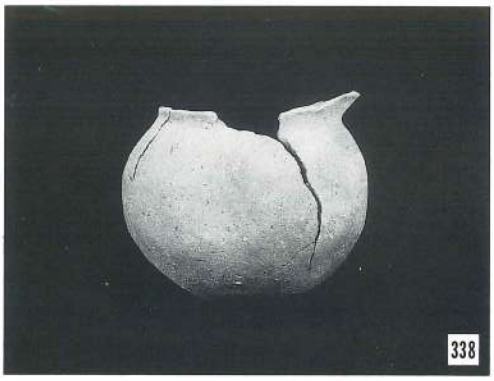
333

334

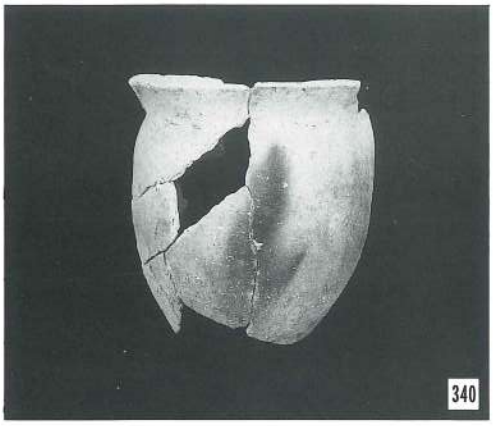
335

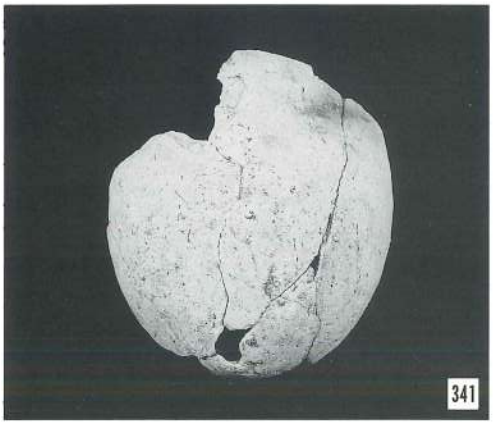

336

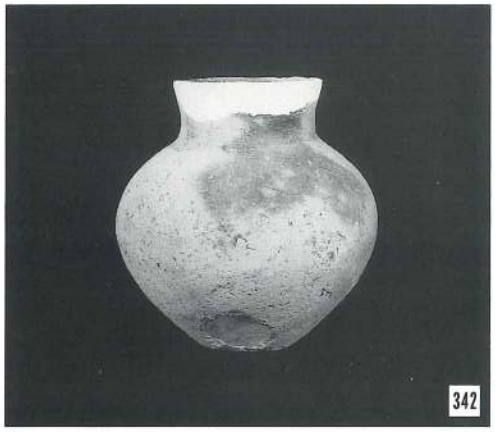
337

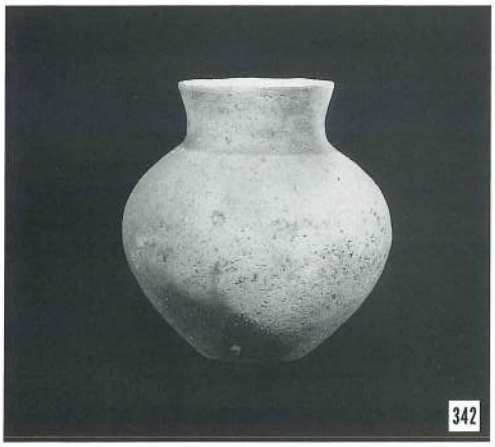

338

339


340

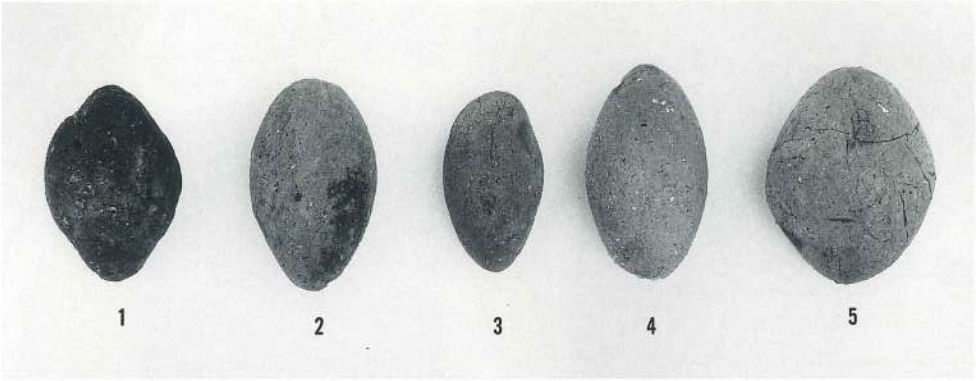

341

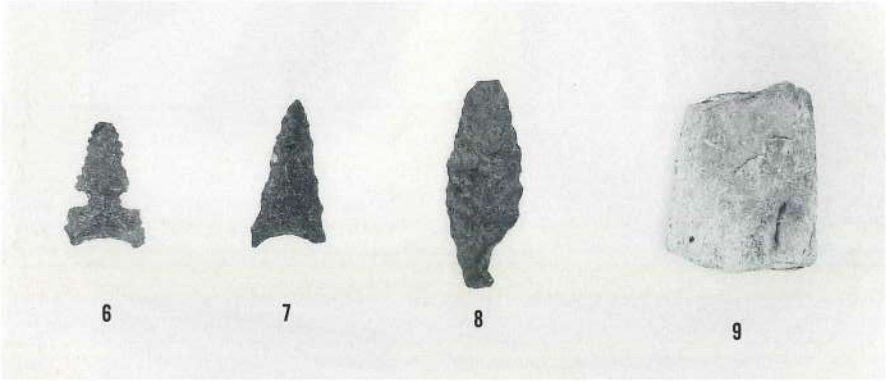

342

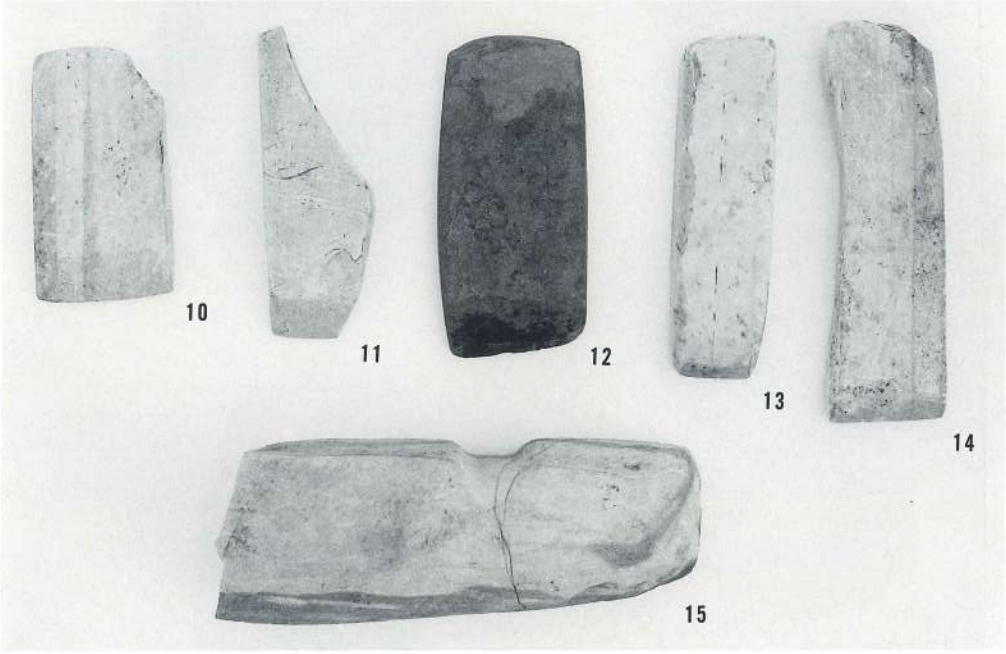

342

344

345


1
2
3
4
5


6
7
8
9


10
11
12
13
14
15

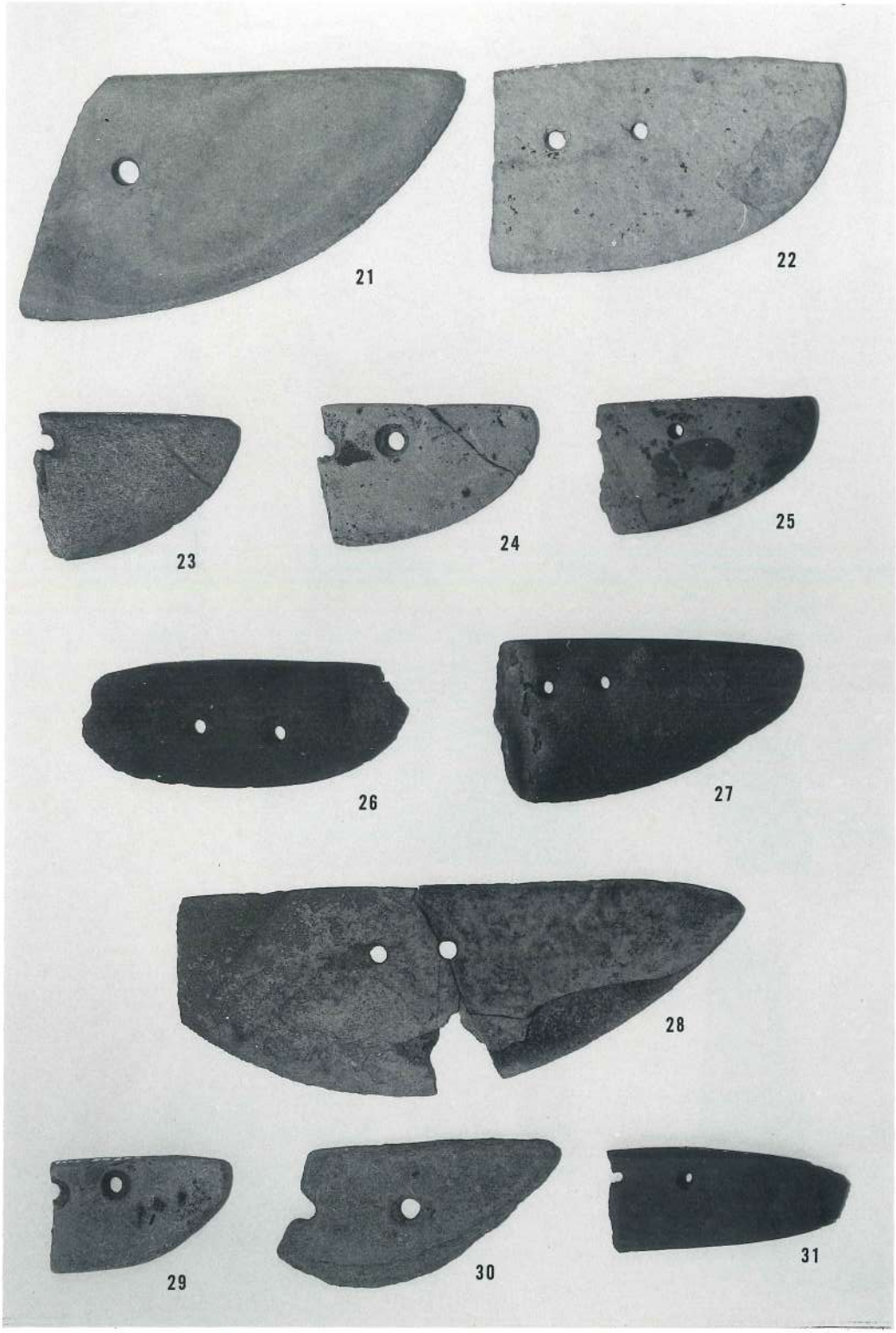
16

17

18

19

20


21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

32

33

36

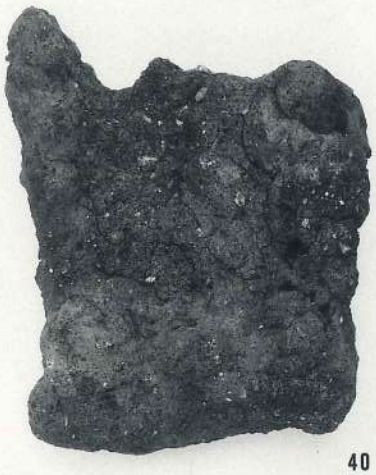
34

35

37

38

39



40

41

42

43

44

45

46

上峰村文化財調査報告書第７集

船石遺跡Ⅱ本文編

平成元年３月24日印刷
平成元年３月31日発行

編集
発行　上峰村教育委員会
佐賀県三養基郡上峰村坊所712－４

印刷　㈲昭和堂印刷
佐賀県佐賀市神野西４－１－32